
聖痕使い

中間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖痕使い

【著者名】

中間

【ノード】

N5887W

【あらすじ】

何かを解決するたびに女の子が増えていくお話です。ジンは神様に異世界を魔物の侵攻から救ってくれ、と頼まれ自ら異世界に。そこでジンは、世界を守るために世界のありとあらゆる力を集めることになるのだが、ジンは一緒に女も集めてハーレムを作ることになる。処女作ですので、拙いですがよろしくお願ひします。

一章は勢いで書いたので、あれですが二章はもう少し頑張ってみます。というかキャラ出しすぎてグダグダに

プロローグ 神様に会つ

田が覚めると白い空間にいた。
どうすればいいのかわからず、その場で寝よつとする。

「やあ始めまして、仁くん」
じん

後ろから声が聞こえてきた。

「誰だお前？」

「この世界の神をやつてこむのです」

後ろを向くと、思いつきり腰曲げて神様が頭下げてる。
見た田は、笑っていること以外あまり特徴のないスースツ姿の青年だ
った。

「すいぶん腰の低い神様だな」

「いやあ今日は、お願ひする立場なものだ」

「……」

無視している

「異世界についてほしきのです」

「……」

「ちなみにあなたが行かなければその世界は滅びます」

お願いじやなくていきなり脅してきた。

「・・・何で俺なんだ」

「あなたにしかできないからです。」

「だか「神様の事情です。」 らな・・・」

話す気はないらしい。

「たくさんの人間が死にます。老若男女種族を問わず大勢の命が失われます。」

俺はしばらく考えた。異世界に興味がないわけではないのだ、まあまだ夢かもしけないのだが眞面目に考えてみることにする。そして

「・・・わかった、行こう・・・ただ一ヶ月待てないか」

「それくらいなら何とかしましょう」

「いいのかよ。」

「何事も余裕を持つて行動しないといけませんからね。それでは、細かいことまた後で」

人間くさいことを言う神様だった。

「ああ、わかつた。」

・・・後で？

そこで目が覚めた。

「おはよひびきます」

「・・・・・」

ベットの横でスース姿の人形が喋つてた。神様だった。
はあ・・・夢じゃなかつたのね。夢に出てきた意味あるのか疑問だ。

あの後いろいろ聞いた事情は

曰く

- ・その世界は、ファンタジーの世界で剣や魔法や精霊や龍やエルフやらがいろいろいるらしい
- ・もう少ししたら魔物の大侵攻があるらしいが世界は、それをしない
- ・それどころか、戦争までやつてるので正直やばいとのこと
- ・侵攻は三回あつてあとになるほど苛烈になるらしい
- ・俺が選ばれたのは、精霊と相性がいいからと人格らしい（あまり良い性格だとは思っていないのだが）
- ・俺は、まず精霊界で修行をするらしい（神様は碌な戦闘能力はくれないらしい・・・神様使えねえな）
- ・今の世界のほうが高位であるため戻つてくることはできないらしい。
- ・基本的に異世界の情報は話せないらしい。
- といつものだった。

一ヶ月の間にやつたことは、バイトと身辺整理だ。

貯金とバイト代で親に旅行をプレゼントしたり、学校には退学届けを出したり、親友とは今までのことをいろいろと話して清算した。親に手紙も用意した。

そして今日が旅立ちなので両親に気分を重かったのだが、別れを告げようと思ったら

「息子の旅立ちに乾杯」

「乾杯」

なんか両親と親友と後なんか元担任がいて宴みたいになつてた。

「・・何してるんだ?」

「ああ私が教えましたよ」

神様が人形姿でお茶を啜つていた。

「貴様のせいか――――」

「まあまあ私たちも大体わかつてたし正確な日はわからなかつたけど」

「普段やる氣ないのにここ最近妙に真剣だったからな

「まさか異世界だとは思わなかつたが」

「応援しているや」

上から俺、母、父、親友、担任だ

さすが俺の両親とこの俺と付き合いのある友人だな。担任は・・・
まあ流石は教師と言つたところか。

こうして小さな宴を開かれた後俺は、異世界に旅立つた。

あ、精霊界のほうにな。

しまった手紙を処分するのを忘れた。

1話 精靈界から異世界へ

「ねえ、もう行つちやうの？」

真っ白な髪にセーラー服を着て、小さい女の子がジンに聞いてきた。

「ああ、そろそろ異世界に行く。」

「ふえ」

女の子が泣きそうになつた。

「大丈夫。大きくなつたらあつちで会えるから。」

抱きしめて頭を撫でてやる。しばりくすると

「わかつた。パパ」

そうなんです。私、父になつてしましました。といつてもこの子は、精靈なので人間とは違う生まれ方なんですが、精靈の統合を初めてしたときに、生まれてしまった子で水と風と土の属性を持ちます。新しい雪の精靈で名前は小雪。

ちなみに精靈界の修行は大変でしたよ。最後なんて精靈王たちあんま手加減していなかつた気がする。

しかし、その成果として精靈王達に認められ、左腕には7つの聖痕

が刻まれている。

それぞれ、火、水、風、土、雷、光、闇の精靈王から『えられた。

小雪の遊び相手を務めているとそこに刀神が歩いて来た。
前の世界の神の知り合いらしい、たまに精靈界に来て刀術の稽古を
つけてもらっていた。

格好は侍スタイルだが髪は後ろで結んだだけの物だ。

「しっかり鍛錬を怠るなよ」

「最後の言葉まで小言ですか師匠」

「まあ、いいじゃないか君のことが心配なんだよ彼は」

なんか元の世界の神もきた。

その神が始めて真剣な顔になつて。

「ありがとうございます。元の世界を捨てて来てくれて。本当にありがとうございます」

真剣な顔をして頭を下げる神に、俺は面食らつた。

「まあ任せろ今の俺は結構強いぜ」

「うん、パパは強いんだよ～～」

「それに、ほかは勝手にさせてもらひしな

神様が不思議そうに聞いてくる。

「なにかぬつもつだ」

「せつかく異世界に行くんだ前の世界でできなこととしたいこじやないか」

「俺はハーレムをつくる」

「…………」

「わーい、わたしもパパのハーレムに入る～～

「ああ、待っているぞ我が娘よ」

娘の頭を撫でてやる。

「」なんだつたつけ?ジンつて

「まあ時間は人を変えるし、その程度の褒美はいいんじゃないか

と刀神。

「こや、けど娘だよ」

「まあ血つながりはないし神ではよくあるだね」

「……うそ、そうだね……だといこなあ

「それじゃあ行くか世界でも救いに」

「ああジン、これを渡しておへへよ」

懷中時計のようなものを渡してきた。

「最初の侵攻が360日後、ゼロになつた時に侵攻が始まる、場所は大陸の中央に大きな山があるからそいだよ」

時計の上の部分に360と青く光る数字が浮かんでいた。ほかは反時計回りをしてくる時計が三つ（時、分、秒だらう）ある。

「じゃあ門を開くね、水の精靈王の懇意の神殿に落とすからその方が何かとせつやすいと想つし、あと例の能力もつこでひとつくか

「ら

「わかった。」

「こいつてらつしゃーー」

なんかこいつからなにかもらつ初めてだな。

「達者でな

「こひで門」が開いた。

「こひてきまか

「頼んだよジン」

いつして俺は第一の故郷に別れを告げた。

2話 異世界の女の子

異世界1日目

門をぬけたと思ったたら、いきなり空中に出た。下が水溜りになっていたから、水の精霊に手伝つてもうひとつ自分の位置だけ水をのけて着地する。

よく見ると噴水のようなところだった。ジンの服装は、闇の精霊王が作ってくれた黒衣姿だ。

闇の精霊王は小さな少女でかわいいやつだった。

「あなたがジン様ですか？」

女の声が聞こえる。顔を上げると。

水色の髪を腰まで伸ばした綺麗な娘が漫画に出てくるような神官巫女のような服を着て目も前に立っていた。

「そりだが、君が巫女さんでいいのかな？」

「は、はい。わたしはこの神殿の巫女をしているソフィアと申します」

「そんなに硬くならなくても。別に普通で良いぞ。どじまでも聞いていいぞ？」

「私の友人が行くとだけ、水の精霊王様から聞いています。」「じゃ簡単に来た目的を話そう

魔物の大侵攻について話した。

「そのような事が、大変なことになつてゐるのですね」

「簡単に信じるんだな。この世界の人間は何も知らないって聞いてたんだけど。」

「巫女ですし先ほどのジンさんが何も無いところから現れるのを拝見してしましたから」

そんなものなのか？ついでに聖痕を見せる。

「すごいです。聖痕はひとつだけでも持つていれば歴史に名を残すような人達ばかりで、いまはもうほとんどいらないのにそれを7つすべてだなんて。」

なんか感動している。まあ聖痕は精霊王に認められたものにだけ与えられるもので、精霊に対し絶対の支配力を發揮する物で、一つ一つに絶大な力がある。聖痕の発動時は、精霊王に近い力を与えられると思われているのだ、まあ実際はそこまで便利な物ではないのだが。

突然雰囲気が変わつて真剣な表情で

「あ、あのお願いがあります。どうかお力を貸しください。」

「？・・魔物でも出てるの？」

「いいえ、実はこのあたりの村を盗賊が牛耳ついて毎月食べ物などを奪われているのです。」

毎月？

「略奪じゃなくて定期的に奪いに行くのか？」

「はい、それでこれ以上奪われると村が餓死してしまいます。」

なんだかソフィアの言葉には違和感がある。違和感を確かめるために

「じゃあ一度村の人集めてくれる」

村の状況を見るのが一番早い、予想通りだと何か手を打たないといけなくなる。

3話 村の状況

まだ夜が明けたばかりのようだった。

ソフィアに村の人を集めて集会を開いてもらつた。

思つたとおりだつた村の人間はみんな瘦せている。これでは餓死者が出ていそうだな。考えていると

ほとんどの村人は、不審そう田を見てきた。まあ仕方ないなよそ者だしちょつと強気に言つとくか。

「まず聞きたいんだけどなんで戦わずに滅ぶ方を選んだんだあんたら?」

「な、なんだと」

「よそ者が知つたような口を」

村人が怒り出す。村人A、Bがうるさいな。

「静かに」

なんか村長っぽいのが出てきたな。ダンディなおつちゃんが村人の格好をしいていた。

「どういうことだね食べ物を捧げなければ我々は殺されていた。なのに君は我々が滅びを選んだと言つた。それはなぜだね?」

「なんでって」

俺は、あきれてしまった。今若者を制したところからもおそらく村長なのだろう。村長ですらこの状況の矛盾に気づいていないのだおそらくあまり物事を考えずにしてきたのだろうまあこの世界ではしかたないのかもしれないが

「あんたうすでに食べるのに困つてんだる本来少しそつたぐものを奪うのなら生きさず殺さずが基本だ。だが、この村は滅びようとしているなぜだ？簡単だ他の村が逆らわなによつにするための生贋に選ばれたんだよあんたたちは」

「そ、そんな」

盗賊が取つたこの手法には、たまに見せしめがないと村が言つことを聞かなくなるからな。

村人たちが絶望の表情を浮かべる。はあ、少しくらい考えろよな。

「ジンをくじうすればいいのですか？」

いち早く立ち直つたソフィアが聞いてきた。

「少なくともこの村ができることはないな。どにつもこいつも瘦せていて碌に戦えんだる」

なんか絶望が深くなつてきた。

「盗賊は、どれくらいいるんだ」

「80人ほどで今日の暁に5人ほどが徴収にきます。」

「ならなんとでもなるな」

「えつ、なるんですか」

なんか驚かれた。まあ問題は撃退した後の復讐だよなあ殺るなり

ついて壊滅させないと後が面倒だ。

しばりく考え。・・・よしこの作戦でいいの。

「じゃあ報酬の方だが」

また絶望の表情を浮かべた絶望好きだな。

「あ、あのジンさんもひこの村にはなにも・・・」

「ああ、俺がほしいのは旅の友だよそれで、ソフィア」

「なんでしょう」

「それをソフィアに頼みたいんだ。」

4話 盗賊一掃

あのあと集会が荒れた荒れた。まあソフィアさん美人だもんな。何より俺が信用できないうらしい。特に村長みたいな名前はオルムさん（ソフィアさんの親代わりでもあつたらしい）なんか怒つてたなあ。

まあ仕方ないか、その場は、ソフィアさんのおかげで何とかおさまった。そこに

「ただの王都までの道案内だよ」

と説明しその後ソフィアさんが

「わかりました。ご案内します。」

といつていたのでそこで集会は解散となつた。

で、今何をしているかといふと田の前で盗賊が三人ぶつ倒れている内ひとりは死んでいる。

「さつさとつれて帰れ、お前らみたいな雑魚が4、50人で徒党を組んでも雑魚は雑魚なんだよ」

盗どもは、仲間を抱えて逃げていった。その顔には、憎悪を浮かべていた。

「どうして先ほど、4、50人と言つたのですか？」

ソフィアさんが聞いてきた

「4、50で言つておけばもつと大人数でくるかなって、それにひとりは殺したから黙つていられないだうし」「

正直作戦といつてもこの程度なのが最初の五人は、格闘だけで倒したから挑発には乗るはず。殺す時だけは、精霊術を使つたが。まあ村人は不安そうだったが、どうにもならん。もともとこの村のためだしな。

この日は神殿に泊めてもつらた。

異世界2日目

次の日の真昼間に案の定八十人を超える人数で押しかけてきた。これならほとんど来たと思つてよさそうだな。

「てめえか、うちの部下やつてくれたのは」

村のはずれに立つていいかにも村人っぽくない俺になんか話しかけてきた。

俺は、軽く無視して。

「ソフィアさんは、そこで俺の精霊術を見ててくれ」

「はい、ジンさん」

ちよつと震えている。ちよつとかわいい。

「おい無視してんじゃねえぞ」

「知らん、死ね」

手を掲げ

「『炎蛇・四首』」

・ソフィアサイド・

彼は80人程度どうとでもなるといつていきました。

確かに精霊術は、強いです。魔法のように詠唱を必要としないので単独での戦闘もできます。その分魔法に比べて習得が難しいですが、精霊と通じなければならぬので才能も必要です。

それでも80人を相手にするのは、難しいはずなのですといつより無理です。

なのにどうじょうか考えている間に昨日は畠に来た盗賊を倒してしまいました。今日の襲撃が決まってしまいました。

そして目の前には、80人を超える盗賊がいるのです。さすがにこわいです。

「ソフィアさんそこで俺の精霊術を見ててくれ
「はい、ジンさん」

すでに彼の周りには、かなりの火の精霊が集まっていました。それは、わたしの想像を超える力でした。

これには驚きました。わたしは、てっきり聖痕を使うものだと思ったのです。聖痕を使わずにこれなのか、と。

彼は、手を掲げ

「『炎蛇・四首』」

炎の大蛇が四匹出て来ました。

「灰にしろ」

大蛇が盗賊に襲いかかりました。大蛇に噛まれた盗賊は燃え灰になりました。

「ひいい」

「なんだよこれ」

「聞いてねえぞ」

一方的でした。剣で攻撃しても剣は溶けてしまい盾で防ぐこともできず3分ほどで盗賊は、全滅していました。

その凄惨なはずの光景は、私を魅了しました。この人は聖痕に頼り切つた戦いかたをしません。そんな彼が聖痕を使つたらと思うとゾクゾクします。私はこのとき彼に魅せられてしまったのです。

5話 ソフィアの畠田

・ソフィアサイド・

村の人たちは大変喜んでいました。わたしもホッとしてしまいました。

盗賊のアジトからお金や食料も手に入つて、今年はなんとか大丈夫そうです。

お皿を食べ終わるとジンさん、やっぱジン様と呼びましょ、ジン様が

「じゃあ王都までよろしく」

「え、 もう行くのですか?」

「ああ、あまり時間もないからな」

今言わないこともいっぱい言えないにかもしねない。だから私は、この場で自分の考えをジン様に伝えることとする。

「あの私も連れて行つてください」

「うそ、だから王都までよろしく」

「やうではなくて、その先もずっとお傍にさせてください。」

「それひとつまつ」

顔が体が熱くなつてきました。

「はい、その……お慕いしています。」

「……」

「……」

「その、ありがとう。……でも俺、実はハーレムを作りうとか考
えてますよ。」

「えと、ジン様ならそれくらいは、いいと思います。きっと」

「（なんか様付けに戻っているな）かなり危険ですよ。」

「私も精霊術が使えます。自分の身ぐらには守れると思います。も
し足りないならもつと力をつけます。」

「オルムさん、いいんですか？」

「ソフィアをよろしくお願ひします。」

満面の笑みのオルムさん。

「（やつはあんなに怒っていたくせに）……俺は夜は意地悪で
すよ」

「大丈夫です。すべて受けとめます」

「……わかりました。これからもよろしくソフィアさん。」

「あのソフィアとおび下せ」

「わかった。ソフィア」

「はい。ジン様」

「じゃあ挨拶とかあるだろうし出発は明日の朝で

「よろしいのですか?」

「ああ、新しい仲間のためだ」

「ありがとうございます。」

ジン様はやつぱり優しい方です。

・ジンサイド・

その夜俺はソフィアと同じ部屋にいた。

俺は、ベットの上でソフィアの髪を後ろから撫でていた。

「ありがとうソフィア、一緒に来ると言つてくれて。俺はこの世界では、一人ぼっちだつた。だからとても嬉しい」

そう言つて俺は、ソフィアを抱きしめた。ちょっと声が震えていたかも。

「ずっとお側にいますから、もう一人にはなれませんよ。」

「そうだな」

ソフィアが手を握ってくれた。

俺はしばらくの間、髪をもう一度今度は全体的に、撫でた後、ソフィアを抱えてベッドに倒れこんだ

「ひゃ

「ソフィア実は、この前まで精霊界にいたから実は一年ほど禁欲生活だったんだ加減できないかも」

「はい。思う存分に。あの、でも初めてなので最初はやさしくへ

「わかった

」つして俺は、この夜ソフィアが気絶するまで彼女と愛し合った。

6話 奴隸商人

異世界3日目

朝ソフィアの体を拭きながら謝った。

「ソフィア、その、すまん」

「いえっ、そのっ、すごかつたです。」

頬を染めてそんなことを言つてくれた。襲いそうになるのを我慢する。

それでもその表情の中に疲れが見える。昨日は氣絶するまでしたからなあ。

村の人間も盜賊の一件で俺のことを認めてくれたのかソフィアがついていくことに反対はしなかった。

一部の男どもはまた絶望していたが。

俺のことが怖くないんだな。俺は、殺してもあまり罪悪感を感じなかつた自分が怖かったのに。

確かに俺は、必要なことに躊躇はしない性格だつたが殺しを平然とするとはなあ。

今は、王都への街道を進みながらこの世界について隣を歩くソフィアに聞いていた。ソフィアもほとんどあの村を出ることがなかつたので、あまり村の外のことはあまり知らないらしい。話を聞くと大陸の中央は、人間の国が多く外側のほうは、人間の国

が少なく亞人の国が多いらしい。

今いる国の話になるとソフィアの顔が少し曇った。話を聞いてみると、この国の名前はグーロム王国またの名を『奴隸王国』つまり国が奴隸を推奨しているのだ。

王もかなりの愚か者らしく奴隸を得るために、戦争を起こすような王で、他国の民どころか自国の民にも嫌われているらしい。

だが他の国の支配者階級は奴隸を手に入れられるので黙認している。表立つて反対しているのは、クイント皇国だけであるらしい。

クイント皇国の中は傑物らしく國力も大きい（協力関係を築くならくイント皇国か）。魔物の大侵攻は、俺だけでは無理らしいから国単位の協力が必要不可欠だからな。

クイント皇国を中心に向とかならないだらうか。

「この世界は、本当にだめそうだな。」

「はい、今大侵攻があれば簡単に滅ぶでしょうね。」

今日は暗くなり適当なところで野宿になつた精靈達のおかげで野宿も快適だ。警戒もしてくれるし。

そして、次の日

「なあソフィアこいつらって」

「はい、奴隸商人と子飼の傭兵といったところでしょう」

俺たちは、ガラの悪い傭兵崩れに囮まれていた。商隊が前から来たと思ったら、傭兵崩れが出てきて、いきなりこれだ。

「そんで商品は、あの馬車の中で俺たちもそこに入れと」

「せうでしじょうね（氣の毒な方たちですね、まあ自業自得ですが）」

ソフィアは、かわいそうな人を見るよつた表情をうかべた。俺が手加減しないのがわかっているからだろう馬車から豚が出てきた。

「おまえらも今から私の奴隸だ。ぐふつぐふつ」

「気持ち悪いやつだな。喋るなイライラする。」

「気持ち悪い豚だな」

口が滑つた。

「なんだと貴様！！おいお前たち男は殺してかまわん」

沸点の低いやつだ。

丸腰だと侮ったのだろう傭兵が剣を抜こうとしているがのんびりしたものだった、と思ったらその傭兵が吹っ飛んだ。

ただの風の精霊を使った突風だ殺傷能力はない。これで時間も稼いだ。

「なつ、精靈術師だと」

その吹っ飛んだ男が立ったところで

「『風刃』」

腕を横に薙いだ。

とつさにしゃがんだ二人以外の奴隸商人と傭兵の首が風の刃に切り飛ばされた。

お、避けたよ、見えないはずなのに。よけた内の一人が切りかかつてきた。

「まで！」

もうひとりが止めようとするが、俺は半身になつて剣を避けて、風を纏つた左手で剣を右手で顔を掴んだ

「なに！」

剣を握ったのに驚いたのだろうはい時間切れ。

「『流雷』」

バチイツ

顔を掴んだ右手から電流が流れ男は氣絶した。もう一人の男が悔しそうにしていたので。

「気にするな、殺していない」

「え？」

「俺の質問に答えれば逃がしてやる」

少し困惑していたが。

「わかった」

敵意がないことを示すためだらうつ男はその場に剣を置いた。

「何でも聞いてくれ」

「なぜ奴隸商人の護衛をしていたんだ？」

「えつ、どういふことですか？」

ソフィアが驚いていた。

「この一人は、ほかと違つ感じがした。」

実際格好からして傭兵もどきとは違つた。装備にしつかりと手入れもしているようだし、何より質が違う。

「ああ、俺たちは冒険者だ」

「・・・冒険者がこんなことを

ソフィアが蔑んだ目で見ていた。冒険者が慌てて

「いや、俺たちは商隊の護衛を受けたんだ。それが奴隸の運搬にすりかえられて前金を使つてしまつていて下りることができなかつたんだ」

「そうだつたんですか」

ソフィアの表情が和らいだ俺は苦笑して次の質問にうつる。

「なぜ冒険者を雇つていたんだ？」

「運んでいたのが、高級奴隸と戦闘奴隸で結構な額で用心のためだつたらしい」

「奴隸を解放するには、どうすればいい？」

「マスターキーを使うか、主が開放するしかない、キーは購入者の所にあるし、うし主は君が殺しちゃったから」

冒険者は残念そうに

「中の二人は助けられないと思う

ソフィアが悲しそうにしていた。だが今は話せない、これはあまり公にはしたくないのだ。

「そりかありがとう。俺はジン」とおはソフィア、俺の女だ。」

ソフィアが頬を染め、ジークは羨ましそうにしていた。

「ソフィアです。先ほどは、失礼しました。」

「俺はジーク、冒険者だ。」

「ジークは中の一人について知っているのか?」

「いや、顔もしないな。」

それなら問題ないだろ? 嘘をつく必要もないし。

「中の一人とやらは俺に任せてくれ。ジークは仲間を王都に運んだ
ほつがいい」

「そうだな」

ジークは、仲間を荷物のよつて馬にくへると
なんか扱いひどいな、ほかにもないかやらかしているのか?

「本当にありがとう仲間を殺さないでくれて、王都に行くんだろう?」

「ああ」

「じゃあまた会えるかもしけないな

「かもな」

そしてジークは去つていった。
あれは、前振りだろうか。

7話 奴隸の一人

それじゃあなかの二人と」対面しますかね。

馬車の中に入ると暗くてよく見えないが金髪と炎髪の少女が床に座つていた。

首には、複雑な模様のかかれた鉄の首輪のよつた物がつけていた。俺の顔を見ると金髪には、ビクッと怯えられた、炎髪の方は俺の前まで来ると突然、床に頭を押し付け土下座の格好で

「奴隸の分際でお願い申し上げます。イリヤは逃がしてもらえませんでしょ、うか、わたしが戦闘奴隸も高級奴隸もいたします。だからどうかイリヤを逃がしてくださいお願いします。イリヤはまだ」

「黙つてくれ」

ビクッ

つい言葉に怒気を混じらせてしまった。炎髪が黙つてガクガク震えている。このとき俺は、かなり苛立っていた。
これがこの世界の普通なのか、自分の認識を改めさせられた。軽く会つてみるか、と思った自分が腹立たしい。

「ちょっと頭を冷やしていく、ソフィア一人を頼む」

俺は馬車から出て少し離れて座り込んだ周りは血のにおいが充満していた。

初対面の誰とも知れない人間に對してすることが、あの対応なのかこの国は、それが普通なのかはわからない。

だが、今決めたこの世界から奴隸制度をなくす絶対になくす。たとえ国を滅ぼしても。ソフィアに心配をかけてしまったな。

しばらくしてから馬車に戻った。

ビクッ

怯えられた

「ああ、さつきはすまなかつた。」

「い、いえ、ソフィアさんから私達に対して怒つているわけではないと聞きましたので」

金髪の少女が初めて喋つた。金髪を肩ぐらいままでって顔はかなり整っている。髪から耳は尖つているのでエルフだった。

「あ、あの先程は、も、も申し訳ありませんでした。」

炎髪の方は、かなりの怯えている近くで怒氣を浴びせてしまったから仕方ないか。

顔が俯いていてよく見えないが、それでも綺麗なのはわかつた。髪をポニー テールにしているのも可愛らしい。

「あの私たちはどうなるのでしょうか？」

「悪いようにはしない」

それでも二人は、不安そうだった。

「ソフィア、マスター キーはあつたか？」

実は一応探してもらつていたんだが

「いいえありません。着飾るための衣装と宝石などがあるだけです。

「やはりないか。・・・しかたない神様のやつにもらった力を使つしかないか。」

「あの助けていただいてありがとうございました。ですが私たちは・

・・・

二人は、あきらめの表情を浮かべた。キーがなければ逃げることはできない、そんな二人に俺は、「一人とも立つてくれるか?」

「え」

「ほら早く」

「は、はい」

その姿勢だとちょっとあぶないな

「ちょっと前かがみになってくれる」

二人は、言われるがまま前かがみになる。

俺は、両手をあげ二人の鉄の首輪に手をあてて神様からもらつた力『契約の無効化』を使つた。

首輪が少し淡い光を放つたと思ったら。

ゴト

二人の首輪が落ちていた。

「え」

これには、ソフィアも驚いていた。

「驚いているところ悪いけど、どんどん行くよ、いいかい今から君たちは自由だ、そして俺たちと君達は対等だいいね。

ちなみに今の力は、『契約の無効化』って力で神様とか余程のやつと契約しない限り無効化できる。つまり君たちはもう奴隸ではないんだ」

徐々に状況が飲み込めてきたようだ。絶望の表情は消えその顔に希望が表れる。いいことだ。一人でなにか話しているとおもむろに。

「あのお願いがあります。」

「なんだい、聞けることならきくけど。」

「「私達をあなたの奴隸にしてください」」

「なぜそうなる」

「むう、覚悟はしていましたが、一日で一人旅が終わってしまいまいした。」

俺は、驚くといつより呆れていで。ソフィアはなんだか残念そうだった。

理由を聞いてみると奴隸から開放してくれた恩を返すために側に置いてほしいらしに。

ならばどうすれば側にいられるか考えた挙句出た言葉が「奴隸にしてください」だったのだ。

「それじゃあ意味がないじゃないか」

「そうなんですけど」

「それなら別の形で仕えればいいだけです。それにジン様もハーレムを作ると言つていたではありませんか」

さつきまで残念そうだったのになぜかソフィアが乗り気になついた。

(これまで夜の営みを満足させて差し上げることができます。)

なんて考えていたことにジンが気づくはずもない。ハーレムと聞いて二人は、頬を染めていた。エルフの少女なんかちょっと嬉しそう

だった。

結局エルフの少女はメイド、炎髪の少女は護衛として仕えることになった。

「じゃあよろしく俺は、ジン。聖痕使いだ。」

「ソフィアです。水の精霊術師です。」

エルフの少女は、恥ずかしそうに

「イリヤです。治癒術師です。その、未永く可愛がつて下さい」とんでもない事を言つてのけた。この子は絶対天然だな。

炎髪の少女は、くだけた感じで

「リリスよ、冒険者でギルドランクはB。これからもよろしくねジン、ソフィア」

こちらが素なのだろう、これはいい傾向だ。

二人には、衣装のなかで比較的に落ち着いた服に着替えてもらつた。ついでに宝石類を預いた。二人とも何か聞きたそうにしていたが。

「先に王都に向かおう、宿でいろいろ話すよ」

「そうしましょう」

「わかりました」

「了解」

聞いていたことだが、一日足らずで王都についてしまった。そのたつた二日の距離しかない村が盗賊に苦しんでいたことに俺は、驚いた。これが国民に対する扱いか王なら治安にも気を使うべきだろうに。だが反乱は難しいのだろう成功しても失敗して死ぬのは奴隸だ。まづ傷つくのは奴隸、この国ではそれが当たり前なのだ。

門はあっさり通れた。怪しいやつなどいちいち取り締まらないのだるべ。

もう夕方なので、ソフィアが一度泊まったことのある宿屋を目指した。王都を眺めているとやはり裕福なところと貧しい者の差は激しい裏路地を見たときは、吐きそうになつた。

首輪の付いた死体がいくつか転がっていたのだ。俺は密かにこの国を滅ぼす決意を強くした。

もう他の物を眺めたりせずに前だけを見て歩いた。ソウイア達もつらそうにしていた。不謹慎ではあるがそのことに安堵してしまつていた。

宿屋に着くとソフィアが女将に、

「ダブルとツイン一部屋ずつお願ひします。」

「いやちょっと待てソフィア、まず三人部屋と一人部屋を聞くべきだろう。」

「三人でやるんですか」

「（何いってんだこの子は）いや違うから」

「それにツインとダブルの方が安いんですよ」

後ろの一人は、何も言わないので、後ぶつちやけ女将の視線が痛い

蔑まれているわけではないのだがなんかニヤニヤしている。実はこのとき後ろでイリヤが何か言いたそうにしているのを見たからなのだが。

「わかつた、それでいい」

食堂で先に食事を済ませた後。部屋に行つた。ちなみにこの世界の通貨は、ギルだ。

金貨一枚	10000ギル
半金貨一枚	1000ギル
銀貨一枚	100ギル
半銀貨一枚	10ギル
銅貨一枚	1ギル

になる（半金貨、半銀貨は、混ぜ物があつて色が鈍いのだ）1ギル
＝約10円だ。

一部屋150×2ギル、宿泊客は一食30×4ギル　しめて420ギルの出費だ

それを盗賊のアジトから取つてきた銀貨4枚で払い半銀貨を一枚受け取つていた。

盗賊は周りの村を食い物にしていただけあってかなり溜め込んでいた。換金の必要のない貨幣を幾らか貰つてきていたのだ。

その額は1万ギル　なので残高9580ギルなり

割り当てられた部屋の、ダブルの方に集まり、イリヤとリリスに魔物の大侵攻と神様に頼まれたことについて話した。

ソフィアの時のようにいかなかつたが、ソフィアが室内なのに空から降ってきたことをはなしたり、『契約の無効化』を思い出して

もうつたり七つの聖痕を見せて一応の納得を得た。

嘘をつく必要性がないこととイリヤが聖痕について少し知っていたおかげだ。その上でついてくるかを聞くともちろん絶対について行くと言つてくれた。

「あのご主人様」

「・・・なぜにご主人様？」

「リリスが、メイドならそれが基本だと」

リリスが、二マ～としていた。まあ役得だからそのままで
「で、なんだっけ？」

「確かに聖痕は、徐々に力を溜めていくもので使用にインターバルがあるのですよね？」

「ああ、よく知っているな。でも今は光と闇以外は、ほぼ満タンだぞ。光と闇についてはまだ聖痕の発動ができないから溜めることができないんだが」

「それでジン様は、盗賊も奴隸商人も聖痕を使わずに倒していくのですね。」

ソフィアが納得していた。

「そゆこと、まあ聖痕のおまけみたいなもので精靈と仲いいからな、でもなんでそんなこと聞くんだ？」

「聖痕保持者が殺されるときは、基本そのインターバルの間ですか
ら、ここにいる人だけでも知つておくべきかと思いまして。」

「やっぱりそうなのか、まあ俺は、素でも強いし聖痕も七つあるから大丈夫だと思うが、ありがとなイリヤ」

頭を撫でてやると嬉しそうに細めた目から涙がこぼれた。

「どうした？ 大丈夫か？」

震えた声でイリヤが

「はい、うれしくて本当なら私今頃誰かに買われてきつと今も奴隸で、でもご主人様に助けていただいてうれしくて怖かったのだろう、頭を抱きしめ頭を撫でてやる。

しばらくそうしていると、リリスとソフィアが、

「じゃあ今日はこの辺でお開きとゆうことで、『じゅつくじ』両人

「たくさん甘えてくださいねイリヤさん」

部屋を出て行ってしまった。

もう外は真っ暗になってしまった。

「ご主人様」

「落ち着いたか？」

「はいご主人様の腕の中とでも落ち着きます〜」

なんか言葉がとろけてきているな。頭を撫でていると顔を上げてきた近い。周りを見て

「あの、二人は？」

「気付いていなかつたのか。

「ああもうひとつのお部屋にいったよ、『じゅつくじ』だと俯いたイリヤが顔を真っ赤にして

「・・・あのご主人様、・・・その・・お情けを・・ください」

詰まりながらもそういうってくれた。

「いいのか、俺はハーレムを作るつもりだぞ。」

「はい、ご主人様ならば当然です。私もそこに入れて同じようにしてぐださればわたしは幸せです。それにもうソフィアさんは入っているのでしょうか、負けられません」

考えた時間は、ほんのわずかだった。

「わかった。イリヤ、俺の女になつてくれ。」

「はい、あなたの女にしてください」

「早速で悪いんだが・・・耳を触つてもいいか」

「ふえ・・・耳ですか、ど、どうぞ」

触つてみると不思議な感じがした、さわり心地は人間の耳とそこまで変わらない気がするのだがあきらかに耳の形がちがうのが面白かつた。

特に触つているとイリヤが

「あつ・ん・・んあ」

ちょっと喘ぐのだエルフで耳が気持ちいいのか、やるなイリヤ。そ

んなイリヤに我慢できずベットに押し倒して

「先に言っておく俺Sなんだ」

「ならば私がMになります。」

さすが天然のイリヤ、凄いセリフを平然と言つた。

俺は、イリヤと体を重ねた。

9話 宿屋の朝

異世界5日目

朝起きると隣でイリヤが裸で寝ていた。寝起きにイリヤの耳で少し遊んでからベットを出る。

自分が着替えた後、イリヤの体を布で綺麗に拭いていく。

「あ、おはようございます。」主人様。

イリヤが起きた。

「おはよう

俺はそのままイリヤの体を綺麗にする作業を続けた。

「あの、自分で・・・」

「いいから、させて」

黙つてしまつた。イリヤの顔が赤くなつていぐ。

・・・・・

「よし終わり」

「はっ、ありがとござりました。」

恥ずかしかったのか急いで服をきている。
ちょっと意地悪をしたくなつた。

「これでイリヤの体で触れていない所はないな」

ピタッ

止まってしまった。可愛いやつである。頭を撫で

「一人を呼んでくるから、早く支度しろよ」

部屋を出ると

「うへへ『主人様のバカ』」

本当に可愛いやつである。

ちょっと時間を置いてからソフィアとリリスをつれて部屋に戻った。

「飯の前に少し話そう、大侵攻については昨日話したな、大侵攻を阻むのが一番の目標だが、それとは別に俺個人の目標もある。」

「『主人様の目標ですか？』

「そうだそれはだな。・・・この世界から奴隸と奴隸制度をなくすことだ」

「・・・ジン様、それはさすがに難しいと思います。」

「そうだよジン、奴隸を持っているのは、基本的に支配者側なんだよ。」

二人は否定的だが、イリヤは、

「「」主様、さすがです。どうまでもついていきます。」

とろん、としていた。

「まあ、これは決意表明みたいなものだ、一応手も考へてる。まだ不確定要素が多すぎるがなんとかなると思う。」

この言葉に、一人もなにか考え込んでいたが、何も言つて来なかつた。

俺は、話を変えて

「大侵攻を阻むための協力体制を取る国を探す必要があるんだが、どの国がいいと思う?」

「それはやっぱクイント皇国がいいと思うよ。あそこの王は、民に慕われているし。奴隸を禁止しているから、ジン的にもありだと思う。」

冒険者のリリスが発言した。実際のところ村からあまり出ないソフィヤやエルフの里から出てきて日の浅いイリヤ達に比べリリスは世間についての情報を持っていた。これは正直助かった。

「じゃあクイント皇国と協力体制を取る方向で行こう。クイント皇国となるとさすがに遠いから、まずは金か」

「それならみんなも冒険者になろうよ、そうすれば情報も力もお金も手に入るからさ」

「情報とお金はわかるが力も手に入るのか?」

「うん、あ、そつかジンは知らないか。あのね冒険者登録するときに丸薬みたいなのを飲むんだ。

くわしくは、知らないけれどそれを飲むと体質が変わつて魔物を倒すと気力と魔力が少ししづつあがるんだよ。個人差はあるけどね。」

「へえ、便利なんだな。戦えばある程度は強くなれるのか」

それなら俺はまだまだ強くなれるかもしれない。

「まあ強さの上限にも、限りがあつて上限までいくとギルドカードの称号に『到達者』っていうのが出るんだよ。

さらになんと能力ランク5以上の人には、『超越者』っていう称号が出るんだ。『超越者』は、凄く少ないんだよ。後、精霊術より魔術が主流なのもそのせいだと思うよ」

またまたリリス。冒険者なのだから当たり前なのかもだがちょっと意外だ。

「ジンなんか今失礼なこと考えていない。」

するどいな。

「いや。それじゃあ装備とかいろいろ準備しなきゃいけないし。今日は、お買い物と冒険者登録ということでいいかなできれば依頼？クエスト？も受けたい。」

「そうと決まれば朝」はんにしましょう

「ちょっと待って、あともうひとつ聖痕についてはできるだけ伏せておいてまだ目立つわけにはいかないから、あと『契約の無効化』については絶対に喋っちゃダメ」

「『契約の無効化』もですか。」

「考へてもみて俺はあらゆる契約を無効化つまり無視できるんだ、それでは誰も怖くて契約できなくなるし悪用の仕方はいくらでもある。誰かが利用するために近づいてくるかもしれない。だからもしかれそうになつてもあくまで奴隸解放の能力ということにしておいて。」

実は、もうひとつあるのだがそれについては、今はいいだろ？

「…………」

三人とも呆けた顔をしている
俺まで困惑して。

「どうした？」

「いろいろ考へてゐるのですね、ますます惚れます。
「さすがご主人様です。尊敬します」
「ほえ～、ジンつてすごいね、普通は力を誇示したくなると思つん
だけど。人間ができるのかな？」

照れくさくなつたので

「よしこれで終わり飯に行くぞ」

先に食堂に向かつた。

朝食 $25 \times 4 = 100$ ギル

残高 9440 ギルなり

10話 登録とチーム名

朝食を終えた俺たちは、冒険者ギルドに向かっていた。俺は、道中リリスに質問していた。

「わざいえば称号てのはどんなのがあるんだ」

「こりいろあるよー、ピンからキリまであつて、すげこのはやつぱり超越者かな」

「確かに到達者と超越者は条件があつたよな全部そつなのか？」

「大体はそつだね、でも中には神様の気まぐれで、ユニークなものもあるらしいよ」

神様の気まぐれ・・・・嫌な予感がするな

「なあ、登録するときに称号つて係の人とかに見られるかな？」

「見られるはずだよ」

どうじょう

「何か困る称号ができるのですか？」

「ひと、ソフィアが聞いてくる。

「ちょっと神様を思い出したら不安になつたんだ、宿で言つたけどまだ田立ちたくないからな」

「はあ」

良くわからなかつたらしい。まあ仕方ないかソフィアたちはあの神様に会つたことないからなあ。あいつ神様のくせにいたずら好きなんだよ。

やつこひじりしている内に、俺達は冒険者ギルドに着いた。

王都の冒険者ギルドは、あまり大きくなない。この国に冒険者があまり来ないかららしい、この国に近づきたくないからだらつ。

中に入ると、一応人がいるにはいた。ガラが悪いチンピラみたいなのがたくさん。

チンピラみたいなのは、俺を見た後、後ろの三人を見たら一タニタと気持ち悪く笑つてこちらに近づいてきた。

「なあなあ、嬢ちゃん達そんなのといないで俺達のところに来いよ」と、腕を伸ばしてきた。動こうとしたリリスを止めて、俺がその腕を掴んだ

「悪いなこいつらは、俺の連れでね」

「野郎によつはねえんだよ。ひつこんでや」

俺は怒気を込めて

「これが最後だ。俺の女に触れるな」

一瞬怯んで何を思ったのかいきなり殴りかかってきた。

掴んだ腕に電気を流す。声も無く男が倒れた。

これだけで終わってしまった。周りは、なにが起ったのかわらないといった様子だった。

俺はそれらを無視して三人と奥に向かつ。

「やっぱりお強いのですね。『主人様は』
「はじめて見たけど、あつけなすぎるジンの実力がぜんぜんわか
んなかつた。」

さりげなくリストがさつきの男を雑魚だと貶していた。
むかついていたのだらう。

奥のカウンターで受付嬢に

「冒険者の登録がしたいんだけど
「四名様ですか？」

あれ落ち着いてるな。もつ少し怖がられるかと思つてたんだが

「いや、三人だ」
「では、こちらにどうぞ。」

別の部屋に通され

「ずいぶん落ち着いているんだな」
「この国では隙は見せられませんから」

よく見ると彼女は、黒い髪を肩でそろえていて少し鋭い目に眼鏡を

かけていて美人秘書といった感じだ。

「大変だな、俺はジン」とちは

「ソファイアです。」

「イリヤです。」

「リリスだよ。」

「始めてクレアと申します。」

「ずいぶんクールな人だな。

「それではこちらに両手を置いてください。」

見ると部屋の中央に、腰の高さまである四角い石としか言い様のないものがあった。

石の上に両手を置いて十秒ほどしたら強く光りだした。正直眩しい。

「なんですかこれは、こんなに強く光るなんて。それに時間がかかりすぎ」

「さすが、ジンだね。」

何度も見たことがあるであろうふたりが驚いている。

石からカードと黒い丸薬みたいなものが光から出てきた。出てきたカードは、光になつて体に入ってしまった。残った丸薬をもつて

「これで終わり?」

「うん終わりだよ。」

トリリスが答えた。クレアさんは、まだ呆けている。

その間に残りの一人の終わってしまった。やっぱり俺のときほど時

間はかからなかつたし、光も弱かつた。

この時には、クレアさんも何とか落ち着いていた。

「それでは、その丸薬を飲み込んでください、飲み込んだらカードを見せてください。登録しますので、出し方は、念じれば出てきます。」

三人とも丸薬を飲み込んだ後、カードを出してみる。

「お、出た出た。」

「よ～し、みんなで見せっこしよ」

「そうだな」

まずソフィアか

名前	ソフィア	種族	人間	性別	女
ギルドランク	F				
能力ランク	総合D	気力D	魔力C		
チーム	なし				
称号	水の巫女	精霊術師			

「精霊術師ですか、珍しいですね。」

「へえ～ソフィアって巫女さんだつたんだ。」

次はイリヤだ

名前	イリヤ	種族	エルフ	性別	女
ギルドランク	F				
能力ランク	総合D	気力E	魔力B		

チーム なし

称号 ジンのメイド 治癒術師

「・・・・」

次いこつか。

はい、リリス。

名前 リリス 種族 人間 性別 女

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム なし

称号 ジンの護衛 熟練者

「また変なのがある」

「あのクレアさんからでいいですか。」

「まあいいですけど。」

名前 クレア 種族 人間 性別 女

ギルドランク C

能力ランク 総合C 気力B 魔力C

チーム なし

称号 ギルド職員

「それじゃあ真打といきますか。」

ソフィアが嬉しそうに言つ。クレアさんも興味があるようだ。顔が

近い

「見せなきやだめだよな。
「ダメですよ」

名前	ジン	男	種族	人間	性別	男
ギルドランク		E				
能力ランク	総合C		気力	B	魔力	D
チーム	なし					

称号	聖痕使い	精霊王の友人	救世主	三人の女の主
	奴隸の解放者	精霊術師		

「あ、あなた何者ですか？聖痕つてまさか？」

クレアさんを落ち着けるために魔物の大侵攻について話すことになつた。

「ということで、できれば内緒にしてほしいんだ。」

「わかりました。世界の危機です、わたしも協力を惜しみません。」

ギルドの職員で目の前でカードを出されても、信じるしかなかつたのだろうすんなり信じてくれた。

思わぬところでギルド内に協力者ができた。

「気を取り直して一応ギルドやカードのことを説明いたします。最初のギルドランクは、能力ランクから二つ下のものがつけられます。

「ランクは上位から、SSS - SS - S - A - B - C - D - E - F - G となります。依頼は、自分のランクよりひとつ上の物まで受けることができます。

成功が続けば昇格、失敗すれば降格です。昇格には、自分のランクより下の依頼をこなしてもあまり意味がありません。」

「つまり降格は、依頼のランクに関係なく失敗が続ければ落ちるということですか？」

「はい、そうです。丸薬のことは知っていますか？」

「ああ、知ってる。」

「そうですか、あと、能力ランクは、あくまで気力と魔力の平均なので、精霊術師の実力は関係ありません。なのでジンさんは、すぐにランクを上げていけると思いますよ。」

最後にチームについてですね、依頼や探索は複数ですることが多いですし、チームに専門の依頼もあります。あとチームをつくれればお金の貯金ができます。個人の貯金は、人数が多くてできないんです。

チームに関してはそんな感じですね、どうしますか、チームをつくりますか？

「そんなに簡単に作れるのか？」

「ええ、チーム名さえ決まればすぐにでも」

「どうするか

「ジン様が決めてください。私達は、ジン様の女なのですから」

「そうです。ご主人様」

「私もジンが決めていいと思う。」

「それじゃあ」

しばらく考えて

「『世界を結ぶ者達』でどうだろう。魔物の大侵攻には世界の人々の力が必要だ、そして俺達は国を種族を繋げなければいけない、だから『世界を結ぶ者達』」

どうだろ？、真剣に考えてみたのだが

「おお～、いいね、それ」

「そうですね。頑張りましょう。」

「今このバラバラな世界を繋げる。これは、戦いの後の世界が楽しみですね。」

「すばらしいと、思いますよ。

いつして俺達のチーム名が決まった。

1-1話 依頼とお買い物

チームの登録が終わるとクレアさんが

「依頼は受けられますか?」

「そうですね、みんなで受けられて、お金を稼げるそんな都合がいいのつてありますか?」

「ありますよ」

「・・・あるんですねか」

「これは、驚きだ。

「チーム限定の依頼でランクが低くいけども、依頼があります。」

「どんな依頼ですか?」

普通なら疑つたりだが俺はもうクレアさんを信用していた。

「討伐系の依頼で一週間以内に一定数以上の魔物を討伐する依頼です。成功報酬はそれほど高くないのですが、どの魔物をどれだけ倒したかで報酬が上乗せされます。」

「討伐すればしただけ報酬が貰えるのか、いいね。それでお願ひします。」

「では、皆さんのギルドカードに依頼をいれますね」

俺たちがカードを渡すとカウンターの石盤の上に置き何か操作していた。

「これで誰がどれだけ魔物を倒したかが分かります。ギルドカードを見てみてください。一番したに欄が増えていますから。」

作業が終わり返してもらつた。

ギルドカードを見ると。一番したに

総合討伐数	000
ジン討伐数	000
内訳	

と、いつた具合だ

「討伐指定地域は、オルムの森です。指定討伐数は300です。報酬に上乗せできるのは500なので上限は800ですね。」

「ありがと、次いでに何処かいい武具屋と宝石商を知らないか?」

「武具屋でしたら、ギルドを出て左側の三件先あるところがいいですよ、ギルドが近いので商売もまともですしギルドが懇意にしてるので、宝石商は武具屋の正面にあるお店をおすすめします。」

「ありがと。じゃあ皆行くつか」

「頑張ってくださいね」

「ついて俺たちがギルドを出た。

俺たちはまず宝石商で奴隸商人の馬車から取ってきた宝石や装飾品を売りはらった。

宝石と装飾品は三万、ギルになった。

そして今俺たちは、勧められた武具屋にいる。

「誰に何がいるんだっけ？」

「わたしはレイピアかな、前使っていたのもレイピアだったし

リリスは、すんなり答えたが、ソフィアとイリヤは黙つたままだ

「どうした? 一人とも」

「実は何がいるのか解らなくて」

「実はわたしも」

「じゃあ店主に聞いてみよつか

「じゃあ、わたしはあつちでレイピアをがすね」

「ああ、頼む」

リリスは剣が並ぶ場所にいった。

「じゃあ、一人とも行くつか」

奥に行くと浴槽のここおじさんがあが話しかけてきた。

「こりゃしゃいます。私はこの店の店主のドルトンと申します、何かお探しですか？」

「ええ精霊術師と治癒術師で使えそうなものってありますか？」

「ふむ、精霊術師のかたは、どの精霊をお使いになるのですかな？」

「水の精霊です。」

「それでしたら」

ドルトンは、奥から小さな箱を持ってきて中を見せてくれた。それは青い石のような物のついた石の光る綺麗な指輪だった。

「こりゃしゃいてこる石は、水の石といいまして魔力を込めるときの精霊が集まりやすくなるものです。以前は、そのまま水の指輪といいます。」

「試しても？」

「どうぞどうぞ」

ソフィアに持たせてみる。するとじばりくしていつも以上に精靈が集まってきた。

これは、アリだな。

「これはいくらですか？」

「精靈術師は少ないので、需要は少ないのでですが、水の石が貴重でして。8000ギルになります。」

「買います。」

「え、よろしいのですかそんな大金」

「装備をケチつてソフィアが怪我したら大変だろ、だからいいの。」

「ありがとうございます。（やつた、ジン様から指輪をいただけるなんて）」

「いいなあ、ソフィアさん」

イリヤが羨ましそうにしている。

それを見たドルトンが、気を利かせたのかおもしろそうに

「治癒術師の方は、こちらなどいかがでしょうか？」

別の箱を取り出した。こちらも指輪だ。こちらは、石は無く少し幅広で複雑な文様が描かれている。こちらも水の指輪に劣らず、綺麗な指輪だった。

「これは単純な、治癒魔術を含む魔術の補助ですね。その中でも治癒術を意識して作られたものです。ヒーリング・リングといいます。」

「

イリヤが田を輝かせていた。ソフィアは、少しうなだれていたが。
イリヤがおそるおそる

「あの、おこくらですか?」

「そのこからは、治癒術を意識しているのと、装飾品もかねてあります
まして10000ギルとなります。」

「うう、高いです。」

イリヤが落ち込んでしまった。

「イリヤ大丈夫だから」

と頭を撫でる。撫でていると

「どうしたの?」

リリアが戻ってきた。

「ちょっとな、それより決まった?。」

「うん、ちょっと高いんだけど。」

そして、レイピアを出してきた。

「わたしスピードタイプだから。強度補強と軽量化の魔法がかけら
れてるこれを選んだんだけどね。値段がね、その~」

リリストが、言いづらそうに

「4000ギルなんだ」

少なくとも二人よりは安い。

ああ、ふたりが落ち込んでしまった。

「あーえーと、後俺だな。刀はあるか?」

「刀ですか、内にあるのは、これくらいしか。」

刀の入った箱を持ってきて中から一本取り出した。あまりいい物ではない。ドルトンもそれはわかっているのだろうバツがわるそうだ。箱を見るともう一本小太刀があつた。俺は妙に気になつて

「それは?」

「ああこれですか。これは不良品として抜けないので。」

「見せてもらいますか」

「どうぞ」

持つて抜いてみると、簡単に抜けた、すると突然、

「【初めまして、我が主、わたしは『鉄餓刀』（てつがとう）と申します。テツとお呼びください。】」

小太刀が喋りだした。みんなにも聞こえているのだろうみんな驚い

ている。しかし土の精霊術師でもある俺は、落ち着いていた。これは、土の精霊に似ている。

「よろしく俺はジン、誰にも抜けなかつたらしいんだが?」

「【私は、土の精霊使いでないとぬけません。私の製作者が土の聖痕保持者でしたので。】」

「それでか。それでテツおまえは何ができるんだ?」

「【刀は切るものです。あえて言つなら金屬等を吸収して成長することができますね。】」

「よし買つた。店主】こつは、いくらだ?」

「きみすごいね。土の精霊術師なのかな?勉強になつたよ。凄そうだけど他人には卖れないし1000ギルでいいよ。」

「これからよろしくなテツ」

「【はい、よろしくお願ひします主】」

全部で23000ギルか・・・

「なあ、鎧以外に体を守れるものつてあるか?」

「それでしたら、防御の護符などいかがでしょう。魔力を通すだけで体の周りに障壁を張ってくれます。強度を魔力に左右されてしまうのが難点ですが。」

「それはいくつだ。」

「ひとつ1000ギルになります。」

「よし四つ買おう、全部で27000か」

「いえいえこれだけの金額を買っていただけるのです。珍しい物も見れましたしサービスで25000ギルドどうしよう。」

「ありがたい。それで頼む」

お金払い各自自分の武器と護符を持って出口に向かう

「毎度ありがとうございます。またのじに来店をお待ちしております。」

「

$$9440 + 300000 - 25000 = 14440$$

その後も、イリヤとリリスの服や食料などこれから必要な物を集め940ギルになつた。

残金 13500ギル

異世界6日目

・リリスサイド・

私は、今イリヤと魔物退治をしてる。

最初はみんなで森に入ったのだが、この森のランクはEランクつまりFランクの冒険者まで入ることができる。

Bランクの私やジンにとって少々退屈だったのだ。総合で50匹ほど狩ったところでジンが（一週間で300なので単純にノルマは終わっている）

「ソフィアの修行をやひつと思ひんだ」

という話になり

なので効率を上げるために一手に分かれたのだ。

ジンがソフィアの修行をするため、イリヤと私が組むのは必然だろう。

イリヤと知り合ったのは、奴隸時代に奴隸される際に負わされた怪我を、こつそり治してもらったのがきっかけで友達になった。（奴隸には、自害以外のことを命令でき禁止もできるが、イリヤは治療行為を禁止されていなかった）

奴隸の間、わたしは友達として不安に潰れそうなイリヤを支えることはできたと思う。でもその不安を取り除くことは出来なかつた。

それを簡単に取り除いてくれたのがジンだった。イリヤにヒツヒジンが特別になるのに時間はかからなかつた。

そして私も奴隸の身から救つてもらつた恩がある。好きではある、あるが、イリヤやソフィアと同じなのか自信がない。小さい頃から冒険者をしていて忙しかつたし、同じ場所にいる事がなく恋愛などしたことがない。初恋もまだと思つ。ジンは、ハ、ハーレムを作るつて言つていたし時間はあるだろうから。

わからないことはわからなこのでわかるまで放置する」とこした。

「イリヤ残念だつたね、ジンと一緒にいられなくて」

「うん、ちょっとね」

少し沈んでいる。

わかれの時は、平氣そだつたのにやつぱりジンの側が一番安心できるのだろう。励ますために

「それじゃあたくさん魔物狩つてジンにほめてもらおうよ」

「そうだね、頑張つたら。頭撫でてくれるかな」

イリヤが赤くなつてゐる。イリヤは、ジンが絡むと頭が桃色になるなあ。いや天然なだけかな。

私達は、それからも順調に狩りを行つた。気付くとずいぶん奥に来てしまつた。

そろそろ戻りうかと思つていた時に私達はそれに出くわした。

それは、サイのような形をしていた魔物で、だが角は太く長さ二丈たつては、2メートルぐらいある。

皮膚は、黒い鉱物の様なもので出来ていてとてもスピードタイプの

わたしやイリヤの攻撃魔法が効くとは思えない。

名前はノワールサイ、サイ型の堅さが売りのAランクの魔物だ。
(何でこんなところに上級の魔物がいるのよ)

心中で嘆いていると、ノワールサイが突っ込んできた。

ヤバい

私はイリヤを抱えて右に跳んだ。ノワールサイは、私達がいた後ろの木を、

三本ほどへし折った。

「デタラメな突進力だ。ジンには悪いがこの突進に護符はあまり意味がないだろう。なので呆けているイリヤに

「イリヤー！ きた道を戻つてジンを呼んで来て」

声が大きくなってしまった。

「リリスはどうするの？」

声が震えている。怖いのだらう当たり前だ今のを見たのだから。それでもこちらを気遣うイリヤに

「私は、あいつを引き付ける。大丈夫ノワールサイの動きは、単調だから時間稼ぎくらいはできるから」

これは事実だが逃げられる保証はない。ノワールサイに障害物は、関係ないのだから

「わかった。待つて絶対にご主人様を連れてくるから」

そう言つてイリヤは走り出した。

「それじゃあ張り切つていきましょうか。」

私は、引きつけるために無駄と知りながら切りかかる

あれからずいぶんたつた。突進を防御せずにすべて回避する。回避しながら考える。

正直イリヤがジンを連れてくるのは、難しいだらうこの森は広いし、木で視界も悪いイリヤの体力も心配だ。だけど諦めた訳ではない、こいつの視界を奪えればスピードタイプの私は、逃げられるはずだ。こいつの動きも大体覚えた。

眼を潰してからの逃走

これしかない。決めたら回避しながら時を待つだけだ。

それから何度も目の突進でノワールサイは、苛立っているのか無理な停止をした。

いい位置だ一步で突ける。

(二二二なら)

私はレイピアを突き出す。

ガキン

ノワールサイは首を下げてレイピアに角を当ってきた。レイピアは弾かれ体勢を崩してしまつ。しまつたこのノワールサイ、自分の弱

点を知つてゐる。ノワールサイが体当たりをしてきた。

ヤバい

助走がなかつたので、私は回避とレイピアと護符で何とか受け流すことができたが。しかし、今度こそ完全に体勢を崩されて転倒してしまいすぐには動けない。

ノワールサイが再度突っ込んで来る。

(避けられない、死ぬ、ジン助けて)
眼を閉じてしまう。

・・・・・いつまでも衝撃は襲つて来ない。

代わりに、心地良い風と暖かい体温を感じる、その体温が戦いで疲れ冷えた体を温めてくれる。

眼をあけると私はジンに、お姫様抱っこされていた。

(タイミング良すぎだよ、ジン)

「ジンー！」

ジンに抱っこされたまま首に抱きついて頬にキスをした。

私は、初めて恋をした。

話は一手に別れる前まで戻る。

しかし、この辺の魔物は弱いな。ほとんどの魔物が、動物が少し強くなつた程度のもので護符があれば死にそうにない。危険がないのはいいことなどだが。

俺は、狼に似たハイウルフを、鉄餓刀で切り裂きながら。鉄餓刀に話しかける。

「なんかお前普通だな。」

「【今の私は、主に抜かれたばかり初期性能ですので。】

「前の所有者のときには成長しなかつたのか？」

「【いいえ、ただ主が移った時に初期化されてしまうのです】

「そりまた、面倒な機能をつけたもんだ。」

「【いいえ、そうとも言えません。前ままでとあまりに癖が強すぎますし、成長にもいろいろあるので主の好きなように育ててください。】

好きなようにって

「具体的にどうすればいいんだ？」

「【金属等を吸収せる時に、私を持つて意識を集中してくだされば、勝手に好みに成長いたしますよ。成長を続ければ隠し機能もあつたりします。】」

「それはそれは、楽しみにしていよ。」

いつたん会話をやめて、ギルドカードを見る。

総合討伐数	050
ジン討伐数	019
内訳	
ハイウルフ	10
グリーングリズリー	2
ラビットドン	7

50か、ソフィアのほうを見る。指輪の力は使えているのだが、攻撃が不得手らしいのだ。まだ、一体も倒せていない。ノルマは終わつたしソフィアの修行でもするか

「階ちよつときてくれ」

三人に側に来てもらひ。

「どうしました?。」

「ソフィアの修行をやめつと思つんだ

「何故ですか?」

「私やっぱり弱いですか? 一体も倒せていませんし」

イリヤは不思議そうにしていた。ソフィアは泣きそうになってしまった。

「いやそうじゃなくて、ソフィアって攻撃が苦手みたいだからその指導をしようかと思ってな、これから先自衛は出来たほうがいいだろうしな」

この言葉にソフィアも納得してくれて。泣き止んでくれた。

「たしかにそうですね。それでは」「指導お願いします。」

「それでは私達は、どうしましょう?」

「一人には悪いけど、このまま狩りを続けてほしい。討伐数がものをいう依頼だからね。」

イリヤは、一応攻撃魔術が使えるので今は、大丈夫だろう。

「わかりました。」

「了解」

二人と別れソフィアの修行が始まった。

いくつか術を見せてもらつたが制御はうまいし精靈の力も申し分ない。となると、ただ攻撃用のイメージが持てないのでどうぞそれを見せるのが手っ取り早い。

「ソフィア今から俺がいくつか攻撃用の術を見せるからそれをヒン

トにして。」

「はい。勉強をせてもらいます」

ソフィアが意気込んでいる。

見せたのは、圧縮して撃つ『水撃』と圧縮した水でものを切る『斬水』この二つだけ。これから自分の形を見つけてくれるといいのがが。

精霊術には決まった形がない、なので自分で形を作ったほうが力を発揮しやすいのだ。

練習を重ね『水撃』に近い物でハイウルフを倒せるようになつたころ。

探査用の風の精霊がイリヤの声を拾つてきた。イリヤはなにか焦つているようだ。

「ソフィア今日は、ここまでにしよう」

「はあ、はあ、わかりました。」

しまつたやらせすぎたか。

「大丈夫か？」

「大丈夫です。早く足を引つ張らないようになりたいですから。」

別にソフィアも集団戦なら問題はないのだが、今はイリヤのほうだ、リリスの声が聞こえないのも気になる。

「ソフィア悪いけどついてきて、何かあったのかも」

「何かつて何ですか？」

「まだわからん、急ぐぞ」

俺は、駆け出す。迷わず森の奥に進みすぐご主人やを見つけた。

「大丈夫か？」

「ご主人様、・・・あの、はあはあ、その」

息切れしているし、えらい慌てようだ。

「落ち着け、なにがあつた。リリスは？」

そこでソフィアも追いついてくる。

「ノワールサイに襲われて、今リリスが引きつけてくれてご主人様を呼んできてる」

俺は、ソフィアに聞いてみた。

「やばいのか？」

ソフィアの顔も強張つていた。

「ノワールサイは、Aランクの魔物です。単純な意味でBランクのリリスさんでは勝てない可能性が高いと思います。」

くそ、俺のせいだ一日目から「手に分かれるんじゃなかつた。」こういう依頼は、なにが起こるかわからないものなのに。

「すぐに行く。一人はここで待つて

「どうやって行くのですか？」

道案内のことだらう。しかし、それには取り合わす。使う覚悟を、決める。

「聖痕を使つ

俺は、リリスのためにこの世界ではじめて聖痕を使つ」と決めた。

風の聖痕を発動

「聖痕発動『嵐帝』」

俺の、周りを風が包む傍目には風の衣を着ていふように見える。発動と同時に俺の視界と感覚が広がつていく。

見つけた。

『嵐帝』状態の俺は、このオルムの森をすべてを見通すほどの探索範囲を持つリリスを見つけるのにかった時間は、一秒ほどだ。呆然とする一人に

「ちよつと行つてくれる。『疾風』」

俺は、ものすごい速さで走り出した。覚えたばかりの氣を使い脚力をあげ、『疾風』で空気抵抗をなくし追い風を起こす、邪魔な木や魔物を風で吹き飛ばしながらリリスの場所に向かう。

二人の目からはすぐに見えなくなってしまった。

「あれが、ジン様の聖痕の発動」

「ご主人様の、本気」

二人は、自分達の近くにラビットドンが来るまで呆然と突っ立っていた。

見えた。

黒いサイの前からリリスを搔つ攫い嵐帝を解く。

リリスが突進を受ける寸前に、助けられた。

ギリギリだった。よかつた本当によかつた。後少し遅れたもうリリスに会えなかつたかもしれない。この世界ではじめて死を身近なものに感じた。

目を閉じているリリスの身体は、長時間の間、回避のみの体力より精神面の戦いだったからか、とても冷えている。

リリスが目を開けると、目を潤ませて

「ジンー！」

抱きついてきて頬にキスされた。

この状況でキスされたことに驚きながらも俺は嬉しくなった。特別になれた気がしたから。

「リリス、大丈夫？」

「うん、平気ジンが助けてくれたから。」

「じゃあちょっと待つてあれ片付けてくる。」

そういうて側に降ろす

リリスは残念そうにしながらも腕を離してくれた

「うん、待ってるね」

リリスが信頼の眼差しを向けてくるな
律儀に待っていた、ノワールサイの前に行き。

「おい黒いの。俺は、俺の大切な女を傷つけるやつを許さない。ち
ょっと残酷な死に方をしてもらつぞ」

次の瞬間ノワールサイが突っ込んで来る。俺は、右足を上げ地面に
落とす。

「『五重・土壁』」

俺とノワールサイの間に5枚の土壁が地中からせりだす。ノワール
サイはそのまま突っ込み土壁を粉碎するが4枚目で突進が止まった。

今度は両手を地面置いて

「『落とし土牢』」

ノワールサイの地面が陥没し円柱状に穴が開き、ノワールサイが落ちこちる。ノワールサイは、狭くて身動きがとれず這い出ることができない。

そこでリリスが近づいてくる。

「もう終わったのさすがだねジン。」

「いいや、まだだよ。言つたろ残酷な死に方をしてもらひつて

「な、何するの？」

「いるある、『炎蛇・六首』」

炎蛇を一分ごとに一匹ずつ穴に順次投入し長時間熱する。皮膚のおかげで燃えることはないが、熱は感じるだろう。生き物なんだから当たり前だ。

つまり俺は、ノワールサイを生きたまま焼き殺したのだ。

ノワールサイは身動きも息も叫ぶことも出来ず悶えながら死んだ。

「ジンす」「大好き」

リリスとしては、自分の好きな人が自分のことで怒ってくれたのが嬉しいらしく、抱きついてきた。俺も失ったかもしれない女の子を大事に抱き締めた。

しばらくした後、キスをして離れる。

「二人のところに戻るか」

「ちょっと待つて。あれ冷やしてくれないかな？」

リリスが、ノワールサイを指す。俺は怪訝を思いながら水を出して冷やす。

穴に降りてリリスが近づき

「『採取』」

光がノワールサイの身体を包みこむ。するとノワールサイの角が根元で折れたり体から黒い鉱石が出てきた。

「この魔法で素材とか貴重な部分を取れるんだよ。まあランクB以上の魔物じゃないと碌な素材が無いから最初はいらないんだけど。Bランク以上の冒険者では、わりと必須なんだよこの魔法。」

そういうながら角を冒険者用の袋に入れる。この袋は、入れた物を自動で圧縮してくれる優れものだ。リリスのレイピアと同じ軽量化の魔法もかけられている。

次に黒い鉱石も入れていった。

「今度こそ行こうか」

と声をかけるとリリスは近づいて来て、腕を絡ませてきた。今まで一番いい笑顔で、

「そうだね。行こ」

そのまま俺達は来た道を戻った。

14話 三人の思い（前書き）

稚拙な文章ですが、よろしくお願ひします。

14話　三人の思い

戻った俺達を迎えたのは、温かい目線で俺とリリスを見る一人の姿だった。

「どうしたんだ、二人とも？」

「いえ、やつぱりこうなりましたか。」

「ジン様が助けに行つたのです。リリスが惚れても仕方ありません。」

「そのことが、まあ俺は、前から俺の女発言しているしな。リリスを見ると。」

俺の背中に隠れて顔を真っ赤にしてもじもじしていた。なにこれかわいい。

「今日は、譲りましょう」

「今日だけですよ、リリス」

リリスが小さく返事をした。

「うん」

今このテントには俺とリリスが向き合つて座つている。

リリスが髪と同じくらい真っ赤な顔で一生懸命に

「あの、ジンお願い、抱いて」

俺は無言でリリスの手を持つて引き寄せ、キスをする。俺は、長いキスの後リリスのすべてを征服していった。

リリスは、冒険者なだけあって体力がありすべての行為を受け入れてくれた。

異世界フ田目

横で裸のリリスが寝ている。起こさないよつとその場を出る

今日で依頼一日目か、と思いながら鞘からテツを取り出します。取り出した小太刀に

「そりいえばお前、金属とかを吸収するんだよな。」

「【そうですよ、主】」

「これなんかどうなんだ?」

昨日手に入つた、ノワールサイの鉱石をテツの近くに置く。

「【これはノワール鉱石ですね。かなり良い物ですね、吸収しても
よろしいのですか?】」

「ああ、かまわない」

「【それでしたら私をノワール鉱石の上に乗せてください】」

「いいのか?」

テツを、ノワール鉱石の上に置く。すると、鉱石が光だし粒子になつてゆつくり吸収されていった。

鉱石がなくなると、今度は、テツが光だし光が消えるとテツの刀身が綺麗な黒色になつっていた。

「へえ綺麗だな。」

「【ありがとうございます。】」

なんか、うれしそうだな。

「【切れ味も良くなっていますよ。昨日の魔物を切れりへりこむ】

「

それは、何気に凄いのではないか?聞いてみると

「【それだけ良質だったのです。倒し方も良かつたのでしょうか】」

「ああ、丸焼きだったもんなあ。たしかに傷なんかもなかつただろうな。」

「あとは、問題がひとつある。これを解決するために討伐に出る前に一度皆にあつまつてもらひた。」

「実は、これから討伐に問題がでてな」

「問題ですか？それはどのようだ？」

「聖痕を使ったときに見つけたんだが。ノワールサイが、奥のほうにまだいるんだ。」

「『えええー！』」

「だから、俺が先行して倒すから皆にはこいつら辺の魔物を討伐してほしい」

「わかりました、けど、大丈夫なんですか？ Aランクなんですよね。」

「

心配そうにソフィアが聞いてくるそれに

「大丈夫だよジンなら、私を助けてくれた時も余裕そудつたし。」

自慢げにリリスが答えた。

「そうゆうじじやあ行つて来るね。と、その前にリリス『採取』の魔法教えてくれる」

「いいよ」

『採取』を教えてもらつた俺は、一人森の奥に向かつた。

・イリヤサイド・

ご主人様は、森の奥に行つてしましました。私達は、この辺りの魔物の討伐を任せられました。

今日もご主人様とあまり一緒にいられないのが残念です。

それにしてもあの聖痕の発動『嵐帝』といいましたか、あれは凄かつたです。精霊術師ではない私にも精霊の存在がわかるほどの精霊が集まつていたのです。

その後の探知も数秒で終わりました。後で聞いたら、風の精霊は探知が得意で、雷の精霊の次に早いそうです。

その力で救われた、リリスは、帰つてきたときすでにご主人様のことが好きになつていよいよつでした。それにすごく可愛くなつていました。

このあたりの魔物を粗方片付けたころ、お昼になつていきました。ソフィアさんが

「そろそろお昼にしませんか？このあたりにはもうあまり魔物はないようですし。」

「の方は、ソフィアさん」主人様のこの世界に来たときから行動と共にしているそうです。羨ましいです。

「そうだね、ジンもまだかかるだらうし」

こちらはリリス、私の友達です。奴隸にされていたときにできた友達でいろいろ相談に乗ってもらいました。ご主人様という呼び方も彼女に教えてもらいました。

私もお腹がすいてきていたので

「私も賛成です。」

三人一致で昼食となりました。周りの良く見える場所に移動して、携帯飲料や果物やパンなど簡単な物を食べています。

実は、このパーティー料理の得意な人がいなかつたのです。ご主人様が一番まともありましたが、簡単なものしか作れないしこの世界の食材に詳しくないと言つっていました。

いつかは、改善したいです。

「リリスさん、昨日はどうでした？」

いきなりソフィアさんが爆弾を投下しました。

「ど、どうしてなにが」

「夜の営みです。」

「えと、その、ねえ」

リリスはこの方面は、ウブですねえ。

「勘弁してください。」

リリスは、何気に一番ウブだと思います。

そういえば、

「そういえば」いつかって三人で話すのって初めてですね。」

「そうですね。いつもジン様がいましたから。」

「やうだよね、私達の中心って間違いなくジンだしね。」

「あつ」

ソフィアさんがなにか思い出したようです。大事なことなのか真剣な表情で教えてくれました。

「ジン様もいないです、伝えたいことがあります。これは、ジン様がこちらに来たばかりのことなのですが。

ジン様が、（ありがとうソフィアついてくると言つてくれて。俺実はこの世界では、一人ぼっちだつたんだよな）といつていたことがあるのであります。」

「それって」

「『主人様』

声に、悲しみが混じります。

それは、どれほどの孤独なんだろう。わたしは『主人様の強さに田を奪われて、私はそのことに気づけませんでした。

「当たり前んですけど、この世界にジン様が来たとき、縁のある人は一人もいませんでした。

ですから、仲間であり私と同じでジン様が大好きなあなた達に話したのです。そしてこれからも一緒にジン様を支えていきたいのです。お強いジン様の孤独を埋め、支えるのは一人では無理ですから」

「そうですね。もつと力をつけて役に立たないといけませんね。その点リリスはいいですよねえ、冒険者の知識を持っているから『主人様のお役に立て』

「でもあたし冒険者なのに戦闘では役に立てなかつたし、イリヤは治癒術があるじゃない」

「『主人様は怪我しませんし、してほしくもありません』

「私も攻撃の術がまだいまいちで。」

・・・

「　　はあ　　」

みんなでため息をついてしまいました。

「でも好きな人のためです。がんばりましょ。」

「そうだね」

「その点は、ここにいる人は大丈夫でしょう」

私達は、決意と結束を強い物にしてご主人様のため何ができるかを考えます。

日が沈む少し前にご主人様が帰つてきました。私達は三人ともご主人様のもとに走つて向かれいます。

「お帰りなさいませ、ご主人様。」

「お疲れ様です。ジン様」

「おつかれ」

「ただいま、みんな」

「ご主人様は最初驚いていましたが、すぐにうれしそうに笑つてくれました。

ご主人様ずっとお側にいますよ。

経過報告としては、昨日より順調に進んでいます。内容としては

1日目 072

2日目	242
内 ジン	105
ソフィア	028
イリヤ	036

リリス 073

「これなら一週間より、はやく終わりそうですね。」

「ご主人様、あしたも頑張りましょう。」

14話　三人の思い（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。

「」指摘・「」感想等ありましたらよろしくお願いします。

15話 討伐報酬と幼い龍

異世界1-1日目

「お帰りなさいませジンさん。ご無事で何よりです
俺達は、5日で依頼を終え6日田には王都に戻りそのまま、ギルドに
来ていた。

「クレアさんお久しぶりです。これが討伐数です。」

そう言って俺は、ギルドカードを見せる。
クレアさんが俺のカードを、受け取りながら二人に。

「他の皆さんのも見せてもらつてよろしいでしょうか、内訳が計算
に必要なので。」

三人も渡す。クレアさんが内訳を読みはじめた

「え、とノワールサイ？ それも三体！？」

「どうかしました？ クレアさん」

「あの、欄にAランクの魔物があるのでが」

「ええ、倒しましたよ。あ、リリスに聞いたんですけど、素材つて
ここで買い取つてもらえるんですね。」

「え、ええ、はいそうです。能力ランクCでAランクの魔物を倒し

ますか、さすが聖痕保持者ですね。・・・ちょっと待っていてください。」

奥に戻り、貴禄はあるが少し疲れていそうな中年の男性が連れて戻ってきた。

「君がAランクの魔物を倒したのかい？」

少し不審そうにしている、仕方ないがちょっとムカつくな。なので証拠を出す

「ええこれがノワールサイの素材です。」

角とノワール鉱石を取り出す。

「こちらの方が例の聖痕保持者です。」

「・・・聖痕を見せてもらつてもいいかな?」

クレアさんが話しているのなら仕方ないか。

「どうぞ」

左腕の聖痕を見せる。

「先程は失礼しました。ギルドマスターのガルダと申します。突然ですが特例であなた達のランクを上げたいと思うのですがよろしいでしょうか、クレアの推薦でして。」

「はい? いいんですか?」

「ええ実力がある人に、依頼をどんどんやつてもうつたまにありますよ。受けいただけますか？」

「まあランクが上がるのにはありがたいから構わないが」

「それでは、Aランクを倒した、ジンくんはEランクからBランクに、イリヤさんとソフィアさんはEランクからDランクに上げたいと思います。」

「こきなりBですか、よろしいので？」

「ええそれだけ期待しているのです。それでは、わたしはこれで仕事がありますので」

奥に戻つていつてしまつた。すぐに行つてしまつたな忙しいのか？思わぬ形で昇格してしまつたな。

「それでは、報酬についてですねちょっと待つてください」

討伐した内訳は

総合討伐数	812
内訳	
ノワールサイ	003
ハイウルフ	332
グリーングリ	
ズリー	101
ラビットドン	296
バインドスネーク	0
80	
となつて	いる。

上乗せ報酬は

Aランク = 金貨一枚

Bランク = 半金貨一枚

Cランク = 銀貨一枚

Dランク = 半銀貨五枚

Eランク = 半銀貨一枚

Fランク = 銅貨一枚

Gランクの魔物はいないらしい

「上乗せ報酬としては、Aランクが3、Dランクが181、Eランクが628なので。超過の12体を除いて金貨三枚と半銀貨152枚分なので総額45210ギルになります。」

「　　「おお」　」

「お金持ちです。」

「一週間で45000ギル、冒険者つて儲かるんですね。」

「いやいや本来Eランクの報酬じゃないからねこれ、普通なら10000ギル前後つてところだよ。」

リリスが一人に常識を語っている。
それを横目に

「素材の方はどうなりますか?」

「ちょっと待ってください、ええと、ノワールサイの角700ギル、ノワール鉱石ひとつ250ギルいくつ売りますか?。」

「?ほかにも使い道が?」

「ありますよ、鍛冶屋で加工したり需要の高いところで売ったりですね。」

角は3本、鉱石は1~4個ある（ひとつめすでに消費してこむ）
一応少し残すか

「じゃあ角を一つと鉱石を12個売ります。」

「はい、ありがとうございます。4400ギルになります。」

合計49610を受け取り

$$13500 + 49610 = 63110$$

持ち金63110ギル

「クレアさんこの辺りで一番いい鉱石って何ですか？」

「鉱石ですか？」

「金属ならなんでもいいですよ」

「それなら龍輝石がありますが、これは入手困難なんですね。」

「なぜですか？」

「昔はよかつたんですが、今は龍の縄張りなのです。」

いるのか龍が

「龍つてやつぱり強いの？」

「種類にもよりますが上の方は最強種に選ばれるほどです、知能も高く言葉も扱います。」

ぜひ見てみたい、会ってみたい。

それに協力を取り付けられれば大きな戦力になる。決めた

「それってどこにあるんですか？」

「・・・行くのですか？」

クレアとしては心配なのだろう

「行く」

「あなた達はいいの？」

クレアさんは後ろの三人を見る。

「どこまでもついていきます。」

「ご主人様の望むままに」

「右に同じ」

クレアさんがしぶしぶ。

「わかりました。教えますよ、龍のいる場所はノーバル山です。」

「ただしあそこは龍がいるのでBランク以上の人しか入れません。」

「「ええ~」」

「やつた」

リリスが喜んでるが

「リリスは、王都に残って長旅の準備をしてほしいんだ。」

「ええ~」

三人には駄々をこねられたが何とか説得した。ベットの中で。

そういうわけで一人で山の頂上を目指しているのだ。ここに来るのに一日かかった。

ここは、龍がいること意外はいたつて普通のこところで。龍がいないこのノーバル山は、Dランクの冒険者が入れる山だつた。だから、強い魔物はいないはずなのだ、はずなのだ。

少し先で小型の龍とBランクの牛鬼三体が戦闘していた。いやどうらかというと牛鬼が小型の龍を襲つていいようだ。

どうするか迷つている間に牛鬼の持つ棍棒が龍を襲い直撃を受け倒れてしまった。

(悩むのはやめだ)
まず助ける。それからだ

決めたら即行動、駆けると同時に龍に止めをさそうとする牛鬼の顔に炎球を叩きつけ一番近い牛鬼の首を後ろから鉄餓刀で切り飛ばす。

あと一匹、こちらから手を出さなかつた牛鬼がここで状況を理解したらしく棍棒を振り下ろしてくる。これの攻撃に対し、右の鉄餓刀で受け流しながら風を纏つた左手で喉を貫く。首に穴の開いた牛鬼は、血を吐きながら後ろに倒れる。

あと一匹、最初に炎を顔にぶつけた牛鬼は、仲間が倒されたことで逃げようと背を向ける。その背を見ながら左手を空に掲げる

「『落雷』」

上空に集めていた雷の精靈で牛鬼に雷を落す。

『落雷』を受けた牛鬼は黒焦げになり絶命する。

ひとまず片付いたな。

龍の状態を確認しようと、後ろを向くと女の子になっていた。

「・・・何故に?」

「氣を失っている女の子が答えてくれるはずも無く、疑問はなくならないが。

「まあまあ安全なところに移すかね」

近づくと顔が見えた。文句無しの美少女だ。驚くほど綺麗で長い銀髪だ。年は10歳くらいに見えるが龍であるなら見た目はあてにならぬのかわからない。

少女が横になれる場所を作りそこに寝かせ、精靈術で結界を作る。荷物の中で一番回復効果のあるポーションを少しづつ飲ませる。

俺にはこれ以上のことができない、駄目だなあ俺。

夜通し看病を続けいつの間にか寝ていた。

異世界14日目

座つたまま眠つていたらしい、田が覚めると少女は先に起きていた。どうすればいいのかわからないつとついた感じだ。昨日のこと思い出し、こちらから話しかける

「おはよう、体大丈夫？」

「は、はい。大丈夫みたいです。」

答えてくれた。さてどうしたもんか。

「良かつたよ、ポーションが効いたんだね。龍に効くか心配だったんだ。」

「あの、ありがとうございます。わたしは、ティリエルと申します。

」

「そんなにかたくないでいいよ。俺はジン、冒険者だ。」

「あの、何で助けてくれたのですか？それにこんなに親切に」

「うーん、何故と聞かれても特に理由は無いんだよなあ。牛鬼がムカついたからかな？親切にしたのは、君が可愛かったからかな」

「な、なな、なんです。いきなり」

真っ赤になつて慌てている。初々しい反応だ。

「こや俺は、君の問い合わせただけなんだけど」

「むう、変な人です。それだけ助けるなんて」

「こやこや、美少女は貴重だよ、宝だよ」

「も、もひこいです。それでなにかお礼がしたいんですけど」

「そんなのこよ。」

「ナハニヒナカニナ」

身を乗り出さうとして

「イッ」

痛みに顔をゆがめるティリエルに

「じゃあお皿までは安静にしておいてくれると助かるかな」

「わへ、わかりました。そつをせてもうこます。」

やはり本調子ではないようだ。不服そつではあったが横になつてくれた。

「 もういいえれば龍つて、なにが食べられるのかな？」

「 人と同じ物を食べますよ。」

「 それじゃあ軽く食事にしよう。」

持つてきた食べ物の内、果物類を中心には渡す。

「 いいのですか？」

「 いいのいいの。 もうこねばこれからどうする？」

「 父の所に戻るといつと思つます。 心配してくるでしょ？」

「 もうか」

そういうえば俺つて龍に会いに来たんだつけ。 ティリエルに頼んでみよつかな、と考えていると。

「 あの、一緒に来てもらえませんか？」

16話 聖痕使いVS銀龍

その後、いつしょにティリエルの父親の所に向かうことが決まった。朝食を食べた後にポーションをもうひとつ飲んでもらい、いくらか良くなつたがまだ体が痛むようなので、俺が背負つて行くことにした。

背負われたティリエルは、この時、道を指差しながら（背中広いです。強いし優しい、私にはいないけどお兄様とはこんな感じなのでしょうか。）

なんて暢気なこと考えており、この後起こるであろうことをまったく考えていなかつた。

ティリエルの言つとおりに進み、開けた所に山小屋が見えてきた。
山小屋？え？

「もしかしてあれ？」

「そうですね。」

なんというか。イメージが崩れていつた。

「家なんだね」

「わたし達を何だと思つてるんですか。私達は、人の姿になりますから、家にくらい住みます。それに人の方が燃費もいいんですよ、怪我したとき人の姿になつたのもそのせいです」

それとかと俺が疑問をひとつ解消していると。山小屋の扉から

「ティリエル、 いつたいど・・・」

泣いおつさんが出でてきた。おそらくティリエルの父親だらう。心配していたのだらう慌てて出でてきた、しかしそのティリエルの父親の言葉が途中から小さくなつていつて最後は俺に焦点を合わせる

「貴様の仕業か——」

「・・・面倒そうな父親だね。ティリエルちょっと降りてもうつていい

「人の娘を勝手に呼び捨てにするな——」

「落ち着いてください、お父さん」

「だれがお父さんだ——」

最後はちょっと遊んでみた。

「貴様殺す」

ティリエル父は、いきなり銀色の光に包まれ丸い光の玉ができる。それが一気に大きくなつて一階建てくらいの大きさで光がはじけた、すると中から、いかにも強そうな銀龍があらわれた。銀龍は、この世界でも有数の力を持つた存在らしい。たしかに、彼から受けるプレッシャーは、戦闘時の精靈王たちに近いものを感じる。手加減なんてできそうにない。

「ティリエル急いで離れて、ちょっと派手な喧嘩になりそうだ。」

「ダメです。死んじゃいます。私の方が」

泣きそうになつてゐる。まつたく父親の癖に何してゐんだ。
ティリエルの頭を撫でながら

「大丈夫どつちも死んだりしないから」

いざとなれば切り札もある。

「信じますよ。」

「信じて。」

ティリエルは急いで距離を取る。

「娘といふ霧囲氣をつくんな——」

「うつせー、子離れの時間だ親バカやろう」

聖痕使いと銀龍の喧嘩が始まつた。

「『七重・土壁』」

まず土壁で俺の姿を隠すが、すべての土壁を尻尾の一振りで破壊される。狙いの定まつていない尻尾をなんとかよけて、土煙の中側面に回り込む。

「『炎蛇・四首』」

炎の蛇、四匹で多角的に攻撃する。三匹直撃した。

が、まったくの無傷、しかし驚いてはいた、俺が一種類の精霊を使つたことに対してもうう。それでも銀龍はその驚きを押し隠し、避けずにつくつた時間を使って魔法を使つて魔力を行使する。

「駆けるは魔の風、無数の刃となりて我が敵を切り刻め『トルネード』！」

チツ、口を狙うんだつた。といふか竜の形態でも喋れるんだな。放された『トルネード』は広範囲に回転する風をぶつけてくるものようだ。その中に、風の刃が無数に存在する。詠唱そのままだな。これは防ぐのも避けるのも難しい。なのでもうひとつの方針を取つた。

次の瞬間俺のいた場所に『トルネード』が直撃する。風が止むと俺は、

地中から這い出た。

つまり、地中に潜つたのだ。それを見た銀龍はそれならばとブレスを放とうとしている。

このバカがこいつクラスの龍がブレスを放てば周りが吹き飛ぶぞ、ティリエルのこと忘れていいのか。

仕方なく

「火の聖痕を発動『炎王』！」

体を炎が包み炎の鎧を着てこりよつこも、ジンが燃えているよつこも見える。

銀龍はまた驚きながらもブレスを放つ、規模は小さい意外と冷静か
？それとも悔つていいのか？

「『炎竜砲』」

俺はそのブレスを、超高温の熱線で全力を持って迎え撃つ。思った
よりブレスの規模が小さかったため、一瞬の拮抗の後、熱線がブレ
スをお押し返し銀龍に向かう。

銀龍は、自分に向かつてくる熱線を見て、ブレスを中断し熱線を避け
る。熱線は後ろの森に落ちクレーターを作る。

「避けんな！」

「避けるわ！」

ちっ、炎蛇はよけなかつたくせに。

あ～あ、銀龍の後ろの森が火の海だよ。

「貴様、聖痕持ちかそれに複数の精靈術を扱つ。人間か？」

「失礼なやつだな。俺は異世界人だ。」

「ほう、いっそその方が納得ができる。面白い、良からう次の攻撃
を凌いだら娘との仲を認めてやる」

まだ勘違いしてるよ。まあ親に先に認めてもらひの悪くない。
俺は『炎王』を解除し、

「いいだらう受けてたつ。土の聖痕を発動『岩皇』」

『岩皇』は『炎王』とは違い見た目は変わらない。しかしそく見るとジンの足が地面に沈んでいる。ジンがとてもなく重くなっているのだ。

「ほかの聖痕もあるのかますます面白い受けてみる、銀龍の最大のブレスを」

「受けてたつ。俺の全力の守りだ『土鉄石金壁』」

これは、土壁・岩壁・鉄壁・金剛壁の壁を最大の大きさでつくる術で、もつとも防御力が高い。

完成と同時にブレスが放たれる。土壁が岩壁が受けて威力を散らし鉄壁と金剛壁が防ごうとする。

金剛壁に亀裂が入った。地形すらも変えるだろう凄まじい威力。しかしこの術の最大の特徴、

それは、防壁の維持が必要ないことだつまり。

「雷の聖痕を発動『雷神』」

『雷神』は雷が体を包みジン自身が雷のように見える。

「『タケミカヅチ』」

雷で螺旋状の槍を作り出し、ブレスが防壁破ると同時に投げる。雷槍は、ブレスの中心を突き破って進む。勢いは止まらず銀龍は、直撃する前にまたも避ける。

「どうよ」

「・・・完敗だ。まさか人に押し返される、いや貫かれるとは思わなかつたよ。」

そう『タケミカヅチ』は、雷の槍を回転させて一点を貫く技だ。

「いいや、まだだ、あなたに見せたいものがある」

「まだ何があるのか?」

「ある。」この後話すこと円滑にするために見といてくれ

「いいだろ?」

俺は、銀龍に切り札を見せる。

今日の前には、誤解を解いたあとティリエルと銀龍あらためアルベルトさんに、魔物の大侵攻についてと異世界人であること、精霊界で修行しすべての聖痕を持つていることを話し終わったところだ。

「そのための切り札か。それでここに来た目的はなんだ? 大体予想はつくが。」

「まずは、アルベルトに戦列に加わってほしいんだ、頼む

俺は、頭を下げる。

「……いいだろ。我はしばらくの間ここにいるから、必要なときには呼んでくれ。」

「いいのかそんなにあつたり、龍でも危険な戦いかもしねないぞ」

「かまわない、ジンは我を凌駕しているし、全力をぶつけ合つた仲だ。龍は強い物に従う。それに私はジンと友になりたいと思つていいる。」

凌駕か、確かに切り札の俺は反則みたいなものだからな。しかしこれはありがたいので。

「ああ、これからもよろしくアルベルト」

「そこ」でだな。ひとつ頼みがある

「なんだ？」

全然予想がつかない。

「ティリエルを連れて行つてやつてほしい」

「なにを言ひ出すのです。お父様！」

「はっ？お前ティリエルのことであれだけ怒つてたじやないか。」

「まあ、そろそろティリエルにも世界を見せるべきだと思っていたんだ。ジンなら安心だ。それにティリエルもお前のことを好いていた

るよつだしな。わうだらうティリエル?」

「うう……はい」

頬を染めて小さく頷く。

「えと、俺複数の女性と関係持つてますよ。」

「龍はそんな」と気にせんよ、なあティリエル。」

「はい、その、連れて行ってください。お願ひします。」

「いや、でも、まだ年齢的」

「私これでも15歳です!」

15歳なのか12歳くらいに見えるぞ、でもかわいいしつか。

「わかった。ティリエル一緒に行こう。」

うれしそうな表情を浮かべた後、恥ずかしそうに頼んできたのが

「あの、お兄様と呼んでもいいですか?」

これはいい、可愛すぎる、アルベルトの前なのにティリエルを抱きしめてしまった。

抱きしめられて赤くなったティリエルに

「……からお願ひしたいくらいだ。よろしくテイリエル。

「はい、お兄様」

「わわ―――」

アルベルトが暴走しそうなるが、

「お父様！またお兄様に迷惑をかけたら承知しませんよ。」

「うう～わかったよ、すまなかつたよ」

「本当に反省していますか、お兄様でなければ死んでいたんですよ。」

俺としては、この世界で始めて本気で戦闘をできて楽しかったのだが、ティリエルは先の戦いについて父に対して少し立腹らしい。旗色が悪くなつたのを感じたのか

「そういうえば先程、まずは、といつていたね。まだあるんじゃないかな？」

話を変えてきた。なのでもうひとつの方をきりだす

「竜輝石つのを探している。ついでに入手もしたい。知っているか？」

「ああ、知ってるしちょつとあるぞ。もう必要ないからあげよう」

「もう必要ない？」

「竜輝石は幼い龍が成長するのに必要な物でな、人間で言ひ栄養みたいな物だ。そしてティリエルには、もつ必要ないからな。」

それでこの山に住み着いていたのか。それより少し前は、必要だったのか。

引き出しから袋を取り出し、渡してきた。竜輝石がいくつか入っているようだ。

これが竜輝石か。竜輝石は、自分で光を放っている宝石の原石に見えた。光が強いほどいい物らしい。

「そりか、ならありがたく貰おう。」

竜輝石の入った袋を冒険者の袋に入れる。

「今日は、泊まつていいくといい、戦闘で疲れただろう。わたしも今すぐ娘と別れるのはつらー。」

後半に本音が出ているぞ。まあ聖痕を三つも使って疲れているのは事実だから。

「やうやくもやうかな

「それでは、もう遅いですしお食事にしまじゅう。」

ティリエルの雰囲気に反し料理は丸焼きといつワイルドなものだった。こんな山奥ではしょうがないか。

夜、枕を抱え黒いひらひらした寝巻きを着たティリエルが、

「お兄様、あの一緒に寝てもいいですか？」

本当に可愛いなティリエルは、

「いいよ、おいで」

この夜は一緒に寝た。ティリエルは抱きつき癖があるので、腰に腕を回し、脚を俺の脚に絡ませてきた。

この日は俺もティリエルを抱き枕にして寝た。寝ただけだぞ。だってアルベルトいるしな。

16話 聖痕使いVS銀龍（後書き）

「指摘・感想等ありましたらよろしくお願ひします。」

17話 小太刀が少女

異世界15日目

目が覚めると綺麗な銀色の髪があった、下を向くとティリエルの寝顔があった。

起こすのも忍びないので起きるまでティリエルの感触を楽しむことにした。

しばらく楽しんでいるとティリエルが起きた。

「おはよう、ティリエル」

「おはようございます。お兄様」

寝ぼけ眼で、すりすりしていく。徐々に、目が覚めてきたのだろう。恥ずかしくなったのか顔が赤くなつてきた。逃げられないように頭を抱きしめる。

「あうあう」

ちょっといやつすぎたかな。開放してあげて

「起きよつか」

「はー」

「それでは、お父様行つてきます。」

「行つてらつしゃいティリエル。ジン、ティリエルのこと頼んだよ。」

「ああ、大事にするわ。」

こうして俺と顔が赤いティリエルは、王都に向かつた。

異世界16日目

王都に戻つたのは昼過ぎだ。集合場所の宿に行つてみたが、皆出かけていたのでもうひとつ一人部屋を取つて部屋に向つ。

部屋に入つてテツを取り出す。

「【主、どうかしましたか?】」

「ひや」

ティリエルが驚いている。二人しかいないはずの部屋で突然知らない声が聞こえたのだから当然だろう。

「こいつは鉄餓刀のテツ、俺の小太刀だ」

「【初めてまして、ティリエルさん。】」

「は、初めまして、テツさん」

「テツいい物が手に入つたんだ。」

竜輝石を取り出します。

「【竜輝石ですか、吸収してもいいですか?】」

なんかテツの声がはしゃいでいるように感じる。

「いいぞ」

テツと竜輝石を重ねる、いつかのよに竜輝石が、粒子になつて吸収された。黒い刀身が変化して白い龍の模様が現れた。しかし、今回はそれで終わらずに光が強くなつていき光が球体のようになつた。アルベルトが銀龍になつた時のものに似ている。光がはじけてなくなつたとき裸の少女が現れた。

「主二つ目で人の姿になれました。」

「・・・テツか?」

「はい。テツですよ主。」

にっこり笑つて抱きついてくる

「テツまず服を着ようかティリエルも驚いてる。ティリエル服を貸してあげてくれないかな。」

「『主人様帰つてきたんですか。』

「ジン!」「ジン様」

三人が来てしまった。

簡単に今の状況をいふと、龍のいる山から戻つてきた主が一人の美女を侍らせていてしかも片方は裸だ。どう説明しようか。

「『主人様、龍の山に行つたはずでは?』

「どうして女の子を侍らせてるんですか?」

「どうして裸なのかな?」

「・・・まずはテツ服着て。」

何とかなだめてベットに座つて説明を始める。

「こつちはテツだよ。」

「えつ、テツさんなんですか」

「そうだ、俺も驚いてな。竜輝石を吸収させると人の姿になつたんだよ。」

「あらためて、はじめまして主の刀で所有物のテツです。ハーレム加入を希望します。」

テツがすかさず俺の膝の上を占拠する。

「歓迎するよ。」

「こんな子だつたんだ」「わかんないもんだね」「羨ましいです。」

「」
「」
「」

「わ、わたしもハーレムに入りたいです。」

「ティリエルが何故か焦っている。テツのせいいか?」

「もちろんだよ、おいでティリエル。」

ティリエルは、うれしそうに俺の右隣にやつてくる。

「まあもうあきらめていますが」「
「そうだね、目を離した数日で一人も、いやテツは元からいたんだ
つけ。」

二人はあきれていた。もう一人は

「わたしも」
「主人様の隣に行きます」

といつて左隣に座つて服の袖を摑んできた。

この世界の女の子は、本当にハーレムに抵抗がないんだな。力が第一の世界だからか?それとも側室があるからおかしくないのか?
まあいいか俺にとつていいことには変わらないからな。

「それじゃあ細かい事情を話すよ。」

説明が終わると

「龍にまで勝つたんですか。それも成体に」

「それもティリエルの父親ってことは銀龍だよね。龍の中でも上位のはずだよ」

「ご主人様、凄いです。」

「本当に凄かつたんですよ。」

「ええ、主は凄いです。」

後半凄いしか言われていないな。

「これからのことについてなんだが、リリス準備の方はどうなった。」

「

「ぱつちりだよ。長距離移動だから馬車と馬を買ったよ。ほかに保存食や必要な装備も。それで全部で15000ギルくらいだったよ。馬車は、ソフィアとイリヤが練習したから多分大丈夫だよ」

「ありがとうございます。三人とも」

「ふふん、夜楽しみにしているよ」

「久しぶりですね」

「ご主人様、たくさん可愛がってくださいね。」

三人一緒にですか。それは楽しそうだ。

外はもう夕飯時だ。

「それじゃあ飯に行こうか。明日はギルドに行くからね。それでクイント皇国に行く日を決めようと思つ。」

異世界17日目

目が覚めると身動きが取れなかつた。右腕をリリスの、左腕をソフィアの胸に抱えられている。体の上にはイリヤに占領されている。皆裸だ。左右の二人にいたずらする。

「んっ」

「あっ」

起きたのでいたずらをやめて。

「おはよー」「一人とも」

「おはよー」「やあこまます。ジン様」

「おはよー」「ジン」

解放してもらひた両腕でイリヤにいたずらじて起きる。

「やん」
「おはよー」「イリヤ」
「おはよー」「やあこまます」「主人様」
まだ半分寝ているな。

とても刺激的な朝だった。

ティリエルとテツを起こして食事を済ませてギルドに向う。

ここ数日の出費は

宿泊費	1500ギル	食費	1000ギル	その他	610
ギル	合計	3110			
63110	- 15000	- 3110	= 45000		

今の持ち金45000ギル

ギルドについたが何か慌ただしいクレアの姿も見えないので。
ほかの係りの人に頼んでギルドカードの更新とティリエルのギルド
カードを作った。

名前	ティリエル	女	15歳	龍族
ギルドランク	E			
能力ランク	総合C	気力B	魔力C	
チーム	『世界を結ぶ者達』			
称号	ジンの義妹	幼い銀龍		

・・・神のやつ義妹ってなんだ義妹って。
それにしても『幼い銀龍』か幼いがとれるときが楽しみだな。

名前	ジン	男	18歳	人間
ギルドランク	B			
能力ランク	総合B	気力A	魔力C	
チーム	『世界を結ぶ者達』			

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 五人の女の主

奴隸の解放者 精霊術師

「俺は、気力と魔力が両方ランクが上がっていた。そういうえば牛鬼と戦つたときよく動けたんだよな。 気力が上がったおかげだったのか。

「ジンは、成長も早いね。まあAランクの魔物とか倒しちゃってるから当然っちゃ当然だけど。」

「五人に、増えています。人化してテツさんも含まれたんでしょうね。」

「はい、次ソフィアとイリヤ」

名前 ソフィア 女 18歳 人間

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 水の巫女 精霊術師

名前 イリヤ 女 17歳 エルフ

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド 治癒術師

「うんうん、順調だね。こっちが普通だよ」

「二人の能力が綺麗に並んだな」

「リリスは」

名前 リリス 女 17歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの護衛 熟練者

「変化ないな」

「まあBランクまで行くとこやBランクをたくさん狩らないといけないからね」

ギルドカードの確認が終わったこと、懐かしい声が聞こえた。

ジークだ。もう一人たしか俺が一撃で気絶させたやつだ。

「ジンくん久しぶり」

「誰なんですか?」

「そういえばソフフィア以外初めて会つな。

「ああ、彼はジーク。王都に来るときに知り合ったんだ。」

「彼女達は、俺の連れて」

「ソフフィアです。ジークさん久しぶりですね。」

「イリヤです。『ご主人様のメイドをしています。』

「リリスよ。肩書きは一応ジンの護衛、ほとんどいらないけど」

「ティリエルです。お兄様に最近同行させてもらひつことになりますた。」

「テツです。」

「「れは、」「丁寧に俺はジーク」」
「カイル一応俺の相棒だ」

「何だよー応つて。あの、ジンあの時はすまなかつた。」

「こや別にこよ」

「やうだ。そんなことヨジン早く王都を出た方がいい」

「? 何故だ、その内出るつもりだつたんだが」

「まだ、正式に公表されていないが、おそらく戦争が起る。ギルドが騒がしいのもやのせいだ」

「の國の王は、どうまでバカなんだ。」

「・・・ビ」とやるんだ?」

「クイント皇国」

「待て、クイント皇国は、ソリソリで一番強いんだろう。戦争なんかして勝てるのか。」

「いいや。勝てないだらつな。」

「なら何のために」

「奴隸を作るため、だらつな」

「わけがわからん。奴隸もなにも負ければ国がなくなるだろ」

「・・・かつてこの国は、自分より大きな国を倒したことがある。その方法は相手の国の奴隸を軍のいたるところに配置しての特攻だった。兵は、戦えなかつた。戦えた者も心を病んだ。」

「・・・」

俺は怒りで一瞬訳が分からなくなつた。この国はこの世界はこのままで酷いのか。許されるのか。

「たぶん、勝つことが目的じゃなくて、クイント皇国の奴隸を得ることが目的だろ? そうなればクイント皇国も下手に動けなくなる。」

「

「ジンさんー戻ってきたんですね。」

クレアさんがギルドの外から入ってきた。

「お願ひです。助けてください。」のままでは、この戦争は泥沼化します。」

さつきの説明だけなら長期戦にはならないと思ったのだが、まだ何があるのか。

「ジンに「？」とですか？」

「「？」では、ジンさんだけで奥に来ていただけませんか」

「わかった。皆は待つてて」

奥に来てと言わってきたが、そこはギルドマスターの執務室だった。もちろん俺を迎えたのはこの部屋の主ギルドマスターのガルダだつた。クレアもいる。

「よく来てくれた。立ち話もなんだし座つてくれ」

正面のソファーを指しながらの言葉に力がない。前会つた時も疲れてるのかと思つたけど今は、度をこしている今にも過労で倒れるんじゃないかとすら思う。俺がソファーに座ると

「すまない、ギルドカードを見せてくれないか」

あまり見せたい物ではないんだが

「どうぞ」

しばらく俺のギルドカードを眺めると突然頭を下げて

「頼む、力を貸してもらえないだろうか」

「頭を、上げてくれ。まず何があつたのか何が起こるのかを教えてください」

「そうだな、单刀直入にいづ。この国の愚王が大使として来られる予定の姫を捕らえよづとしている。」

「……そんなことをすればクイント皇國は引けなくなる。なるほど、泥沼だな」

あきれて怒りを忘れてしまった。

「ええ、何とか救つてお国にお返ししなければいけないです。だが我々では大使達の居場所が分からぬのです。力を貸してくれないか？」

「わかつた、協力する。わかつてゐる」とは？

「ほとんど分かっていないのです。」

それなり

「少し調べてみましょ。」

部屋の窓に近づき

「『風見鳥』」

どこでも屈そつな鳥を二羽ほど作り出す。風の精靈に形を取えて偵察を行う術だ。これなら景色も見えるし音も聞こえる。

「それは？」

「偵察用の精靈獸です。」

そして言おつか迷つたが一人に

「……場合によっては、俺はこの国を滅ぼしますよ。」

「それもいいでしょ、この国は、たくさんの犠牲で成り立つ国じゃなくなるべきなのでしょ。」

「わたしも、別にこの国は好きではありません。ジンさん、思いつきやつちやつてやつ。」

これで決まった。國民が滅べといつているのだ。決まりだ

この國、グーロム王國には消えてもらひ。

17話 小太刀が少女（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

18話 懸念の蜜行

「これはグーロム王国の王都にある王城。

贅を凝らした広い部屋の豪華な椅子に豪奢な服を来た男が座っていた。周りには、見事麗しい奴隸の女性を侍らせていた。

若い兵士が、伝令に来た。

「申し上げます国王陛下。」

「話せ」

「クイント出身の奴隸の選別はまもなく終わります。その後国内のクイント皇国出身の者を奴隸にするとあります。よろしいのですか？」

「余に意見するのか？」

「いい、いえ決してそのようなことは」

若い兵士は、慌てて弁明する。

「しかたない、余自ら話してやる」

国王は、すばやくことによつて

「此度の計画は、クイント皇国の皇女レティーシアを捕らえ奴隸とし戦争の旗頭とする。そして今回の戦争でクイント皇国の方を削ぎ、

手にいれた奴隸で最近うるさいクイント皇国を黙らせる、というも
のだ。そのために多くのクイントの奴隸が必要なのだ。しかし数が
少ないならば作るしかないだろ？ 奴隸を。何か意見があるか？」

「いえ、そのようなことは、ありません、陛下の深いお考えに感服
いたしました。」

このとき若い兵士の中にでは、
(そんな理由で奴隸を作ればこの国から人が出て行くのではないか、
皇女を奴隸にしたら皇国との泥沼の戦争になるんじゃないか等疑問
は尽きないが、ここは追従するしかない)
その言葉を聞いて満足したのか

「さがれ」

若い兵士を下がらせ、別のこと口にする

「おい、レティーシアの方はどうなつている？」

側のふくふく太った文官風の男が

「ラシード将軍に騎士団500名を変装させて持たせ捕獲に向わせ
ました。今頃コルテス地方の辺りでしょ？」

この王城内の奴隸以外のほとんどの人種は、こんなのはばかりである。
他国の姫を呼び捨てにしたり、捕獲などとほざくのが当たり前なの
だ。

「それでは、期待しよう。かの姫騎士を奴隸として迎える日が楽し
みだ。」

といやらじい笑みを浮かべた。

これを精靈で作られた鳥が一部始終を見て聞いていた。

といひ変わってギルドのギルドマスターの執務室のジン。

「なんだ、これは！。皇国を黙らせるこれだけのために戦争をするのか、そんなことをすれば最悪の場合共倒れだぞ、負けなくとも、この国から人は離れる。この国は、何もせすとも滅びる。混乱だけを残して」

「それがこの国の末路ですか」

少し寂しそうにクレアさんが聞いてくる。

「ああ、この国は、終わる。だから最もいい形で終わらせる。終わらせでみせる。」

決意を込めて一人を見る。

「手を貸してもらいますよ。ギルドマスターあなたの依頼だ。」

「任せてくれ。どうすればいい？」

「まずは、後見人になつてもらつ。一つ目はこれからクイント皇国に行くにはどうしたらいいか教えてくれ」

「後見人の件は任せてくれ。クイント皇国に行くには二つの道があります。」

「ならその二つの道が描かれている地図はあるか?」

「クレア取つてくれ」

クレアさんが慌て部屋を出る。

「あとこの世界の戦争を簡単に教えてくれ。」

ギルドマスターに、簡単な説明を受けるが、ほとんど予想の範疇だつた。飛び道具が魔法になつていて、兵戦が基本らしい。

「持つてきました。！」

「ありがとうございます。コルテス地方とはどの辺りですか？」

「I/Jです。」

ガルダが指したのは、王都とそんなに離れていないところだった。近いかなりやばそうだ。だが、離れていないとはいってもおそらく徒歩で一、二日はかかる。まだ間に合つかもしれない。

「I/Jの地図は借りれますか？」

「本来はよくないのですが。持つていってください。」

「最後に、俺のことは内密にお願いします。」

「わかつた」

「わかりました」

「では、姫様を救いにいきます。」

皆のところに戻り開口一番に

「すまん、またちょっと出る。ティリエルだけ付いて来てくれるか、テツは小太刀に戻つてくれ」

「「「またですか」「」」

三人が泣きそうになる
帰つて来たばかりだからな。

「すまん緊急なんだ。三人は、クイント皇国の皇都に向つてくれ。ジーク突然で悪いが、三人の護衛をしてくれないか、金は払う。」

みんなの表情が変わる。この情勢での緊急だ碌な事ではないだろう。
「お金は、いいよ。もともとこの国を出るつもりだったんだ。借り
も返したいしな。」

「じゃあ頼む、お前達は皇都に行くのに一番短い道を通つてくれ。」

むくれる三人の頭を撫でてやる。

「すまないな、すぐに出ることになつて。」

「早く来てくださいね。」

「怪我しないでくださいねご主人様」

「いつか絶対ジンに「ついて来てくれ」って言わせてやるから

「楽しみにしいてるよ。あれテツは?」

「【主】に【】」

テツが座っていた椅子に小太刀があつた。

「ティリエルできるだけでいい俺を乗せて飛んでくれないか?」

「お兄様、喜んで」

嬉しそうに言つてくれる

「ありがとう、時間がないすぐに出る。いいかい?」

「はい。大丈夫です。」

「じゃあ行こう」

外に出て三人に振り返り出てきた三人をまとめて抱き締め。

「行つてくる。」

「はい。行つてらっしゃいませ。」

三人が見送つてくれる。

龍化したティリエルに乗つて飛びだつ。

なんの障害物もない空を飛んで目的地に向かつ。

一時間ほどでティリエルが疲れ始めていた。

まだ幼く体もあまり大きくないのに良く頑張ってくれた。

一度地上に降りて方向を確認してから、ティリエルを脇に抱えて走り出す。

ランクAに上がった氣力を使って『鬪氣』（全般的な身体能力の強化）を使う。

一時間ほど走り。

コルテス地方の手前で

「ティリエル飛べるか？」

「なんとか、乗ってください」

「いやここからは探索もやるから、自分で飛ぶよ

「飛ぶ？」

ティリエルが、きょとんとしている。

「聖痕発動『嵐帝』」

精靈を使ってコルテス地方全てを見渡す。いた、かなり街道をそれている。逃げている最中のようだ。追っているのは百人ぐらい、別のことのように四百人いる。

追っている方を潰すことにする。

「ゆっくりでいいから付いてきて。すぐに降りたらダメだからね。終わったら俺が呼ぶから」

そうティリエルに注意して

『嵐帝』の力で人の身で空を飛ぶ

追い着いたときには、もう乱戦になっていた。

人間が入りに乱れているこれでは白兵戦しかできない。テツを抜いて空から落ちるように飛ぶ。

三人で一人に攻撃する山賊風の男達がいたので、真ん中の男を、空から地上に落ちるのに合わせて肩から斜めに切り殺す。男の体は切った軌跡にそつて斜めにずれ血を噴き出して絶命した。

着地と同時に一人殺し、立ち上がって右の男を小太刀で首を切り飛ばし、左の男は風を纏つた左手で首を突き刺す。

三人を瞬殺した俺は、攻撃を受けていた奴を見ると

ジリッ

警戒されていた。しかたない突然空から降ってきたのだからな。驚いたことに、助けたのは女だった。女騎士だった。美人だが今は時間が無い

「助けにきた。今は、先にコイツらの殲滅を手伝って欲しい。」

女騎士もそうするべきだとわかっていたのだろう。頷いて

「わかった。感謝する」

俺は、近くの山賊風の一団に突っ込んでいく。女もついてきた。一番近い敵を小太刀で切り、別の者を炎で燃やす。囮まれそうになると風で吹き飛ばす。三方向から攻撃されれば水で防いだ。その間に、俺は刀技の実践を重ね洗練されていく。

戦いの中、刀神との修行を思い出し、徐々に精霊を使わずに回りの敵を片づけるようになり、精霊は周りの援護につかうようになっていた。

三人を相手にしていたことから見当はついていたが女騎士もやはり相当の手練だった。

長剣を巧みに使い危なげなく敵を倒している。一対一なら不覚を取ることはない様に見えた。女騎士ひ援護はいらなかつた。

数が減り不利を悟つた敵は逃げ出した。

「『風刃』」

敵味方がはつきりしたので『風刃』で逃げる敵を、横に真つ二つにして殺して戦闘は終わった。

これからが問題だ。残った周りの人間は、感謝はしているが、その強さに得体の知れなさを感じているようだ。時間がない早めに話をつけたい。まず、どうやって皇女に会うかが問題だ。そんな時、女騎士が近づいてきた。

「君、一緒に来てくれないか？話を聞きたいんだ。」

この状況で話しかけてくるのだ、少なくとも話は進むだらう。

「わかつた。ちょっと待つてくれ、ティイリエルー！」

「はーい」

空から龍が降りてきた。みんなが驚き身構える中、ティイリエルは空中で人の姿に戻る。

落ちてきたティイリエルを受け止めた。

「お兄様、疲れました。」

周りは唖然としていた。

「君は龍なのか？」

「俺は違うよ」

女騎士は訳が分からなくなつたようすで

「とにかく来てくれ」

考えることをやめ連れて行くことにしたらしい。

馬車に案内された。馬車は、派手さはないが質がよく皇女が乗るのに恥ないものだった。

中に案内されて、女騎士が

「「」の者が、先程助力してくれた者です。」

俺のことを中の人に紹介する。馬車にいたのは、ドレスを着た令嬢が一人とメイドが一人、護衛が一人と俺を連れてきた女騎士の五人の人間いた。

メイドが喋る。

「此度のご助力まことにありがとうございます。主が何かお礼をしたいと仰いまして。こうしてお呼びさせていただきました。」

お礼をするのに呼びつける必要はない、つまり

「ですが、その前に何故こんなところにいたのか、お聞かせ願えませんでしょうか？」

こっちが本命だろう。ここは街道を外れていてたまたま通りかかった、ということはありえない。

目的があるはずだ、と思っているのだろう。

時間がないさつさと終わらせよう。令嬢を見て

「あなた方を助けるためですよ。皇女様」

1-8話 愚王の蜜行（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。よろこびます。

『』指摘・『』感想等ありましたらよろしくお願いします。

19話 皇女

「あなた方を助けに来たのですよ。皇女様」

五人全員に動搖がはしる。それを見て確信した。

「よかつた。あなた達が皇女様ご一行であることは間違いなさそうだな。」

「お前は何者だ？」

「俺は、冒険者のジン。グーロム王国のギルドマスターに頼まれて助けに来た。」

俺は皇女様といいながら。口調を変えなかつた。ティリエルは、戸惑つていたが、俺は改めなかつた。案の定、

「き、貴様こちらのお方を皇女様と知つてゐるなら、その口調を改めろ！」

護衛の男が怒りだす。

これからこのことを考へると俺は皇国とは対等でなければいけない。従つてもりはなかつた。

「断る、俺はあんたの國の民ではない。公の場ならともかく、この場にその必要性を感じない」

「なんだと！」

「落ち着いてくださいレオン卿。ジン殿あなたギルドマスターの部下なのですか？」

「訝しげに見てくるメイドさん。にしても皇女は喋らないなお飾りなのか？」

「いや、違うあくまで対等な関係だ。依頼主ではあるが」

ギルドマスターは基本一国に一人しかいない。そして冒険者を束ねる存在でそれなりに力があるだが、俺はそのギルドマスターと自分を対等だと説明した。

「じゃあ、あなたは」

「ちょっと待つて、時間がいいんだ、まだ続くかな？」

その無礼な物言いに護衛が声もなく怒りを顕にするが

「では、最後に・・・あなたは味方ですか？」

「それはこれからする話を聞いてから、あんた達が判断してくれ。」

「貴様は、私の敵だ」

話の腰を折るなよ。

「ちよつと黙れ单細胞、話が進まん」

「单細胞?どうこう意味だ?」

あ～細胞がわからんか、そりゃそうだな。男は無視して

「時間がない、そろそろ俺の話を聞いてもらひ。まああんた達には、
皇国に戻つてもうついたい。」

「それは無理です。皇女は大使として来ています。その責任を放棄
することは出来ません」

「果たせない責任を守る必要はないだろ」

メイドさんが声を荒げる

「果たせないとはじつこつ意味ですかーー？」

皇女をバカにされたと思ったのかな？

「皇女に問題があるわけじゃない、グーロム王国があんた達を大使
として扱わないといつている。」

「な、何故ですか？私達はグーロム王国に招待されて」

初めて皇女が声を出した。戸惑っているようだな

「招待はおそらく罷だらう。大方、奴隸制度の緩和か皇国出身の奴
隸を解放するとかなんとか言つて呼びつけたんだろ」

「（そこまでわかっているのかー）」

交渉の内容を知っていた皇女付きのメイドは驚愕していた。
事実なのだ交渉の内容は皇国出身の奴隸の解放についてだった。何

を要求されるかはわからないが無視できない内容だったのだ。実際グーロム王国は皇国出身の奴隸を集めていると聞いている。

「グーロム王国は戦争の準備をしている。そして、その前に皇女を捕らえるつもりだ。」

「えつ、そんな

皇女の顔が青ざめる。他の者も動搖している。

「姫様、落ち着いてください。ジン殿それを証明できますか？」

「あんた達の状況そのものが証明だろ？。この襲撃初めてじゃないんだろ、おやうぐなんどか襲撃を受けたはずだ」

「なぜそんな」とまで

「生き残りと死体の数を数えたが皇女を守るには少く少ない

「それが何故襲撃を受けたことが証明になるのですか？」

「普通は勝てない相手を襲撃したりしない、なのにあんた達は何度も襲撃を受け護衛が少なくなってしまった。しかし、壊滅したわけではないから、戻ることもできない」

「護衛が少なく？」

「戻ることができない？」

女騎士とメイドが呟く

「そこが大事なんだ護衛がある程度いれば勝てなくても皇女を逃がすことができる。今のあんた達は敵から皇女を逃がせるかな？それに壊滅させでは皇女に逃げられる。」

「しかし！それは証明にはなりません」

メイドは、理解できても納得できないらしい。さつきの戦闘を考えれば皇国に戻ることはおかしくないはずなのだが

「私は彼の言葉を信じる。先程の戦闘、彼がいなければ我々は死んでいた。信じるには十分だろ？ ミリア、今は耐えてくれ。」

女騎士が援護してくれた。

「わかりました。皇国に戻りましょう。」

「なら急いでまだ追手は四百人ぐらいいるから

「え？」

「だから急いでいると言つているだろ。いつぞ、そいつらを証拠にするか」

「で、では早く戻らないと」

「駄目だ、相手は四百もいるんだぞ当然前の街道は封鎖されてる」

地図を取り出して一つの街道をしめす。そこは前の街道の反対側の街道だった。

「だからこいつの街道に出る」

「何故だ？その街道はもつとも皇都まで距離があるが。それに道はわかるのか？」

「道はわかる。理由は追手が分散してかなり数を減らせる。それに元々この道しかない」

道は、聖痕を使ったときにはあらかた調べていた。

三つの内一つには敵がいる、もう一つには今の場所からは行けない。

「・・・わかった。皇女様」

女騎士が皇女に採決を促す。

「わかりました。あなたの言葉を信じましょう。直ちに皇国に戻ります。」

「了解しました。それでジン殿、君を雇いたいのだが

「ああ、俺が裏切らないよう。なにか繋がりが欲しいのか

「すまない、何かないかな？」

「謝る」とじゃないや。やうだな皇都についたら戦争について皇王と話したいその渡りをつけてもらいたい

「わかった。掛け合つてみよ」

「それで君達、名前はなんて言つんだ？」

「さうだったな。私はレイシアだ。さつきはありがと。」

女騎士が名乗りほかも名乗りはじめる

「私はミリアと申します。」ひらは、我らの主のレティーシア様です。」

「よろしくお願ひいたします」

「ひらは、応答していたメイドと皇女

「ミー・シャです。」

「レオンド」

終始喋らなかつたのがミー・シャで護衛がレオンドらしい。

「これからのことについて話したい、戦えるのはどれくらいいるんだ？」

「・・・八人」

「八人が、戦うのは無理だな。どうするか？馬は？」

「人数分はある」

「移動しながら話そう、すまないがティリエルを馬車に乗せてくれないか」こに來るのに無理をさせた

「かまこませんよ」

「よしでま行け」

俺が馬車を降りると

「ジン殿馬を」

「いやいい乗れないからな、走る遅れるなよ」

「はい？」

外の騎士が今に乗るのを確認してから走る
気力と精靈の力で驚く早さで駆ける

「は、早い。全員遅れるな」

レイシアは、慌て馬を走らせる。近くにきたレイシアに
「街道に出るまで走る」

「本当に何者なんですか？」

その後、道なき道を進み、時には道を強引に作り込んだ。
街道に出た時に

「新しい道ができてしまった。」

皆呆然としていた。

「すまん疲れた。馬車に乗せてくれ」

周りの人間は安堵していた。

「よかつた。ちゃんと疲れるんだな」

と別の騎士が呟いた。失礼な

馬車に入った俺は、最初のメンバーを集めて話をはじめる

「これでゆつくり話が出来るな」

「正体について教えてくれないか」

「それは時間がかかるから追手を振り切つたらな」

「いこまで來るのか」

「来るだろな四百人の内一百ぐらいは騎兵だった。分散しても、その内五十人前後が来るだろ。」

「どうする、相手は騎兵なのだろ馬車のいる我々はすぐ追いつかれ
る」

「だからこの先の川まで行く。そして橋を壊す」

橋の手前で追手に見つかった。

「手筈どりに」

八人の騎士が引き付けながら橋を渡る。

追手が橋を渡りはじめ、土の精靈術で脆くしたところまできた時

「『炎蛇・六首』」

炎の蛇がその場所にいた騎兵^{アーモンド}と橋を破壊した。石造りの立派な橋が木つ端微塵だ。

何故こうなったかといつと橋の破壊方法を言つた時にミーシャが

「橋と一緒に敵さんを破壊すれば、後のことを見逃して良くて
一石二鳥ですね」

と、とても怖いことを言つてのけた。

ミーシャは見た目は小動物みたいで性格も引っ込み思案なのだが、たまに怖いことをいつ、それも天然なので腹黒いのとはちがいよく分からぬ子だ。

俺達は、夜になり移動が困難になつたころ開けたところで野営にすることにした。

準備が終わつたころレイシアが

「そろそろ君の正体を教えてくれないかな?」

19話 皇女（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。よろこます。

『』指摘・『』感想等ありましたらよろしくお願いします。

20話 龍の思いと小太刀の思い

「俺は異世界人だ。」

「…………」

まあそうなるよな。ちなみにこの場にいるのは、皇女のレティーシアとメイドのミリアそして女騎士のレイシアそして俺とティリエルの五人、これは俺が人数を減らすように頼んだ結果だ。この五人で、馬車の中で話している。風の結界で防音して外には漏れないようにしている。

「まあ、信用できないだろうから、これを見てくれ。」

そういうてギルドカードを見せる。

名前	ジン	男	18歳	人間
ギルドランク	B			
能力ランク	総合B	気力A	魔力C	
チーム	『世界を結ぶ者達』			
称号	聖痕使い	精霊王の友人	救世主	五人の女の主
奴隸の解放者	精霊術師			

「救世主？精霊王の友人？」

「そ、俺つて救世主らしいんだよね。」

「聖痕使いというのは？まさか

「これが聖痕か、それでの精霊術か、納得だな」

左腕の聖痕を見せる。

「これが聖痕か、それでの精霊術か、納得だな」

「そんで、俺が何をしにこの世界に来たかだけど」

魔物の大侵攻について話した。

「そんなことが本当に起っているのですか、とても信じられません」

ヒメイデさん。

「誰が何を言おうと起らぬものには起らぬ、それに嘘をつく必要もないだろ。」

「やうひですが

「というより、考へても答へなんかでないだろ。今は、知つていてくれていればいい。皇族が知つているだけでこれからのこととも変わらぬからね。」

「ジン殿、聖痕を使えば簡単に勝てたのではないですか？」

レイシアが不満といつよつ単純に不思議がっていた。

「あ～実は、いま水の聖痕以外使えないんだわ」

「…………えつ」「」「

「実はここに来る前に銀龍と戦ったときに三つ使ってあんたら見つけるのに一つ使つていてな。聖痕って連續しようできないし、力が戻るまで少しかかるんだよね」

「ぎ、銀龍？銀龍と戦つたのか！」

「ああ、勝つたぜ。ちなみにティリエルの父親な。」

「…………」

「だから、魔王との謁見よろしく頼むよ。」

「【】主人様、人の姿になつてもよいでしょうか?】

ビクッ

三人が驚いているな。

「いいぞ。」

テツが人の姿になる。

「こいつはテツ、俺の小太刀だ。」

テツは突然、

「皆さん主はお疲れです。主については、これ以降ティリエルさん聞いてください」

「どうしたんだテツ今は、」

テツが無理に俺を外に連れ出そうとする。

「お願いです。主一緒に来てください。お願いします。」

テツの声が震えている。

「わかった。すまない後は、ティリエルに聞いてくれ、ティリエルも何でも答えていいから。」

俺はテツを連れて馬車を出る。

・テツとジン・

人気の無いところまで俺を連れていくと、突然テツは、抱きついてきた。

「どうしたテツ大丈夫か？」

「私は問題ありません。私が心配しているのは主のことです

「俺の、こと？」

「人を斬った時、主の心が軋んでいるようでした。」

その時に持たれていたからこそ、聞けた心の悲鳴だ。

「・・・俺は、この世界で何人も殺している。今さらだな」

盗賊、奴隸商人とそれなりに殺している。

そのはずなのに、

なぜ俺は今泣いている。

「私は、ずっと主の側にいました。なので主のいた世界のことでも一番聞いています。」

それは他愛もないことを話した、ソフィア達との会話のことだらう。

「だから知っています。主の周りは、とても想像できないくらい平和な世界で、魔法はなく亜人もいない世界だったと」

テツは、俺のことを理解しようとしてくれていた。

「だから主にとって、人を『斬る』というのは、精霊術を使ってのものより『殺し』を特別意識することだ。その事で、自分を責めているのだとわかりました。」

そうなのだ俺は今までの人間を、精霊術だけで殺してきた。怖かつたのだ人を斬った時の感覚を覚えるのが、殺した人間の血を浴びるのが。

そして今日俺は斬る感覺を覚え、血を浴びた、恐怖を隠すために途中からは稽古に見立てたりもした。稽古に見立ててたくさん『斬つた』のだ。

「主は優しいです。すべてを捨てて、この世界を救いに来てくれました。主は強いです。銀龍にすら勝ってしまいました。主は私たちの誇りです。」

テツが喋ることを、やめない。

「ですけど、主は人なんです、時には私達に甘えてください。自分の中に溜めず、たまに吐き出してください。わたし達は受け止めますし支えます。そしてずっと側にいます。」

「ありがと、テツ

今日俺はテツの胸の中で泣いた。

馬車の中

ジンがでて行つた後の馬車は沈黙が続いていた。テツ出現しその後すぐにジンを連れて行つたことで、その場をしばらくの間沈黙が支配していた。

レイシアが、沈黙を破つて口を開く

「その、ティリエル殿」

「ティリエルで結構ですよ。」

「じゃあティリエル、ジン殿もああ言つていたしジン殿について聞いていいかい？」

「どうぞ、なんでも聞いてください」

「ありがとうございます。わつき龍がどうたら言っていたがジン殿はやはり強いのか？」

「ええ、強いんですよ。私の父に勝ってしまいましたし、個人で勝てる人間はいないと思います。聖痕を使えば一国とも戦えると思いますよ。」

「ヤレヤレだが、お兄様ってどうして？」

「旅に同行する方に私からお願ひしました。」

こうしてレイシアが、質問しティリエルが答えレティーシアとニアは聞き役に徹した。

質問にこゝつか答えたころにレティーシアが

「お一人の様子を見に行かなくてよろしいのでしょうか？」

「絶対に行かないでください！」

幼いティリエルの剣幕に二人が戸惑つ

「お兄様は今きっと辛い思いをしています。」

「ユリに来るまでに何かあつたんですか？」

「いいえ、お兄様が辛いのは、人を殺したからだと思います。そのことはテツさんの方が分かると思います。」

。だからお兄様を任せたのですから。」

「人を殺したから？ それだけ？」

「お兄様は、お優しいのです。本当は殺しなんてしたくないです」

「あれほど力を持っているのに」

「そんなことは関係ありません。お兄様は、この世界を救うために力をつけたと言つていました。人を殺すためではありません。」

また馬車の中が静かになる。レイシアは、ジンの力のみに気を取られていたことを恥じていたし、ティリエルも今自分がジンになにもできないことを再確認して沈んでいた。

「え」と、ティリエルちゃんは、びつしてジン殿と一緒にいるのですか？」

皇女が場の空気を変えるために新しい質問をする。

「えつ、え、えと、大好きだから」

空気がやわらぐ

「あ、あと支えになりたいんです。お兄様はこの世界に一人で來たらしさいので故郷もないですし、だから、その」

「俺の話か？」

「うひやー。」

「どうしたティリエル？」

「ど、どこから聞いて」

「どうしてジン殿と一緒にあたりからだな」

ポン

真っ赤になった。

落ち着くのを待っていると

「その、大丈夫ですかお兄様？」

「大丈夫だよ。にしても俺つてそんなに顔に出てるかな」

「大丈夫ですよ。少なくとも皇女様方は気づいていなかつたので」

「それはよかつた。」

「お兄様、あの、今日は二人で寝ましょ。」

「・・・ありがとうございますティリエル。じゃあまた明日、お休み皇女様」

そつこつて馬車をする

その後の馬車

「ティリエル様の言葉を聞いてどう思われますか？レティーシア様」

「信用していいだろ？。ティリエルの信頼は本物だった。」

「その上でビリスのですか？」、皇女様

「わたしはあいつが気に入った。何より強い」

（姫様がここまで異性を気に入るのは初めてね。どうなるのかしら）

「強いのは関係ないでしょう、まあいいです。では、渡りはつけるといふことでいいんですね？」

「ああ、そうしてくれ。ふふっ、あいつの驚く顔が楽しみだな～」

20話 龍の思いと小太刀の思い（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。

「」指摘・「」感想等ありましたらよろしくお願いします。

異世界21日目

俺達は今、追手に追いつかれそうになっていた。その数80前後の完全武装の正真正銘の騎士団だ。

「あいつら軍馬まで出してきやがった」

レオンが毒づいている。

しかし、騎士団と軍馬を出してきたといふことは軍が、つまりは国が動いていることの証明だ。

この行動は、皇女達に俺の言葉に信憑性を持たせてくれた。

この場を切り抜くことができれば、交渉はしやすくなる。

「どうするんだ、貴様のせいだぞ」

たしかに、追いつかれたのは、一番距離のある道を選んだ結果ではある。他の道が2、3田で皇國に着くのに対してこの道は、5田もかかるのだ。

他の道が正解だとも思えないが、軍馬を出してきたのは、想定外だった。

グーロム王国はもう隠すつもりがないようだ。

それに敵は、甲冑を着けていて、聞くとあれには耐魔耐精霊の術がかけられている。負ける気はないが、守りながらでは厳しい、だから

「あの狭い道まで行けば俺が何とかする」

「本當だらうな？」

レオンがさつきからいつぬといな

「レオン卿今は逃げることだけ考えなさい」

レイシアが一喝する。

「了解しました。」

狭い道までたどり着いた。俺は、馬車から飛び降りた。

「お兄様！」

「ジン殿！」

「先に行け」

これ一度言つてみたかったんだよな。

「『『』』」

道を走る壁でふたぞれ馬車が見えなくなる。

「悪いな、ここから先は、通行止めだ。死にたいやつはかかってこ
い。」

俺は、高低差を埋めるため土で足場を作り80近い敵を迎撃つ。

皇女達は、夜にはなんとか国境を超えて、国境の近くで野営をしていた。皇女たちはジンを待っているといつよりティリエルへの配慮のつもりだった。

「お兄様」

ティリエルは、ジンが来るであろう方向をずっと見ていた。

そこに、レオンとミリアが近づいて来た。

「お前、戻って来ると思つてんのか？」

ドコッ

「ドコッ」

声にびっくりしてティリエルが振り返ると、ミリアの拳が脇腹を抉つていた。

「言葉を選びなさい」。ジン様は、我々のためにあの場に残つたのですよ。」

「ふふっ大丈夫ですよ。お兄様は帰ってきます。」

二人はその年下の少女の揺るがない声に呆気に取られていると

「あつ」

街道に一つの人影が見えた。次の瞬間ティリエルが走り出す。

「お兄様！遅いです。」

ジンのところまで走り飛び付く

「痛い、痛いティリエルそこはやめて」

「お兄様どこか怪我したんですか！」

「ああラシード奴がわりとできるやつでな、痛み分けになった。」

そこにはコトアたちも追いついてくる。

「ラシード将軍ですか、よくご無事で彼は気力がSの実力者なんですよ。」

「へ～じゃあ、あいつ『超越者』なのか？」

「いいえ、彼は魔力が低かったのでAランクなんです。超越者は、能力ランクがSランクからなのでちがいます。彼は『到達者』です。」

「

レイシアまで出てきた。

「ジン殿戻ってきたのか、信じていたぞ。」

「ああ、レイシア達は、怪我はなかつたか？」

「我々は大丈夫だ。それよりジン殿怪我しているのか、大丈夫なのか？」

「かすり傷だよ。」

レイシアは、心配そうな顔をしていたがそれを聞いて安心し今度は真剣な表情で

「ジン殿此度の件、真に感謝する。グーロム軍が出てきていたのだ、あなたの言葉は真実なのだろう。わたしはあなたを信る。皇帝陛下への取次ぎは任せてくれ。まあ元々皇女の恩人だ、会うことは簡単だと思うが。」

「それはありがたいな。」

「ジン様は異世界から來たのでしたね。ジン様は、なんのために戦つているのですか？この世界に思い入れのないあなたがどうしてそこまでできるのですか？」

ミリアにとつて、それはとても不思議なことだった。しかし、ジンはとつては当たり前のことで

「自分のためだな」

「自分のですか？」

「そう、まあ明日は皇都までもまだ距離はあるんだ今日は休もう。と

「もう少し休みたい」と、

そうつられて締めくくった。

異世界24日目

三日かかって、やっと皇都の城門についた。
もう馬を回つていろ。

「やつと、皇都についたな。」

「「主人様～、「無事で～」

イリヤが凄い勢いで走つてくる。側まで来ると飛びついてきた。

「「主人様、寂しかつたです。」

「ずっと城門前で待つていたのか？」

呆れるよつな嬉しいよつな。

「はい。三人で順番に待つてました。」

「ジン殿我々は、先に城に向います。明日の毎日お出でください。
い。」

氣を使つてくれたのか、レイシアたちとはここで別れことになり
先に城に向つた。

「わかった。イリヤ一人のところに案内して。これからのことを持
そつ」

「わかりました。行きましょう」

イリヤはさう言つて俺と手を繋いで歩き出す。

クインント皇国は皇都は、グーロム王国の王都に比べてとても綺麗な所だった。少なくとも表通りには孤児は、見えない。しかし、孤児院も見えなかつたからどうかにはいるのだろう。

市場にも活気があり個々の家も立派だ。あらゆる点でグーロム王国を凌駕している。

なぜ、グーロム王国は、皇国に戦争しようとしているのか、わからぬ。とても皇国に勝てるとは思えない。そこで、グーロム王国の目的が勝つこぢではないことを思い出し怒りを覚えた。

いかんな、こんな状態であいつらに会つのは、なんとか気を鎮めようと思つて、テツを抱きかかる。

「ど、突然、ど、どうしたのですか主？」

「ちょっとだけ」さわせた

「はい、ど、どうか、好きなだけ、むしむすつとでも

「むづく

ティリエル達がむくれてゐるのは見ない」として一人の待つ宿を指す。

宿に着くと

「ジン様」「ジン」

テツを降ろして飛びついてきた二人を抱きとめる。
ソフィアなんかちょっと泣いている。

二人を解放して全員の顔を見る。

「これから忙しくなるぞ、なんせ国を一つ潰すんだからな」

「わたし、あの国嫌いです。」

「ううう」

奴隸にされていたことがあるイリヤとリリスは、全面的に賛成とう感じで、他の者も

「主が潰すと言うのなら潰すまでです。」

「人の国にあまり興味ありません。」

龍と小太刀の二人には、人の国という形に興味がないらしい。
ただソフィアだけは

「ジン様、わたしの村は大丈夫でしょうか？」

ソフィアの村は、王都から近いため巻き込まれないか心配なのだろう。

「大丈夫できるだけ綺麗に片付けるつもりだし、皇国が勝てば国民からは問題なく受け入れられるだろ」

ソフィアは、一応それで納得してくれたようだ。

「わかりました。」

「明日の晩に、登城だ。皆準備しておいてくれ。」

「はい」

「それで、主人様今日の夜は」

「イリヤさん、お兄様は疲れています。そういうことは後日にしてください。明日は登城なんですよ」

「む～、いいじゃないですか、お一人はずっと一緒に寝ていたんでしょう」

「うえ、まあそれは

「やつぱり寝てたんだ」

「うう」

「大丈夫だよティリエル。まあでも一緒に寝るだけな

「やつた」

イリヤが嬉しそうにしているところ

「じゃあわたし達もいいですよね、ジン様」

「そりだね～、ジン」

「なんでそうなるんですか！」

「まあまあイリヤ、一人も一緒にいられなかつたのは、同じだろ」

「う～わかりました。」

世界は救うつもりだが、やつぱりこういつの大事だよな。

結局この夜は、三人を抱くことになつたが。

21話 皇都へ（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。よろしくお願いします。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

異世界25日目

「すごいぶんと大きいな。」

まあ当たり前なのだが、皇都の城はかなり大きく贅を凝らしている。グーロムの城は遠目にしか見ていないが、皇国の城との格の差は歴然だ。

正直日本出身の俺としては無駄な気がするが、この時代には権威を保つためには必要なのだろうな。

城門に近づくと//コアさんが待つていてくれた。

「お待ちしておつきました。ジン様」

「//コアさん、どうなりましたか？」

顔見知りのメイドが迎えてくれた。

「すぐにお話しになるというのです。ついて来てください。」

問題なく通してくれた。

入つてみると城内はとても荒ただしい、グーロム王国が動いたんだ
うつな

「//コアです」

//コアさんが扉を開ける。俺達は//コアさんと共に、部屋に入ると

部屋には、男女が三人ずついる、その内一人に問題がある。

「レイシア？何故？」

レイシアがドレスを着て座っているのだ。

「はっはっはっ、実はわたしが皇女だったのだよ

「え――――――」

これはティリエルだ。

「はあ」

俺はため息をついていた。
ため息を吐く俺を見て残念そうに

「なんだジン驚いてくれないのか」

「想定内だよ、想定内だが」

レイシアいやティーシアの元に迎い両肩に手を置いて体重をかける

「驚いてはいない、だがな、どこの国に影武者がいるのに一対三をする皇女がいる。」この国の皇女はアホなのかバカなのか、というかミリアさんはあれを認めているのか、影武者の存在意義は、なんのための護衛だ、俺が着く前に死んでたら全部台無しだったぞ、だいたい

「わ、悪かった。すまん謝る」

レティーシアを知る者たちは、怒るというより感嘆していた。

(おお、あの姫に謝らせたぞ)

「まだ言い足りないが、まあ許そう。そんで誰が皇帝かな」

「わたしだ。娘が迷惑をかけた。」

皇帝は、髪を伸ばした、威厳のありそうな男だった。

それにもしても、皇族に対する無礼を受け流すか、ずいぶん器の大きい男だな。誰も騒がないところを見るとこれは、身内だけの会議らしいな。

「まあ、まず自己紹介からしましょうか

「やうだな、わたしはクルト・クイントーの国の皇帝だ。」

皇帝の左側の女性が

「アイリス・クイントよ。皇妃をやつてこます。」

右の男が

「アッシュ・クイントです。一応皇太子です。」

優男みたいだが、目に力のある青年だ。

「アリシア・クイント。第一皇女」

第一皇女と名乗つたが、明らかにレティーシアより小さい。それに、

表情があまりない子だな。

「一応名乗らうレティーシア・クイントだ。第一皇女だな」

「ゲオルグだ。将軍をやつている」

老将軍といった感じの軍人だな。

「じゃあこっちだな。俺は、ジン異世界人だ。神に、この世界のことを頼まれこの世界に来た。」

「ソフィアです。ジン様の付き人のよつなものです。」「イリヤです。ご主人様に仕えております。」

「リリスです。護衛をやっています。まあジンには必要ないんですが。」

「ティリエルです。銀龍です。」「テツ。主の小太刀」

ある程度聞いていたのだろうとくに質問はなかつた。

「自己紹介も終わつたことだし、話に移りつつ。」

「せうだな。そちらの要求は何だね?。」

「要求じやがない提案だ」

「提案?」

「そうだ。魔物の大侵攻については聞いたんだろそれを一緒に防がないか、ていう提案」

「それについては、一応起らるものとして行動することになった。わたし達としても協力体制を敷きたいと思っていた。」

「それはありがたい、これからよろしく」

二人握手を交わす。

レティーシアのおかげか簡単に話がついたな。

「しかし、それには問題もある。軍を動かせば、他国が黙つていな
いだろう」

「他国は巻き込むしかないだらうな、巻き込まないと攻められる、
そうなつたら魔物の大侵攻を知つていても王の立場上動けないだろ
うし、元々魔物の大侵攻は、皇国独力では厳しい」

「田の前の問題もある」

「グーロム王国か、外の様子だと宣戦布告でもされたか」

皇帝は、田を見張った。その情報は、ここにいる者しか知らないはずだからだ。

もつとも感づいている者はいるだらうが、それは少数で情勢に詳しい物だけだ。その少数に入っていることが異常なのだが。

「ほかには、他国を巻き込む方法か、それは後回しにしよう。まず
この戦争だな」

「他国を巻き込むことについては、この戦争に勝てればを何とかなるだらう。勝ち方にもよるが、かなりの発言力を持つては必ず。その

ためにジン殿力を貸してもらいたい。」

「わかった。それだと勝ち方が問題だな。」

「話が早くて助かる。では、戦争に関する話に入つても」

「お願いする。しかしながらは一国の王なのでしょうもう少し上から田線でもいいと思うんだが」

「いいのですよ。ここには、身内しかいませんし。戦力についてですが、グーロム王国は

奴隸兵	5万
戦闘奴隸	1万
兵士	2万
貴族の私兵	2万

の約10万こぢらは

兵士	5万
貴族の私兵	3万

の約8万の兵がある

「それなら正面からでも勝てるんじゃないか？5万は奴隸何だろ？」

「三つ問題がある。一つ目は、クイント出身の奴隸がいること。二つ目は、戦えば損耗は避けられない。三つ目、これが一番問題なのだが、わが国の南側の国境付近にカルモンド王国の軍が近づいているその数5万これが問題なのだ。宣戦布告はされていないがあの国

の王は、グーロム王国と仲がいいのだ

「どうするつもりなんだ？」

「損害を小さくして勝つ方法が今のところない」

しばりく考える。

「俺にいくつか案がある」

「おお、ありがたい。聞かせてくれないかね」

「まずはな・・・」

こうして二人の間でポンポン話が進んでしまい。周囲は、口を挟む隙もなく果然として一人を眺めて終わってしまった。

「二人は、何か打ち合わせをしていたのでしょうか？」

「いや、していないと思つが」

レティーシアとニアさんがそんな会話をしていると

「これなら何とかなりそうだ。アッシュ、ゲオルグ将軍の方針で以降と思つただが？」

「問題ないと、思われます。」

「それで進めましょう。」

「レティーシア」

「ん・・は、はい」

レティーシアは、呆けていた。

「お前にジン殿の副官を命ぜる補佐するよつ」「元

「はつ」

「アッシュ、ゲオルグあとは頼んだぞ」

「はつ」

一人が、部屋を出て行く。

「ところでジン殿後の女性は、君の女かね」

「はいつ？」

「いや、君が複数の女性を愛する男ならレティーシアもむづだね」

「な、なにをいつているのですか、父上」

レティーシアが、照れている。脈アリなのか？しかし

「何が目的ですか？」の間に留めておくためですか

「そんなに深く考えなくていいよ。先程娘を叱つて謝らせただろう。あれは、おでんばでなかなか嫁の貰い手がなくてな君ならばと思つてな。あれも君を気に入つていてるようだし」

「なつなな」

レティーシアが超照れている。どちらかといつと綺麗といつ感じだが、意外と可愛い所もあるな。

なんだかこの流れアルベルト（ティリアルの父）のときと似てるな。

「まあ、すぐでなくともいいさ、今は戦時だからね。」

その戦時に娘の縁談の話かよ、図太いやつだな。

「それじゃあ失礼するよ、特訓しないといけないからな。」

後ろの水の精霊術師の方を向って

「がんばるぞ、ソフィア」

22話 燐城と皇帝（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。よろこびます。

「」指摘・「」感想等ありましたらよろしくお願いします。

23話 戦場へ

異世界32日目

宣戦布告から一週間後俺達は戦場にいた。

「時間がありません。急いで陣地を組んでください」

陣地設営の指示を出しているのは、アッシュュ皇子だ。
総指揮は、ゲオルグ将軍が執っている。

「アッシュュ、俺は手筈どつり時間稼ぎと、仕込みをやつてくれる。」

アッシュュとは、すぐに気安い中になれた。アッシュュにとって身分を
気にしなくていい相手は初めてで、付き合い易いらしい。

「お願いします。なんせこの戦いは、あなたにかかっているのです
から」

そうなのだ。ここにきているのは兵は三万のみ残り五万は、カルモ
ンド王国との国境の近くに行かせてカルモンド王国軍を牽制してい
る。俺達は三分の一以下の戦力でそれも野戦を行わなければいけな
いのだ。国境を越えられると国民を奴隸にされるから国境付近まで
出るしかないのだ。

「わかった。アッシュュ、行つてくる」
「テツいいかい？」
「はい、大丈夫です主」

「行つてらつしゃい

俺は、敵軍が来るであろう方向に向つて走り出す。

時間稼ぎ自体は簡単だった。

まずは地の精靈で落とし穴を作る。

次に水の精靈で沼もどきを作る。

これを行軍進路にいくつか作つただけだ。

それだけで行軍速度は落ちた。

あるかもわからないものを気にしながらの行軍は、格段に落ちるし沼も人数が多くて迂回するのも一苦労なのだ。

「ええい、なにをとろとろやつてこる。」

グーロム軍のコートル将軍は苛立つていた。この戦争は、コートル将軍にとって勝ち戦なのだ。將軍としては、さっさと勝つて報酬と奴隸を手に入れたいのだ。

実際この戦いを勝ち戦と見て予定より貴族共が多く集まっている。まあ集まつたっても奴隸商からのなりあがりの貴族ばかりで、昔からの貴族は不参加だったが。

「兵が落とし穴を気にしてこるのはうづですな

これはラシード将軍だ、レティーシア皇女を捕まえられなかつたため、コートル将軍の補佐をするはめになつた。

「そんなもの、指輪の力でゼットのでもしれ」

奴隸を兵隊にするときは、一度奴隸を王の下に集めそのあと命令権を与えた指輪を将軍に『与える』、という仕組みをとつてこる。そこからさらに奴隸を指揮するようために命令権の一部を指輪に移譲して士官に渡していく。実際問題、五万の奴隸を一人で指揮できるはずがないのだ。そのために、指輪を与えて指揮を任せるのである。

「それは不可能です。穴を無視しようと命令すれば、穴に気づいても落ちていくことになります。それに後続も避けずに進むのでそのまま落ちてしまいます。」

「ちつ、所詮は奴隸か」

奴隸にしたのも奴隸を取り入れたのもグーロム王国ゆえだろ？
、アラシードは思ったが、口には出せなかつた。

「このままいくと着くのは、夕刻ですな。決戦は、明日にした方がよさそうですね。」

「そんなこと知るか、こちつは三倍以上なのだ。ついたら夜だらうと攻撃を開始する」

「こつは疲労のこととは考へないので、アラシードが呆れていると

ドン・ドン・ドン・ドン

（来たか）

一度爆発音が聞こえ外が騒ぎになつてゐる。これなら今日の決戦は

さすがにないな、トライシード将軍は落ち着いていたが

「なんだ、何の音だ」

『コードル将軍にとっては、それどころではないらしい。

「『炎爆』」

これの技は、殺傷能力はかなり低いが爆音と衝撃が強く、敵を混乱させることのが目的のときは、大いに役立つ。一応直撃はさせないよう、に全体に満遍なく『炎爆』を落とした。程よく混乱したら地中から潜入する。案外地中が一番発見されないので。

潜入したのは、戦闘奴隸一万の軍団でそこで孤立しているやつを探す。

いた、少年だ。風の精霊を使って音を消して後ろから近づき少年を物陰に引きずりこむと同時に首輪の契約を破棄する。

「えつ」

少年は驚いて首の手を伸ばす。引きずり込まれたことよりも首輪が外れたことに驚いているようだ。

次第に落ち着いてきたのだろう。感謝を、言つためか大声を出されそつになつたので口を押さえ黙らせる。

「静かに」

コクコク

「時間がないんだ。頼みたいことがある」

言いながら手を離す。

「何でも言つてください」

奴隸から解放されただけで「」まで信頼されるのか

「戦闘奴隸のリーダー格つてわかるか？」

「何人かはわかります。」

「居場所に、見つからないように案内してほしい。」

「わかりました。お名前を聞いてもよいでしょうか？」

「ジンだ、君は？」

「僕は、レイトといいます。」

陣地内を移動して

「あの人です。」

「」に呼べる？」

「はい、呼んできますか？」

「頼む」

レイトが男に近づいていて何事か話すすぐにこちらに来た。

「レイトイいものってなんなんだ？」

それで釣れるのかよ、まあ見た目からしていかにもなマッシュチョではあるが。

レイトの時と同じようにして氣づかれないように首輪をはずす

「え？」

レイトと同じ反応だな。

俺は、これを何度も繰り返し敵陣地で味方を増やしていくた。数が増えたら作戦を説明し、さらに数が増えていくと誤魔化す係りや説明する係り、奴隸を連れてくる係り、捕まえる係りと効率を上げていった。

その後リーダー格の人達に後を任せて皇國軍に戻った。

「お帰り」

「お帰りなさいませ」

レティーシアとソフィアが迎えてくれる。

ソフィアとテツとレティーシア以外の女には、後方に下がつてもらっている。イリヤを医療関係のところに行かせてリリストティリエルは、その護衛についている。

「しかし、以外だな。君の女達あつさり後方に下がつたんだな。冒険者風の女とか来たがると思ったんだけど」

「それはですね。それがジン様のためになるからですよ。ジン様は、私達が戦場にいるどじうしても気にしますから。」

「ありがとな、ソフィア」

ソフィアの頭を撫でていると

「主、わたしも」

テツが人に戻り、おねだりしてきたので
片腕で抱き上げてテツの小さな体の感触を楽しむ。

「ジン殿には戦場たぞ」

レティーシアが怒ったので

「わるいわるい」

俺は謝罪して、テツを降ろす

「羨ましいんですか？」
「羨ましいんですね。」

「ち、ちがうもん」

自分の叫んだ言葉を思い返したのか、真っ赤になつて無言で走つて
逃げていつた。

「今の可愛かつたな」

「やりますね。皇女様」

「主に氣があるのって本当みたいですね」

「やっぱりそうですね、皇帝も一人を認めるようなことを言っていましたし
仲間になるかな？」

俺は、一人がレティーシアについて話しているのを聞きながら陣地を見渡す、3倍の敵と戦うのにみんな諦めていた。希望を持っていたのだ。この状況で希望を持たせることのできるこの国は、やはり良い國なんだろうな。だからこそ絶対に勝つ。

「やれることは、やった。後は戦つだけだ。まあ完勝するぞ」

「「はい」」

23話 戦場へ（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。よろこます。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

異世界33回目

グーロム王国[軍側]

「なんだ聞いていたのよつたらに少ないではないか」

「一トル将軍は、敵の数を見てほくそ笑む

「やつでござりますね」

副官が相槌を打つ。ラシード将軍は、自分の部隊を率いている。

「いやから仕掛けてやる。全軍に伝令、あのよつな陣地正面から粉碎せしめろ」

クインント皇國[軍側]

ワアアーー

「来たな」

「ええ来ました。手筈どつり陣地内まで引き込みます。」

「ああ頼むぜ、なんとか持たせてくれよ。」

「わかつていますよ」

しかし、この陣地には、今一万しか残っていないのだ。残りは、伏兵として左右に、一万ずつ伏せている。
今は、旗を増やしたり陣地を使って数をこまかしている。
一万で十万を受け止めることには不安がある。
不安が顔に出ていたのだろう。

「大丈夫です。相手は奴隸兵こちらは、正規兵です。見事に釣つて見せます」

「わかつた。信じるよアッショウ」

「全軍迎撃準備、各部隊長は手筈どりじこ

一番隊から十番隊まで作り各部隊長に千の兵を持たせたのだ

「敵近づいてきます。」

「弓構え・・・放て」

無数の矢が敵軍に降り注ぐ。

この矢のさきは潰してあるが、万の軍が動く戦場では、死者も怪我人もである。

だが、もちろん被害は普通の矢に比べ少ない。
その代わり勢いもあまり落ちないまま先頭の部隊がぶつかり合つ。
何とか初撃を受け流すと

「一番隊と二番隊は、後退していください。七番隊と八番隊はその援護を」

この陣地は元々逃げやすく作っている。

第一と第二部隊は陣地をうまく使い難なく後退をこなし、追撃してきた敵を七番隊と八番隊が攻撃する。一番隊と二番隊は、体制を整えたら部隊の援護に回る。これを繰り返しながら戦闘を行い敵を引き連れながら後退する。

これを難なくこなすのは、皇国軍の練度の高さの賜物だろう。

グーロム王国軍側

「いいぞ。押しているまま一気に全軍で攻め落とせ。」

「一トル将軍には、それがわからず意氣揚々と指示をだす。

「全軍で、ありますか？」

「やうだ、やうじじる」

隊長達は、渋々言われたとおり全軍が前進した。

皇国軍側

「思ったより早く。後続がでて来ましたね。」

アッシュが、嬉しそうな表情を浮かべる。

「よほど、『らえ性のない将軍なのでしょうな」

副官が相手の将軍を評価する。その評価は見事に当っていた。

「ではそろそろ。全軍、全力で後退してください。ジン殿に伝令を

ジンの側には、ソフィアとレティーシアあと小太刀のテツがいた。

「ジン殿、アッシュ様から『いつでもやつてくれ』のことです。」

「了解。ソフィア準備はいいかい？」

「はい。大丈夫です。」

「じゃあ、いくよ」

俺は、そいつてソフィアの手を握る

「水の聖痕発動『水龍』」

水の精霊が俺とソフィアを、包む。

「『水翼』」

さらに背中に、大きな水の翼ができる。

『水翼』は、大量の水を使うための準備だ。

「ソフィアは、危ないとと思った人を助けることだけを考えて」

「はい！」

「いくよ。『陸津波』」

次の瞬間、翼から大量の水が噴出し、大量の水は制御され津波になる。陸に出来た2メートルの津波が五万の奴隸兵を押し流した。

ジンヒソフィアは、この技そのものより、呑み込まれた人間を助けることに全力を尽くした。

ソフィアとの修行とは、この共同作業のことだったのだ。

溺れそうな人間を、波から出したり、流された武器を安全なところによけたり、何かにぶつかりそうな人をそらしたりした。

陸の津波がおさまった時五万の奴隸と後続の突出していた正規兵五千の兵が左右に押し流されていた。戦線復帰は不可能だろう。

「すごいな、これがジン殿の実力の一端か。」

アッシュは、しばらく呆けてしまった。その間に空に、青い光が擊ち上がった。

ジンが、光の精霊術で出した合図だ

この合図を、待っていた複数の人間がいた。

例えばクイント皇国軍には、
アッシュが、

「合図だ。騎馬隊を先頭に、突撃してください。魔術師はその援護を」

アッシュは、今まで温存していた九番隊と十番隊の騎兵一千を出して正面から反撃にでた。その後ろを、馬に乗った魔術師千人がついていく。

伏兵の指揮をしているゲオルグは、

「合図じゃな。一気に攻める。我らの目的は、貴族の私兵二万のみじゃ、それ以外は、手柄にならないと思え。突撃！」

次の瞬間一万もの伏兵が、地中から現れた。ジンが土の聖痕の『岩皇』を使って作った地下の空洞から出てきたのだ。ジンが、敵軍の足止めをしていたのは、彼らをここに伏せる時間を稼ぐためだったのだ。グーロム王国はこの空洞を知らないため伏兵に対して無警戒だった。

さらに敵軍を挟んで反対側には、ゲオルグの副官が、同じ内容を叫んで突撃を仕掛けた。

グーロム王国では、

戦闘奴隸の一 角のレクト達が

「合図ですムガルさん」

ムガルとは、レクトの次に解放した戦闘奴隸だ。レクトをつけて後を任せた一人だ。

「見えどるよ。」

彼の目の前では、部隊長だった者の死体がある。この時、いたると
ころで奴隸を操る指輪持ちの部隊長が不意討ちで戦死していた。

「虜げられるのは今日で終わりだ。俺達には、救世主のジン様がつ
いてる。ジン様の頼みで今から貴族共を殺しに行く。いいか野郎ど
も」

「　　オオオ——」「

「ここにいるのは、五十人程だが、解放した戦闘奴隸は、二千いる。
「救世主様のために」

「　　救世主様のために」「

二千の奴隸が牙を向いた瞬間だ。

正規兵の一角ではラシード将軍が

「私は、民達を守るためにこの国を捨てるついてくれるか?」「
我らラシード将軍と共に」

彼らは、ラシード将軍に鍛えられ、ラシード将軍を尊敬している兵
達だ。その数五千。

「ありがとう。これよりコートル将軍を討つ。ついてこい」

ラシード将軍と五千の兵が、駒から人に戻り。反旗を翻した。

合図を聞いた五ヶ所が反撃に出たとき、ジンはティリエルの背に乗り空から戦場を見渡していた。ティリエルも合図を見て行動した一人だ。

戦場は、すでにほぼ決着がついていた。

奴隸兵五万は、すでに『陸津波』により左右に割られており、元々高くない士気が全くなくなつていて、騎兵を止められる筈もなくほぼ素通りして貴族の私兵に肉薄する。

戦闘奴隸一万は、指揮官をすべて失い、何もせずに伏兵一万と元戦闘奴隸一千を、貴族の場所に通した。

正規兵二万は、五千を『陸津波』に呑み込まれ、さらに五千に裏切れ半分になつていた。残つた一万もラシード将軍を見てどうすればいいのか分からなくななりラシード将軍と合流したゲオルグ将軍率いる一万に簡単に突破されてしまう。

こうして

貴族の私兵 二万

対
正面 三千

右 一万二千
左 一万五千

の三万の戦闘入った。

貴族の私兵は、何とか抵抗しようとするが、『陸津波』を見せられ動搖しているところに、突然の三方向からの攻撃に組織立った抵抗ができず簡単に崩されていく。

それに比べて攻める側の、皇国軍、ラシード将軍の兵、元戦闘奴隸と三種類の人間が混じっているにも関わらず、かなりの連携が取れている。

この時、指示していたのは、戦場の流れを空から見ていたジンだ。風の精靈を使って各リーダー格に命令を出し、合流させ連携を取らせていた。空から戦況を見ていたジンには簡単なことだった。

グーロム王国側は、

「なんだこれは、なぜこんなことになつていてる。」

命令を出すべきゴートル将軍は呆然としていて、碌に命令も出せていない。

しばらくして自分を取り戻した時の第一声は

「もう無理だ。私は、逃げるぞ」

とだけ叫び一番最初に、逃げたした。元々將軍の器でわなかつたのだ。それを見た他の貴族（奴隸商人でもある）達も我先にと逃げ出す。逃げる彼らの道は、後方しかない。

前方は三千の敵と五万の奴隸の壁その後ろには七千の敵、左右には一万を超える敵がいる。彼らが後方を選んだのは必然だつた。しかし、その必然は作られた必然だつた。

後方には、『嵐帝』を発動したジンが待つっていたのだ。

ゴートル將軍がジンを見かけた時すでに辺りは血の海だつた。すでに逃げようとした者がいたようでジンは、『嵐帝』の広範囲索敵を使い後ろ側に逃げてきた敵をすべてを殺していく。一人残らずだ。

「お前がゴートル將軍だな。その首貰うぞ」

ヒュン

小さな風の音がした。

それだけでコートル将軍は、首を体から切り離され絶命した。この時のジンは、口以外全く体を動かしていなかつた。

コートル将軍の首が風に運ばれジンの近くに落ちた次の瞬間、

「『削嵐』」

逃げてきた貴族とその私兵は、声を出すこともできずに無数の風の刃にすり潰されて肉片になつた。

間もなくして、正規兵の指揮を取つていたグーロム王国側の最後の將軍が降伏勧告を受け入れ戦いは、終わりを告げた。

こちらの被害は死者百人、怪我人が七百人ほどだ。

グーロム王国側は、貴族の私兵二万のほぼすべてが戦死、それと正規兵に少し死傷者が出た。

文句無しの完勝だった。

この場の戦いは終わったがまだまだやることがある。

俺は簡単な後始末を終わらせると一人に

「アッシュ、ゲオルグ将軍作戦の第二段階に移りたいと思つ。」

「わかつた。ゲオルグ将軍後はお任せします。」

「わかりました。」

「さあ行くぞ、王都へ」

異世界34日目

休まず馬を走らせて（俺は自分の足で走つたが）何とか次の日には、王都にたどり着いたその数は、騎兵八千その騎兵が王都の四つの門を2千ずつ付き東西南北の門を封鎖している。この八千は、皇国軍五千頭とラシード将軍率いる千頭、残りの一一千頭は王国軍から奪つた馬だ。八千もの騎兵はそうそう見れるものではない。

「ラシード貴様、娘がどうなつてもいいのか！」

今城壁の上で肥満体型の男が、首輪のついた小さな女の子を引き連れてラシード将軍を脅している。

驚きはない、以前ラシード将軍と戦い今回の策を持ちかけた時に、何故現政権に逆らわないのか聞いたら、娘を人質に取られていることを聞いていた。

「ジン殿頼む娘を助けてくれ」

「もちろんだ。」

今のラシードには、俺と戦った時の雄壮さはなく娘を出され精神に余裕がなくなっている。早く娘を助けることにしよう。

「大丈夫だラシード。お前を連れて来たのは、お前がいればあいつらがお前の娘を連れて来ると思ったからなんだ」

「どういつ意味だ？」

「つまり外に連れて来てくれれば絶対に助けられるってこと・・・

雷の聖痕を発動『雷神』」

次の瞬間には、雷速で近づいた俺は肥満体型の男からラシードの娘を奪い取っていた。

「な、に」

呆然とする男を無視して城壁の上から飛び降りる。雷速で逃げないのは、女の子が耐えられないからだ。

「ひゃーーーー」

女の子の悲鳴を上げている。良い悲鳴だ元気そうだな。

氣付いた兵が矢を射かけて来るが、すべて雷で焼く。

地面に降りるとすぐにラシード将軍の元に行く。

「おお、フロー・ラ良かつた本当に良かつた」

「お父さん、うひ」

「どうしたー・フロー・ラーー。」

突然フロー・ラが苦しみだした。首輪の逃亡防止のための機能だつた。すぐに、首輪を外してやる。

「あつ
「なつ」

きよとんとしたフロー・ラがじみらを見ていこる。
頭に手を置いて

「もう大丈夫だよ。君は自由だ。」

フロー・ラの目から涙が零れた。そうなるともう止まらなく泣き出しこ
しまつ。

ラシード将軍が、娘を抱き締める。

その場を離れ

「アッシュ降伏勧告は、すんだか」

俺の声はかなり冷たくなつていた。

「その返事が、あの子だったんだよね」

「そうか。じゃあ適当に殺して来るから」

「気を付けてください」

「誰にいってんだよ。」

俺は、そのままにしていた『雷神』の力で城壁の上に戻る。そこから、一方的な殺戮が始まった。

人間が雷速に、反応できるはずもない。めぼしい者を雷で殺していく。

奴隸と女子供以外をあらかた片付けると城門を開けて外で待っていたアッシュュ達を中に入れる。

その後王都からも人を集め城の庭園に来てもらう。

庭園には、皇国兵、王国兵、国民、奴隸達にラシード達が集まっていた。

そこに、俺は一人の男を放り出す。

「ひい、わ、わたしを誰だと、お、思つている」

男をこの国の王を無視して。

「皆聞いてくれ。この男は、この国の王だ。此度の戦争はすべてこの男がやったことだ。そして私は、この国と奴隸制度を否定する。

この男は、その象徴だ、ゆえに俺が判決を下す。そして俺は奴隸のいない世界をつくることをここに宣言する。」

周りは状況をあまり理解できていないようだ、構わず

「『炎蛇・四首』・・・消える、元凶」

俺は男を四肢から炎蛇に食わせる。喰われた部分は、焼かれ血はないそのせいで失血死はせず長い苦しみを味わって死んだ。死刑のあと男の存在したはずの場所には王冠だけが残っていた。

近くに、アッシュがやってきて

「私は、アッシュ・クイント、クイント皇国の皇太子です。ここにクイント皇国皇帝クルト・クイント名の元にクイント皇国の勝利とグーロム王国内の奴隸の解放を宣言します。」

一時の静寂後に、ここに集まつた全ての人間が歓声を上げた。

王都は、そのまま宴に入った。

しかし俺には、仕事が残つていた。奴隸を解放する仕事だ。首輪を外しても次から次へと奴隸が来るので休む暇がない。

この戦争で、聖痕を四つも使つたのでかなり疲れていた。それでも休む訳にはいかないのでふらふらになりながら解放していく。一度寝ぼけて頭からこけてしまった。奴隸の解放は、見かねたテツが止めるまで続いた。

「ありがとうな、テツ。実は結構限界だった。今日は、一緒に寝よ

「う

「はい。お供します」

俺は、城にあつた一室でテツを抱っこして眠りについた。奴隸兵五万と戦闘奴隸八千のほうは、城からマスター・キーが見つかりどうしても見つからなかつた少数だけですんだ。あぶなかつた六万近い人間を解放してたらぶつ倒れていた。

異世界35日目

マスター・キーが見つからなかつた五百人の解放が終わつた時すでに昼を過ぎていた。全員が感謝を口にするのでかなり時間がかかってしまった。中には忠誠を誓う者までいた。

今俺の側には一緒に寝たテツしかないので仲間達を探すことにする。その前にアッシュに挨拶するか。

「よつアッシュ大変そうだな」

アッシュの部屋には、紙の壁が出来ていた。

「やあジン、失敗したよ。秘書官を連れてくるんだつた。」

「レティーシアは、手伝わないのか?」

「役に立たない」

バッサリ切つた

「ジン手伝ってくれないか？」

「いやだ、それに俺じゃあ大したこと出来んだる。それより俺の女達を知らないか？」

「ああそつちの問題があつた。実は一人判断に困る人がいてね、その人の扱いに困つていてレティーシア達に頼んだんだよ」

「判断に困る人？」

「IJの國の王つて子供はいなかつた筈なんだけど。その人、「私は、この國の王女です」とて言うんだよ。変だろ」

確かに敗戦国の王女を名乗る意味がわからない。普通敗戦国の王族なんて殺されるか良くて妾にしたりと政治の道具にされるのがおちだ。

「確かに変だな。俺も女達に会つついでに会つてみるよ。」

居場所を聞いてその場に向かう。

26話 忘却の王女

教えてもらつた部屋に行きノックすると中からソフィアが顔を出した。

「ジン様ー！」無事で

「ジン」「お兄様」「『主人様』

聞き付けた三人が飛び出してきた。なんとか三人を受け止める。

「みんな元気そうだな。中の人に会わせてくれる」

中に通してもらい自称王女に対面する。

見た目は、森を思わせる深い緑色の長い髪。顔立ちはかなり整っているが、どことなく表情が硬い。体は小さく10才を越えた辺りだろうか。

「はじめまして俺はジン、君は？」

「これはどうも私は、ミコーと申します」

傍目にはわからないが、どことなく不安定な感じがする。

「みんな外で待つて

「ジン様、彼女に王女についての話をするなら氣を付けてください」

「わかった

みんなを外に出す。

バタン

「それで何が聞きたいんですか？」

「君は何者だい？」

一瞬ピクッとなつたが

「私は」の國の王女です。」

「どうして王女を名乗つたんだい？」

「王女が王女と名乗るのがおかしいですか、英雄さん

「知つていたか」

「ここから見ていました。」

なるほどここは昨日の庭園がよく見える。

では、俺は仇になるのか

それにしては、彼女から憎しみは感じない

「どうして王女になりたいんだ？」「

「ですから」

苛立たそうにしたミリー

「いやこの際君が王女かどうかは問題じゃないんだ。」

「な、何で？」

あきらかに動搖だ

「君のことを知っている人がいない以上、君は王女になれない」

「そんな」

彼女は、かなりの衝撃を受けているようだ。

「この国の高富の、ほとんどは死んでいるんだが、君を知っているのは？」

彼女の言つたのは重臣ばかりでようある王室のよつな奴らだった。つまり俺が殺している確認はできない。

「王宮でその人数しか知らないということは、君は何処かの村で王富とは直接関係なく生まれたんじゃないかな？」

「そうです。私は妾ですらない女から生まれて。数年前に連れてこられました。」

ミリーの声が低くなつた気がする。

それでも続ける

「なら村には帰れないのか？」

「私の村は燃やされました。」

「・・・」

「私はこの国に全て奪われました。私の家族は殺され、村は焼き払われ、忘却の魔法で名前を忘れさせられ偽りの名前を『えられ。娘と呼ばれながらも、わたしの立場は伯爵の娘でした。そしてほとんどの間ここに監禁され教育だけを受けていました。」

ミニーは、全てをぶちまけるように語る

「もう私には、家族も生れた村も名前すらありません私には、何もないのです。確かなものが、信じられるものが、なら愚かであるとのこの国の王女でいなければ私は何なんですか？教えてください私は何なんですか？嘘で着飾った私は何者なんですか？」

空虚な顔に涙を浮かべた彼女を見ながら思つた。

この子は俺に似ている。

一度世界との繋がりをすべて失い自分のことがわからず、とても不安定になつてゐる。

違うのは、俺は自分で選び、ミニーは奪われた。

「たしかに君は何者でもないのだろ?」

「ツ、そう、ですよね」

絶望に打ちひしがれるミニーに俺は近づき脇に手を入れ抱き上げる。

「な、何ですか？」

できるだけ声に力を入れて話しかける

「何者でもないのなら、何者かになれば良い、まずは名前を『』えてやる。これから一生使う名前だ。」

「名前?」

「そうだ。そうだな・・・・・・・今から君はフェリスだ。」

「フェリス?」

「そうだ。フェリス何か好きなことや得意なことはないのか?」

「えつえつ」

この時女の子は、ジンの勢いに呑まれていた。

「何があるだろ?」

「えと、料理が好きです。」

「上手い?」

「と、得意です。」

「なら俺のところで料理人をしないか?」

「え、なんで」

「俺の仲間で料理が得意なやつがいなくてな。」

「そうじゃなくて・・・なんで、そこまでしてくれんんですか?」

「俺も似た経験がある。その時、俺はすぐにソフィアたちに出会えたから大丈夫だった。」

「え?」

「だから、俺が居場所になつてやるよ、名前もやる、だから新しい人生を歩んでみないか、君には未来も自由もある、これから君は何でもできるんだよ。確かに君は一度終わったのかもしない。だけど、もう一度俺の側で始めてみないか?」

「あつ、わたし」

フュリスの目から涙が溢れる

「いいんですか?」

「おいで」

フュリスになつた女の子は、ジンの胸に顔を埋めて

「わあ――――」

大きな声で泣き出した。

「はじめよつ、新しい君を」

フェリスは落ち着つくと

「ありがとうございます。それで、そのお願いがあるんです」

恥ずかしそうに

「あのジンちゃんの」と、お兄ちゃんって呼んでもいいですか？」

「えつ」

「ダメ？」

「いや、いいよ」

それだけで、顔を輝かせてくれた。
ティリエル、なんて言うかな。

「フェリス仲間になってくれる？」

「はい」

新しい仲間が加わった。

そこで外の皆を呼び戻した。

あらためて自己紹介をした。みんな名前が変わったことに驚いていたがフェリスが名乗った時にとても嬉しそうに笑ったのを見て、なにも言わなかつた。

ただ、ティリエルは

「お兄様は、私のお兄様です」

「お兄ちゃんになつてくれるつていつたもん。だからお兄ちゃんは、
私のお兄ちゃんだよ」

フェリスが子供っぽくなつてゐる。こちらが素なんだうな

「む～」
「う～」

「いひ、二人とも仲良くなさい。」

二人を左右に抱き抱えキスをする。

「お兄様」

ティリエルは、うつとりしていつたが

「～～～～～」

フェリスは、言葉にならない悲鳴を上げ、顔を真っ赤にしていつる。

フェリスは、初々しいなと和む。

「そついえばアッシュに話通さないとな。ついでに皇國に帰ぬ」と
も話すか、皆それで良いか?」

「はい。いいですよ。」

ソフィアが返事をして他の畠も頷く。

「セリィえーはレティーシアは、じつあるんだ?」

「私も戻る。事務仕事は苦手だ。」

うん、アッシュも期待していなかつたみたいだしね。
今日は、もう遅いから帰るのは明日だな。

「よし、畠で夕食にしよう!」

「はー」

アッシュに、フェリスは俺が預かることになったことと明日京都に戻ることを伝えた。戻ることを伝えた時泣きそうになっていたが男の涙なんかに興味はないので無視だ。

27話 我が家

異世界36日目

皆で朝食を取つてゐる時に

「やうこえはフューリスの位置付けはどうなつたのだ？」

レティーシアが聞いてきたので

「料理人兼メイドだな。」

「まあ、メイドはなんとなくわかつてゐたけどね。あの格好だしね」

俺の隣のフューリスは、メイド服を着ていた。少々幼いが服装は正統派のメイド服だ。ちなみにイリヤも対抗してメイド服を着用している。一人とも可愛い、フューリスは小さなメイドでイリヤはエルフメイドに仕上がつている。

「料理得意なんだ」

「はー」

「IJの料理もフューリスが作つたんだぞ」

「え、そうなの。いつもの料理と比べても遜色ないよ」

「はい、とってもおいしいです。」

「すういのね。まだ小さこのこと」

「小さいは、余計です。」

そつ言いながらフヨリスも満更ではないらしい、頬が緩んでいる。

食事も終わった頃に、アッシュが訪ねてきた。

「やあジン、お密さんが来てるよ」

「お久しぶりです。ジンさん」

そこには、ギルド職員のクレアさんがいた。

アッシュにクレアさんを皇国に送るように頼まれ何がなんだかわからぬまま城を出ることになった。
道中何をしに行くのか訊くと

「ギルドマスターは基本一国に一人なんです。普通は戦争などで国が潰れたり増えたりした時に採めるんですけど、今回はうちのマスターがあっさり降りたんです。そしてギルドマスターがいるところが冒険者ギルドの本部になるので、それで皇国のギルドの方といろいろ調整するためにわたしが赴くことになったんです。」

「大変だな。わざわざ皇国を行き来するなんて」

「いえ、そうでもないですよ。もともと皇国には興味がありましたし、それに向こうに住む予定なんです。」

「え、住むの?」

「はい、まだ住む家は決まっていませんけどね。」

「またなんで?」

「毎回報告に戻るのも面倒ですし、それに興味があるんです。英雄様に」

「ぬ

「む

「あらあら

「一名様追加

「なはは

女達の反応はそれ、それだな。最近の英雄といえば俺しかいないからな。

「あ～まあよろしく。」

「ええ、よろしくお願ひします。」

異世界38日目

皇国の城についた時、俺達は国賓待遇でもてなされた。召し使い達が左右に立つて道ができるている。

「ジン様、ご無事で」

たぐわんのお迎えの中からリコトさんが出でて迎えてくれる。

「皇帝がお待ちです。」カラビビツ。

クルト皇帝の執務室に案内された。

「よつくりと久しぶりだな。」

「ジンくん、ありがと。君のおかげで問題がいくつも解決したよ。単純な意味での脅威であったグーロム王国を潰してくれたのをはじめ、グーロム王国内の奴隸推奨派の貴族達の殲滅、ラシード将軍の引き入れに奴隸の解放これらすべて君がいなければなしえなかつた。」

「といつても、まだ問題は残つているだる。一応戦場の貴族と王城の貴族はすべて始末したが残党はいるだる。ラシードだけにグーロムの軍を任せるわけにはいかないしな。元王国領が落ち着くのはいつ頃になりそうなんだ?」

「半年以内には一先ず終わらせたい、他国に集まつてもらうのに時間がかかるからな。それまでには終わらせないと魔物の大侵攻に対して動けないかもしれないからね」

「半年か、実際に元王国領を立て直すのまだ先になるのだろうな。一先ずといつのは、本当に緊急の要件だけを片付けるのだろ?」

「まあそれまで俺はゆつづせてもらつよ。」一ヶ月忙しかったしな。」

「おおそろかゆつづするのか、そこでだ、どうだねジンくんゆつ

くつするためには自分の屋敷など欲しくはないかね？」

「なんだよ、突然」

「いや、君への報酬を考えていたんだよ。先程言つたとおり君の戦果は計り知れんそれで報酬に関して悩んだ結果、その候補のひとつが屋敷になつたんだよ。どうだね？」

「そうだな、ありがたく貰つておこうかな。」

「あれ？ 意外だな。君はどこかの国に肩入れするのは嫌がると思つていたのだが」

「まあな、でもいつまでもどこかの宿屋に泊まるのも問題だし、それに屋敷は報酬なんだろ。それに帰る所があるつていうのは良いことだからな」

帰る家があるのは、割と重要だと俺は考えている。

「そうかい。それはそれとしてレティーシアについては、考えてくれたかい？」

「俺としては、歓迎なんだが國としてどうなんだ？」

「たしかにすぐに結婚というわけにはいかないな。だから今は一緒に屋敷に住ませてやつてくれないか？」

「ち、父上！」

縁談は以前にきいていたが今度は同居の話まで出てきたのだ黙つて

いられない。まあレティーシアは、怒っているところより恥ずかしがっているようだが。

「俺は構わないが、屋敷は大きいのか?」

「まあまあ大きいよ。それでレティーシアは、どうするんだい?」

「わ、わたしは」

「ジンくんの側には魅力的な女の子がいっぱいいるようだが、このままでは出遅れてしまうぞ」

「うへへ、・・・・ジン殿そのへ厄介になつてもいいのだろうか?」

「もううひん

「よし決まりだ。それじゃあ、屋敷の場所は、ミリアが知っているミリアに案内してもらつてくれ」

「わかった」

そして俺達は、ミリアさん先導のもと俺達の家になるところに向つた。

「「「でかい」「
「「「大きい」「
「

「確かにでかいな。」

「ミコアを見ているんですか！」

ソフィアに怒られてしまつた。

「ミコアさんの胸」

「確かに大きいですけど、今はそつちじやありませんお屋敷のことです」

大きいを連呼されミコアさんが赤面している。

「皇帝が言つてたじょん大きいって」

「ですがこれは」

田の前には、豪邸と呼ぶにふさわしい建物だった。軽く迷子になれる大きな大きさだ。皇族のレティーシアはともかく、ほかの女達は、萎縮してしまつてゐる。

「それだけの仕事をしたつてことだよ。」

「でもそれはほとんびり様の手柄で」

「なに言つてんだよ。俺はお前達がいるから頑張れるんだ。お前達のおかげで俺は孤独にならずにすんでいるんだからな。俺が住む以上俺の女が住むのになんの問題もないさ。」

「うへん、わかりました。」

まだ、不服そうだがその内なれるだろ？

「それでもこの規模だと掃除が大変だな」

「それなら大丈夫ですよ。私がジン様のお世話をさせていただくな
とになったので、掃除等はお任せください。」

これには、焦った。

「いやいや、それはさすがに悪いだろ。せっかく皇族付きなんだし、
それにいくらミリ亞さんでもこの規模を一人で管理するのは」

屋敷を見ても慌てなかつた俺が、ミリ亞さんという個人が関わつた
瞬間焦りだしたのを見て。

「　　あはは　　」

ミリ亞さんを含めみんなに笑われてしまった。

「主らしげです。」

テツよ、どうこう評価なんだそれは。

「ふふつこれは、私から志願したんですよ。レイトといつ名前を覚
えていりますか？」

「ああ覚えてる、戦闘奴隸一千を解放したとき一番最初に解放した
やつだ」

「レイトは私の弟です。」

そうだったのか、そういえば俺が皇女を助けた時、ミリアはどうしてもグーロム王国との交渉に行きたそうだった。弟が奴隸だったからなのか

「ジン様、弟を助けていただきありがとうございました。この恩を返すために私は志願したのです。」

言ひきつた後顔を赤らめて

「あと、その、気になるのでしたら、わ、私の胸を好きにして下さつてもいいですよ」

女達は、少し呆れ顔だ。俺としてはうれしい、ミコアさんの胸は、この場では一番大きいのだ。

「それでは夜にでも」

ポカ
ビシッ

フェリスにパンチされレティーシアにチョップをくらった。
その後その二人を何故か周りの女達が諭していた。
内容を聞いてみると内、ジンと一緒にいるなら早くなれなさい、
いつことらしい。

「でも一人だと大変だろ」

「私も手伝いますよ」

「私も」

ジンのメイドをやつているフュリスとイリアが名乗りを上げる。

「それでも三人だしなあ」

「それも大丈夫です。ジン様が解放された奴隸の方達から志願した人を国で雇つて屋敷にいれるので大丈夫ですよ」

至れり尽くせりだな。

「出来れば屋敷内は女の子だけがいいなあ。俺の女をジロジロ見られるのは嫌だし。それはそうと、いろいろありがとうございます。それじゃあ改めてようじへ//コアさん

「私はもうあなたの物です。//コアと及びください」

「わかった。//コア」

そうして俺は、新しい我が家に入った。

その夜に、ジンの寝室に//リアが訪ねてきた。

「本当に来てくれたんだ」

「来ちゃいました」

「本当にいいのか？恩とこつても弟を助けたことだろう」

ミコアははにかみながら

「ふふっ、お忘れですか、レティーシア様を助けに来て頂いた時わ
たしも助けてもらつてるんですよ」

「まあ、 そうかもしかねないが

「それとも魅力ないですか？」

そういうながらミリアは服を脱いでいくそして下着姿になり。胸
を強調している。

明らかに体に自信があるし余裕もある。ならば

「いや、かなり魅力的だよ。」

そう言つてミリアを後ろを向かせて胸を両手で包む。そして氣と電
氣を使って一瞬でミリアを絶頂に導く。
この世界に来てから少しづつ性技を練習していくのだ。ミコアの余
裕は一気に消え去つた。

「寝かさないからな

「あ、ちよ、まつ、~~~~~ツ

異世界38回目

食事中にイリヤが

「これからどうするのですか?」主人様

「そうだな、今は聖痕が使えないから、使えるようになるまで、家で束の間の休みを楽しむことにする」

「それでしたら皆ちゃんと順番に楽しむところのはじりですか?」

それいいな、個人と一緒にいられる時間少なかつたからな。

「それ採用」

「わたしも賛成です」

声が膝の上から聞こえる。フェリスが俺の膝の上で食事を一緒にとつてているのだ。

料理人の特権だそうだ。毎日すると皆が怒りそうなのでほどほどにしよう。

皆と遊ぶといつことはお金を使うな今の残金は

それほど大きな買い物はなかつたがお金は消費するものなので、これまでに細かいところで使つたのが1000ギル、フェリスの服類

に1000ギルの2000ギルを使ったので

45000ギル - 2000ギル = 43000ギル

皇国軍と一緒に行動していたのであまり出費はなかったようだな。

でも「これ俺だけの金じゃあないんだよな。まあ、なんとかなるか。

・レティーシアの場合・

お昼すぎにレティーシアが俺の部屋に現れた。

「ジン殿、ぐじ引きの結果最初はわたしになつたのだが、・・・」
何をしよう?「

「確かになほとんど考える時間なかつたからな

「うーん、・・・あつ、そうだジン殿手合させをしないか、一度やつてみたかったんだ。」

「休みじゃあなくなつているが、まあいいか。中庭でやひつか

「やつた」

レティーシアが嬉しそうにしてくれているならいいか。

中庭に出て俺は木刀を、レティーシアは木剣を構える。

「はじめ」

途中で捕まえたメイドさんに合図をいてもらつ。捕まる時に手を掴んだら赤面された。メイドのほとんどは俺が奴隸から解放した人たちで、恩を感じている人が多い、中には好意を持っている人もいるらしい。

打ち合いを始める。

打ち合つてわかつたがレティーシアの剣はリリスのような戦いの場で鍛えられた剣ではなく誰かにならつたのだろう技があり型があるようだ。何かの剣術なのだろう動きが洗練されている。ただし単調で型に嵌つてている分俺にはやりやすい。

フェイントで釣つた所に懐に入り足を引っ掛け肩で押し倒す。あつさり転倒してそこに木刀を突きつける。

「負けたか」

ちょっと不満そうなレティーシアを立ちあがらせる

「しかし、依然見たときはもつと早かつたと思つただが」

それで不満そなのが、手加減したと思われたか

「手加減したわけじやないぞ、普段は精靈にいろいろ助けてもらつてるんだ。さつきのが俺本来の力だよ」

「そなのが、それでも私は負けたのか」

今度は、落ち込んでしまった。

「まあ俺の師は、刀神つまり神様だからな」

「か、神が師なのか羨ましいな」

「そつでもないぞ、あいつの修行つて滅茶苦茶だつたし。なんど死を覚悟したことか、おまけに期間が短いからつて一時期は、朝晩、飯時、寝てる時も風呂の時も不意打ちしかけてきやがつて。風呂の時なんか壁壊して女子風呂と繋がつてしまつて闇の精霊王と鉢合つし。」

「ちょっとアラウマになつていろらしい。少しトリップしていく。

「ジ、ジン殿帰つて来い。そ、それより私に対してなにか指摘はないか?」

「あ、ああそだな攻撃が単調に感じたかな、俺も未熟だからよくわからないけど、少なくともレティーシアの攻撃を受けていて驚きはなかつたな。まあその分まだまだ強くなれると思うが。」

「やうなのか、ジン稽古に付き合つてくれないか?」

「いいよ。存分にやるわ」

二人で夕方まで汗を流したが、全くといつていいくらい色気のないすゞじ方だなレティーシアらしいが。

-ソフィアの場合-

レティーシアとの稽古が終わりレティーシアに先にお風呂入つても
らつてゐるといふ。

「ジン様、次は私の番ですよ。」

「こんな時間からでいいのか?」

もつ口が沈んでゐる。あまり時間もないとと思うのだが。

「大丈夫です。さつき中庭の稽古見ていたんですけど汗を搔かれて
いたので、その、一緒にお風呂に入りませんか?」

なんだこの展開、レティーシアとは正反対にとても色氣のある展開
になつてゐる。まあ断る理由もない

「じゃあ俺からもお願ひするよ

「ジン様、お邪魔します。」

レティーシアがあがつた頃に浴室に向かい、先に入つて待つてゐると

タオル以外なにも身につけていないソフィアが入つてきた。髪を頭
の上で団子にしてゐるのが新鮮で可愛らしい。

「お風呂お流します。」

「ああ、頼むよ。」

ソフィアに背中を流してもらつた後で

「次は俺が背中を流そう」

「えついいですよ。そんな」

「いいからいいから」

「ジン様手つきがいやらしいです」

「気にするな」

「あつ」

しつかりソフィアの背中を流してもらつてちょっとだけいたずらした。
体を洗つたら二人でお湯入る、もちろんタオルは外して入るので全裸だ。
やつと恥ずかしさが薄れてきたのかソフィアが

「ジン様見てください」

精靈術で作った見事な水の鳥を見せてくれた。

やっぱりソフィアの制御は、すばらしいな。この能力があったからこそ奴隸兵5万を押し流す決心が出来たのだ。
ソフィアは俺をすうじいと書つがソフィアも少しは自身を持つてもいいと思うのだが。

「すうじいなソフィアは、俺も何か作つてみようかな」

そこからは、一人で精霊術を使つたり精霊術の話をしたりして時間をすごした。

そろそろあがれうかと思ったときソフィアが型に頭を寄せてきた。

「私村にいた頃は、こんなことになるなんて思いもしませんでした。ずっとあの村で巫女をやりながら精霊術で農作業を手伝つて暮らすものと思つていました。ジン様のおかげで世界を見られました。ありがとうございました。ジン様といひわい・・ま・・・・す」

バシャ

言葉が尻すぼみになつていつて最後には顔から湯船に顔を落としました。

すぐに抱き起しすと真っ赤になつてゐる。完全にのぼせている。体を拭いて服を着せ自分の部屋で介抱していると

「うへん

「起きたか？」

「あ、ジン様申し訳ありません」

状況も理解できていないようだ。

「駄目じゃないか無理しちゃ」

「だつて」

ソフィアが口の辺りまで毛布を上げて

「ジン様と一入つきりで話すの楽しかったんですね」

可愛いなオイ

「まあ、まあそれじゃあ仕方ないな、うん」

「ジン殿いますか?」

レティーシアだ

「どうぞ」

「失礼します。よかつたソフィア殿は気づかれたのですね」

「ああ、ついにやつせな」

「それでですねジン殿、その、夜は私とソフィア殿が闇を共にすることになつてゐるのですが、よろしいでしょつか」

そんなことになつていたのか。明日もそうなるのだろうな。

「もちろん、歓迎するよ。もともとソフィアは、動かせなかつたしね」

その夜は、俺を中心に川の字で寝ることになった。ソフィアとレティーシアは、二人とも疲れていたのだろう（一人は、手を繋いできた程度で静かな夜をす）した。

29話 女達との休日 2回目

異世界39回目

・ティリエルの場合・

「あの、お兄様はお空のお散歩に行きませんか?」

朝にティリエルが訪ねてきた。

「うーん、今聖痕は使えないからなー難しいな」

「いえ、私の背に乗つてくださいさればいいです。」

「いいのかい?前乗つたときはかなり疲れていただろう?」

「わたしも成長していますし、そんなに早く飛ばなければ大丈夫です。」

「ティリエルがいいならいいけど」

「じゃあ行きましょ!」

俺とティリエルは、朝のお散歩に空を飛んだ。

以前に乗せてもらつた時は、とても速くて余裕がなかつたからあまり楽しいとは思わなかつたが、実際龍の背に乗つて空を飛ぶのはけつこう楽しい。前の世界では夢想でしか出来なかつたことがこの世界では出来る、じついう時異世界に来てよかつたと思つ。

ティリエルに乗つて皇都を一週してから屋敷に戻る。

「あ、ティリエルそのまままでいて」

「どうしたんですか、お兄様？」

「龍の姿のティリエルの世話をしてみたくてさ」

龍の姿のティリエルは、とても綺麗だ銀の鱗に覆われていてすべて本物の銀のような輝きを放つていて。そしてその光が不快にならないのだ。そんなティリエルを世話したくなつたのだ。

メイドさんに頼んで、タオルを持つてきてもうひ。持つてきてもうつたタオルでティリエルの体を拭く。

「気分はどうだ？」

「気持ちいいです。もっと強くして下さつても」

「やつか」

ティリエルにどうして欲しいかを聞きながらお世話をさせてしまつた。

ティリエルの世話が一通り終わりティリエルも人の姿に戻る。

今は膝の上で遅めの朝食を取つていて。昨日フエリスが膝の上で食事しているのが羨ましかつたようだ。
食事をしていると突然ティリアルが

「お兄様、どうして私は夜伽に呼んでくださらんですか？」

「「ホ、「ホ」

むせてしまつた

「どうした突然？」

「私だつてもう十五ですよ、前の世界はよくわかりませんが、この世界では結婚だつて出来ます。」

ティリールの見た目は、少々幼いフェリスほどではないが、アルベルトと話してからと考えていた。答えに困つてると悲しそうな聲音で

「やつぱり見た目ですか？」

「やつぱりじゃないけど」

「じゃあ私のことがお嫌いなのですか？」

「それはありえない。愛してる」

「なら」

「・・・わかつたよ。やつだな16歳になつたら、俺の方から呼ぶよ、俺の国では女性は16歳から結婚できるんだ。頼む俺はティリエルを大事にしたいんだ。」

「・・・わかりました。今はその言葉で我慢します。ただ一つお願ひがあります。」

「なんだい？」

「キスをしてください」

「わかつた」

そう言つて俺はティリエルにキスをする。

もそれにこしたえる。

「おまえ、うわあでした。

うつとりした表情のティリエルがいた。

- テツの場合 -

ティリエルとの食事が終わり部屋でくつろいでいると

「どうして足音を殺してきたんだ。」

「主、私の番」

テツが音もなく現れた。

「主を驚かせようとした。けど、驚かなかつた足音聞こえた？」

「いいや聞こえなかつた。ただ精靈が教えてくれるんだよ、不自然

な行動を取ればわかるんだ。」

「主に奇襲は効かないの？」

「少なくとも俺個人には、奇襲は無意味だな。」

「主す」「さすが私の主です。」

「はは、ありがと。テツは、何をするか決まったのか？」

「決まらなかつた。主何かない？」

「せうだな、・・・街に出よつか」

「街に？」

テツの頭を撫でながら

「何か楽しいことがあるかもしないだろ」

「はい、行きましょう」

今は、テツと手を繋いであってもなく街を歩いている。テツは、歩いているだけなのに楽しそうにしてくれている。だからといって何もしないわけにはいかないよなあ、装飾品店が見えてきた。テツは、女の子だし鉱石を吸収する、興味があるかもしない。

「テツ、あそこに入るひ

テツを連れて店に入る。

「わあ、主寶石がいっぱいです。」

よかつたテツは、興味をしめしてくれた。テツと店内を見て回る。

「主ありがとうございます。」

テツが小走りで展示品を見て回る。テツのこんなにはしゃいだところは、はじめて見たな。

「この穴は、何でしょう？」

テツが見ている者は銀細工の首飾りで翼を模して作られているようだ。二つの翼が重なるように作られていて、翼に一つずつ穴がある。店主に聞くと

「その穴に宝石を埋め込むんです。プレゼントでよく使われていて受け取る側と渡す側で宝石を選ぶんです。」

その説明を聞きながらテツは、ずっとその首飾りを見ていた。気に入つたようだ。

「お値段は？」

「付ける宝石によつますが付ける石自体は小さいので、2000ギルから2500ギル程度になります。」

「テツは、何を付ける？」

「いいのですか？」

「いいよ、初めてのデートのプレゼントだよ」

「ありがとうございます。」

テツはダイヤモンドを俺はブルートパーズを選んだ。俺は、確か前の世界で、トパーズの石言葉でいい感じだった気がしたから選んだ。テツにダイヤモンドについて聞くとダイヤモンドは、硬度がとても高いのでテツのような存在には特別であるらしい。

「どうですか主？」

「似合つているぞ」

「えへへ～～」

今日はテツがよく笑つてくれるのが嬉しい、テツはあまり表情をださないから笑つていていうことは本当に楽しんでくれているのだろう。

いつもは、落ち着いていているからか見た目より大人っぽく見えるが、笑うと雰囲気が見た目相応に幼く見える。笑顔のテツと腕を組んで俺は帰路についた。

テツの首には銀の首飾りが揺れていた。

これ以降テツが小太刀の姿になった時、柄の下の部分に銀の装飾と一つの宝石が輝いていた。

43000ギル・2400ギル＝40600ギル

- フェリスの場合 -

「テツさんが笑顔で部屋の方に歩いていっていたんですが、お兄ちゃんがないところで笑うなんて結構珍しいですよね。お兄ちゃん、テツさんと何してきましたか？」

「テツとは、街でデートをしていたんだ。それより、フェリスは何をするか決まった？」

「デート羨ましいですね。私がしたい事はですね、わたしといえばやつぱり料理なのでお兄ちゃんの故郷の料理を再現したいです。」

「・・・ありがとう、フェリス」

思わずフェリスを抱きしめてしまう。フェリスは、顔を真っ赤にしながら恥ずかしそうに

「それで、その、食材のお買い物に一緒に行きませんか？」

「いいよ、それじゃあお買い物といつものおデートにいきますか？」

「い、いえデートとかそんなのじゃあ・・・デートなのかな？・・・デートかあ」

最初は狼狽していたが、最後の方は嬉しそうに頬を緩めていた。

出る前に料理を決めるのが意外と悩んだ。出来そうな物でこの世界で似ている物がなく、かつ俺が食べたい物となると意外と少ない、この世界の食べ物は、異世界人の俺が不自由しない程度には、前の世界と似通っていた。

結局作るのは、ハンバーグになつた。この世界では、基本的に肉は焼くだけだつたのだ。

「お兄ちゃんの話を聞くと混ぜるお肉と野菜が問題ですね、香辛料はなんとかなりそう。」

「いくつか買つて帰つて試そつか?」

「せうしましよう。余つたお肉は、別のときに使えばいいですし

「それじゃあ行こうか」

まずは、肉屋だ。聞くところの世界のお肉は、魔物の肉が多いらしい。一応牛や羊は、いるらしく放牧もしてはいるがそれは毛や乳を得るためだ。魔物の危険があつて大量に家畜を飼つのが難しいらしく、家畜を潰して食べることはまれらしい。ちなみに豚はいの魔物にずいぶん昔に絶滅させられたらしい。

「それじゃあ牛型の魔物のお肉を一種類と猪のお肉に猪型の魔物のお肉をお願いします。」

四種類のお肉で挑戦することになつた。
おじちゃんが話しかけてくる。

「嬢ちゃん、家の手伝いかい?えらいねえ、」おじちゃんがお兄さんかい?」

フエリスは、今メイド服を着ていないので家の手伝いと思われたらしい。

「いいえ違います。」

「あれ？でもお兄ちゃんって呼んでなかつたっけ。じゃあ近所のお兄さんかい？」

「違います」

「じゃあ親戚」

「うへ、ちがうもん

フエリスの素が出てきて泣きそうになってしまった。理由がわからぬ理由がわからぬので慰めることも出来ない。おじひやんもお姫を泣かせたことにかなり焦っている。

「あんた、なにお姫泣かせてんだーーー。」

「こや、俺もよくわかんなへどよな」

「まつたく、」の二人は「トーントの途中だつたんだよ。それをあんたは、妹の枕に押し込めよつとして」

「そ、そうのかい嬢ちゃんそれは悪かった。」の鳥肉もおまけするから許しておくれ

おじひやんが慌てて謝罪を口にする。

「いえ」迷惑をおかけしました。大丈夫です、私のほうにも問題がありましたから

居心地が悪くなつたので店を出る」とあります。

「お兄ちゃん、私たちつてデートしてるのは見えないんだね」

「周りの田なんか気にするな実際はデートをしているし、俺はフェリスを大事に思つてこる。それでいいじゃないか、それにその内、気にならなくなるさ」

「どうしてですか？」

「俺は、精霊界で長く過ごしていたから体質が変化して少し自然そのものに近くなっているんだ。そのおかげで俺は長寿で歳を取るスピードも遅いんだ。水の精霊王の話では300年は生きられるらしい」

フェリスの頭を撫でながら

「三年後には、しつかり連れ合いに見えるわ」

「嬉しいんですけど、それだと私のほうが先におばあちゃんになつてしまいそうです。わたしも冒険者になろうつかな」

「どうしてそこで冒険者になるんだ？」

「冒険者的人はある程度強くなると少し長寿になるらしいんです。能力ランクA以上必要らしいですが」

254

「へ～それなら同じ時を過ぎさせるかもな。」

「はい、がんばります。」

フエリスがやる気になつてゐる。まあいか護身にもなるし

「それじゃあ残りの食材を買ひに行こうか」

「はい」

後は、混ぜる玉ねぎとかの野菜だなこれは、もうフエリスにお任せ
だつた。

家に帰り、フエリスと一緒に夕飯を作ることに手間のかかる挽肉は
俺が担当した。

結果ハンバーグは牛型の魔物のお肉と猪型の魔物のお肉が一番おい
しかつた。

その夕食には食卓にハンバーグが並び、フエリスはいつも以上に幸
せそうに俺の膝の上で食事を取つていた。

その夜

「　　「今日は私たちです。」」

やつぱり、寝室に二人娘がやって來た。ティリエルとテツとフエリ
スだ。

ティリエルの抱き付き癖に対抗するようにほかの一人も抱きついてきた。

一番小さいフェリスが体の上でティリエルが右、テツが左に抱きついたままの就寝となつた。三人ともやわらかかった。

異世界40回目

・ミコアの場合・

「（レ）主人様失礼します。」

「どうしたんだ、ミリア急に（レ）主人様なんて」

前までジン様だったのに

「ジン様は私の主になりましたので、わたしもイリヤさんを見習つて（レ）主人様とお呼びしようと思いまして。」

「いやまあ、俺はいいんだけどね。それよりミコアは、どうするのか決まった？」

「それが決まらなくて」

「？・・・なんで」

「私は、使用者としての教育を受けていたので自分の主だと思つと何かを頼むのも気が引けるといいますか」

生真面目だなミコアはそこもいい所だが。

「それじゃあ、ミコアの仕事を見守させてもらおうかな。」

「見学ですか？それは楽しいのですか？」

「やつと楽しけり」

そして今、俺とミリアは普段使わない部屋を掃除していた。これは、通常の仕事ではない、そもそも一人でやる仕事でもない。何故こうなったかといふと

ミリアと話し、やることは決まったが、問題が発生した。仕事がないのだ。今日ミリアは、オフなので仕事を入れていなかつたのだ。他の人の仕事をとるわけにもいかない。

そこでミリアが出した案が

「空き部屋をお掃除しましょう。」

といふことになつた。元々ミリアの仕事は掃除が多いらしい。食事をフェリスが、掃除をミリアが担当して周りのメイドはその手伝いをしていくやうだ。

さすがに一人で片付けるのは大変なので俺も、手伝つことにしたのだ。

「ご主人様は、ご主人様なのですから、あまり他の人の仕事を取らないようにしてくださいよ。」

まあ、仕事を取ることが悪いのは何となくはわかる。仕事がない使人人は肩身が狭くなるようなのだ。

「わかつたわかつた。でも今日はミコアと共同作業がしたかったんだ。」

「「」、「」主人様」

「おお、照れてる照れてる。

「ほら、外に出たらあまつミコアに会えないかもだろ

「あっ、そうですね。」

「ミコアが少し落ち込んでしまった。落ち込んでくれるのなら提案ぐらいはしてみよう

「フーリスにも話したんだけどミコアも冒険者登録をして一緒に旅をしないか?少し危険だから断つてもいいんだが」

「いえ、行かせてください!。私でつきり置いていかれると思つていたので、誘つてくださつて嬉しいです。」

「そこまで、嬉しいものなのなか?」

「だって誘つてぐだかるところとは、わたしを側に置きたいと思つて下をついているところことで、それが嬉しいはずがありません。」

「そ、そつか。それじゃあ明日でモギルドに行くか

そつ言われる少し照れるな。ミコアは興奮した様子で

「はい、それでは、引き継ぎなどをしないことだけないので、ひょりと行つてきます。」

行つてしまつた。掃除の途中だつたがまあいいか、まだ終わつていなかが切りは良いのだ、後は本職に任せよう。

-リリスの場合 -

お昼を過ぎたころリリスが部屋になつて來た。

「リリスは決まつた？」

「私も手合わせ・・・と言いたい所だけどそれじゃあ、つまらないから一緒にお出かけしよ」

「わかつた。何処に行くんだ？」

「武具屋」

目的地に向かう道すがら何故武具屋なのか訪ねると

「実は、ノワールサイと戦つた時ので、レイピアの損耗が激しくて新しい武器が欲しいから下見をしたくて」

「そんなに前からか、大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ。すぐには折れないと思う

「それならいいが」

「ついでにこの内に皇國の武具屋の一つに着いた。

「前の武具屋では、武器を見るのに付き合へなかつたんだよな。リ
リスは今回もスピード重視なのか?」

「やのつもつだからレイピアにしようつと黙つただけど」

惱みながらレイピアの棚を見るリリスに

「ちょっといいか?」

「なに?」

「リリスって基本刺突がメインだよな」

「やうだよ、なんで知つてゐる? 手合させしたことないよね?」

「リリスのことば、よく見てこらねからな」

「あ、ありがと」

顔をそらしながら礼を言つてゐる、照れてるようだ

「それならエストックなんかどうだ、刺突を重視した武器だからリ
リスには合つと思つんだ」

エストックとは両手用の刺突重視の武器だ。エストックは、剣身の

断面は菱形で、先端になるにつれ狭まり先端は鋭く尖っている。レイピアと違い両手で突ける分威力が期待できる。

「リリスのスピードは申し分ないし少しはパワーを求めてみたらどうだ。ノワールサイのよつたな固いやつに出会つたら大変だろ」

「エストックかあ、みてみよっか」

エストックは、刀同様数が少ないので奥に仕舞われているらしく表には並んでいない。

店主に奥から持つてきてもらいエストックを見てみると、全てに目を通した結果一つのエストックを手に取った。

「これが一番いいかな」

そのエストックは、軽量化の魔法を始め、一重強度強化と雷を纏わせて貫く力をかなり高めた物だ。かなりの業物だ。

「これは、いくらですか?」

「それでしたら複数の魔法をかけられているので、15000ギルになります。」

「た、高いよジン」

「確かに高いな、まあ大丈夫だろう。それをくれ

「ジン今日は下見のつもりだつたんだけど」

「いいのいいの、なあ護符つてあるか?」

「ありますよ、いくつまで？」

「一〇八くれ

40600 - 17000 = 23600 ギル

残金 23600 ギル

「ジンは刀見ないの？」

「テツがいるだろ？」

「ふふん、レティーシアとの稽古を見ていた時に気付いたなんだけ
どジンって本当は、二刀流だよね。」

「・・・気付かれたか。皆を驚かそうと思つて黙つっていたのになあ。」

「

「他には、誰も知らないの？」

「テツは、知ってるよ、なんせ俺の小太刀だからな。話さない訳に
はいかないし、自分で気付いていたしな」

「少し妬けるなあ。」

「そういうなよ。そうだな、気付かれたんなら、ちょっと見てみる
か」

店主に刀も見せても、『うが

「やつぱりテツに釣り合つ刀はないか」

刀を戻し店を出る。リリスが腕を組んできた。リリスの感触を楽しんでいると

「ジン今度一刀流見せてよ。」

「機会があればな」

・イリヤの場合・

最後の一人が、夕食と入浴の後に部屋にやって来た。

「『う』主人様、私が最後になりました。」

「いらっしゃい、でも今から何をするの?」

以前この時間帯に来たソフィアは、お風呂を共にしたが、今日はそれも終わっている。

「『う』主人様もお掃除とお買い物でお疲れでしょうからマッサージをさせてください。」

「俺には、願つたり叶つたりだが、イリヤはいいのか?」

「はい、『う』褒美です。させてください」

「そこまで言つなりお願ひするよ」

そのまま座っていたベットに横になる。ベットに寝転がる俺にイリヤが跨りマッサージを始める。

イリヤはマッサージに治癒魔術と一緒に使うようかなり気持ちいい、蕩けそうだ。

「（）主人様、質問してもいいですか？」

「なんだい」

「（）主人様はどうしてこちらの世界に来たのですか？」

「言わなきや駄目？」

「駄目ではありますん。ただご主人様の女の一人として知りたいのです。」

「わかつた。話そう、そつだな理由は、いくつかあるんだが結局俺のためなんだよな」

「ちゃんと教えてください」

「そつだな簡単なのは、神が言つには、俺でなければいけなかつたらしいんだよ。」

「（）主人様でないと？」

「精靈との相性と人格らしい、次の理由は知つてしまつたからだな」

「何を知つたのですか」

「俺が行かなければこの世界が滅ぶことを知つてしまつた。俺は他人の命を粗雑に扱える人間ではなかつたんだよ。三つ目が・・・・・」

「三つ目は？」

「たぶん三つ目が、本音だらうな。俺は前の世界で物事に本気になれなかつたんだよ。物事にあまり興味を持てなかつし、興味を持つたものでは優秀な成績を収め、すぐにやる気もなくなつた。」

「・・・・」

イリヤは、黙つて聞いていた。

「生き甲斐がなかつたんだよ。前の世界では、大事な人たちはいたけど毎日が退屈だつた。だから退屈が嫌で異世界行きを決めたんだ。だから前の世界に未練はない。ちゃんと別れを伝えられたからな。ほらな、自分のためだろ」

「そのおかげで私たちは生きていられます。」

「そうだな俺は、この世界でお前達に出会つた。俺は生き甲斐との世界大事な者を手に入れた。そして目標を持てた俺は今とても充実している。ありがとうイリヤ」

「ならどうして奴隸を解放するなどと」

「奴隸制度が気に入らないんだ。それに神は俺に好きにしろと言つ

てくれたからな。俺は、今の世界を壊し新しい世界を造ることしたんだ。」

「『ご』主人様はどうのような世界を求めているのですか

「それはだな、人と人が仲良くなつて奴隸制度がなくなりあらゆる種族が手を取り合えるそんな世界を造りたいと思つている」

「とても素晴らしいと私は思います。」

(『ご』主人様あなたは、やはり素晴らしい人です。この世界に来たきっかけは退屈しのぎだとしても、精霊界での修行も、私たちを救つてくれたことも、奴隸を解放しようとすることも、この世界を導きまとめようとすることも、あなただからこそなのですよ『ご』主人様。ですからどこまでもお供します『ご』主人様)

イリヤはこの人と共に歩むことを改めて心に誓つたのだった。

その夜

「ジン」「『ご』主人様」

リリス、ミリア、イリヤの三人が部屋に現れた。まあここまで二日の夜でわかつていたことだ。

ほかの一曰と違うのはその夜がとても濃厚なものになつたことだろう。

三人を同時に愛し合つことになつたが、先に力尽きたのは三人の方だった。三人ともジンの性技によつてイキまくり失神してしまったのだ。

三日目の夜は、疲れ果てていた三人をベットに押し込み裸の三人を抱えて一緒に寝ることにした。

3-1話 方針と新たな仲間

異世界41日目

朝起きると。

「ご主人様お客様が来ています。」

「誰?」

「アッシュ皇太子様です。」

「アッシュ?」

グーロム王国で、わかれてから一週間もたっていない。とても元王国領が安定したとは思えないのだが、何かあったのか?
不安に思いながらアッシュの待つ部屋に向かう。

予想通り問題が発生していた。俺達は、王城で奴隸の解放を宣言したが、数日たつて奴隸を隠し持っているやつらが目立ってきたのだ。
しかし、安易に軍を動かせば、証拠隠滅のために奴隸が殺されてしまう。

そこで個人で、貴族や商人を潰せる俺に白羽の矢がたつたのだ。

「わかった。俺の方で対処しよう。」

「ありがとうジン。できる限り手助けはするよ」

アッシュは、俺の返事を聞くとすぐに元王国領に戻つていった。
朝食後アッシュの話を踏まえて、これからのことの決めるためにみんなに集まつてもうつ。

そこで元王国領の状況を話す。

「そのようなことになつてゐるのですか」

反応はそれぞれだったが、以外とフェリスの反応が一番大きかった。
顔は青ざめて俯いている。

「大丈夫か？」

フェリスの肩を抱きながら話しかける。

「その、私、お城の奴隸の扱いを知つてて、とてもひどいことを」

顔は上げてくれたが、その目には涙があつた。フェリスには城の生活そのものがトラウマなのだろう。

「大丈夫だフェリス俺達はその奴隸を助けに行くんだからな、それにはこの俺が行くんだ絶対大丈夫」

「はい、・・・はい」

フェリスは、一番身近に奴隸がいたんだな。イリヤとリリスは一度奴隸になつたが、奴隸を体験する前に俺が助けているから体験はし

ていない。

フェリスの、記憶から王城の生活を忘れるのは、まだ時間がかかるな。

フェリスが落ち着くのを待つて話を続ける。

「俺の簡単な方針をこれから話す、

一つ目

元王国領の奴隸解放

二つ目

元王国領の残党の殲滅

三つ目

俺達自身の強化

四つ目

お金を稼ぐ

この四つがおおまかな方針だ。質問はあるか?」

「フェリスちゃんやミリアさんも連れていくのですか?あとレティーシャ様はどうするのですか?」

「ああ、一人共同行する。このあと冒険者登録をしてギルドに行く。レティーシャのことは、皇帝に聞かないとな」

「それなら大丈夫だ。アッシュが、同行していいと言っていた。」

アッシュのやつ俺より先にレティーシャに話していたということが、俺が断らないこと前提だったなあの野郎。三人の同行に反対などはなかつた。

フェリスとミリアに護符を渡す。ちなみに、ティリエルとレティー

シアは護符を元々持つていた。

レティーシアは、姫騎士と呼ばれているから不思議ではなかつたし、ティリエルはアルベルトが持たせたようだ。テツは、氣力と魔力を持たないから使えない。

「よし皆でギルドに行こう」

「み、皆でですか？」

確かに俺達は、9人と多人数だしな。

「今日だけだよ。ギルドカードの更新もしたいし依頼も受けるから。

一応は納得してくれたので、俺達はギルドに行くことにした。

「へえ、ここが皇国の冒険者ギルドか、大きいな。グーロム王国のギルドって本当に小さかったんだな」

俺たちがギルドに入ると騒がしかつたのが一瞬静かになつたが、すぐにはまた騒がしくなつた。しかし、中には元の場所に戻らず俺達に、正確には俺の女達に近づいてきた。こつちでもあるんだな通過儀礼なのか？

顔立ちは整つているが、どうも軽い感じがする金髪のにいちゃんだつた。

「ねえちゃん達俺と遊ばない。依頼が終わつてぱっかりで今結構お金あるんだよね。」

男がミリアに触れようとしたので間に入る

「彼女達は、俺の連れだ。手をだすな」

「オイオイそれを決めるのは彼女達だろ?」

「それでしたら話しかけないでください」

「喋るな」「雑魚」

「私達はジン様のものです」

「死ね」「消えろ」

穏やかなものもあるが、暴言のほうが多い。

「な、なんで、そこまで言われないといけないんだ。」

まあもつともだな。

「悪いな。皆も挑発するな。だが」「こいつらは俺の女だ。もう一度言う手をだすな」

「・・・ちつ

舌打ちして男は去っていった。

「『』はグーロムじゃないんだから、もえす』し穏やかに断るう
な

「ハーヴィー」

「ジン!久し振り」

大きな声で呼ばれた。周りにも聞こえたのだろう。さつきの男もギ

ヨツと顔を強張らせた後、胸を撫で下ろしていた。手を出さなくてよかつた、とでも思つてゐるのだろう。

「あいつが『英雄ジン』なのか、じゃあ、あの水色の髪の女が『水災の魔女』なのか？」

「『水災の魔女』ってなんですか！？」

ソフィアが悲鳴をあげている。その引きがねになつた男が側に来た。

「久し振りだなジーク」

「もうギルドは君の噂で持ちきりだよ。やつぱりジンは、すごいな」「そうでもないよ。それよりはソフィア達を送つてくれて助かつた。ありがとう」

「いひつて。そうだカイル～ちょっと来てくれ」

ジークは、相方を呼びよせ

「お久しぶりです、ジンさん」

あれ、カイルの口調が変わつてゐるよつな。

俺の疑問が解決する前に、さらに意外な申し出があつた。ジークが真剣な顔で

「ジン、俺たちをジンのチームにいれてくれないか？」

何故俺のチームなんだ、普通は女ばかりで入りづら」と思つんだが

「ジーク達は俺達の目的を知らないだろ。なのに何故チームに入りたいんだ？」

これに答えたのは、意外にもカイルだった。

「私達は、昔騎士だったのです。ですが私達は、戦争で主君を失いました。そして新しい主君を探していたのです。そして私達はあなた様に出会いました。仕えさせていただけないでしょうか？」

やつぱりカイルの言葉使いが変わっている。それだけ本気なのだろうか。チーム"仕えることになるのか？。だがチームの増強も必要だそれに彼らは信用できる。俺が数少ない知り合いの冒険者だ。

「わかった。チームに迎えよう、ただ俺は男には厳しいぞ」

「「ありがとうございます」」

新たに二人の仲間が増えた。その後二人はジン達の目的を聞いて。「やはりあなたを選んでよかったです」と感慨深げに呴いていたとか。

手早く冒険者登録を済ませ

新しい仲間とギルドカードを見たことがない人達のカードを見ることがになった。

まず新しい登録組の

名前	フェリス	種族	人間	性別	女
ギルドランク	G				
能力ランク	総合E	気力F	魔力C		

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの料理人 ジンの義妹

名前 ミリア 種族 人間 性別 女

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力E 魔力C

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド

フェリスとミリアは、完璧に魔術師タイプだな。これでは、後衛に偏ってしまうな。
新しい男どもは

名前 ジーク 種族 人間 性別 男

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力B 魔力B

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 一級騎士

名前 カイル 種族 人間 性別 男

ギルドランク C

能力ランク 総合C 気力B 魔力C

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 二級騎士

名前 レティーシア 種族 人間 性別 女

ギルドランク D

能力ランク 総合 C 気力A 魔力D

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの女 皇女

ありがたいことに、三人とも前衛タイプだった（ジークも前衛だった）。これなら、チームのバランスがよくなるな。それにしてもジンの女ってずいぶん直接的なつたな神の野郎。残りのメンバーもカードを出す。

名前 ソフィア 種族 人間 性別 女

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力B

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 水の巫女 精霊術師 水災の魔女 ジンの女

「ジン様『私』水災の魔女』じゃないですよ」

ソフィアの称号が増えていた。水災の魔女については、かなり不満そうだ。ソフィアは、あの時危ない人を助けていただけだからな。

名前 イリヤ 種族 エルフ 性別 女

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力B

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド 治癒術師

名前 リリス 種族 人間 性別 女

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの護衛 熟練者

名前 テイリエル 種族 龍族 性別 女

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力B 魔力C

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの義妹 幼い銀龍

三人のカードには、変化はなかつたが、ティリエルのカードを見たときには新しい男二人は、かなり驚いたようでティリエルを長い間凝視していたので

「ティリエルを見すぎだアホども」

目潰しをしてやった。

二人は、悲鳴をあげながら地面を転がつた。

「ここまでするか普通?」

「言つたら、男には優しくないって」

「厳しいって言つてたよ!」

「細かいことは気にするな。最後は俺だな。」

名前 ジン 種族 人間 性別 男

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 「世界を結ぶ者達」

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 英雄 8人の女に愛される男 奴隸の解放者 精霊術師

『英雄』が増えている。後前からあつた称号が変化している。まあ主ではないしな。

さつきまで騒いでいた二人は絶句している。そんな二人は放つておいて次は依頼だな

依頼を見に行くとまた、顔見知りがいた。クレアさんだ。

「クレアさん久し振りってほどでもないか」

「そうですね」

「家は決まりましたか?」

「それがなかなか決まらなくて、今はギルドの空き部屋を使わせてもらっているんです。」

この時、しばらく留守にする屋敷と暇になるであろう使用人達を思いました。それならと

「クレアさんいい物件がありますよ

俺は、屋敷を使うように勧めた。最初は、遠慮していたが、屋敷の主要人物が全員出るので信頼のおける人に任せたいことと使用人が暇になることを話してやつとクレアさんは頷いた

「それなら、『厄介を申すつもり』しますね。ありがとうございます。ジンせん」

後ろの女達からは冷たい視線が送られてくるが気にしない。

細かいことを話したあとクレアさんと別れる。

今度こそ依頼を受けに行くぞ。

32話 新しい依頼と第一皇女

「それじゃあ依頼を受けるわけだが」

「だが？」

何人かに？マークが浮かんでいる。

「この人数で一つの依頼を受けても時間がもったいなかつからいくつかのチームに分けようと思つ」

テツと男二人以外の仲間の顔に影がさしたので慌てて付け足す

「分けるといつてもそのチームが中心になつて受けた依頼をやるつてだけで、基本皆一緒に行動するからあんまり気にするなよ」

テツ以外皆安堵していた。まあテツは、小太刀だから俺と一緒に行くなつて決まつているからな。

結局皆と相談した（各自の思惑も混じつて）結果こうなつた。

- Aチーム 僕とテツ
 - Bチーム ジークとカイル
 - Cチーム レティーシアとミリア
 - Dチーム リリスとソフィア
 - Eチーム イリヤとフェリスとティリエル
- というチーム分けになつた

受けた依頼は、

Aチーム ランクA 岩窟竜一頭の討伐 5万ギル 無期限 モル

ド伯爵領

Bチーム ランクC 牛鬼五体の討伐 1万ギル 一月以内 元王国領南部

Cチーム ランクD ゴブリンの群れの討伐 4000ギル 二週間以内 元王国領の西街道付近

Dチーム ランクD 生熱の種の採取 30個 5000ギル 半年以内 元王国領北部に生息

Eチーム ランクF 魔物五十五討伐 2000ギル 一月以内
ニビルの森

このほかにチームとして特別クエストとして元王国領内の魔物の討伐依頼を受けた。

この依頼は、元王国領を立て直すためにクイント皇国が出した依頼で制限がない代わりに報酬は少ない、一応受けておくという依頼だ。これのおかげで冒険者が魔物討伐に積極的になるらしい。

この依頼は、ギルドカードのチームの下に

A・000 B・000 C・000 D・000 E・000
F・000

と表示されていてチーム内で混同されているらしい。

「それじゃあ、今度は武具屋だな」

フェリスとミリアの魔法を使うための媒体を買いに行つた。二人ともソフィアやイリヤのしている指輪をジンがプレゼントした物だと知つていて

「わたしも指輪がいいです」「

ということになり一人に別々に媒体としての指輪をプレゼントした。フェリスの指輪は、黒い魔石の付いた指輪で魔力増幅に重点を置いた指輪だ。フェリスの指輪はシンプルなデザインだ。黒い魔石は黒真珠に似ている。

ミリアの指輪は、緑と黄色の魔石を付けたもので風と雷の魔法が使いやすくなる指輪だ。ミリアの指輪は、魔石が一つな分少し凝っているが派手ではない上品な指輪だ。

あとティリエルの武器だが、ティリエルは、ダガーを2本選んでいた。二重強度強化がかけられた物だ。

指輪が4500と5500で1万ギル、ダガーは一本2000ギルだった。

23600 - 14000 = 9600ギル

武器の次は魔具を取り扱う店に行くことにした。

以前の討伐依頼の時にリリスを失いそうになってしまったことがあった。森のランクに相応しくないランクAのノワールサイが現れたからだ。それらの不測の事態に対処するためにいくつか考えていたのだ。そのひとつが魔具に頼ることだった。リリスに話は聞いたがそれだけではわからない、俺が欲しい物があればいいのだが。

入ったのは、レティーシアがお忍びでよく使っている魔具屋だ。

魔具屋といつても魔具といつてもいろいろで、魔術を込めた装飾品、使い捨ての魔符（魔術を込めた符）などあらゆる物を扱っている。魔具以外にも魔物の一部や魔石などの素材などもある。

俺が探しているのかは装飾品だ、武具屋にもあつたが、武具屋のものは、ほとんどが戦闘用だった。

この世界の字が俺は読めないので、店主に話して探してもらつた」とにした。

目当ての物は、見つかった。

『絆の腕輪』といって登録した相手の居場所がわかり、自分の危機を伝えることができる。

チームがバラバラに動くときにつけたり、お金に余裕のある家庭が子供につけたりもする。

腕輪に少し細工をしてチームの証にすることもある。

これを、人数分買つ。細工はいつかしたいと思つ。

$$11 \times 500 = 5500\text{ギル}$$

$$9600 - 5500 = 4100\text{ギル}$$

店を出たあと、旅の準備をジーク達に任せ先に宿に戻る。準備のお金は、ジーク達が払うことになった。もうチームの一員だし腕輪のお礼も兼ねてらしい。お金もずいぶん少なくなつたのでありがたい。

皆を先に帰らせて俺は、城に向かう。馬車を借りるためだ。今の馬車では、六人ぐらいしか乗れないからだ、金もないから依頼主に借りることにしたのだ。

顔パスでお城に入る。

しかし、皇帝は今忙しいらしく待つことにした。

庭で暇をもて余していると、城の方から女が一人歩いてきた。驚いたことに、第一皇女とレティーシアの影武者だった人だ。

「どうしたんだ、アリシャちゃん」

「むつ、私の方が年上」

「いいじゃないか、こんなに可愛いんだから、えっとそっちは？」

「レイシアと申します。」

「名前交換してたんだ」

「は」、レティーシア様の希望でして。何度も自分の名前を反応しそうになつたから

笑顔でレティーシアの愚痴を言つている。苦労していたようだな。

「ハハ、レティーシアらしい、話は戻るけど、こんな感じでどうしたんだ？」

「あなたがいるから会いに来た。」

「俺？」

「興味がある。あなたのこと教えて」

「条件がある」

「なに？」

最初は馬車を頼もつかと思ったが、自分の話を馬車と回じにするのは気が引けた、だから

「君のことを教えて」

「え？」

「俺のこと教えてから君の事を教えて」

「わ、わかった」

その後、二人で会話を交わした。俺の世界のことアリシアの思い出などあらゆることを聞き話した。

「じゃあアリシアは、ハーフエルフのハーフなのか」

「いつも私は、エルフのクオーターの姿は、そのせいだと想つ」

自分の平らな胸と身長を指しながらアリシアは言った、そのアリシヤは今では、俺の膝の上で会話をしている。レイシアさんは、少し後ろで微笑んでいる。そんな楽しい時間に水を指すやつが来た。

「アリシア姫そんなどいで何をしてこりゃしやる」

高圧的な喋りかたで騎士風の男が近づいてきた。明らかにこちらを見下す表情で

「そのよつなじいの馬の骨ともわからない男と話しては、姫様が汚れますぞ」

「お前と話す方が穢れる」

「アリ・シャーこいつは誰だ？」

アリ・シャーは苦々しそうな表情で

「第六師団長で私の元許嫁」

師団長といつゝとは、ゲオルグよりは下だな。師団長は、所詮將軍の指揮下にある。

「おじ平尾、元ではない。父達が勝手に解消しただけだ。」

「こいつはアホなのか、許嫁は親が決めるものなんだから親が解消してもおかしくないだろ？」

「アリ・シャーなんで解消になつたんだ？」

「素行不良でこくつか罪も犯してゐる」

よくやんなやつに師団長を任せているな。ゲオルグに相談しようかな。

「そんなゴミみたいなやつに、可愛いアリ・シャーを任せせるわけにはいかないな」

一人の反応は、似ているが正反対だった。

アリシャは、無表情ながら頬を染めて恥ずかしがり。
「ハハハ、顔を真っ赤にして怒り狂っている。

「貴様俺を侮辱してただで帰ると想つなよ。」

「なんだ、土産でもくれるのか?」

「殺されたいらしさいな」

「やれるならやつてみろ」

「言つたな、貴様に決闘を申し込む」

「ジン止めた方がいい、」これはランクA。あなたの精靈術はすごいけど決闘には不向き

「ハハハ、何気にアリシャが物扱いしたことによ付かずに

「姫様は、よくわかつていてる。謝るなら今のうちに平定

「アリシャ大丈夫だよ。俺は剣術もやるからな、こんな三下すべに倒せる」

「ならば、受けののだな」

「ああ受けたやる、ありがたく思え、師団長」

33話 決闘 英雄VS師団長

「ただ決闘するのもつまらないな、そうだな賭けをしよう」「賭けだと？」

「そう賭けだ。俺の方からは、そうだな・・・俺が勝つたら今後一切アリシャに近づかないで貰おつか」

「ふん、いいだろ。その代わり俺が勝つたら、お前を奴隸にして売り払ってやる」

「こいつ奴隸と言ったか。皇国で禁止されていることを当たり前のようだ。適当な時に潰しておくか、その方がこの國のためになりそうだ。」

「これよりジン殿とラウル殿の決闘を始める。攻撃防御は、持った武器のみ魔術や精靈術などの使用は禁止とする。急所への攻撃も禁止、急所に当たた場合当たたほうの負けとします。それでは・・・
・始め」

合図をしてくれたのは、訓練場で訓練をしていた他の師団長だ。審判をお願いした。

「こいつラウルって名前なんだ。そういうばこいつの名前聞いてなかつたな、まあ興味もないしそうせすぐ忘れるいいか。
俺が使う武器は短い木刀、ラウルが使うのは長めの木剣だ。

驚きの速さでラウルが間合いを詰め、左から木剣を横に振るう。ジンはこれを木刀で受け止める。ラウルは、すぐに木剣を引きなんど

も突きを放つてくるがこれらをジンはすべて弾いてみせる。次にラウルは上段から木剣を振り下ろすが、これは後ろに飛び避ける。

「どうした、攻撃してこないのか、それとも手も足も出ないか」

「以外だつたよ、もう少し雑魚っぽいと思つてた。」

実際すべて防いでいるが、ラウルの攻撃は一連の流れになつており切り込む隙がない。今までこの世界でまともに打ち合つたことがあるのはラシードとレティーシアだが、少なくともレティーシアよりも強いだらう。

だから、まずラウルを一度蹴り飛ばして距離をとる。

「ぐつ、だがこれくらいで」

「ちよつと確認したいんだけど、いい？」

「なんだ命乞いか？」

「いや、ただあんたに本氣でやつていいか聞いつつと思つてな」

「貴様ふざけるなよ、これは決闘だぞ本氣でやれ」

「いいぜ、レイシアさんこそ木刀投げてくれ」

「ふえつ、・・・」、これですか？」

突然呼ばれて驚いたレイシアさんが近くの壁に立てかけてあつた通常の長さの木刀を持ち上げる

「そうですね。投げてください」

投げてもいい

「ありがとうございます」

「なんだ武器の長さの問題だとでもいうのか」

ラウルが嘲るような表情を浮かべる

「ああ違う違う」

投げ入れてもらった木刀を右手に、下からあつた木刀を左手に持つ

「俺は、二刀流だ。」

「なんだと、は、はつたりだ」

「なんだ評価は、下方修正だな。俺まだ左腕しか使っていないんだぜ」

「なつ」

「俺が刀神から習つた、神双流は左の小太刀で攻撃を防ぎ、右の大太刀で攻めるのが基本、見せてやるよ俺の本気」

本氣で相手に踏み込む。左の木刀で迎撃のための木剣を受け流し右の木刀を首に添える様にギリギリ止める。

一つの動作を同時にを行うことでたつた一度の攻撃で決着をつけた。一つの武器を持ったことで動きが遅くなるどころか、重心が安定し

て動きの速さも上がっていた。

「ま、まいった

「もうアリシャに近づくなよ。師団長殿

ラウルがその場に倒れてしりもちを付く。
ジンが、ラウルに背を向けアリシャたちの下に歩きだすと、後ろの
ラウルがブツブツ呟いて

「・・の・・ほの・・せ・・・焼き肉へ须くせえ——『フレイム・
バレット』『

無数の小型の火球がジンに向かって放たれる。ラウルが、逆上し魔術で攻撃してきたのだ。審判役の師団長が止めようとするが、間に合わない。それに、このコースはアリシャたちの巻き込まれるコースだ。

しかし、俺の近くにきた炎の玉は、すべて俺の手前でしぼむように消滅した。

「な、ぜ」

「精霊術で壁を作つただけだ」

風の精霊術で真空の壁を作つたのだ。炎では、これを『じぶる』とは出来ない。

「今の攻撃、アリシャたちにも当たるコースだつたな、少しあ仕置きが必要だな」

ラウルに精靈術の雨を降らせる。

火で髪の毛を炙り
水で息できなくし
風を圧縮してぶつけ
土で下から土の槍で突き
雷で感電させたりした。

服は焼け落ち、鎧は碎け、髪の毛は焦げ、体中を痛打される。見るも無残な姿になつていくラウルに、審判をした師団長だけではなくアリシャやレイシアまで同情の眼差しを向けていた。ラウルがボロボロになり気絶したのをみてお仕置きをやめる。同情の眼差しをラウルに向ける師団長に

「師団長ちょっとといいか」

「は、はい、な、なんで」「やれこましちつ

すつじい慌てようだな、そんなに怖かったかな？

「さつきの賭けの話、広めておいてくれるか。これがアリシャに今後近づかないよう」「たん

「△△のよになつたラウルを指しながらお願ひする。

「はい、わかりました。」

「頼んだよ、アリシャ庭に戻ろつか」

「わかつた」

庭に戻つて、もう一度アリシャを膝の上に乗せる。

「ジンって、結構怖い？」

「敵でせらうに男なら、どこまでも残酷になれるな。だけど女には基本優しくすることにしておる。」

「よかつた。それにしてもジンは強い」

「ありがとう」

「わたしもあなたに・・・」

「俺に?」

「な、なんでもない、そ、それよりジンは、お城には何をしこ?」

急な話題変換だなまあいいか、何しに来たかだつたな・・・

「ああ――――、すっかり忘れてた。馬車を借りに来たんだった」

「馬車? 何故?」

「近いに旅に出るんだよ、アッシュの頼みで

「兄上余計なことを」

突然アリシャの機嫌が悪くなつたような気がする。

「どうかした？」

「なんでもない」

しばらくアリシャがなにやら考ふ込んでいた。

「馬車だつたら私の頼みを聞いてくれたら用意する」

「頼みによるなあ」

「大した事じやない」の指輪をつけてほしい

アリシャの指についている物と同じ指輪を差し出してきた

「指輪？いいけどなんで？」

「あなたの、腕輪と同じような物、この指輪は特注品、相手と会話
が出来る。」

「つまり、たまに話がつてこと？」

「ククク

アリシャがすゞい勢いで頷く

「姫様その指輪は

「レイシア黙る」

「は、はい」

アリシャがレイシアを黙らせている。何かありそなうだが危険はないだろう。

それに会話をしたいと思つてくれることは少し嬉しい、だから受けとることにした。

アリシャの手で指輪をつけてもらつ

「対呪、や氣力、魔力の増強などいくつか効果がついている」

「そんな便利な物をいいのか？」

「いい、ただ」

「ただ？」

「その指輪は、私以外には外せない」

「えつ何故？」

後で試したが、俺の契約破棄の力でも外せなかつた。契約とは違うようだ。

「その内わかる。馬車はレイシアに頼む。馬車が来るまでお茶にする。私の部屋に来て」

アリシャに連續で喋られ言葉を返す暇もなく、部屋に連れられて行くことになつた。

アリシャの部屋には本がいっぱいあつた。本棚で左側の壁が埋まつ

ているし机にも本の塔ができる。」

「本好きなのか?」

「好き、人は面倒だから」

「たしかに、皇女となると面倒だらうな」

とてもドロドロした人間関係になりそつだ。

「でもあなたは、どこにも所属していないし対等に話しても問題ないからとても落ち着く」

アッシュも同じことを言っていたな。

部屋に入つたからだろうか、やわらかい表情を見せてくれた。普段無表情な分よけいに可憐い。

その後も一人でお茶をしながら他愛もないことを話してすこした。日が傾いてきたので帰らつとすると

「使いを出す。問題ない。それより一緒にご飯を食べべる」

「わ、わかつた」

またアリシャの勢いにのまれてしまい、そのまま食事を共にすることになった。

暗くなり、やすがに帰らないと、と説得すると。

「私と一緒にイヤ?」

「イヤじやなこナビ、こりこり船で」

「だつて、ジン旅に出るか?」

「うふえはそうだな。わしごりとなら今田べりこせアリシャに付
るものにしておるが。

翌日アリシャと朝食を食べ終わった後、城を出ること

「あの馬車は?」

レイシアさんに尋ねると

「もう昨日には屋敷に帰っていますよ」

不思議そうな顔のレイシアちゃん。

騙された。

まあいいかこうこう可愛こわいは許せる。

屋敷に帰ると指輪について聞かれたが、とある人からプレゼントさ
れたとだけ説明した。

皆気になるようだが、俺が答えないで諦めた。ミコアは、なにか
感づいてくるようだつたが追求はなかった

34話 岩窟竜

異世界44日目

「魔の火よ、眼前の敵を焼き尽くせ、『ファイア・ボール』」

指輪で増強された魔力でフェリスが、直径1メートルぐらいの火球がハイウルフに命中する。

「できた。できたよ、お兄ちゃん。褒めて褒めて」

「すういぜ、フェリス」

誉めながらフェリスの頭を撫でてやる。

ジン達は、今別れて行動している。Bチーム、Cチーム、Dチームでゴブリンの群れ討伐に出ている。

そして余った、Aチーム、Eチームは実戦経験のないフェリスの魔術の練習することになったのだ。

今は、Fランクの魔物しかでない森にいる。

ミリアは、元レティーシアの付きのメイドだったからか、今のギルドランクの依頼ぐらいなら問題ないそうだ。

ここには、俺と小太刀のテツ、ダガーの練習をしているティリエルと教師役のイリヤと生徒役のフェリスがいる。

俺も将来的には魔術も使つつもりだから、イリヤの説明をフェリスと一緒にしつかり聞く。

「体内にある魔力の源は、基本無色と言われていますが、これを魔力に変換する時に、色が付く人がいます。」

「色つてなんですか？」

「！」の場合の色は、視覚的な意味での色ではなくて、魔力の質のことで赤だと火の、緑だと風の魔術に使えます。」

「へえ」

「変換するときに色が付く人は、その色の魔術に関しては、詠唱短縮、威力増加などいくつかの利点がありますが、その代わり他の魔術を扱いづらいです。」

イリヤなんだか楽しそうだな。教えるのがすきなのだろうか？

「ちなみに、私は薄い白で治癒術が得意です。そして赤色を持つ人を炎術師、緑色を持つ人を風術師、私の薄い白は治癒術師等と呼ぶこともあります。ミリアさんは、変わっていて緑と黄色の一ひとつを持っています。」

「それで、ミリアさんの指輪は、一つ魔石が付いていたんですね。」

「そうですよ。フェリスさんは無色のようでしたので增幅の指輪にしましたね。」

「じゃあ、私は得意な魔術ないんだ。」

フェリスが落ち込んでしまった。イリヤが慌ててフォローする。

「だ、大丈夫ですよ。得意なものはなくとも不得意なものもありませんから。」

「器用貧乏?」

「はうー!?」

見事なカウンターが入った。

「フェリスあまりイリヤで遊ぶな

「えへへ~ごめんなさい、イリヤさん天然で面白いんだもん

「それは認めよう」

「(主人様)」

イリヤが、可愛いらしい非難の目を向けてくる
うん、可愛いだけだな

こんな感じで緩くフェリスの練習または修行を続けた。

ゴブリンの群れは問題なく討伐できたらしいです。

次の依頼

モルド伯爵領の、依頼主であるモルド伯爵に岩窟竜討伐の補足事項について聞きたのだが

「貴様らは、岩窟竜をさつわと倒せばいいのだ」

「こればかりだ。」

「ですから、討伐で5万その場から移動をせんだけでも3万と依頼にあるのでその確認をですね」

「補足事項とは、街道から移動させれば必ずしも討伐する必要はない、といつものだつた。」

「知らん知らん、わざとあの邪魔者を討伐してこい」

「では、この依頼は、破棄されるのですね?」

「そんなこといつておらん、ええい、貴様らは黙つて四つこときナ

「話になりませんね。私たちはあなたの部下ではあります。そういうことでしたら、ギルドのほうに再申請してください。」

「わからひが、席を立つと

「ま、待て、わかった。その依頼の通りでいい」

「わかりました。」

胸くそ悪い屋敷を後にする。

今は、Bチームが牛鬼討伐に出でているので、周りは女ばかりだ。

「ジ主人様、何故あのよつな者に会いに行かれたのですか？」

「岩窟竜を説得ができるなら戦う必要がないだろ」

「り、竜を説得ですか」

「ティリエルがいるから可能性はある。それにアッシュの情報で、あいつは奴隸を持っている可能性があるんだ。」

「でしたら、その、何故捕まえないのですか？」

「目撃情報はあるんだが、奴隸そのものが見つからないんだ。今も精霊術を使って探していたんだが見つからなかつた。」

「ガセつてこと？」

「まだわからん、もう一度屋敷に入るためには、依頼を終わらせないとな」

ティリエルだけを連れて、岩窟竜に会いに行くことに。

岩窟竜は、モルド伯爵領が使う大きな街道を塞いでいた。確かに邪魔だな。

討伐されないのは、基本無害だからか？

岩窟竜から攻撃はしてこないそつだし。村の人間は、山賊がいなくなつたと喜んでいました。

岩窟竜は、巨大な岩のよつた竜だった。その体は、ノワールサイヨリさらに硬く柔軟らしい。竜ならブレスも扱うだろうから本来ならSランクの依頼だ。それがAランクなのは岩窟竜が本当におとなしいのだから。

岩窟竜の頭部と思われる場所に移動する。（わかりづらー）

「ティリエル話せそ、？」

「はい、といいますか、たぶん」

ティリエルが、何故か反応に困っている。

「ワシと話がしたいのか？」

「うむ、びっくりした。喋れたのか」

それでティリエルが困っていたのか。

「ワシは、これでも長く生きてある。人の言葉くらいは扱える。それにしても珍しい組み合わせじゃな、銀龍の嬢ちゃんと、うーん・・・・人間か？」

「一応人間だ。話ができるなら、手取り早い。単刀直入に聞く、じいさんはなんでここにいるんだ？」

「お、お兄様。古龍と言つてもいい方に、じいさんはちよつと」

「じいさんかそれも悪くないが、ワシの名前はストルと言つ。」

「そ、うか、ならストルさんと呼ぼう。俺はジン、救世主をやつてい
る」

「わ、私は、ティリエルと申します。」

「救世主?まあよからう、よろしくの。さてワシがここにいる理由
じゃつたな。」

あつたり流されてしまった。まったく動じない。

「ワシは、ある村で縁あつて小人族を守つておつたのだが、一ヶ
月ほど前に村の小人族が三人ほど人間に連れ去られての。特殊な方
法で追いかけ、あの屋敷にいることがわかつたのだが、攻撃して
事を大きくしては、小人が殺されかねん。それで、ここに陣取つて
ジンくんみたいなのか、屋敷の誰かが交渉に来るのを待つておつた
のだ」

「小人族・・・そういうことかあのゲス野郎!、連れ去られた小人
族が心配だ。ストルさんこちらの要件を話させてもらひ

小人と聞いて、何故見つからなかつたのか、わかつた。

要件を話し終え、ストルさんは、しばらく黙考して

「ジンくんの申し出を受けよう。これは、友好の証だ受け取つてくれ。」

ストルさんがくれたのは、きれいな丸い石だった。蒼くて透明で宝

石のようだった。それを三つくれた。それがなにか知っているのだ
といテイリエルが

「よろしくですか？ これほどの物を三つも」

「それだけの価値が君たちにはあるとワシは判断した。」

「ティリエルこれは、なんなんだ？」

「『竜宝珠』、地に属する竜にだけつくることのできる宝珠でつくるのに長い時間を必要とします。地の竜にとって家宝のようなもので、人にとっても市值で最低でも50万ギルはします。それにこの竜宝珠はとても純度が高いです。」

ティリエルが、興奮している。

「ストルさん、一つナッシーえていいか？」

「その不思議な小太刀のこと構わんよ」

気付いていたが、小太刀の姿なのによくわかるな。アルベルトどっちが強いんだろう？

それにも、ありがたい

テツを抜き宝珠と重ねる、今までの吸収で一番強い光を放った。

「主、これすぐい。力が溢れます。」

テツは、突然人型になつた。顔を見ると頬を上氣させている。瞳が蒼っぽく変化している。落ち着くのを待つて

「テツ、小太刀になつてみてくれるか」

テツに小太刀になつてもらい持つてみると、その存在感がまるで違つた。見た目は小太刀なのに大剣以上の存在感だ。斬らなくともその鋭さが格段にあがつているのがわかつた。刀身にあつた白い龍の紋様が変化して、青い龍と白い龍が絡み合つた紋様になつていて。

「【主私を両手で持つてみてください。】」

「いづか」

テツが光だした、光が収まつたとき一振りの小太刀が握られていた。左の小太刀に白の龍が、右の小太刀に青の龍の紋様が浮かんでいる。

「【隠し機能その二です。】」

「はは、すういな」

「【長さもその内変えられるかも知れないです。ただ力は半々になつてしまつます。】」

「それでもすういよ。やっぱりお前は最高だテツ。」

「【ありがとうございます。・・・そして私はもう餓えた『鉄餓刀』ではありません。主のおかげで『黒龍刀・鉄』へと成長しました。これで私は、主のための主だけの刀になれました。】」

「俺だけの

嬉しさを噛み締める。

一通り感動したあと。

「ストルさん一度ここを離れてくれないか、そうしたら屋敷にすんなり入れるんだ。」

「わかった。ジンくんティリエルちゃんそれにテツちゃん後は頼んだよ」

「任せてくれ

「はい！」

35話 小人救出

異世界45日目

「依頼通り岩窟竜を街道から退かした。討伐ではないので3万ギルもらおうか。」

今回は、俺とテツの一人だけで屋敷に向いた。武器の携帯は認められていないが、テツは当たり前のようによつて同伴している。少々危ないかもしれないから他の仲間は置いてきた。

「知らんな、証拠を見せてみろ。岩窟竜のお主達が退けた証拠を」

「実際に、岩窟竜は移動している。」

「そんなもの証拠にはならんだろう。ククク、素直に討伐しておれば証拠になつたであろうにな、ハハハハハ」

ムカつくのでさつと本題に入る。

「正直報酬の件は、別にどうでもいい。」

「なんだもう諦めたのか、ククク」

笑いが止まらないようだな。その耳ざわりな笑いを止めてやれりつ。

「一階東側の倉庫のような部屋の小さな三つの金庫の中身」

ピクッ

「・・・何故、それを」

「企業秘密だ」

モルド伯爵の護衛一人が武器を構え、伯爵は側の呼び鈴で外の私兵を呼び寄せる。

扉から多数の私兵が入ってきて、ジンとテツを囮む。十六人か、その兵に向かつて聞いてみる。

「お前達に聞く、この屋敷の奴隸については、知っているのか？」

「だったらどうするんだ、お前はここで死ぬんだから関係ねえだろ

「そつちのチビは、俺たちで犯してや・・・る」

ドサ

テツに向かつて気持ち悪い視線を向けていた男の首より上がセリフの途中で後ろに落ちた。無音の『風刃』で頭を切り落したのだ。

「大体わかった。お前は死んでおけ、テツ」

「はい」

テツが小太刀の姿になると同時に

「『炎蛇・四首』」

炎の蛇を四匹だし私兵にけしかける。

「人が刀に」

「なんだ、精霊術なのか」

動搖している兵を次々に喰らう。七人ほど喰つたところで

「『ウォーター・ウォール』」

水の壁で炎蛇を相殺される。さすがに山賊のようにはいかないか、と考えながら炎蛇に気を取られていた後ろの一人の胸を斬る。二人とも鉄でできた鎧を着ていたが、今のテツに鉄の鎧など何の障害にもならない。バターを切るよりも楽だ。

これで十人、あと六人。一先ずそのまま後ろに下がり距離を取る。

「野郎よくもやつてくれたな。」

三人が同時に攻撃してきた。狭い空間で三人が同時に攻撃してこちらの動きが制限されるが、それは相手もおなじで動きが読み易い。

「テツ、二刀に」

テツを二刀に分け、回避が出来ないからすべての攻撃を弾く。

「増えただと」

「なんだこいつあたらねえ」

「全部弾きやがった」

防いだ時間で精靈を操り地面を揺らす。

「なつ」

「くつ」

体制が崩れたところで二人を切り殺す。一人になつた敵を蹴り倒し喉を踏み潰す。

残り三人の内、すれ違ひざまに一人切る。最後の一人も少し打ち合ひの後、つばぜり合いの最中に炎蛇で焼いた。

残つたモルド伯爵に

「一緒に来てもうう」

顔面蒼白の伯爵の首を掴んで、監禁されているだらつ場所に伯爵を引きずつて向かう。

途中出てきた兵は、『風刃』ですべて音もなく殺した。金庫を見つけるが鍵がかかっている。

「外せ」

「い、ここにはない

ベキッ

「ギャ——」

左腕を折る。

「嘘をつくなわざわざ別の場所に置く理由がない。さつさと鍵を外

セ

「わかった、言ひとおりにする。」

入り口付近にあつた机から鍵を取り出して鍵を外す。

「これでいいのか？」

「ああ、『苦勞』」

刀を振るい両足の腱を切る。

「ギッ・ア・・・・・・な、なぜ？」

「殺しはせん、ただ逃げられても困るのでな『流雷』」

そう言つて意識を刈り取る。

金庫の中は狭く真っ暗で、身動きも取れない。小人族は、そこに押し込まれていた。それはもう監禁ではなく拷問の域だ。

三人の内一人は、すでに事切れていた。小人族は、初めて見るから年齢がわかりづらいが、見た目は普通の幼い子供だとても痛ましい。他の子も小さいからか性的な虐待はないが所々怪我をしている。金庫に押し込められていて衰弱もしている。いそいで運ばなければ命にかかる。

まず、首輪を外し窓から光の精靈術で信号弾を打ち上げる。すると、すぐにティリエルが、空から降りてきた。

「急いで運ぼう」

近くの村の宿に運びベットに寝かせイリヤに治癒術をかけてもらつ。小人族を皆に預けて岩窟竜を呼びに行く。

「ストルさん一人は、助けることはできた。だけど一人はすでに…すまない」

「…そうか、いや君のせいではない。ワシもまたなにもできなかつた。」

「他の二人もかなりやばい小人族の村つて南の奥だよな？」

「そうだ」

人間と亜人は中央と南部で住み分けている。

数年前、人間と亜人対魔人の戦争があつたそうだ。戦争は人間側が勝ち魔人は北に追いやりられた。勝った人間と亜人は、最初はうまくいっていたが、大昔で他種族に対して無知なこともあります。それ違い争いが起き長い年月をかけて人間は中央に亜人は南に住むようになつていった。亜人達は、さらに細かく分かれていつた。人間の国によつては、亜人が多数いる国もあるが、それは中央より南に近い国々だ。

そして小人族の村は、そのな中でもかなり南の奥にある。おそらく国いくつかをまたぐことになるだろう。

「小人族の二人は、今帰ることに耐えられないだろう、だから一度俺の知つているところで療養させたいんだが」

「それは、ありがたいが、そこまで迷惑をかけるわけには」

「別に迷惑じゃないさ、それにストルさんは、俺に竜宝珠をくれただろ。それにあの提案も受けてくれたし、恩を返したい」

「ありがとう、それでどこで療養させるのだ?」

「元グーロム王国のお城だ、ここから一番近くで安全だ。ストルさんはどうする?」

「生き残った一人の顔を見たら一度村に戻ろう」

「わかった。落ち着いたら、俺の屋敷に移すつもりだから皇都のほうに来てくれ、皇国には話しておぐ」

「それでかまわない、本当にありがとうジンくん」

「それでだな、その、小人族の遺体はどうする、屋敷には置けなかつたから宿の近くにもってきているが、俺のほうで葬ろうか、それとも連れて帰るか?」

「連れて帰らせてもらえるか、あれは親がいてな親元に帰してやりたい」

「わかった。」

異世界47日目

遺体をストルに渡し、小人族を城に運び、モルド伯爵の捕縛を命じる等、面倒なことがすべてが終わると。俺の気分は沈み込んでしまった。今はベットで不貞寝している。

氣付くと周りに女達が集まっていた。

ティリエルが

「どうしたのですか、お兄様？」

「ひとり助けられなかつた。」

テツが

「それでも主は、二人を助けました。主だから出来たことです。」

「ふたりともボロボロだ。」

イリヤが

「ならば私が治します。」

「後遺症が残るかもしねれない」

ソフィアが

「それでも命は助かりました。」

「心には傷が残る」

ミリアが

「ご主人様が癒せばいいのです。私たちも手伝います。」

「死んだ子には親がいた。」

レティーシアが

「今度こそ、助けないといけないな

「でも他にも、まだ奴隸はたくさんいる。他国にもたくさんいる」

フェリスが

「お兄ちゃんなら、きっと奴隸をなくせるよ。お兄ちゃんにしかできないと思つんだ。」

「……うだな、俺がやらないとな。そのためにもっと強く

リリスが

「私たちも、強くなる、ジンを支えて、一緒に守るよ」

「ありがとう。これからは元王国領の大掃除だ。手伝ってくれ

皆が

「「「はい」」」

36話 依頼の報酬

異世界58日目

「帰ってきた——」

リリスが叫んでいる。

ジンたちは、依頼を終わらせ久しぶりに皇都に戻つてきていた。まずは、ギルドに報酬を貰いに行くことにした。

受けた依頼は、

- | | | | | |
|-----------|------------|--------|--------|----------------|
| Aチーム ランクA | 岩窟竜一頭の討伐 | 5万ギル | 無期限 | モルド伯爵領 |
| Bチーム ランクC | 牛鬼五体の討伐 | 1万ギル | 一月以内 | 元王国領南部 |
| Cチーム ランクD | ゴブリンの群れの討伐 | 4000ギル | 一週間以内 | 元王国領の西街道付近 |
| Dチーム ランクD | 生熱の種の採取 | 30個 | 5000ギル | 半年以内 元王国領北部に生息 |
| Eチーム ランクF | 魔物五十四討伐 | 2000ギル | 一月以内 | ニビルの森 |

ちなみに、期間については、期間がすぎるとギルドカードにカウントされなくなるので誤魔化しは出来ない。一応ギルドの支部から結果報告をする決まりだが、これは達成できなかつたときにすぐに依頼を再張り出しするためだ。

岩窟竜の討伐依頼は、依頼人を征伐したので報酬は受け損ねた。

なので

ランクC 牛鬼五体の討伐 1万ギル

ランクD ゴブリンの群れの討伐 4000ギル

ランクD 生熱の種の採取 5000ギル

ランクF 魔物五十四討伐 2000ギル

合計21000ギルになった。

特別依頼は

A・004

B・033

C・112

D・232

E・211

という結果だった

特別依頼の報酬は

Aランク=半金貨3枚

Bランク=銀貨1枚

Cランク=半銀貨3枚

Dランク=半銀貨1枚

Eランク=銅貨3枚

Fランク=銅貨1枚

なので

半金貨	12枚	12000ギル
銀貨	33枚	3300ギル
半銀貨	568枚	5680ギル
銅貨	759枚	759ギル

合計 21739ギル

最後に素材の売り払いでの

オオクロコダイル Aランク
オオクロコダイルの牙 200ギル 40個 8000ギル
オオクロコダイルの肝 600ギル 4個 2400ギル

ブルー・コブラ Bランク

ブルー・コブラの鱗 60ギル 120枚 7200ギル
ブルー・コブラの毒液 140ギル 瓶6個分 840ギル

合計18440ギル

総計 4100 + 21000 + 21739 + 18440 = 65279

持ち金 65279ギル

やつぱりAランクの依頼が潰れたのは痛いな。十一人の仕事とは、それほどの額ではない。

次は、ギルドカードの更新だな。
まずフェリスだがクレアさんのおかげでギルドランクが一つあがつた。フェリス自身順調に成長している。

名前	フェリス	種族	人間	性別	女
ギルドランク	F				
能力ランク	総合D	気力E	魔力B		
チーム	『世界を結ぶ者達』				

称号 ジンの料理人 ジンの義妹

他の仲間も

名前 ミリア 種族 人間 性別 女

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力D 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド

名前 ジーク 種族 人間 性別 男

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 一級騎士

名前 カイル 種族 人間 性別 男

ギルドランク C

能力ランク 総合B 気力B 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 二級騎士

名前 レティーシア 女 17歳 人間

ギルドランク D

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの女 皇女

名前 ソフィア 種族 人間 性別 女

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力C 魔力B

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 水の巫女 精霊術師 水災の魔女 ジンの女

名前 イリヤ 種族 エルフ 性別 女
ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力A

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド 治癒術師

名前 リリス 種族 人間 性別 女
ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力B

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの護衛 熟練者

名前 ティリエル 種族 龍族 性別 女
ギルドランク E

能力ランク 総合B 気力B 魔力B

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの義妹 幼い銀龍

皆順調に力を付けている。

俺自身は

名前 ジン 種族 人間 性別 男

ギルドランク B

能力ランク 総合A 気力S 魔力B

チーム『世界を結ぶ者達』

称号	聖痕使い	精靈王の友人	救世主	英雄	8人の女に愛される男
奴隸の解放者	精靈術師				

Aランクの魔物をはじめ多数の魔物を狩り力をつけた。今的能力ランクは、ラシード将軍とほぼ同じになつていて。

「皆順調に力をつけているな、このままがんばりつ」

「「「はい」」」

いい返事が返つてきた。実際皆、これから自分をどうやって鍛えるかどのスタイルを目指すか、この旅で大体の未来像が出来たようだつた。

「皆お疲れ、今日は屋敷でゆっくり休もう」

「「「はい」」」

こっちの方がいい返事な気がする

屋敷に戻ると出迎えがあつた。屋敷の使用人と小人の少女二人はわかるのだが、何故か以前ラウルの後始末をお願いした、師団長も来ていた。

まずは、小人の少女の二人が

「助けていただいてありがとうございます。わたし、キリといいま

す。こつちは妹のユリです」

「ありがとうございます。」

可愛らしいお辞儀をしてきた。一人とも15歳らしいが見た目は10歳くらいに見える。二人とも健康そのものだ。

「よかつた、元気よさそつだね。不自由はない?」

「大丈夫です。クレアさんもメイドさん達もよくしてくれます。」

「それならよかつた。」

「あの、私たちは村に戻れるのでしょうか?」

「こちら、失礼でしょ」

不安そうなヨリをキリガ叱る。

「すぐには、無理だけど必ず村に戻れるようにする。ただ一つだけお願いがあるんだ。」

「なんでしょう?」

「村に戻つたらすべての人間が君達を傷つけたようなやつらじゃないことを村に伝えて欲しいんだ。お願いできるかな?」

「わかつた伝える。それに、ここの人たちは、優しかつたし。」

「ヨリも少しそ、言葉使いに気をつけなさい」

「でも、この人怒つてないし」

「それでもよ」

「別にこことよ。キツモトさんなかたくなりなぐてもこことよ」

「アハニリカニモナ」

「まあ、無理強こはしないにばどね。じまくへせの壁敷でゆうくつするといこよ」

「「ヌー」」

次は師団長だつた。そういうればお前しらないなビリシヨウ。

後ろのミコトアガヒツモツ

「第八師団長のタツド師団長です」

「タツド師団長殿今日は、ビリヒツた用件で」

「アッシュ皇子からこれがあなたに渡すよ」と

差し出しあれた袋には、金貨が数枚入つていた。

「これは?」

「モルド伯爵征伐の報酬と岩窟竜の退去の報酬 金貨十三枚です。お納めください。」

「じゃなにいいのか? 退去は3万だから征伐が10万とこりとこりなるが」

「お気になさりず、モルド伯爵の資産没収でかなり稼いだよつですか」

「俺が働いただけこの国が潤うところとか」

「ハハハ、そういうことになりますね。それでは私はこれにて失礼します。ああ、私のことは、タツドで構いませんよ。皇國にとつて、あなたは英雄なのですから」

「わかつたよ。タツド」

師団長は、城の方に帰つていった。

「よつし監、数日休憩したら、また旅に出るからな準備しておけよ

「はい」

これからジン達『世界を結ぶ者達』は数ヶ月間、他国が集まるまで奴隸の解放に力を注ぐことになる。

65279+130000=195279ギル

持ち金 195279ギル

設定資料（36話まで）

異世界58日目の段階で

【主人公の成果】

チーム『世界を結ぶ者達』を結成。人数10人+テツ

ハーレム八人

ソフィア・イリヤ・リリス・テツ・ティリエル・ミリア・レティ
シア・フェリス

グーロム王国を潰して、クイント皇国に大きくなる。
報酬として屋敷を皇帝から貰う。

お金 195279ギル

【人物設定】

主人公 ジン

前の世界ではやりたいことがなかつた。そのため、異世界に来るこ
とにあまり迷いはなかつた。そして異世界に来ることで生き甲斐を
見つける。力は精霊界で精霊王に修行してもらつた。（あと刀神に
も）

能力

全精霊王との契約・すべての精霊を操れる

火・風・水・土・雷・光・闇がある

聖痕の発動 ・属性ごとにある 光と闇はできない

火＝炎王 風＝嵐帝 水＝水龍 土＝岩皇 雷＝雷神

神双流 刀神直伝の一刀流の剣術

契約破棄 大抵の契約は強引に破棄できる

ハーレムヒロイン

ソフィア 精靈の巫女

精靈に使えていたため聖痕を持つ主人公を信用した。村を救われたことと救われた時の精靈術を見て主人公に惚れる。精靈使いでもあり水の精靈魔法が得意。落ち着いた少女で髪の毛は水色。

装備 水の指輪

イリヤ エルフの治癒術師

高級奴隸として売られそうなところをリリスと一緒にジンに助けられる。

ジンのご主人様と慕う。マッサージが得意。エルフならではの美貌を持つ 金髪で天然。

装備 ヒーリング・リング

リリス 生糀の冒険者 スピード型

戦闘奴隸として売られそうなところをイリヤと一緒にジンに助けられる。

魔物との戦闘で危ないとこをジンに助けられてジンに惚れる。

活発な少女 炎髪

装備 エストック（両手突き剣）

ティリエル 銀龍

牛鬼に襲われているところをジンに助けられる。ジンをお兄様と慕

つている。

銀龍としては、幼く将来が楽しみ 年齢より幼く見える。銀髪

装備 ダガーを2本

フェリス 亡国の姫

一度すべてを失ったが、ジンの元で新しい人生を歩む。

ジンとおにいちゃんと言って慕っている。髪は緑色。

装備 ブースト・リング

ミリア できるメイドさん

元皇族付きのメイドだったが、ジンに恩返しをするためにジンのメイドになる。

呼び方は、ご主人様。

装備 風雷の指輪

レティーシア 第一皇女

ジンの強さを気に入る。姫というより騎士に近く付いた通り名が『姫騎士』

長い金髪で少しキリッとした、美人。ジンをジン殿と呼ぶ。

装備 ロングソード

テツ 小太刀の少女

『鉄餓刀』から『黒龍刀・鉄』になる。持ち主の邪魔になるため気力、魔力を持たない。

最近二刀に分かれることができるようにになった。黒髪でジンの前以外は基本無表情。ジンに貰った銀の首飾りは宝物。ジンのことを主と呼ぶ。

クレア ギルド職員

ジンに興味を持っている。ジンに誘われて屋敷に住むようになる。

短い黒髪と眼鏡で秘書っぽい女性。

アリシャ 第一皇女 エルフのクオーター

小さいことを気にしている。ジンに、通話の出来る指輪を渡すなど積極的。レティーシアと違いしっかり皇女をやっている。

キリとユリ 小人

小人の双子。キリが姉でユリが妹。瓜二つだが見分けは付け易い。金庫に閉じ込められているところをジンに助けられる。キリは気が強く。ユリは気が弱い。一人とも奴隸時代の後遺症で軽い暗所恐怖症と閉所恐怖症。

小雪 精霊

ジンの子供?。ジンをパパと呼んで慕っている。

その他キャラ

クルト

クルト・クイント クイント皇国の皇帝。レイシアの父

アッシュ

クイントの王子 今は元グーロム王国領の管理を任せている。

アイリス

アイリス・クイント クイントの皇妃

ゲオルグ

クイント皇国 の 将軍

ジーク

騎士でジンに仕えることを選ぶ

カイル

ジークの友人で同じく騎士ジンに仕える

アルベルト

銀竜。ティリエルの父親 戦つて友になる。S S クラスの力を持つ。

ラシード将軍

グーロム王国の將軍だった。ジンの誘いに乗る。今はクイント皇国の將軍をやつている。Aランクの実力者。聖痕なしのジンと引き分けている。

ラウル

クイント皇国 の 第六師団長。ジンにボコボコにされる。

タツド

クイント皇国 の 第八師団長。

ガルダ

元ギルドマスター、今はギルド支部長

ミーシャ

皇国 の メイド、変な方向に天然

レオン

皇國の騎士

レクト

ミリアの弟 元戦闘奴隸

オルム

村長兼ソフィアの保護者

コートル将軍

グーロム王国の将軍。死亡

【ギルドカード】

名前 ジン 男 種族 人間 性別 男

ギルドランク B

能力ランク 総合A 気力S 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 英雄
8人の女に愛される男 奴隸の解放者 精霊術師

名前 ミリア 種族 人間 性別 女

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力D 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド

名前 レティーシア 種族 人間 性別 女

ギルドランク D

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの女 皇女

名前 ソフィア 種族 人間 性別 女

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力C 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 水の巫女 精霊術師 水災の魔女 ジンの女

名前 イリヤ 種族 エルフ 性別 女

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力A

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド 治癒術師

名前 リリス 種族 人間 性別 女

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの護衛 熟練者

名前 ティリエル 種族 龍族 性別 女

ギルドランク E

能力ランク 総合B 気力B 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの義妹 幼い銀龍

名前 フェリス 種族 人間 性別 女
ギルドランク F
能力ランク 総合D 気力E 魔力B
チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 ジンの料理人 ジンの義妹

名前 ジーク 種族 人間 性別 男
ギルドランク B
能力ランク 総合B 気力A 魔力B
チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 一級騎士

名前 カイル 種族 人間 性別 男
ギルドランク C
能力ランク 総合B 気力B 魔力B
チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 二級騎士

名前 クレア 種族 人間 性別 女
ギルドランク C
能力ランク 総合C 気力B 魔力C
チーム なし
称号 ギルド職員

【世界観】

数千年前、人間と亜人対魔人の戦争があつた。戦争は人間側が勝ち魔人は北に追いやられた。勝った人間と亜人は、最初はうまくいつていたが、大昔で他種族に対して無知なこともあります、すれ違いやいざこざが起き長い年月をかけて人間は中央に亜人は南に住むようになつていつた。亜人はさらに細かく分かれていき国や集落ができた。人間の国によつては、亜人が多数いる国もあるが、それは中央より南に近い国々だ。

通貨は

金貨一枚＝10000ギル
半金貨一枚＝1000ギル
銀貨一枚＝100ギル
半銀貨一枚＝10ギル
銅貨一枚＝1ギル

1ギル＝約10円くらい

【登場した力】

鬪氣

氣力によつて変動する。身体能力の強化。武器の強化。

魔術

魔力によつて変動する。あらゆる現象を引き起しせる。

属性 風

『トルネード』 無数の風の刃で切り裂く

属性 火

『ファイア・ボール』 火球を飛ばす

『フレイム・バレット』 無数の小さな火球を飛ばす

精靈術

気力、魔力は必要ないが、習得が難しく、才能に左右される。

火・水・風・土・雷・光・闇の七種類がある。

火の精靈術 『炎蛇』 火の蛇を作り出して攻撃、『炎竜砲』 ドラゴンのブレスをイメージた熱線。もつとも威力が高い、『炎爆』 爆音と衝撃で搅乱する

風の精靈術 『風刃』 锐いカママイタチを作り出す、『風見鳥』 偵察用の鳥型の精靈獣を作る、『削嵐』 無数の風の刃で敵を削る、『疾風』 風による補助による高速移動

水の精靈術 『水翼』 大量の水を使うための前準備、『陸津波』 陸で津波を起こして押し流す、『水撃』 圧縮した水をぶつける、『斬水』 高圧縮した水を細く使って相手を切る

土の精靈術 『土壁』 土の壁を作り出す、『岩壁』 岩の壁を作り出す、『土鉄岩金壁』 土壁、鉄壁、岩壁、金剛壁を作り出す。『落とし牢』 落とし穴

雷の精靈術 『落雷』 力ミナリを落とす、『流雷』 相手を氣絶させる、『タケミカヅチ』 槍状の力ミナリに回転を混ぜすべてを貫く。

【魔物】

ランクA

ノワールサイ

黒い鉱石を纏つたサイ型の魔物。突進力と防御力はSクラス。

オオクロゴダイル

ワニ型の上位の魔物。かなりの巨体で、傷つけることはできても止めをさすのが難しい。噛み付きは必殺。

ランクB

ブルー・コブラ

個体の戦闘能力より、その隠密能力が特徴。見つけることができれば、Dランクの冒険者でも倒せる

牛鬼

群れと連携が脅威。武器を扱える。個体はそれほど強くない。

Dランク

ゴブリン

圧倒的な数と繁殖力が特徴。個体は弱い。

Eランク

グリーングリズリー

熊型の魔物。緑色の毛を持つ。普通の熊より大型で凶暴。あまり熊と変わらない。

バインドスネーク

蛇型の魔物。獲物を縛つて絞め殺す。

Fランク

ラビットドン

ウサギ型

ウサギが大きくなり凶暴化した。

ハイウルフ

狼を少し強化したような魔物。

魔物以外

岩窟竜

Sクラスの力を持つ。ストルは、長く生きていて古龍に近い力を持っている。

銀龍

SSクラスの龍の上位種。

37話 会合の前

異世界200日目

「た、助けてくれ」

さつきまで、奴隸の売買をしていた男が、今日の前で命乞いをしている。

「金もやる、奴隸も解放するだから」

ザシユ

「うひ、あつ」

目の前の男は、首から血を流して事切れた。

「「主殿」」

ジークとカイルだ。一人は俺を「主殿」と呼ぶようになっていた。

「残りの奴隸商人は?」

「集まっていた奴隸商人の主要人物は、すべて殺しました。他の物は拘束しています。」

「『』苦労さん。」

「これで元王国領のゴミは、大体片付きましたね。これからどうす

るのですか？」「

「俺たちの働きで元王国領が早く片付いて、他国の代表が少しづつ集まっているらしい。だからここにいる奴隸を解放したら、一度回国に戻る。」

「了解しました。」

この二人もずいぶん力をつけたな、ここには護衛を入れたら100人近いゴミがいたのにそのうち半分を片付けてしまった。他の仲間も、ここ数ヶ月で力をつけた。魔物の大侵攻まであと160日しかない気合をいれていかないとな。

異世界205日目

皇都への帰り道、足にフェリスとテツを乗せて馬車に揺られているとレティーシアが

「ジン殿、前方に牛鬼の群れだ。馬車が襲われているどうする？」

「・・・助けよう」

特別クエストは、三週間ほど前に終わったので牛鬼を倒しても金にはならないが、見捨てるわけにもいかない。

件の襲われている馬車の護衛は手練のようだがたつたの6人だった。牛鬼の数が多く馬車を守るために精一杯のようで、効果的な攻撃ができないようだ。あのままでは、いずれ牛鬼側に流れが傾くだろう魔物のほうが体力もある。

「先に行くぞ」

体に闘気を纏つて飛び出す。すぐにスピードに定評のあるリリスが後ろに続く。牛鬼の数は、ざつと22体ぐらいだ。この世界にも少しは詳しく述べた、だからわかるがこの数は異常だ。その異常性は一先ず置いておいて牛鬼を倒すことに集中する。

まず馬車から離れている牛鬼に向かつて『風刃』を放ち四体始末する。残り18体

「テツ、二刀に」

テツを左右に持つて、群れに突っ込む。そのまま馬車まで突き抜ける。抜ける間に三体の腹を搔つ捌く。残り15体

「あ、あんたは？」

馬車から女の子が話しかけてきた。

「通りすがりの冒険者だ。馬車の中に戻れ、もうじき俺の仲間が来る。」

そう言いながら目の前の牛鬼の首を刎ねる。護衛の人間も救援に勢いづき一體ほど倒す。残り12体

俺の仲間も到着し数が同等になる。そうなると後は問題なく討伐できた。一対一で後れを取る者はここにはいなかつた。

安全を確認しているとさつきの女の子が

「ありがとう助かったわ。わたしは、シャール。あなたは？」

「俺はジン。冒険者だ。」

「んー、あなた達も皇都に行くのでしょ、一緒に行かないかしら。ところよつうちの護衛に怪我人が出たから、ご一緒にされてもらいたい、ところのが本音だけど」

開けっぴろげな子だな。ただ発言に作為を感じるな、断りづらい状況をつくられている気がする。まあなにか問題があるわけでもないし別にいいか。

「いいよ、同行しよう!」

「あらがと」

まあ同行と言つてもつかず離れずに皇都を田指し野原のところに少し世間話をした程度だったが。

異世界207日目

皇都にたどりついで、すぐにシャールとわかれた後、仲間ともわかれ一人で城に向かう。

城に着き皇帝に会つために回廊を進んでいるとアリシャヤが駆け寄つてきた。

「久しぶり、アリシャ」

アリシャヤは挨拶を無視して、なんとタックルしてきた。そのままジンの体に抱き付く。

「ホントに久しぶり」

「指輪で話していたじゃないか」

「偶にだつた」

「えっと、今から君の父親に会いに行くんだけど」

「わたしも一緒に行く」

「えつとね」

「行く」

「わかつた」

アリシャは、見た目に反して押しが強い。可愛いのでつい許してしまつ。こうこうのを甘え上手と言つのだろうか。

「クルト、邪魔するぞ」

「久しぶりだね、ジンくん。おや、アリシャも一緒にないかい」

「ああそこで一緒になつた。」

「いつの間に仲良くなつたんだい。アリシャは人見知りが激しいのだが」

「俺は、この世界で組織と繋がりがないから話しやすいやうしー」

「・・・あれ？君つてたくさん女いるよね？（ジンくん意外と鈍感なのかな？）」「

「うん？まあ、この世界ではいるな。でも前の世界では、一人身だつたんだぜ」

「（そのせいかな？）えっとね。アリシャはだねヘブ」

クルトが何か言おうとするのを、アリシャが手に持っていた本を投げつけて黙らせる。

「ジン、速く本題を話す」

「まあ、そうだな」

「聞かないほうがよそそうだな。」

「今度の他国の代表者との会合の方はどうなっている？」

「集まりは、順調だよ。ただどうやつて魔物の侵攻を信じさせるかが問題だよ。みんな頭固いから」

「それについてなんだが、大侵攻が始まる場所を、見てきたんだが、大きな真っ黒い半球ができていた。」

「『無得と魔物の大地』か」

魔物の大侵攻のある場所は、大陸の中心にある半径数十キロに及ぶクレーターがある場所だ。

「こ」では、作物は育たず、水もない。そして、魔物をいくら倒しても強くなれない不思議な場所。なので魔物以外の人間をはじめとする、すべて生き物はその場所を求めない。ゆえに、そこは誰の領土ではなく多数の魔物が生息する場所。そこが『無得と魔物の大地』だ。

「それを、見せられれば。兵を出すと思うんだが。」

「どうやって連れて行くかだね。」

「こざとなれば力ずくで連れて行くさ」

「ジンくんそれは、ちょっと」

「そりながらいように、祈つてくれ」

「まあ、それについては、任せるよ。呼んだのは私だが、会合の進行はジンくんに頼みたいんだが」

「面倒だが仕方ないか、俺なら一応立つてここにできるしな」

「そういうこと。あ、これこの前の奴隸商人を潰した報酬ね。結構貯まつたんじやない。」

渡された袋には、金貨が五枚入っていた。

「こ」の報酬合わせて、たしか100万ギルくらいだな。」

「稼いだねえ」

「まあな

小人族の子供を助けられなかつた後から、俺は精力的に元グーロム王国領のゴミ掃除に励んだ。

そのおかげで、かなりのお金が貯まつたのだ。

その後、細かい打ち合わせをした後、皇帝の部屋をあとにする。

「ジン、がんばってるね」

「そうでもないさ、俺はやりたいようにやつてているだけだからな。」

「あら、ジンこんなところで会つなんて奇遇ね」

つい最近どこかで聞いた覚えのある声が聞こえた。後ろを向くとシヤールが歩いてきた。

「ジンこいつ誰?」

「なに、この失礼な子供」

二人の機嫌が悪くなつたような。

「黙れガキ」

「ほんつとうに口が悪いわね。あんたのほうがガキでしょ。」

なぜか一人は、お互いを睨み合つてゐる。

「二人とも落ち着け、何故そこまで初対面でいがみ合えるんだ?」

「「なんとなく気に入らない」」

「仲いいな」

「「よくない」」

ハモったやつぱり仲いいな。

「えーと、こっちはアリシャ、そんでこっちはシャールな」

とりあえずお互いの名前を教えてみる。

「シャール？」

「アリシャ？・・・そりこり」と、ならじは私が引きましょう

名前を言つただけで、争いは収まつてしまつた。分けがわからん。
「ジンあれには、氣をつけてあれば商人、油断すると金を巻り取られる」

「まあそんな気はしていたがな。」

シャールは、会話がというより交渉が得意そつだつたからな。俺たちにタダで護衛させていたしな。

屋敷に久しぶりに戻つてみると

キリとユリが、メイド姿で迎えてくれた。

「「お帰りなさいませ。」「

「二人とも別に働かなくていいんだぞ」

「いえ、働かざる者食うべからずですか」「

「せうか、なにか」褒美をあげないとな

「あのそれでしたら、その、お願ひが

「なにかな?」

「えつと、その~」

「もう、ユリ。私が言つよ、えつとね、ユリが夜一人が怖いから一緒に寝て欲しいんだつて、いつもは私が一緒に寝てるんだけどね」

「う~、キリだつて暗くて狭いところ苦手なくせに」

「う~

そつか二人とも奴隸のこのことがトラウマになつてゐるんだな。

「いいよ。それじゃあ今日は一緒に寝よう。それに今一人の部屋は別々だつたね。今度一緒にしてもらおうか?」

「いいんですか、お願ひします。」

キリの良い返事が返ってきた。
ユリがそれを聞いて微笑んでいる。

「・・・あ」

キリが恥ずかしそうにしてるので

「可愛いよ、キリ」

「あ」

ますます、赤くなつた。

「キリする」

「す、ずるくない」

「ハハ、じゃあ夜にね。」

夜になつて寝室にいくとベットの大きさが三倍くらいになつていた。
ベットを三つほどつづけているのだろうか。

「な、なんだこれ」

近くのメイドさん元に訊いてみると

「お嬢様方の希望でベットと急遽大きくしました。」

「なんで?、大変だつたろ」

「理由はこれからも女が増えるだろうから一度に一緒に寝られる人数を増やすため、と聞いています。大変でしたけど、そのへ、頑張れば、「主人様に添い寝させていただけると言われまして」

頬を染めながらそう言つてくれる。それ自体は嬉しいんだが。

俺はまつたく聞いてねえぞ。

「まあ、俺としては、嬉しいけど今日は」

「はい、今日はキリ様とヨリ様が添い寝されると伺っています。それにこれからは屋敷にいることも多くなるそうですし、わたしはその時にも。」

「そう言つてくれて嬉しいよ、ありがと」

「いえ、そんな」

「ああ、「主人様となにしてるの」

「見つかってしました。それでは、「主人様失礼します。」

そつ言つて同僚のもとに走つていぐ。

その夜、枕を持ったキリとヨリが部屋を訪ねてきて、一緒に寝た。二人とも怖いのか俺の腕をずっと掴んだまま離さなかつた。それが少し心苦しかつた。

ジンは一人を抱きしめて眠ることにいた。そのためささやかな胸が夜通し当たつっていた。

異世界208日目

人が治める国の代表達が集まる日がやってきた。

今ジンとクルト皇帝は、会合を行う部屋で各国の代表が来るまで、これからのこと話をしていた。

「大進行は丸一日、24時間、朝晩戦闘が続く。そんな戦い誰も経験はないし、前例もない。ジンくん正直私は不安だよ」

「それでも、やらないといけない。」

「問題は、長い時間と夜の暗闇だね。こんな長時間の戦いも暗闇の中の戦いも人間はしないからね。」

「時間は、部隊いくつにも分けて何度も入れ替えるしかないし、夜は何かで光を確保して防御重視しかないな。」

「そうなるだろ? ね。夜に頑張って攻撃して同士討ちなんてごめんだからね。」

コンコン

「ウルティア国の代表がお越しです。」

「ちょっと早いな」

「ウルティア国ならかまわないよ。通して」

入ってきたのは、美しい美女だった。

「失礼します。久し振りですねクイント王。お願いがあつて早めにきたのですが、そちらの方は？」

「彼は、冒険者のジン。我が国の英雄だ」

彼女の反応は、かなり意外なものだった。女性は、入り口から走りだしジンの隣まで来て。喜色に溢れた表情で

「あなたが英雄ジンなのですか。お会いできて光榮です。私は、ウルティア国代表カルティアと申します。よろしくのお願いしますね。」

「とても一冒険者に対する態度だとは、思えない。」

「よ、よろしくジンだ。（おいクリトどうじつことだ）」

「（私にもわからん）カルティア殿、それでお願いいとは？」

「実は、彼に会つてみたかったのです。水の聖痕を、持つ彼に」

「ああやつこいつ」とね

なんだ聖痕が珍しいだけか

「それだけではありません。先の戦争で水の精霊術で5万の奴隸を殺さずに無力化した、そのお手並み、その発想、その精神は、我が

国ではすでに伝説です。」

「いや、まだ言われるときは恥ずかしいな。

「何故そこまで？」

「我が國ウルティアは、湖と川の国、水といつのは我が国では特別なんです。首都も湖の上にあるんですよ」

「湖上の都市か、見てみたいな」

「是非来てください。大歓迎します。」

「ありがとうございます。落ち着いたら行かせてもらいます。それで突然なのですが、カルティア様少し質問してもよろしいですか？」

「質問は構いませんが、様付けはお止めください。國の者に怒られます。」

カルティアが面白そうに笑って言ひ。

「では、カルティアさんのお國は今回の呼びかけをどう思っていますか？」

「我が國は、ジンさんに会えるので、嬉々として私を送り出しましたよ。土産話に期待するそうです。」

「だめだ、参考にならない。」

「えへと、では他国の反応を、どう予測しますか？」

「そうですね。書状には世界の危機とありましたが、信じていな
と思います。呼び掛けに応じたのは、クイント皇国が大きくなつた
からと旅費の八割を皇国が負担すると書状にあつたからでしょうね。
」

「つまり他国は、大いに不満であると」

「そうかと」

カルディアが少し気まずそうに同意する。

「まあ、それくらいは想定の範囲内だし何とかなるだらう」

「ふふ、楽しみにしていますね。」

しばらく会話を楽しんでいると、会合の時間が近くなり次々と代表
者が集まってきた。

参加者についてクルトから、事前に説明を受けた。

まず最初に現れたのは、

ヴァーテリオン帝国、帝王のラインツ王だった。

「失礼する」

ラインツ王の最初の印象は、王の中の王、まるで霸王のよつた男だ
った。従者を一人連れてクルトの正面に座つた。

ヴァーテリオン帝国は、クイント皇国がグーロム王国を吸収するま
で皇国と同等の国力だった、今でも人の國では、一番目の国力を持

つてゐる大国だ。そして數は少ないが竜騎兵ドラグーンを有する国もある。この大陸で少數の部隊戦では、最強を誇つてゐる。

次はリニヨン教国のカリウス教皇と聖女ウリアのツートップが入ってきた。

「失礼」

「失礼します。」

二人は、円卓の皇國よりの位置に座つた。教皇は白を基本とした神官服を、聖女は同じく白を基本にした巫女服だ以前ソフィアが着ていたものに似ているが質はかなり違うのだろう。布が多くて正直動きずらそうだがこれでも軽装だつたらしい。リニヨン教国は、この世界の宗教を司る国だ。人が治める国に対しては、すべての他国へ少なからず影響力を持つてゐる。聖職者は、魔人を毛嫌いする者が多いらしい。今後の課題になりそうだ。

次はファーランド王国、国王のヘンリー王だ。

「お邪魔します。」

ヘンリー王は、これといって特徴はないのだが、彼は王だ、と思わせる不思議な男だつた。ファーランド王国は、なんと魔人を受け入れてゐる国だ。そのせいでリニヨン教国と仲が悪いらしい。入つて来たときもカリウス教皇とヘンリー王が睨み合つていた。そしてそのまま教皇の対面から少しづれたところに座つた。

次はカルモンド王国、国王のグスター王と王大使のエクス王子が入ってきた。

「・・・

「失礼します」

グスター王は、無言で適當な席につき、エクス王子は入室の言葉を言つて席につく。正直カルモンド王国にはあまり良い印象を持つていなし。グーロム王国との戦争の時に明らかにグーロム王国を援護する動きをとつていたからだ。国にいる奴隸の数も多い。それでも無視ができないのは、国内に二つの有数の鉱山を持っていて、そのおかげで経済力も軍の装備もかなりのものなのだ。しかしそれも今の国王になつてから国力は下がつていつているようだ。

次はテンプル騎士国の、騎士王ジャックとその娘、『剣姫』^{けんき}の異名を取るクリス王女が入室した。

入り口でクリスが一礼して入室する。

騎士王と格好は普通の王と変わらなかつたが、クリス王女はドレスと甲冑を合わせたような格好だつた。

テンブル騎士国は、集団での戦闘能力が高い、軍人はすべて騎士道精神を持つ事が求められる国だ。礼節はしつかりしているが、騎士が貴族階級なためか差別的な考え方を持っていて、平民層を守られる対象として平民を下に見る傾向がある。それもジャック王になつてからはその傾向は減つてきているようだ。

お次は、ヤマト国の国王キリガネとその娘、『舞姫』の異名を取るトウカ姫の一人だ。

「邪魔するぜ」

キリガネは不遜な態度で、トウカは一礼して入室する。キリガネは服装は着物を崩した着方をしていてトウカは、着物を動きやすく改造した物を着ている。

ヤマト国は、武士の国で個人の戦闘能力が高い者が多い。Sランクの実力者が複数いる。この世界の武士は主君に仕える者と傭兵として世界をまわる者の一種類がいる。

そしてテンプル騎士国の騎士と傭兵は仲が悪い。騎士は傭兵を意図なき者達と毛嫌いし、傭兵は騎士を群れないと戦えないと嘲つている。

ヤマト国が座つた場所はテンプル騎士国の対面だった。キリガネ王とジャック王は、視線を交わしていたがそこに悪感情は感じなかつた。例えるならライバルに向けるような挑戦的な視線だつた。二人の姫もお互いを見て微笑んでいる。どうやらトップ同士は敵対してはいないうだ。

次はクラフト商国のトランド王とその娘が入つて来た。その娘が

「あれ、ジン?なんでここにいるの?・・・あんたそんなにえらかつたの!?」

シャールだつた。

「娘よ、皇国でジンといへば、『英雄ジン』のことだとおもつのが」

「つえ、そ、そういうばうね。だからアリシャがあんなになついていたのね」

「よひしへ シャール」

「え、ええよひしへ」

「よひしくしなくていい。ジンが汚れる」

アリシャとアッシュもやつてきた。

「なんですかー！」

「シャール後にしなれい。」¹¹¹は、各國の代表がきているんですから

「・・・はい」

アリシャとにらみ合つた後、しぶしぶシャール達は、少し離れたところに座つた。

クラフト商国は、商人の国だ。経済力が高くあらゆる国と商売をしている。交通の要所があり人が治める国だけではなく亜人の国に対してもそれなりの影響力を持つてゐる。そして獣人の狸族^{りきく}が多数暮らしている国もある。

「なにが、あつたんだ？」

アッシュがさつきのことを見ってきた。

「面倒だから秘密」

「ひ、ひどい。僕皇子なの！」

セリフとは裏腹になぜか嬉しそうだ。こいつ実はマジなのか。

「あれ？ ジンその指輪確かアリシャのこんや／ブッ」

確信を言つ前にアリシャに黙られた。それにしても『こんや』か・
・・指輪・・・、まさか婚約指輪じゃないだろうな。考えても答え
は出ないので考えるのをあきらめる。

これらの国にクイント皇国をいた9カ国が主だった国だ。
発言は主にこれらの国がすることになるだろう。

その後は、小国が次々と入室し席を埋めていった。

すべての席が埋まった。その数21ヶ国の代表が集まつた。この世
界でこれほどの、国の代表が一同に会するのは、はじめてのことだ。

「すべての代表者が揃つたよつですね」

すべての視線がジンに集まる。その中で、ジンは丁寧に始める

「それでは、この世界を守るために会議を『世界防衛会議』を始めたいと思います。」

39話 世界防衛会議・一回目

「それでは、この世界を守るために会議を『世界防衛会議』を始めたいと思います。」

親しい国同士で会話をしていた代表たちも話す」と止めジンを注视する。

一瞬の静寂の後、ラインツ王が問い合わせてくる。

「君が進行役をするのかね？」

「はい、そうです。」

カルモンド王国のグスター王が

「どこの馬の骨とも知れないものに任せて良いのですかな。」

「わたしは異世界から来ました。この場でもつとも中立だと自負しています。」

「異世界？ 邪はふぞけているのか？」

グスター王は呆れ半分、怒り半分といった感じだ。

「そんなつもりはありません」

「クルト皇なぜ彼を進行役にしたのだ？」

ジンが相手にしないでいると、今度はクイント皇国の責任を追及し

てきた。

それに対して面白そうにクルトが

「それはもちろん、この集まりは、彼が作ったものだからですよ」

「どういふ意味だ？」

「つまりこの集まりは、ジンくんの主催なんですよ。」

「なんだと、クイント皇、我々を騙したのかー？」

「そんなつもりはない。わたしは呼びかけただけだし、あなた方の旅費は、彼が稼いだお金で払うのですよ。」

「・・・帰らせてもらひ」

突然グスター王が席を立ち、出入り口へ向かう

「ち、父上お待ちください」

エクス王子が止めるが、グスター王はそのまま扉に向かう。しかし出入り口には、ジークとカイルが陣取っていた。カイルは抜剣するしている。

剣の柄に手を置くジークが、

「主の話はまだ始まつておりません。席にお戻りください。」

「え、貴様らなにをしているのか、わかつているのか」

ジークはそれを無視して繰り返す。

「お戻り下さい」

「いい、この」

グスター王が怒りを爆発させよつとしたところに、ファーランド国のヘンリー王が

「もう短気を起しちやう、ひとまず席に戻つて話だけでも聞いたらどうですか?」

「・・・ふん」

グスター王が不満そうに席に戻る。そこでトランド商王が商人の質問をする。

「クルト皇、先程ここに集まる者の旅費の八割をそちらの英雄殿が払うと言つたが、旅費といつてもこれだけの数だ、かなりの額なはずだ。どうやって工面したのかな?」

「それはだね。私はグーロム王国の富裕層の九割の財産を没収したんだが、その成果のほとんどは彼の功績なんですよ。その報酬で旅費程度どりともなりますよ。」

これは実際に受け取つた報酬とは、また別口だ。

「ほひ、素晴らしいですね。しかし、私にはできません」

たしかに、資産をあれだけ没収できたのは、グーロム王国が害国だつたからだらう。

ラインツ王が、

「そろそろ本題を話してはどうだね。」

「そうですね。そうさせてもらいましょう。」

「よいよか、と踏がジンに今まで以上の意識を向ける。ジンが真面目な顔を作つて告げる。

「踏さん『無得と魔物の大地』はご存知ですね。そこに、真っ黒い半球状の空間ができていることはご存知ですか？」

「いや知らないな」

ラインツ王が答え、他の代表達も口々に知らないと答える。

「きょうから152日後の正午に、その黒い空間から大量の魔物が現れます。世界を滅ぼすほどの規模の魔物の侵攻です。」

少しの間静寂が流れる。

その中、グスター王が

「何故そんなことがわかる」

「神にこの世界に送られる際に教えられました。」

「今度は神か」

グスター王が、吐き捨てるように呟く。

神と言つ言葉に黙つていられない国がある。

宗教を司るリーコン教団だ。カリウス教皇が

「軽々しく神を口にしてもらいたくないですな」

その声には明らかに怒氣が含まれている。

「そう怒らないでください。私が言つた神は、私の世界の神です。あなた方のこの世界の神とは、なんの関係もありません。」

いつ聞われては、教皇も反応に困りてしまつ。

そこで、ファー・ラング王国のヘンリー王が

「何故君が送られたのですか？」

「この世界を救うために」

「では何故別の世界の神が送つたのですか？この世界の神ではなく

「神の事情までは知りません」

「この世界の神は何もしないのですか？」

「ファー・ラング王、何が言いたい？」

教皇が先程より明確な怒氣を纏つて質問する。

「いえ、やはり神は使えないな、と思つただけですよ。」

今まで黙っていた、聖女ウリアが辛らつな言葉を吐く。

「黙りなさい。王でありながら魔人などと仲良くするなど、万死にあたいします。この賣国奴」

ファーランド王もこれに、怒りをにじませ

「魔人を恐れることしかできないあなた方になにがわかる」

「魔人は敵です。魔人の中には食人を好む種族もいます。人の身でありながらどうして仲良くできるのか理解できません。」

「それは、一部の種族に過ぎないし、長い年月をかけて彼らは自分を制御できるようになつた。食人は、もう彼らに必要なものではない何故それを認めない」

聖女ウリアとファーランド王が舌戦を始めよつとした瞬間

二人から音が消失していた。

「
」「
」「
」「
」

驚いているようだが、やはり声は聞こえない。驚きが少しあさまつた頃にジンが声を抑えて注意する。

「ここは、あなた方のための問答の場ではありません。お静かにお願いします。」

「ククク

二人は、なんども頷く。すると一人の空間に音が戻った。ジンは全く動いていない。

呆然とした聖女が

「今のはいつたい」

「音を伝えるのは、空氣です。私はその空氣の動きを止めただけです。」

「その止めるだけが難しいと思つのですが。」

「お気になさらず。それでは、本題ですが・・・・あなた方には『無得と魔物の大地』に軍を派遣していただきたい。」

「ふ、ふざけるな!、何故わたしが、貴様に従わなければならん」

まあ、軍を動かせといつてはいわかりましたとは、いえないだろうな。

「何も私に従え、と言つているわけではありません。王の責務を果たせ、と言つているのです。」

「クイント皇国は兵を出さう」「ウルティア国も兵を出します」

「しょ、正氣か貴様」

うろたえるグスター王を見かねたライントン王が

「ジン殿何か君の言葉を証明できる物はないのかね」

「確固たるものはないですね。」

「何かはあるんだね」

「ええ、まあ」

「それで構わない。教えてくれ

「それでは、まずギルドカードですね。」

カードを取り出し、ライントン王にのみ見せる。

「称号を見てください。あ、能力ランクはバラさないでくださいね。」

「・・・救世主だと（それにこの能力ランクは）」

円卓がどよめく。「ライントン王と周りの代表も驚いているようだ。

「はい、神様が私を救世主としてこの世界に送った証拠になるかと」

「たしかに、しかしこれだけでは、漠然としている。」

「そうですね。状況証拠としては、最近の魔物の異常な出現が上げ

られます。ノワールサイや牛鬼はもともと『無得と魔物の大地』辺に多く生息していました。それが最近低ランクの狩場に現れ冒険者に被害がでています。』

この件に関わりのある、シャールが援護する。

「私も皇都の近くで20をこえる牛鬼に襲われました。」

冷や汗たらたらのトランデ王。

「娘よ、私は聞いていないのだが。」

「あはは～気にしない気にしない。」

「気まずそうに、顔をそらすシャール。護衛が少なかつたのは、ケチつていたのだろう。」

「やつらが住処を離れたのは、黒い半球が関係していると思われます。状況証拠としては充分でしょう。」

「しかし、それではまだ弱い」

「ええですから、あなた方には、『無得と魔物の大地』と一緒に行つてもらい黒い半球を物的証拠として見てもらいたいのです。お願ひできませんか」

「・・・わかった。ヴァーテリオン帝国は同行しよう。すべての国で行くのか？」

「いいえ、主要国の、ヴァーテリオン帝国、リニヨン教国、ファー

「ラングド王国、カルモンド王国、テンプル騎士国、ヤマト国、クラフト商国、ウルティア国そしてクイント皇国の9ヶ国で行きます。皆様よろしいでしょうか？」

「クイント皇国は、問題ない」

「ウルティア国も問題ありません」

「世界の危機なのです。我らヨーロン教団は同行します。」

「クラフト商国も旅費を出してくれるなら問題ない」

「……っちは……エクス見てきなさい。カルモンド王国からはエクス王子を出す」

「ファーランド王国も同行しましょう。」

次々に了承が得られる。思つていたより順調だ。しかし今までこれについて発現のなかつた残りの一国が

「テンブル騎士国は断る」

「いやだね、ヤマト国は拒否するぜ」

「……何故ですか?」

「やぢりは、いぢりを騙し出入り口を塞いでいる。あまりに不敬ではないか。」

「いじりまで好き勝手されて、はいわかりました。なんて言えるかよ。」

「

「どうやら武闘派の二国は、納得がいかないようだ。今まで黙つていたくせに、この言い様は、王として大丈夫なのか？」

「必要なことでした。嫌だと申されても連れて行きます。世界の命運が懸かっています。力づくりでも連れて行きます。」

「いいだろう。力づくりでもとこうのなら。そうだなジン殿、我と手合わせをして我に勝てば我が国も同行しよう」

「それがいい。うちもそうするぜ。『英雄ジン』の力、見せてもらおうじゃねえか」

「……はあ、わかりました。お相手しましょう」

思わぬ形で一人の王との手合わせが決まってしまった。

40話 英雄VS一人の王

勝負は、闘技場を使うことにした。この場に来たのはクイント皇国とヤマト国とテンプル騎士国とカルディアとシャールだけだ。残りは各々の部屋で待機している。

先にやるのは、騎士王だ。白と赤の全身甲冑に、両手剣だ。両手剣には、これといった装飾はない無骨な剣だが騎士王が持つのだナマクラではないだろう。ジンはテツを一刀モードで構える。

「本当に、精霊術も使っていいのか？」

「ああ、構わない。といつよりその言葉遣いが素かい？」

「そうだ。あれは、会議進行用だ。」

「まあいいや、そんなことは。やつらが始まよ。」

「殺し以外何でもありの単純ルールだな。クリスさん、トウカさん審判をお願いします。」

「はい」

「わかりました。」

「（テツこの戦いに切れ味は、必要ないから。初撃を受けたらすぐに「刀になつて。）」

小声でテツに話しかける。

「【まい】」

「それでは、両者よろしいですか。それでは……始め!」

ジャック騎士王との試合が始まった。

一瞬で間合いを詰めた騎士王が剣を降り下ろしそれをジンが受けたところでテツが二刀に分かれる。余った一振りで騎士王に斬りつける。奇襲のこの攻撃を騎士王は難なく回避する。

「ふつふつふ、君が黒刀を一刀つかうことは『陸津波』」知つてうえふ

お喋りしている騎士王に、大量の水をぶつける。一応威力は押されである。

「喋っている時は、聞くものじゃないかね。」

「ならもうこいいか?」

「うん?ああ来たまえ」

ジンは、水浸しの地面に手をおいて

「『流雷』」

ビリビリビリ・・・バタン

トウカがジャッジをくだす。

「・・・ジン様の勝利。」

「・・・お父様、・・・はあ」

溜め息をつくクレス。

「次は、父上ですね。無様はさらしないでくださいね。」（一コラ）

トウカさん恐つ

「お、おう」

次はヤマト国のかつら王との試合だな。

キリガネは侍スタイルで武器はもちろん刀だった。

「始めてください。」

キリガネがとつた戦法は、高速移動と連続攻撃だった。キリガネは、高ランクの気鬪と独特的の歩法でジンの周囲を縦横無尽に移動して攻撃を仕掛ける。ジンは、その攻撃を一刀と風による空間把握で最小限の動きですべて防ぐ。

高速ゆえに短い時間の間に多数の攻撃をすべて防がれたキリガネの動きに隙ができる。この時キリガネが攻撃を誘っていたのかはわからない、何故ならジンは攻撃をせずにキリガネの足を思いつきり踏んづけた。そのままその足を精霊術で地中に埋め動きを封じる。

「んな」

焦るキリガネから距離をとりキリガネの周りに五つの火球を作り出す。

「『、殺しは無しだぜ。だ、だからまだ負けじやねえ』

悪足掻きをするキリガネに、聞こえないように風を操作して、他の者に耳を塞ぐよう伝えれる。

気絶している騎士王以外が耳を塞いだのを確認して。

「『炎爆陣』」

キリガネは全方位から衝撃と爆音を浴びて昏倒した。

クレスがジンの勝利宣言を行つ。

「ジン殿の勝利。」

「捕まつたといひで素直に負けを認めていれば、みられた試合だったのに、まったく父上は

爆音で飛び起きた騎士王が起きて早々

「あれでは、納得できんもう一度やろう

ふざけたことを言つてゐる。『流雷』の後でこれだけ動けるということは、あの鎧に何かあるのだろうか。

「お父様、何を言つているのですか? どうぞお聞き下さいよ。」

「まあ、いいですよ。」

「話が早い。いくわ

ジンは、テツを一つに纏め氣を流し本氣で、振るつてきた両手剣に斬りつける。

カラーン

両手剣がポツキリ折れ刀身が地面に落ちる。一度受けた時に不思議に思っていたが、やはりこの両手剣、ナマクラだつたようだ。しかしこのナマクラで最初の攻撃のときにテツで受けた時に折れなかつたことが凄い、よほど氣をうまく流さないと一撃目のときに両手剣の方が折れていただろ？

「うつ、まいつた。」

この言葉でこの騒動は一応の、決着がついた。
そのあと

「いやあ、噂通りの腕前だね。あれで聖痕無しか、凄まじいね。」

「まったくだ。俺の攻撃をすべて完璧に防ぐたあ大したもんだ。」

口々に褒める二人に

「よく言つ。一人とも本氣では、なかつただろう？」

「あれ、バレてる。」

「そりやあジャック殿の剣なんか、ナマクラもいいところだし、キリガネ殿も剣技だけでしたし」

「「あの～」」

一人の王の娘が、不思議なものを見るような顔で

「何故父上たちは、仲良くお話ししているのですか？」

「お父様も会議が不満で勝負を始めたと記憶していますが

「ああ、あれかあれは嘘だ」

「その通り、つまりやらせだ。」

娘一人の周り温度が急に下がった気がする。

「・・・何故そのようなことを？」

「あそこで、ねたらジンと戦えると思つてな。」

「右に同じ」

「父上」「お父様」

「「ちよっとお話が」」

一人の王は物陰に連れていかれ。

「娘よ、どうしたのだ？」

「トウカどうした？」

「娘よその腕はそつちこは曲がらなああああああああ

「トウカその手に持つているのは、なんぞや――――――

一人の制裁はしばらく続いた。

「ああ、テンプル騎士団は、『無得と魔物の大地』に同行する。」

「ヤマト国も同行する。」

「ジン殿申し訳ありませんでした。」

「ジン様すみません。父上がとんだ粗相を。」

「いや、気にするな。俺もそんなことだらうと思つていたから。」

「??.?.?.してそんなことが、わかつたのですか?」

「俺の名前が出てからこの二人ずつと無言だったし、お互いを見て無言で相談していたみたいだからね」

「それだけですか?」

「ああ、だから確信があつたわけじゃないよ。それはともかく今日出発するには中途半端な時間だな。出立は明日にしよう。」

「クルト他の王にも伝えておいてくれ。」

「わかった」

「それじゃあ、俺は屋敷に戻つて仲間と打ち合わせをする。護衛の方は、クルトの方で頼む俺のチームは別のやつを守るからな

「別?まあ君のことだ、きっと考えがあるのだろう。護衛の方は任せてくれ」

「じゃあクレスさん、トウカさん失礼します。」

屋敷に戻ると、ミコアが迎えてくれた。

「『』主人様、会合の方はどうなりましたか?」

「明日『無得と魔物の大地』に行くことになった。」

「それには、私たちも行ってよいのですか?」

「ああ皆で行く。あと亜人の子達も連れて行くからお前達はその護衛を頼む。」

「亜人の人たちもですか?何故ですか?『無得と魔物の大地』は決して安全なところではないですよ」

「一度目の侵攻は、人間の国だけで何とかなるが、二度目の侵攻は人間の国だけでは難しいんだ。だから亜人にも協力してもらう。そのために現実を知る亜人が必要なんだ。もちろん無理強いするつもりはない、これから頼みに行く。」

「やつうことですか。でも、ふふ、『主人様の頼みを断るとは思えませんねえ』

意味深なことを言つミコトアをおこてキリとココのところに向かう。

コンコン

「キリ、ユリいるか?」

「『』主人様!?」

「ちょ、ちょっと待つて」

中からドタバタ聞こえる。しばらくして、ビシッとメイド服を着たキリとユリが出てきた。

「どうされたんですか?」

「ちょっと話があるんだ。入つていいかな?」

「どうぞお入りください』主人様

「どうしたの、『主人様?』

二人に『無得と魔物の大地』同行してほしいと理由と一緒に説明する。

「確かにちょっと危険なんだけそこは俺たちが」

「いいよ」
「いいですよ」

「・・・そんなあつさりいいのかい？」

「『主人様のお役に立てるなら。かまいません』

「私たちご主人様のこと大好きだし、その方が一緒にいられそうだし、問題なし」

「二人ともありがとう」

二人を抱きしめ頭を撫でる。

「『主人様』」

二人の甘えた声が耳元で聞こえ、頬をスリスリしていく。小人の体は人の子供と変わらないのでお肌はすべすべでやわらかくて気持ちいい。三人でしばらく戯れた。

「もう行くのですか？」

「ほかの亜人達にも話しへ行かないといけないんだ」

「我慢しなさいユリ」

「キリ、ご主人様の服を放してから言おうよ」

「あう」

二人の頭をもう一度撫で

「それじゃあ行くね

「「はー」」

ここ数ヶ月の仕事でたくさんの奴隸が屋敷に集まっていた。屋敷にいる亜人のほとんどは、ジンが奴隸から開放した者がほとんどで皆ジンに恩を感じて居る者ばかりだったからだろう。他の亜人たちも快く同行を了承してくれた。

その夜ちょっとした事件が起きた。

「「「ご主人様添い寝させてください」」」

夕食を済ませてジンが自室に戻ると屋敷で働いているメイドたちがあられもない姿で待ち構えていた。下着姿の者もいればネグリジェ姿の者もいるさすがに全裸の者はいないが、この状況はいつたいどうこうことなんだろう?。

「「ご主人様がまた、皇都を出ると聞きましたので」

「添い寝をさせていただく約束聞いていませんか?」

「添い寝をする格好ではないと思うのだが

「ふふ、ご主人様がお望みならばここにいる1~2名ご主人様にこの身をささげます。」

「ご主人様、こんな格好で来ているのです。お察しください

「わかった。みんなベットにこい」

その夜12種類の喘ぎ声が、ジンの寝室から聞こえてきた。

41話 一つの馬車の中

異世界209日目

「何故こうなつた」

今ジンが乗っている馬車には、アリシャ、シャール、カルディア、クリス、トウカ、ウリアと会議に参加した女性が勢ぞろいしていた。ジンは最初、自分のチームと一緒に行動するつもりだったのだが、クルト皇が

「君の発案なんだから君はこっちでしょ」

といつち側に連れてこられたのだ、そしていざ出発して馬車の中を見渡すと・・・女しかいない。

右隣にはアリシャが、左隣にはカルディア、正面にはシャールが座っている。シャールの両隣にクリスとトウカが座りウリアはトウカの隣だ。

「同乗を希望した。」

「私は、ジンさんと親睦を深めたくて希望しました。」

アリシャとカルディアは嬉しいことを言つてくれる。

「君たちは?」

他の女性に視線を向けると

「お父様にジンさんは婿候補だから会つてこそ、と言われまして。」

「私も、父上に似たよつな」とを言わされました。」

「あたしは、ジンがどれほどの器なのか見てこいつて父が、まあ私は一度ジンに助けられているからそことことはあんまり気にしないけどね。」

黙つている聖女に視線が集まる。
聖女が顔を赤らめて否定する。

「な、なんですか。私は違いますよ。ただカリウスが他国の動きを見て。じゃあうちも一応、と押し込まれただけです。」

それは、他の娘とどこか違うのだね？

「そんなことよりアリシャさん、カルティアさん、ちょっとくつつきすぎではないですか。」

「そんなことない。これでも控えめ」

「そうですよ。隣に座つているだけですよ。」

「それで控えめって普段は、どうなつてるんですか？」

もつともな発言だった。実際にジンと一人の間に隙間はなく肩には頭を乗せるといつ、かなりの密着度だ。他の姫も少し赤くなっている。

「見せまじょうか？」

「いいです。遠慮します。」

トウカが話題を変える。

「そ、そういうばジンさんは、刀を使うのですよね？」

「ああ、一応な。」

「今度手合わせしませんか？」

「私も頼みたい。」

『剣姫』と『舞姫』から手合わせの申し出だ。

「いいよ。機会があればその時にでも」

「ねえねえ、ジンあの一角つてジンの仲間よね。あの一角つて何を護衛しているの各国の代表じゃないよね？」

一度目の魔物の侵攻の時は、亜人にも手伝つてもうつことを話す。

「大侵攻ね～いまだに信じられないのよね」

「私は信じますよ。」

そこで意外な発言をしたのは聖女ウリアだった。

「何故ですか？」

「主神オシリスから、世界に危機が迫っている」とは、聞いていましたから」

この世界の神様か、

「・・・なんで公表しないのよ。」

「内容がわからなかつたので公表できなかつたのです。内容も解決策もないのにただ危機が迫っています。などと言えません。」

「じゃあなんでの場で言わないのよ」

「あの時は判断に迷つていたのです。各国が一定の理解を示したので今お話したのです。」

「まあいいけど。でもこれでジンの言葉が裏付けがとれたね」

「」の世界では神の存在が認められているんだな。俺の世界の神は、ほぼ人間に無干渉だつたから神はいないことになつていてるのに。」

「ううなのですか？まあこの世界でも神の声が聞こえるのは、世界に一人だけで代々声を聞いた者が聖女をしています。」

「やういえば、リニヨン教国は教皇と聖女の二君主制だつたね。よく成り立つね」

「教国は、内側を教皇が、外側を聖女が司つてゐるんです。内政と外交ですね。教皇は国民に支持されたりますが、聖女は神に選ば

れます。だから我が国には両方とも大事なんです。」

「つまり教皇の方が実権を持っているけど、それも神の後ろ盾のある聖女あつてこそその物つてことか?」

「よくわかりますね。たしかにそんな感じですね。」

感心したようにウリアが頷く。

その後もジンは各国の姫たちと交友を深めていった。

その頃、ジンの仲間達が乗る馬車では、

「またたく間に皇帝は、余計なことをしてくれますね」

「『主人様と一緒にいられると思つたのにな〜』」

「お兄ちゃんと一緒によかつたな〜」

ソフィアが悪態を付き。キリとコリとフエリスは落ち込んでいる。キリとコリは、メイドの格好をし始めた頃から、ジンを「主人様と呼ぶようになつていた。

「申し訳ありません。父上が」

「レティーシアはいいのよ。」

「そうですね。レティーシア様も本来ならあちらに乗つてもよかつ

たはずですし。」

レティーシアが謝り、リリスとリリアが擁護する。

「今頃お兄様は姫様方のお相手をしていのじょいね。」

「「主様を盗られた」

「私は主の物なのに」

ティリエルが馬車の中を思い浮かべ、イリヤとフローリスが不満そうに頬をふくらませている。

「また、増えるのじょつか？」

「やうだりうねえ」

「しかたないですよ、わかつていたことです。」

「この話はやめましょ。あまつ良い結果には、ならぬじょいし」

「やうですね。」

リリスがこのと話題を変える。

「それじゃあ、最近あつた良いことを報じて気分を盛り上げよつはいまば、ソフィアさん」

「えー！え、えつと実はジン様との前川で水泳を教えてもらつ

ました。」

「どんなのを教えてもらひたの？」

「ぐるーるという泳法で、これがとても速く泳げるんです。いつか海水浴に行く約束をしました。」

「いいな。」「」

「そしてナイスよ、ソフィア」

「はい次、フェリス」

「Uの前チーズケーキをお兄ちゃんと一人つきりで食べました。」

「チーズケーキ・食べてないよ」

「お兄ちゃんとの二人だけだもん」

「べつう次、テツちゃん」

「Uの前体の隅々まで綺麗にしてもらいました。」

「な、なんですって」

「小太刀の姿のときU」

「な~んだ」

皆安堵していた。特にキリ、ユリ、ティリエル、フェリスの年少組

はあからさまにホツとしていた。

「次、ティリエル」

「実は今お兄様と聖痕無しで空を飛ぶ練習をしてるんです。それがやつと形になってきてるんですよ。」

「……」主人様は、どこまで行かれるののでしょうか

「せりゃあ、この世界をまるまる守れるくらいでしょ

「ねえねえ、どうやって飛ぶの？」

「薄い木の板を使つんです。足を板に固定して板と背中で風を受け
るんです。」

「ジン殿は、すくな。一度乗せてもらおうかな」

「お兄様でも当分は難しいと思しますよ。」

「「「そつか~」」」

ジンの女達は、ジンの「じでー喜ー憂しながら『無得と魔物の大地
への道程を過ぐした。

42話 黒い半球

異世界215日目

「『炎蛇・四首』」

四体の牛鬼を炎の蛇で燃やす。

「魔物の数が増えてきたな。」

「そうだね。びりするジンっ。」

リリスが隣から聞いてくる。

「俺が外で警戒する。『無得と魔物の大地』はもうすぐそこだし大丈夫だろ。」

ガサガサ

藪からブルー・コブラが出てきた。牙をかわしながらその首切り落とす。他に魔物がないのを確認してから採取をするためブルー・コブラに近づくブルー・コブラの死骸が黒い粒子になつて消滅した。

「ジンこれって」

呆然とするリリスに

「たぶん、黒い半球と関係があるんだろう。リリスしばらくこれは内緒にしておいて。意識は統一しておきたいから『無得と魔物の大

地』で実際に見せたほうがいいだろ?』

「わかった。仲間にも秘密?」

「説明が難しいから、黙つとく」

「わかった。」

異世界 216 日目

「『』が『無得と魔物の大地』か、本当に何もないんだな」

そこには、草一本も生えていない荒地が広がっていた。荒地は中心に向かつてゆるやかな下り坂になつていて、その中心には以前見たときより大きな黒い半球がある。皇都のお城が丸々入るくらいの大きさだ。

「なんだあれは」

王の誰かが呟いた。『世界を結ぶ者達』のチームメンバー以外は皆黒い半球に驚きを隠せないようだ。ジンを信じていた、クルトやカルディアですら驚いている。

「あれが、魔物の大侵攻を証明している。」

ジンは言いながら、光球を作り出し半球に近づけるが中を照らすことはできない完全な暗闇だった。

「確かに、あれは異常だ。近くまで行つても大丈夫なのか?」

「いや危険です。おそらくすでに魔物が少數出でてきている可能性があります。」

「なんだと、それは本当か？」

「それを今から確かめに行く。王の方たちは、私の後を付いて来て下さい。」

「わかった。」

ラインツ王が代表して答える

先頭をジンが少し後方にジークとカイルが続き、そのさらに後ろに護衛と各国の代表それにジンが連れてきた亜人たちが続く。

ジンが100メートルくらいまで黒い半球に近づいたときに、異変は起つた。半球の一部が、ブクブクをふくれ大きな泡のような物がいくつかできる。

「なにが始まるんだ」

「ジーク、カイル少し下がって後ろのやつらを守れ」

「「了解」」

ジークとカイルが後ろに下がり臨戦態勢をとった頃に

とすべての泡が破裂して中から100近い魔物が現れる。

ハイウルフ・燃狼・コールドオオカミと狼型の魔物ばかりだ。燃狼は、体が燃えている狼型の魔物だ。コールドオオカミは、冷氣を纏つた狼型の魔物だ。

後ろでは、驚きの声が出るが、ブルー・ゴブランの件である程度予想をしていたジンは、冷静に対処する。

まずは『風刃』で魔物を切り裂く、だがあまり減った気がしない。ここには、重要人物が多いリスクは極力省くべきだろう。

「土の聖痕を発動『岩皇』」

ジンは土精靈を纏い、魔物の群れを見る。

「『じせき刺石槍』」

ガガガガガガツ

魔物の群れがいる地面から石の槍が無数に突き出し魔物を串刺しにする。

石槍を逃れた魔物は、ジンが斬り殺す。漏れた魔物はジークとカイルが始末した。目算で100近い魔物が一分ほどで片付いた。

「すごいこれが聖痕持ちの力なんですか」

「父上との戦いなんて大したことなかつたんですね」

「娘よ、なにもそこまで言わなくても」

「なんだあれは」

ファーランド王が指を指した先では、先程殺した魔物が黒い粒子になつて消滅していつているところだつた。消滅が終わつた場所に魔物の痕跡は何もなく。ただ石の槍が突き出しているだけの大地が広がつていた。

ジンは名国の王の場所に行き。

「急いでこの場を離れます。あなた方も状況の理解はできたでしょう」

「ああ確かに、嫌といつほひな」

『無得と魔物の大地』から出たといひで、野営をするといふのである。そこで今後どうするかを話すことになつた。

「ガーター・テリオン帝国はジン殿の発案に同意する。兵も出さず他の国もそれぞれ同意する。問題はカルモンド王国だが、そこはヒクス王子が約束してくれた。

「絶対に父を説得してみせます。」

「よろしくお願ひします。」

「急ぎ皇都に戻り他の王達にも話を通そひ。」

「時間がないな、軍の配置が難しい小競り合いをしている国が多いし戦争をしている国もある」

「まずは、どの国にも武力衝突はやめさせる方針でよいですか？」

「同意する」

各国の王達は王らしく今後の話をまとめていく。

「ジン殿確認したいのだが後何日あるのかな？」

「144日間です。」

「すぐに動けるのよ、皇国へいらっしゃつあまり時間はないな」

「せこいら辺は、あなた方のほうが専門でしょ。」

「確かにそうだな。ジン殿は何かないかな？」

王がジンに意見を求めたのだ、ジンは確かな手合えたを感じた。

「一つ提案なんですが『無得と魔物の大地』の近くに拠点が必要だと思つんですね。それを四つ作って攻略の要にしたい。」

「確かに物資のことや長時間の戦いを考えると拠点は必要だ。今までは、この辺りに拠点を作ることは、まったく意味がなかつたがこれからは違つ。改めてお願ひするジン殿力を貸してほしい。」

「もちろんそのつもりだ。拠点は皇国に作つてもうこたい、いいか

クルト皇?」

「かまわないよ。皇国はすでに準備を始めている。それぐらいの余裕はあるさ」

「頼もしいな。ただわたりは144日間といったが。実際はもっと速く『無得と魔物の大地』に入つて迎撃準備と魔物狩りをしたいから時間は本当にない。だから今回の拠点は一つだけでいい」

「わかった。皇都に戻つたら正式に同盟を組もう」

「ヨーロン教国とファーランド王国もそれでよろしくかな?」

そう、問題はこの一つの国なのだ。この一つの国は、国境に兵が集まつており小競り合いが絶えないのだ。小国同士の戦争は、黙らせることができるが、この一つの国はそういうかない。どうしても両国のアーチ承が必要だ。

「仕方ないでしょ。あれを見せられては。我が国は、ヨーロン教国は世界を守ることを第一に考える。ファーランド王国との一切の武力衝突は避けよう。」

「ファー・ランデ王國も、兵を国内に引かせましょう。それが世界のためです。」

「ありがとうございます。」

なんとか両国のアーチ承は取れた。だが和解したわけでもないので問題は以前残つてゐる。そこでラインツ王がジンに質問した。

「ジン殿もし両国が拒否したひとつずつもりだつたのだ？」

「答えなければいけませんか？」

「私は、君の覚悟が知りたい。異世界から来た君がどれほどの覚悟があるのか」

「では、ラインツ王ならどうしましたか？」

「質問を返すのは感心しないな」

「これは失敬、そうですね。武力衝突はできないですから・・・トックを入れ変えます。」

当人のカリウス教皇とヘンリー王がギョッとする。

「あれを見てまだそんなことを言ひ愚物なら殺します。秘密裏に「・・・覚悟はわかつたが、あまりそつこい」とは言わない方が良い。信用されなくなる」

「そうですね。それに排除は最後の最後です。それまで説得など手は尽くすつもりですよ。」

「ジンくんあまり無理しないよつにね。聞いているよ君は戦争の時、人を殺して悲しんでいたんだろつ」

「・・・」の場で言ひつなよクルト

「僕はね君が心配なんだよ。いつか君が潰れてしまふんじやないか

と

「大丈夫だ、一人でやるわけじゃない。侵攻は三度あるんだまだまだ先はある。無理をするつもりはない。」

「わかった。その言葉を信じよう」

「帰つてから忙しくなる。俺は仲間のところに休ませて貰うよ。」

そう言ってジンは話し合いの場を去った。

43話 ジンとギャルド

異世界222日目

皇都に戻ってきて、最初にしたことはこれからについての会議だった。

結局皇都での会議で決まつた連合軍内の分担は

クイント皇国が、まとめ役と拠点設営を、
ヴァーテリオン帝国、テンプル騎士団、ヤマト国が軍部を、
クラフト商国、カルモンド王国、ファーランド王国が財務を、
ウルティア国、リニヨン教国がそれ以外を、
ジンは、冒険者ギルドを動かすように頼まれた。

これは、国ごとにそれぞれ準備をやつてしまつと9カ国で帳尻合わせが必要になる。それでは、侵攻に間に合わないので仕方なく分担したのだ。

ジンが冒険者ギルドを担当するのは、国がギルドに介入するのが難しいからだ。

冒険者は自由を重んじるため、国が介入するのを嫌うのだ。そこで立場が微妙なジンが担当することになった。

そのあと各国の代表達は、一度国に戻った。自国の状況の確認と軍の編成と人材を集めるためにだ。これから設営する拠点に各国の武官、文官が集まるそれを指揮するのは、クイント皇国の中割になる。

中立の意見を聞くためにジンが呼ばれたことはあったが、基本的にジンは自分のことに専念することになる。

ジンは、自分の屋敷に戻つてまず、クレアさんに会い「ギルドについて学ぶ」とにする。

「ギルドマスターさえ押さえればいいのかな?」

「大抵のことは、ギルドマスター一人でいいですが、大規模に動かすなら支部長や有力チームにも話をしたほうがいいでしょうね。」

「チームにも、ですか?」

「はい、チームランクがAランク以上に限りますが。」

「チームランク?」

「ギルドがつけるチームのランクです。ギルドカードの機能とは、関係ないので、ギルド内でしか通用しませんが」

「俺のチームは?」

「チームランクは、Aですね。一年たらずで、これは異例の早さですね。」

「皇国で有力なチームは、どこですか?」

「有力チームは、二チーム。ランクAの『ランスロウ騎士団』と『双獣の双炎』ですね。」

「その二チームと話せますか?」

「可能でしょうか。ジンさんは『気にしない』ようですが、あなたのチームも有力チームなんですかね」

クレアは面白むずかしく笑って

「本当に名声に興味がないのですね」

「色々面倒だからな、名声は必要な分だけでいい」

「もうですか」

「クレアさん、頼みがあるんだが。できるだけ早くやこいつと話がしたい、なんとか出来ないか?」

「確約は出来ませんが、やってみます。」

「お願ひします。」

「私も、ジンさんはお世話をなつてこなしますから。されば、今からギルードに行つてきますね」

「今からですか?」

「早い方がいいですか?」

もう少しで日が暮れる時間だ。

しかしどうかのだけ早く、と言つたのせいだ。しかし今はまだよ。

「ありがとうございます、クレアさん」

クレアさんのおかげでギルドマスターと一緒に一つのチームのコーダーと会えることになった。

今ジンは、彼らが待つ部屋へ向かっていぬといひだ。クレアさんにこれから会う連中のことに聞いてみる。

「そうですね。ギルドマスターは、元冒険者で自由を大事にするお方ですね。国を嫌っているわけではないですが、口を出されるのを嫌います。チーム『ランスロウ騎士団』は騎士道を重んじる方々です。冒険者と騎士を混ぜたような方たちです。『双獣の双炎』のリーダーは、獣人の姉弟でチーム名のとおり火を扱い得意だそうです。」

「お会いしたことがあるんですか？」

「いいえ。あつたことはありません。聞いたことがあるだけです。チームランスクAつて書くのは、本当に有名なんですよ。」

「つてことはいつも？」

「はい。超期待のチームです。つきました。どうぞ、お話し下さい」

話している間に部屋についていた。

部屋で待っていたのは、どこかの王かと見間違えそうなほど威厳を備えたギルドマスターと騎士風の男が三人と獣人の男女だ。獣人の一人はどうやら狗族、犬の獣人のようだ。ギルドマスターが出迎える

「よつ」そ『英雄ジン』

「どうも」

「面倒なことは省」う黒い半球のことだね

知っているのか！各国の代表すら知らなかつたのだぞ

「・・・・・」

「私はこれでもギルドマスターだ。そしてギルドはもつとも情報が集まりやすい場所だ。これくらいは簡単だよ。ちなみにこの場にいるチームのリーダー格の者は、実物も見ている」

この世界に来てからここまで先を行かれたのは初めてだな。だが、お話は始まつたばかりだこれからが本番だ、と思つていたら

「我々ギルドは協力しない」

「なつ、なんだと！？」

「いやうの一つのチームリーダーも同意してくれた。」

「・・・・・何故だ？」

「ギルドは国がすることに介入しない、そして国も必要以上にギルドに介入しないこれは昔から決まっていることだ」

獣人の姉が

「わたしたちは、国といつ組織を信用していない。クイント皇国以外はまだ奴隸をつかつてゐる。そのような国に助力するつもりはない」

騎士風の男の一人が

「冒険者とは自由なのだ、国の駒になるわけがないだらつ」

「そのとおりだ、我々冒険者ギルドは冒険者の自由を守るため。国に対しても助力はしないこれが我々の総意だ」

ブチツ

この瞬間ジンの中で何かが切れた。

「言いたい放題言つてくれるな、おっさんちょっと耳が早い程度で

天狗かこの野郎」

ジンのあんまりな口調にこの場にいるすべての人間がギョツとする。

「自由ってのは、責任を果たした者だけが与えられるものだ。お前の言う自由はただのわがままだ」

「わ、わがままだと」

「だいたい、自由も何も世界がなくなればそんなの関係ないんだよ
アホが」

「この時のジンは、この世界に来てから200日以上この世界のために動いていた。前の世界の快適な暮らしを捨ててだ。ジンは、奴隸の解放、元王国領のゴミ掃除とずっと働いていた。そして積もりに積もったストレスが冒険者どもの妄想を聞いて一気に爆発したのだ。

「それに奴隸だ、こっちが頑張ってグーロム潰して奴隸解放に勤^{いそ}しんでいたつていうのに自由だなんだと、ほざいているやつが、奴隸をつかっているから信用できないだあ？。ならてめえが奴隸解放しきつてんだよ。」

獣人の女は少し気まずそうに顔をそらす。

「国^{くに}の駒になるわけにはいかないだあ。しっかりとした意思があれば駒になんてならないんだよ。駒になることを気にしている時点であんたらは、駒以下だ。」

騎士風の男は、口をポカンとあけている。

「ああ～なんか馬鹿らしくなった。世界見捨てりやおうかな～」

「ジ、ジンさん正氣に戻つてください。あなたにもこの世界で守りたいものがあるでしょ」

「別に俺の仲間だけなら世界^{じゆく}」と守る必要ねえもん

「・・・」、「こんなジンさん初めて見ました。つてそれどころではあつません。ジンさんお願いですこの世界を守つてください」

「でもまあクレア」つい世界が滅んでも関係ないって言つたんだぜ。」

「」ジンは核心を言つた。ジンからすれば呆然としている彼らの言葉は、世界が滅ぼうが知ったことではない国が勝手にやるだろ、と言つて居るようなものだ。ジンは、すべてを守りつとしているつまり彼らのことも守る対象だった。その彼らが別に滅んでもいいといったのだ。ジンの怒りはもつともなものだった。

「それでもお願ひします。ジンさん私を助けてください」

クレアの真摯な言葉にジンが正気に戻る。

「クレアさん・・・わかつたよ。まあすでに国は巻き込んでしまつているんだし仕方ないか」

正気には戻つたが、ジンは今も蔑んだ目でギルドマスターとチームリーダーを見ている。普段向けられなれない侮蔑の視線に耐えられず、獣人の弟のほうが

「や、それでも、人間の王たちが奴隸を容認している事実は変わりません」

「なら奴隸制度をなくしてやるわ。それで問題ないな。じゃあ今からお前にち側な」

「うえ、な、なくす、？奴隸制度を？」

「そうだ、俺がなくす奴隸制度なんてムカつくもん絶対なくしてや

る

「君は国の使いではないのか？」

これが彼ら冒険者側の一一番の失敗だ。

彼らはジンを国の使いとして見ていた。しかし、ジンはただ頼まれたから来ただけだ。この部屋の中で正しくジンを見ていたのはクレアだけだった。

「当たり前だボケ。ああ、眞面目に話す気が失せたから、今から言うことに黙つて頷けよ。あんたらには大侵攻に参加してもらう。いいな？」

「な、それは……」

彼らがすぐに頷けないでいると、ジンはこの部屋の空氣すべてを支配して音を消した。

そして、この部屋にいるクレア以外の人間は、今まで感じたこともない目の前に壁があるかのようなプレッシャーを部屋の入り口にいるジンから感じていた。ギルドマスターとAランクチームリーダーたちは、殺氣は含まれていないそのプレッシャーに死の覚悟し、圧倒的な実力差を実感していた。

「わかつたか？」

「・・・わかつた。ギルドは協力する

「それでいい。それじゃあほかの国のギルドにも話を通しておいてくれ、おっせんならできるだろ？。もしふざけたことをしたら消すからな」

セーフティージンは部屋をでた。それをギルドマスターチームのコーダーたちも本氣だと理解できた。

「ひっ、ギルドとの関係は、最悪の状態から始ることになった。

「よかつたのですか?ジンちゃん」

「あ～～実はあんまり良くないけど。アッシュに丸投げすることにした。ムカついたから仲間と侵攻までのんびりすることにするよ。」

「それがいいと思います。ジンちゃんにも休日は必要です。」

「意外だな。幻滅するかと思つてた」

「前からお体が心配にならぬほど頑張つておいででしたから」

「やうだつたかな?。」

「はい、ギルドの方は、任せっきりださご。」

「それでは、お葉巻に甘えます」

クレアはもう一度、部屋の中へ。ジンは屋敷へと戻った。

異世界229日目

アッシュコに、ギルドとの連携を頼んだ（押し付けた）後、城内を歩いていると、アリシャに見つかった。前から思つていいのだが、もしかして待ち伏せされてるのだろうか。

「ジン、一緒にお食食べよ。」

「いいよ」

挨拶などをするひまはアリシャの申し出をジンも快く承諾する。

アリシャの部屋で食べる」とになり、アリシャの部屋に向かつ。

その途中で見覚えのない禿頭の男とすれ違った。その禿頭の男に何故か憎しみと殺意のこもった視線を向けられた。

部屋に着いてからアリシャに聞くと

「ジン、それはちょっとひどい。あれはラウル」

「ラウル？ああ、あの身の程知らずか、髪切ったんだな。」

「・・・ジンが髪の毛を燃やしたんだよ」

さすがにアリシャもラウルを哀れに思つが、よく考えたらあんなのどうでもいいので、これからやることに気持ちを切り替える。

「ジン指輪は、つけてる?」

「もちろん。」

「ありがとうございます。実は今日は私の誕生日。」

「えっ、『ごめん知らなかつた。』」

「気にしない。ただお願いがある。」

「なんだい、今なら大抵のお願いは聞くよ。」

「椅子に座つて、私の手を握つて目を閉じて欲しい。」

「わかった。」

アリシャに対する申し訳なさのため、ジンは奇妙なお願いをあつたり聞いた。

椅子に座り目を閉じた。

そのまま十秒ほど待つと指輪が熱くなつてきたと思つたら膝にアリシャの掌を感じた。

チユツ

驚いて目を開くとアリシャの唇がジンの口に触れていた。

普段無表情のアリシャが嬉しそうに笑顔を見せる頬は少し赤い。

「契約完」

「契約?」

「うん、婚約

「！」、婚約？・・・何故こんなやり方を？

「私は公務でジンの傍にいられないから。ジンは、契約の破棄ができるんだよね。もし嫌なら破棄して、嫌じゃなければ・・・キスして」

チユツ

アリシャを抱きしめてこちらからキスをする。

「嬉しい」

アリシャは、静かに喜びを言葉にする。

「ジン、一つやつたことがある。」

「なんだ？」

「ギルドに連れてって」

今ジンには何気にハードルが高い。しかし今日はアリシャの誕生日ということなので。連れていくことにする。

「わかった。一度屋敷に寄るけどいい？」

一応テツを連れていくためだ。

「かまわない」

「それじゃあ、行こうか」

屋敷に戻ると

「お帰り、ご主人様」

「お帰りなさい、ご主人様」

キリとユリが出迎えてくれる。

「そちらの方は?」

「彼女はアリシャ、この国の第一皇女だよ。」

「こ、皇女様、は、はじめまして」

「第一皇女?にしては小さいね」

「キリ失礼だよ」

「わたしエルフのクオーター、何故か成長が遅い

「なんだか私たちみたいですね。私は小人族なんですよ。」

「おかげでご主人様に子ども扱いされがちなんだよねえ」

「親近感がわく」

「私たちいい友達になれそうですね。」

三人娘はすぐに仲良しになつてしまつた。
それにしても知らず知らずの内に子供扱いしていたのか、これから
は気を付けよう。

「ご主人様お願いがあるの、私たちギルド登録がしたいの
「したいんです。」

「・・・なぜだ？俺はストルに無事に村に帰すと約束している。あ
まり気が進まないんだが」

「その、ただご主人様と一緒にいたくて
「ダメ？」

「う~ん」

「別にいいと思う。屋敷に閉じ込めるのはどうかと思つ」

アリシャがキリとコリを擁護した。

確かにアリシャが言つことも、もつともだこには一人の意思を尊重
しよう。

「わかつた。ただ当分は外に出るときはランクA以上の人と一緒に

「「は~い」」

その後テツを探してからギルドに向かう。

ジンがギルドに入るとそこには静寂が生まれた。

酒を飲んでいた男たちが近づいてきた。一旦酔っているのがわかるほど顔が赤い。

「てめえか、俺たちの自由を奪おうとしている英雄様ってのは」

「さあな」

男の一人がジンの肩を掴む

「じりぱつくれんじゃねえぞ、調べはついてんだよ」

「なら最初から聞くな、面倒なやつだな。俺は今ギルドのことで機嫌が悪い文句があるやつは全員かかつて来い。」

「上等だ。全員で袋叩きにしてやる。」

ギルド内の人間のほとんどがその場に立ち上がった。
ジンは冒険者たちを見渡す

「ギルドマスターに言つた言葉をそのまま送つてやる。自由ってのは、責任を果たした者だけが与えられるものだ。お前の言う自由はただのわがままなんだよ」

男たちが一斉に飛び掛つてくる。

ジンとキリ達を囲むように龍巻が発生した。近くの者は宙に巻き上げられ、離れている者は吹き飛ばされて壁に叩きつけられる。龍巻が消えると巻き上げられていた、男達は平衡感覚がなく受身も取れずには地面に叩きつけられた。

ジンは悶えている男を踏みながら受付に進み

「登録がしたいんだけど」

「ひつ・・・えと、その」

「す」「こ怯えようだな。少し傷つく

「あー、女の子には手荒なことはしないから」

「は、はい、すいません。どうぞ」

三人の登録は滞りなく終わった。

名前	アリシャ	種族	人間	性別	女
ギルドランク	E				
能力ランク	総合C	気力D	魔力B		
チーム	『世界を結ぶ者達』				
称号	皇女	エルフのクオーター	ジンの婚約者		

アリシャは、何故か満足気だ。

名前	キリ	種族	小人族	性別	女
ギルドランク	G				
能力ランク	総合E	気力C			
チーム	『世界を結ぶ者達』				
称号	ジンの娘				

名前	ユリ	種族	小人族	性別	女
ギルドランク	G				
能力ランク	総合E	気力C			
チーム	『世界を結ぶ者達』				
称号	ジンの娘				

「『私達』は主人様の子供じゃない（です）よー？」

キリとユリが叫んでいる。それにしても本当に子ども扱いしていたんだな。

「ジン殿」

キリとユリを見て和んでいるところに不愉快な声が聞こえた。

「・・・なんだ？」

無視しようかと思ったが、アリシャ達の前だから返事だけはした。

「この前は申し訳なかつた。」

顔を向けるとそこには頭を下げる『ランスロウ騎士団』のリーダー

格の三人がいた。

「でつ」

我ながら扱いが酷い。

「私のチームは元グーロム王国の騎士だつた者達ばかりです。」

突然の身の上話だ、これには面食らつ

「我々は、国のやり方についていけず国を捨てました。自分たちは正しい道を選んだと昨日まで思つておりました。」

チームリーダーは、決意を込めた顔をこちらに向か

「しかし、それは間違いでした。我々は、国民を見捨ててただ逃げていただけだと、ジン殿の言葉で気づきました。ですから、我々は国民を救つてくれたジン殿の力になりたいのです。お願ひします。我々に世界を守るための戦場をお与えください。」

大人三人が頭を下げてきた。彼ら騎士にとつて頭を下げる事はどう軽いことではない。ジンは彼ら認めることにした。

「・・・わかつたよ。この前のことば、水に流す。ただ今の責任者はアッショ皇子だ。まあ、口利きぐらにはしよつ」

「ありがとうございます。」

また頭を下げるチームリーダー

「それは止める。あんたの方が年上なんだからな」

「そうだな、わかつた。ところでジン殿、友好の証にギルドカードを見せあわなか」

「まあいいが

「それでは、我々から」

名前	カロルド	種族	人間	性別	男
ギルドランク	S				
能力ランク	総合S	気力S	魔力S		
チーム	『ランスロウ騎士団』				
称号	特一級騎士	剛槍	超越者	到達者	

名前	アーマイン	種族	人間	性別	男
ギルドランク	A				
能力ランク	総合A	気力S	魔力B		
チーム	『ランスロウ騎士団』				
称号	一級騎士	到達者			

名前	ヤッシュ	種族	人間	性別	男
ギルドランク	A				
能力ランク	総合A	気力A	魔力A		
チーム	『ランスロウ騎士団』				
称号	一級騎士				

「剛槍？」

「あれ知らないかい。Sランクになつたら。ユニークな称号がつき易いんだよ。」

「そうだったのか、それじゃあ俺のだな」

名前	ジン	種族	人間	性別	男
ギルドランク	A				
能力ランク	S	気力	SS	魔力	A
チーム	『世界を結ぶ者達』				
称号	聖痕使い	精霊王の友人	救世主	英雄	11人の女に愛される男
	奴隸の解放者	精霊術師	準貴族	超越者	

「き、氣力、がSSだつて。君もSランクじゃないか。」

まあ驚くわな。

「そんなんに驚くなよ。」

「ユニークな称号が多いですね。」

「これに、さらに精霊術があるとは」

ヤツシユとアーマインも驚いているようだ。

「なあアリシャ、『準貴族』つてもしかして」

「皇族との婚約の副産物だと思つ

「もしかして結婚したら皇族？」

「もちろん」

王侯貴族か、なんだかドロドロしたイメージしかないぞ。

「まあいいか、じゃあな『剛槍のカロル』俺は屋敷に戻るよ。三日後ぐらいに城に行つてくれ、話は通しておくから」

「わかったよ『英雄ジン』」

45話 からあげ

異世界242田田

「お兄ちゃん、何か食べたいものはないですか？」

フェリスが、膝の上から尋ねてきた。

「そうだな、からあげってわかる?」

フェリスは首を左右に振つて

「わかりません。どんなのですか?」

「えつと確か鶏肉に下味をつけて小麦粉を薄くまぶして油で揚げた
ものかな?」

「お兄ちゃん一緒に作りましょう」

「いいよ。でも急にびびったんだ?」

「その、甘えるなら今かな」と

お料理が甘えることになるところがフェリスらしいな。

「それじゃあ、お買い物に行こつか

「はい」

元気のいい返事が返ってきた。

今ジンとフーリスは、以前ハンバーグを作ったときに来た肉屋に来ている。

「いらっしゃい、この前はすみやせん」

「別にいいよ、なあフーリス」

「はい。あの後いつぱいお兄ちゃんに優しくしてもらいました。」

「今日は鳥肉を買いに来たんだが、何か良いのはあるか?」

久しぶりの前の世界の料理の再現だ、良い物で作りたいと思つたのだが

「鳥肉かい、融通してやりたいんだが、本当に今は良いのがなくてなあ。すまんな」

「何かあつたのか?」

「いやね、お国がどいつも買い占めているらしくてなあ。ただでさえ鳥肉の類は、他の肉に比べて供給が少ないんだよ。獲物が空を飛ぶからな。」

「せうか、ちなみにここは辺りで一番いい鳥型の魔物はどうしているか知っているか?」

「それならノーバル山のフリールバードだな。」

ノーバル山には、一度行った事がある。ティリエルの父が住んでいる山だ。アルベルトにも会いたかつたからちょうどいい。

「よし、フェリス、ノーバル山に行こう。」

異世界244日目

「お兄ちゃん、すごい行動力です。」

「いいじゃないか、どうせ暇だつたし。」

ジン達は、ノーバル山にやつて来ていた。メンバーは、ジンとフェリスとティリエルとテツのだけだ。これは、移動に空を飛ぶためティリエルに乗れる定員がフェリス一人だけだったからだ。

「お兄様、お父様に会つていいくのですか？」

「帰りにな、これから的事とか色々話したいからな」

「主、そろそろフリールバードの生息地だから、刀になつとくね」

頭上から声が聞こえてきた肩車をしてやつていたのだ。

「ああ頼む」

そういうと小太刀が前に落ちてきた。それをつかみ腰に挿す。それ

と同時に、風による探知を拡げる。

「見つけた」

「何処ですか？」

「あつち

指を指して方向を教える。

「やつてみる？」

「やります！」

返事と共にティリエルが銀龍に姿を変え宙を舞う。以前乗せてもらった頃に比べ姿を変える時間が短くなつた。それに空を飛ぶ姿は軽やかで優雅だ。

ティリエルは、ここ数ヶ月の特訓で、自分にしかない飛行能力に磨きをかけた。

速度、体力共にかなりの上達だ。

現にティリエルは、素早くフリールバードを捕捉してすでに戦闘に入つている。

フリールバードは、風を操る怪鳥だ。大きさは今のティリエルとあまり変わらない。

ティリエルは、フリールバードのカマイタチや嘴を回避して背後を取る翼を掴む。そのまま降下してフリールバードを地面に叩き付ける。そこを、フェリスが

「魔の風よ、鋭利な刃となりて、我が敵を切断せよ『ウインド・カッター』」

風の刃で首だけ綺麗に切り落とす。フェリスは精度と威力そして多様性を目指した。

得意分野とはいえ、Bクラスの魔物に危なげなく勝利した。ジンは年少組の成長に、胸が熱くなつた。

しかし、感動に浸るのはここまでだつた。じつちに、フリーブードの群れが接近していた。

ジンは背中のボードを地面に下ろす。

ボードは、テツに合わせて黒を基本としたカラーリングだ。これには、『浮遊』と『障壁』の魔法がかかっている。魔力を通すことでの宙に浮くことができる。さらに風の精靈術を合わせて空を飛ぶのだ。

「ティリエル、フェリス数が多いから後は俺がやる。」

「「はーい」」

この飛び方は、浮遊に精靈術を使用しないので空にいる時も精靈術が使えるのが利点だ。

そこからは、ジンの高空戦の訓練の時間になつた。空を舞いながら炎を雷を放つてフリールバードを打ち落とす。戦闘が終わる頃、ジンの高空戦はある程度形になつていた。

地に落ちたフリールバードはフェリスとティリエルが『採取』で鳥肉を手に入れていた。

ちなみにこのボード、ただの木の板に魔法を刻むことがほとんど無いため、特注になつてしまい、五万ギルもした。

百万一 五万二九十五万ギル

「お兄ちゃん大漁ですね。これだけあればいろいろ試せますね。」

「そうだな。数ができたらアッシュに持つていってやるか、ギルドのこと押し付けてしまったからな」

その後、アルベルトに会つてから皇都に戻つた。

このとき、アルベルトと一緒に着あつて少々地形が変わつたがそれは余談だ。

異世界247日目

フェリスの唐揚げは絶品でした。

今は城のアッシュに、お裾分けに来ていた。

フェリスとアリシャ（城門で待ち構えていた）を連れてアッシュの部屋に向かう。

「アリシャよく來るのがわかつたな」

「婚約指輪の力。居場所がわかる」

そんな隠し機能が

「どうやるんだ？」

頬を染めて

「ひ、秘密」

すげえ気になる。

アッシュの部屋に着いた。

「アッシュ差し入れだ。唐揚げつていう俺の世界の食べ物なんだが」

「ジン久しぶり、ありがたく頂くよ。」

アッシュの部屋には、書類の山ができていた。

「大変そうだな？」

「・・・いや、ジンがギルドの件、丸投げして僕の仕事増やしたんじゃないかな」

呆れ顔のアッシュと面白そうに笑うジン。二人の間には確かに絆が見えた。

「そりだけどさあ、俺があいつらと打ち合わせしたらその内、殺しちゃうかもしれないぜ」

「何があつたか知らないけど、それは困る」

「だろ、それじゃあ邪魔しちゃ悪いしお暇するは、差し入れここに置いていくな」

「ああ、また来てくれ」

部屋を出るとカルモンド王国の王と王子がこちらに歩いて来た。

「やあ、グスター王にエクス王子お久しぶりです。」

「会議で決まった役割を放棄したようだな。」

「いろいろあつたんだよ」

思々しそうにこちらを見ているグスター王がフェリスを見て

「うん？ その娘は？」

「フェリスのことか？」

「フェリス？ ……いやなんでもない

「やうか、じゃあな」

ようもないのとその場を後にする。

「あの娘、グーロム王国の」

「父上はじめましたか？」

「いいや少し面白いものを見つけたのだ」

グスター王の視線は、元グーロム王国王女のフェリスを見ていた。

「気づかれたな。」

「何が？」

「フーリスの正体に」

「えつ、もしかしてわいきの王様ですか？」

「ああ」

フーリスが顔面蒼白で涙を浮かべている。

「わたし、どうしたら、お兄ちゃんに迷惑が」

「大丈夫だよ。俺が何とかするから。それに実はそんなに問題でもないしね」

「ぐす、やうなんですか？」

「ああ、だから泣かないで」

「はい、お兄ちゃんを信じます。」

「よし、それじゃあ屋敷に戻ろう。」

早めに解決してやらないとな、と思いながら帰路につく。

46話 世界防衛会議・一回目

異世界260日目

魔物の大侵攻までちょうど100日間になった日に、各国が集まつての『世界防衛会議』の一回目が開かれることになった。

今回の主催はまとめ役に決まったクイント皇国だ。もちろん以前の主催者のジンも参加することになった。

ジンはこの会議に、レティーシアとフュリスを同行させている。

今回の会議では、確認が主なものになった

「軍は東西南北に分けました。」

今回の進行役は、連合のまとめ役になつたクイント皇国のアッシュ皇子がやっている。

「これが内訳になります。ここでは小国の兵を連合兵とさせて頂きます。」

東方軍は、クイント皇国10万とウルティア国3万、連合兵2万の15万

西方軍は、ヴァーテリオン帝国8万とクラフト商国5万、連合兵2万の15万

南方軍は、リニヨン教国6万とテンブル騎士国6万、連合兵3万の15万

北方軍は、ファーランド王国5万とヤマト国5万とかカルモンド王國5万の15万

「」の合計60万の兵が、主力になります。さらに遊撃部隊として冒険者と連合兵の混合で5万を用意しています。さらに独立部隊として1万を用意しています。」

全部で66万の軍隊か、やつとこれだけの力を集めることができた。

「軍の責任者は、東方軍をクイント皇国が、西方軍をヴァーテリオン帝国が、南方軍をテンブル騎士国が、北方軍をヤマト国が、担当します。そして遊撃部隊をラシード将軍にお願いします。独立部隊は、ジン殿にお願いします。」

「ちょっと待った。」

このタイミングでグスター王が待つたをかけた。

「ジン殿に独立部隊を任せるのは反対です。」

「何故ですか？グスター王もジン殿の実績は」存知でしょう

他の王たちも怪訝な顔をグスター王に向ける。グスター王はそれらの視線を無視して。

「ジン殿は、一度会議で決まった役割を放棄している。そんな者に1万の部隊を任せいいとは思えん。」

周りの王からも

「確かに少々無責任な気がしますな」

「それにジン殿はあくまで平民ですし」

「何か役職についているわけでもないしの?」

等と、次々にジンに対する不満の声が出てきた。今不満を口にしているのは小国の王達だ。彼らは小国とはいえ一国の王たちだ、冒険者にあれこれ言われるのに、抵抗があつたのだろう。今まででは、大国がこれといってジンに対して何も言わなかつたので黙つていたが、カルモンド王国がジンを非難したことで小国の不満が表に出てきたのだ。

「それに実績といつても皇国内のことだ、我々にとつて利益ある行動を取つたわけではありません。」

「確かにそうですね」

「今のところジン殿には兵を出せと言われただけだな」

「ジン殿は何を考えているかわからないところがありますね」

「しかし、ジン殿はグーロム王国の蛮行を阻止した実績がある。これはあなた方々にとつても意味のあることだったはずです。」

アッシュがジンを擁護する。

グーロム王国の奴隸推奨の犠牲になつていていたのは、そのほとんどが小国だつた。グーロム王国は小国をいくつも食らつて大国になつたのだ。小国の王達は、グーロム王国に怯えていたのは確かで、ジンがグーロム王国を潰した時には感謝していたのだ。

「それは確かにそうですが。」

「グーロム王国を、潰したこととは感謝しているが」

小国の勢いは治まつたが、グスター王はこれを待つていたと言わん

ばかりに

「確かにジン殿はグーロムを滅ぼした実績がある。」

グスター王はそこで終わらず。

「だが、ジン殿はグーロム王国の王族、ミリー王女を匿つておるようですね」

「ほ、本当ですか？ジン殿」

これにはカルディアをはじめとした大国の代表も驚いている。

「・・・」

ジンが黙つているとグスター王が続ける

「異世界から来たジン殿は知らないかもしれないが、国が滅んだときその国の王族は全員が斬首なのだよ。つまりミリー王女は本来なら生きていてはいけないのだよ。それに、グーロム王国に酷い目に会わされた人は多い、王女の生存を彼らは認めないと。それを君は匿つているこれは重大な裏切りだ」

「それは本当ですか？ジン殿」

「それは、あんまりではないですか」

ジンにとつてそれらは理解ができない感覚だ。何故親がやつた責任を子どもが取らされるのか理解できない。それがこの世界の王族の責任の一つとしても、それは歪んでいると思つ。

「そして、そこにいるのが、グーロム王国の王族の一員ミリー王女だ」

グスター王がジンの隣にいるフエリス指差して宣言する。フエリスの顔色が悪くなつていぐ。

周りの王たち、これには言葉を無くした。それもそつてこんな場所に本人を連れてきているとは誰も思わない。

「…………」

「何か言つたらどうなんだ？ジン殿」

「ああ、終わりましたか」

「貴様ふざけるのも大概にしうよ」

おお、ジン殿から貴様に戻つたよ。これだけで余裕がなくなるのか、やつぱり小物だな。大体俺をここから排除してこれからどうするつもりなんだか。そこは一度忘れて相手をすることにする。

「私としては、どうして親がやつたことを子どもが責任を問われるのかわからないんですよね」

「それが王族といつものだ、自らの命で物事を終わりに導くのも王族の務めだ」

「年端もいかない。何か罪を犯したわけでもない者を殺すことが正しいと？」

「そういうものだ。」

「「」の場に、フエリスのことを知っていた人はいるのですか？」

「誰からも返事はない。よつするに知らなかつたのだろう。

「それなら問題ないでしょう。そのまま知らないものとしてすゞせばいい」

「そんなことが認められるわけがないだつ」

「別に認めてもらひ必要は感じませんね。」

「ふん貴様ならそう言つだらうな。だから、私は貴様ではなく別の人独立部隊を任せんべきだ、と言つているのだよ。」

これに多数の賛成あつた。そこでジンが

「ああ～、盛り上がつてゐるといふ悪いんだが、あなた方は勘違いしている」

「・・・何をだね」

「フエリスはグーロム王国とは無関係だ」

「な、なにを言つてゐる。どつこつ意味だ？」

「フエリスは王女ではないとこつことだ」

「ふざけるな！私はグーロム王自身から娘だと紹介されたのだぞ、それを」

「騙されたんじゃないか。」この子はただの村娘だよ。村を焼かれ城に監禁されていたのを助けたんだ」

「な、何のためにそんなことで嘘を」

「さあ?、Hクス王子と結婚させるためとか、王族の肩書きはいろいろ使えるんだろ」

「何を証拠にそんなことを」

「じゃあ聞くがあなたは何か証拠を持っているのか?」

「だから私は直に聞いたと」

「それは証拠には、ならないでしょう。(馬鹿かこいつは)なにより何故他の王の方々はフェリスの存在を知らないのですか?..」

「そ、それは」

「その時点でのフェリスが王女である可能性は限りなく低いお思ひのですが。フェリスは、ただの料理好きの村娘ですよ。今度振る舞いましょうか?..」

「確かに私もグーロム王に子どもがいるなど聞いたことがありますんな」

クルト皇帝の言葉を皮切りに

「確かに王女というのは不自然ですね」

「決め付けるのは早計でしょう」

「料理が得意な王女とは聞いたことがありますから」

「お兄ちゃん」

フェリスがジンの首に抱きつぶ。

そのフェリスを見てクルト皇帝が、

「そんなに小さな女の子を答えが出ない話で不安させるのもない
でしょう。独立部隊は、ジン殿に任せることでいい」と

「しかし

グスター王が食い下がるが

「元々この一万は、グーロム王国の戦闘奴隸を中心とした者たちで、
皆ジンの元で戦うことを探んでいる者たちだ。ジン殿の下で戦わせ
るべきでしょう。」

「……わかった。好きにしろ」

もつ無理だと理解したのだろう、グスター王は自分の席に座った。

この会議では、グスター王に恥をかかせる事になってしまったが、
別にいいだろう。正直グスター王は、何かと突つかかってくるから
邪魔なのだ。適当な時にエクス王子に入れ替えたほうがよさそうだ
な。

その後は、細かい指揮系統を決めた。正直知らん名前ばかりなので
省く。

これ以降は、何事もなく一回目の『世界防衛会議』は終わった。

47話 テイリエルの誕生日

異世界288回

今日はティリエルの誕生日だ。

「ティリエル、入つていいか?」

「どうぞ」

ジンはティリエルの部屋に来ていた。

「お兄様、お待ちしていました。」

部屋には、しつかりめかし込んだティリエルが待っていた。今日はティリエルと『デート』の約束をしているのだ。

部屋に入るといきなりティリエルが近づいてきて、抱きついてくる

「今日はお兄様を独り占めしていいんですね。」

「ああ、もうだぞ」

「えへへ~」

早くもティリエルの頬が緩んでいる。

「行こうか、俺たちにだけできる『デート』」

背中にあるボード改め『黒飛板』に手を向ける。

屋敷の庭から空に飛び立つ

「ティリエル競争するか？」

「はい、負けませんよ」

ティリエルと競争したり、のんびり漂つたり、空中戦について話したりと時間を過ごす。競争の結果は、速度は引き分け、機動力はジンが勝ち、持久力はティリエルが勝つた。

青空をティリエルと満喫してから皇都に戻る。

「楽しかったです。次はどうしますか？」

「行きたいところがあるんだ、付き合ってくれないか？」

「ビーハーですか？」

「装飾品店」

「これはこれはジンさん。よつこお越しくださいました。ご注文の品はできていますよ。」

店主がジンを出迎える。

「これは、以前テツの首飾りを買ったところだ。その後も屋敷のメイ

ド達にプレゼントを買つたりとすっかり常連になつた。誕生日を聞いてから、プレゼントを特注で作つてもらつていたのだ。

「見せてくれ

店主が持つてきたのは、銀で作られた腕輪が二つあった。その腕輪には、複雑な文様が描かれており一箇所だけ窪みがある。ジンは、そこに竜宝珠を取り付ける。

「お、お兄様、竜宝珠を、使ってもよいのですか？」

慌てるティリエルに

「この品は、魔具を取り扱う方にも協力してもらつて作った物でして。竜宝珠をつけることで完成すものでして。身につけた者の魔力、気力の底上げ。腕輪同士の通話。常時展開の障壁などの機能が付いております。」

「名前は？」

「これを私に？」

「ああ、俺とお揃いだ。」

「『白銀の龍輪』と言います。」

自分の腕につける、そして銀の腕輪を見せながらティリエルの頭をなでる。

「ううとうときは、キスとかの方が良いです。」

嬉しそうに頬を緩めながらそんなことを言つティリエル。

「それは家に帰つてからな。」

『白銀の龍輪』をティリエルの腕につけてあげる。右腕には、『絆の腕輪』。左腕には、『白銀の龍輪』が輝いていた。

「ありがとうございます。お兄様、一生大事にします。」

日が落ちてきたので屋敷に戻つてティリエルと一人で夕食を取ることにする。

夕食が終わり夜が近づくにつれティリエルが拳動不審になつていた。
どうやら、夜のことを考えて緊張しているようだ。

「ティリエル」

「ひやー」

重症だな。変な声で返事をしてしまい恥ずかしそうにしているティリエルに

「怖い?」

「えつ」

「「これからやることが

「怖くは、ないです。ただ、私はやっぱり他の方より子どもっぽいのでお兄様をがっかりさせてしまうのではないかと、不安で。それに私は、龍だから成長が遅いから。」

ティリエルは、龍の寿命の長さを気にしていたようだ。

「大丈夫だよ。俺はティリエルのこと大好きだから」

「お兄様、私も大好きです。愛しています。」

「ありがとうございます。それにね、皆にはまだしつかりと話していないんだけど、俺は人間でありながら、長命なんだ。」

「それって、もしかして」

「ああ、俺と同じ時間を生きられるのは、今の仲間の中では、テツとティリエルだけなんだ。」

この世界のエルフの寿命は400年ほどだからイリヤでも難しい。力をつければ少しは違うだろうが、今はまだ無理だ。

「どうして長命に？」

「「」の世界で能力ランクが上がれば寿命が延びるのは知ってる?」

「はい、知っています。龍でも力がある者だけが古龍へとなりますから」

「俺はすでに能力ランクがSだし。さらに精霊界で生活したことでもが重なつて長命になつたんだ。今までも700年は生きられそうなんだ。だから小さいとかあんまり気にしないでくれ。俺にとつてティリエルは救いなんだ。」

「はい、一生お傍にいますよ。『お兄様』」

その後、ティリエルは「お、お風呂に行つてきまー」と残して部屋を出ていった。

ジンはティリエルとの会話で再確認した。このままだと、今の仲間達といつか別れることになる。

だが、この世界を守るためにには、力がいる。力を手にすれば寿命が延びる。寿命が延びれば一人になる。

人との別れなんて当たり前のことなのにな、俺は強欲になつたようだな

「暇なときこ、長寿の方法でも探してみるか」

ジンは、この世界を見て不死は無理でも不老長寿の可能性はあるのではとのじのじう考えていたのだ。

「まあそれも、魔物の大侵攻を終わらせてからかな～」

まあ、適当なときこ探してみるか。

その夜

ティリエルが寝巻き姿で、ジンの寝室を訪れていた。

「お兄様、いますか？」

「こ、こ、おいで」

「お、お邪魔します。」

「そんなに硬くならないで」

「やせじくしてくだれ」ね

ジンはベッドに腰掛け、ティリエルを膝の上に乗せる。

「もちろん、ティリエルとは数百年の付き合になるからね。しかし時間かけて開発してあげよう」

「うー、みなさんの言ったとおりです。」

「なんて言つてたの？」

「夜のお兄様は、ちよつと意地悪だと」

「たしかに、そうかもな」

「夜のいながら、寝巻きを脱がす。

「お兄様、展開が早いです。その、キスから

「わかった。」

ちょっと意地悪をした。ティープキスを十分ぐらい休み無しで続けた。終わった頃にはティリエルはトロトロになっていた。

「愛してる」

「ふあい、お兄様」

その日は、ティリエルにとって色々な意味で忘れられない誕生日になつた。

48話 第1回 世界防衛戦・戦前

異世界350日目

大侵攻の日まで10日となつた日、ジンは『無得と魔物の大地』に立つていた。

そこには、すでにかなりの魔物が発生していた。ジンたち、先行部隊は来るべき時のために魔物の駆逐を行つていた。殺すと黒い粒子になつて消滅するので後始末は必要ないのは楽だ。来ているのはジンの独立部隊の内の5000人だ。

「本隊が来るまで後三日だつたか？」

「はい、三日後になります。」

ジンの間にミニコアが答える。

「今日中に止付きたくそうだな、どうじょっか？」

「ゆっくり待ちましょう。そして樂しことをしましょう。」

「まあそうするか」

何事もなく終わればいいんだがな。

異世界353日目

昼前には主力が到着し始めた。

「ジンお疲れ」

アッシュがジンに近づいてくる。

「一日前からのんびりしていたがな」

「それでも警戒はしていたんだろ。あとは、僕たちが引き継ぐよ。」

「ああ、任せる。」

その後は、忙しかった。兵隊が次々と到着してそれを配置につかせたり、人員、装備の確認する。さらに堀を作つたり防御柵を作つたりと大忙しだった。ジン達にはあまり関係がなかつたが。

異世界360日目

魔物の大侵攻から一時間ほど前にはすべての軍が配置についた。黒い半球の東西南北を扇型に展開した軍勢が囮み、黒い半球との間には、深い堀が一重に掘られている。その次には防御柵が立てられている。

できるだけの準備はした、力も付けた、あらゆる力を集めた。あとは結果を出すだけだ。

取つた戦法は、堀の外から魔術部隊が魔術で殲滅して他はそれを援護する、そして軍を三万ずつにわけ3時間前後で入れ替える、といふものだ。3時間の戦闘の後に1~2時間の休憩できることになるつまり半日もあるのだ。遊撃部隊は、南西と北東に配置して、不利になつた戦場に投入される予定だ。

戦場が広すぎ、すべてを見通せる者がいないため総指揮官はおりず
東西南北ごとに指揮官を置いている。

東方軍はクイント皇國のクルト皇帝が
西方軍はヴァーテリオン帝国のラインツ王が
南方軍はテンブル騎士国の大ヤック騎士王が
北方軍はヤマト国の大リガネ王が
戦争に慣れているHが、指揮官になった。

「やつこえは連絡は、どうやるんだ？」

全軍を見渡しながらアッシュに尋ねる、すると呆れた表情のアッシュ
ユが

「・・・ジンのところも配給してるとだぞ」

「何をだ？」

「これだよ」

とこつて出してきたのは、数字の書かれた腕輪だった。書かれていた
数字は3桁でこれには332と書かれている。

「これはね腕輪」と番号があつて、登録している番号の腕輪と通
話ができるんだよ。」

まるでケータイだな。

「便利なものがあるんだな。」

「あらかじめ登録したもの同士しか通信できないけどね」

「高いのか？」

「そりゃあもう、世界に千個しかないんだからね、一個3百万ギルはするよ。だから大事に使ってね」

「わかったよ。」

最後の会議が開かれた。

「いまさら話すことなどあるのか？」

キリガネが疑問を口にする。

「これといってないな。ただ、これだけは伝えておこうと思つてな、・・・前回も話したが侵攻はこれが最後じゃない、だからできるだけ兵を死なせないように戦ってくれ。これは相手を潰して終わりの戦いではないんだからな」

「難しいことを言つたジン殿は」

他の王が苦笑する。戦う以上被害は出るのだ。
その時ジンの腕輪が淡く光りだした。それもそうだとジンも苦笑する。

「なんだ、通信？」

ジンは不思議そうに周りを見る、本来通信できる人間は皆ここに集まっている。ジンは不可解ながらも無視もできず通話に出る。

「誰だ？」

「【英雄ジンだな。】」

会議の途中なのだが、腕輪はそんなことお構いなしに続け、会議をぶち壊す発言をした。

「【お前の屋敷の人間を数人預かっている。人質の命が惜しければお前は、戦闘には参加するな】」

「な、なにを言つている。俺を戦線から外すことには何の意味がある？」

「【お前に活躍されでは困る者がいるのだよ】」

「わかつてゐるのか、世界が滅ぶんだぞ」

「【私の知つたことではない、イエスかノーかだけを答える】」

「・・・わかつた。戦闘には、参加しないこれでいいか？」

「【それで結構。もし参加すれば女は犯した後で殺す。せいぜい静かにしておくんだな】」

それで通話は切れた。

「ジンさんじつするのですか？」

トウカが聞いてくる。

ジンはこれに

「ちょっと待つて。クルト、皇都に確認を取ってくれないか？」

「わかった」

しばらくして

「ジン君残念だが君の屋敷が何者かに襲撃されたらしい。タツド師団長が、懸命に捜索している。だから」

「俺は一度皇都に戻る」

「ジン君それはいけない。これは君が始めたことだらう」

「貴様、またしても役割を放棄するつもりか！」

「ジン殿、考え方数人の命と世界そのものどちらを取るか、など明白だらう」

王たちが口々にジンを止めるが、

「確かにこの戦いは俺が始めたものだが元々この戦いはこの世界のものだ。そしてこの世界が俺の大事なものと引き換えにしか守れないのなら。そんな世界を俺は守るつもりはない。」

このジンの世界を見捨てる宣言にクイント皇国の人間は戸惑った。ジンが見捨てるといったこの世界には万単位でジンが救った人々がいることを知っているからだ。しかし、他の王はそうもいかない。

今まで肯定的だった大国の王たちがジンに非難の声を投げかける

ヘンリー王が

「ジン殿、ふざけるなよ無責任にもほどがあるだろ？」

キリガネが、

「ジン俺はお前が気に入っていたんだぜ。だがなそれはだめだろ？」

カルディアでさえ、ジンの言葉を理解できないと言つよう

「ジン殿、我々を見捨てるのですか？」

他の王たちも不満を口にする。
ジンは彼らを

「だまれ」

罵倒した。

「あんたたちが、俺をどう思つているかは知らないがな。俺は聖人
じゃないんだ。そして俺は本来この世界とは無関係の人間だ。俺が
この世界に来て世界を救うのはただ救いたかったからだ。そして今
人質に取られているのは、この世界で俺の世界を作ってくれている
人たちだ。俺はこの世界では異物だ、だから俺は、・・・俺の世界
を、居場所を守る」

王たちもこれには黙つた。自分たちがジンに力を貸しているのではない。自分たちが力を借りてることに気づいたのだ。しかし、そ

れでも自分たちを見捨てると言われて平静ではない。

「なら、我々は、どうすれば」

「勘違いするなよ、俺は帰つてくる。」

「……は？」「」

「俺は今日の夜には、帰つてくる。それに助つ人も呼んである。あんたたちは、それまで持ちこたえてくれればいい」

「なにをどうやつて？」

聖女ウリアが、何を聞けばいいのかもわからず尋ねる。

「いやつてだ、風の聖痕ステイグマを発動『嵐帝』」

ジンを風が包む。精霊術師以外にも見えるほどの精霊が集まり風が縁がかつて見える。

「もう一度言つ俺は、かなりず帰つてくる。それまで持ちこたえてくれ」

ジンは言い終わると空へと消えた。

ジンが去つた会議の場では

「我々はジン殿に頼りすぎていたのだろうか？」

「しかし、準備はほとんど我々で」

「それも我々に仕事をくれた言えるし、あちらはあくまで個人だ」「とりあえず、持ち場に着いつ。これは我々の世界を守る戦いなのだからな。」

各国の王たちは、自分たちの持ち場に戻つていった。

トウカ姫、クリス王女、聖女ウリアは、心配そうに空を見ていた。

49話 第1回 世界防衛戦・開戦

ジンは風を使って仲間達に皇都に戻ることを簡単に説明した後、今自分に出せる最高速度で空を飛んでいた。

「絶対に助ける。そして犯人は拷問のあとに殺す」

会議の場で見せていた冷静な態度とは違い、その顔には明らかな怒りを浮かべている。
自分の身内に手を出されて怒り心頭だったのだ。

戦場の方はあまり気にしていなかつた。あそこには66万もの軍がいるのだ、自分ひとりが抜けてもそれほど大局には関係がないとジンは思つていた。

その戦場では、魔物の大侵攻が始らうとしていた。

黒い半球が一斉に泡立ち始めたのだ。大きな黒い風船のようなものがいくつもできている。

遠い空を飛んでいるジンが持つてゐる懐中時計のような物の数字がゼロになつた瞬間に

パンパン、パパパン、パン

すべての風船が弾けた。その瞬間、東西南北の軍からあつとあらゆる遠距離攻撃が放たれた。

東方軍では、クルト皇帝とカルティアが指揮をしている。

「全軍攻撃やめ、初戦を担当する部隊以外は防御柵付近まで後退」

最初の攻撃のために前進していた軍を下げる。

これは、他の軍も同じだった。

土煙が晴れてきたころ

魔物の消滅を意味する黒い粒子のなかに大きな人影が見えた。それは大量のストーン・ゴーレムだった。大量のストーンゴーレムは、堀へと近づき自ら身を投げ出し自らの体で堀を埋め始めたのだ。

「皇帝陛下あれば厄介です。中央のゴーレムに集中して倒しましょう。バラバラに攻撃しては堀を無力化されます。」

側に控えている、ゲオルグ将軍がクルト皇帝に提案する。

「わかつた。第一魔術部隊から第十魔術部隊は中央のストーン・ゴーレムを集中攻撃。」

前線の魔術師の部隊に伝令が届くと

「了解しました。第一魔術部隊右前方のストーン・ゴーレムを攻撃します。『フレイム・シユート』準備・・・・放て」

「「「『フレイム・シユート』」「」」

いくつもの火炎弾がストーン・ゴーレムに直撃して粉碎する。第一魔術部隊は、ゴーレムが黒い粒子になるのを確認して次の目標に移る。クイント軍ほど動ける軍隊は、他の国ではヴァーテリオン帝国に少しあるだけだ。クイント皇国軍は平均能力ランクと鍛度が高い

ことでも有名なのだ。軍という集団ではもつとも敵にしたくないタイプの軍隊だ。

適切な指揮により、東方軍は堀の維持に成功している。

西方軍のヴァーテリオン帝国では、

「ドラグーン・チーム竜騎兵部隊に、ストーン・ゴーレムを攻撃せろ。」

「御意」

ラインツ王は、堀を維持すること優先して虎の子の竜騎兵を投入した。

竜騎兵は、空を進みストーン・ゴーレムを次々と粉砕した。手に持った巨大なランスで貫いたり、相手の攻撃が届かないところから魔術を放つたり、騎乗する竜のブレスを浴びせたりと大陸の最強の部隊の名に恥じない働きをした。

西方軍も竜騎兵部隊のおかげで堀の維持に成功した。

しかし南方軍と北方軍は、有効な手を打てずに一時間後一つ目の堀を無力化されてしまった。

北方軍の三国の王が集まる天幕では

「なんなんだあいつらはー！」

キリガネが苛立つた声をだす。

「これは、思つた以上にきつい戦いになりますね。」

ヘンリーの声も硬い。

彼らが言つてゐるのは、魔物がとつた最初の行動のことだ。やつらは、まず最初にストーン・ゴーレムで堀を無効化してきたのだ。つまり、こちらの戦術に合わせて魔物を出していることになる。

各国の予想では、所詮は魔物という考え方があつたが会戦わずかでの認識を覆されたことになる。

「報告します。跳躍力のある魔物が、第一の堀を飛び越えて接近中です。」

「こつもやすやすと、・・・重装歩兵で迎撃。後方の部隊は、防衛柵の後ろまで後退せよ。」

「何故我が国の兵なのだ、こじ自慢の武士を出せばいいだらう

重装歩兵は、カルモンド王国自慢の部隊だそれを使つと聞いてグスター王が喚いている。キリガネはうんざりしながら。

「あなたの国の重装歩兵は足が遅い、しかし守りが堅いこれは当然の采配だ。グスター王はあなたはこ自分の軍にお戻るといい。」

「なんだと、危険ではないか」

「大丈夫だ、今の魔物はこランク以下の小物ばかりだ。」

「・・・わかつた。」

グスターが戻った後、

「何故あんなのが王をしている。」

「キリガネ殿、それはおそらくエクス王子の存在でしょう。カルモンド王国では、エクス王子を次の王にと決まっている。王位継承を円満にするために、グスター王を放置しているようです。」

「息子に守られる王位か、そこまでいくと哀れだな」

「そうですね。しかし、キリガネ殿今は戦闘中です。戦場に意識を向けましょう。」

「そうだな。」

パパン

ストーン・ゴーレムだ。

「またが、魔術師隊に、一体ずつ確実に倒すよ」と云ふ。

第一の堀が無力化されるのも時間の問題だろう。

南方軍では、少々状況が異なった。

「はっ、橋だと」

ジャックが担当している南側の堀に、大蛇の橋ができていて、その橋を使って多数の魔物が堀を越えてきた。

橋は、大蛇が3体が絡み合つてできている。それが3つある。

「三騎士を出せ。大蛇を潰すように伝えろ」

三騎士とは、テンプル騎士国内で最高の騎士三人に与えられる称号で、それぞれ特別な武具を与えられていた。

聖劍カリバーンを与えられた聖騎士
竜剣ドラグニルを与えられた竜騎士
魔劍レヴァンティンを与えられた炎騎士

三人の騎士は、それぞれ別の大蛇の橋に馬を走らせた。

聖騎士に与えられた聖劍カリバーンには破魔の力があり、魔物を一撃で斬り殺す力をもつていて。聖劍は、魔物に対して圧倒的に有利な武器なのだ。

聖騎士は、近づく魔物をすべて一振りで片付けて難なく橋にたどり着く。たどり着くと聖剣に大量の魔力を流す、すると聖剣の刃が巨大化した。これが聖剣の二つめの能力だ。聖騎士は聖剣を振り上げ、橋の上にいる逃げ場のない魔物ごと大蛇を一振りで真っ二つに斬つた。

これで、一つ目の橋が落ちた。

竜騎士に与えられた竜剣ドラグニルは、持ち主の気力のランクを二つ上げる力がある。

竜騎士は人とは思えない動きで敵を葬つていた。たとえば、自分の倍はある熊型の魔物を片手で投げたり、ゴーレムのパンチを素手で受け止めたり、十数メートルの跳躍を見せたりした。

同じく大蛇の橋にたどり着いた竜騎士は、大蛇の頭を蹴りあげると大蛇の頭が浮かび上がった。そして落ちてきた頭を切り落とした。

これで二つの橋も落ちた。

フレア・ナイト
炎騎士に与えられた魔剣レヴァンティンは、炎の魔剣だ。魔力を出すことで炎を生み出す剣だ。炎の精靈を集める力も持っている。炎騎士は、進行方向に炎を飛ばして魔物を焼き払い道を作る。その炎は、ストーン・ゴーレムを溶かし燃狼すらも焼いていた。

炎騎士も大蛇の橋の場所にたどり着いた。炎騎士は、魔剣を大蛇に突き刺し内側から燃やし尽くした。絡まっていた他の大蛇もろとも灰となつた。

これで最後の三つの橋も落ちた。

「さすがは、テンプル騎士団の三騎士ですね」

リニヨン教国のカリウス教皇が三騎士を賞賛する。

「どうも。三騎士を下がらせる、戦いはまだまだ続くのだからな。第1騎士団から第8騎士団を前面に出せ。教皇、神官騎士団を出してください。」

「わかった。君のところの騎士団の穴を埋めればいいのかね？」

「話が早くて助かります。」

攻撃が得意なテンプル騎士団が押し返し、防衛が得意な神官騎士団

が守ることで南方軍は、戦線を押し返すことに成功した。

しかし、北方軍は、さらに一時間後、会戦から四時間たつた頃に第一の堀も無力化されてしまった。

50話 第1回 世界防衛戦・助つ人

「何をしていいのだ、カルモンド軍に何があった！」

第一の堀を2時間で無力化されてしまった北方軍。戦線の防衛を担当したカルモンド軍の動きがあまりにも遅すぎたのだ。

「それがどうやら、軍中のグスター王が何かと軍を勝手に動かそうとしているようとして、指揮系統に混乱が生まれているようです。」

「なつ、なん、だと・・・やつは、正氣か。」

キリガネは、呆然とした表情を浮かべる。

「それが、どうやら自軍に戻ったことで、気が強くなつたのか自分を守るように将兵に強要しているようです。」

「・・・・・ヘンリー王、あいつ斬つたらダメか？」

「聞かないでください。一瞬許可しそうになつましたから。」

「あのバカ、・・・まだ一十時間もあるんだぞ。ずっとあいつのお守りをするのか俺達は」

「IJの戦いが終わつたら、わざと王位を退いてもらいたいものです。ですが今は」

「わかっているさ、すべての部隊を防御柵まで下がらせる。迎撃準備だ、相手はBランク以下の魔物だ、なんかなる。今はな

足止めの部隊以外が防御柵まで後退するが、またしてもカルモンドの軍が、遅れている。

そのせいでカルモンド軍が突出してしまっている。あれでは、集中攻撃を受ける。

「何をしているんだ、グスターは」

「どうするキリガネ殿？」

「・・・しかたない全軍戦線を一度上げる、カルモンド軍を引っ張り戻すぞ。グスター王は、もつと後ろに下げる正直邪魔だ。」

「閣下緊急事態です。」

「今度はなんだ？」

もつもつんざりだといった、風情のキリガネ。

「黒い半球付近にノワールサイを確認しました、その数約百体。」

ノワールサイは以前リリスを苦しめたAランクの魔物だ。ノワールサイの突進の対処は回避が基本だ。しかし人間が密集するこの戦場で回避は、難しい。それに本来は群れないノワールサイが百体だ。

狙われるのはもちろん突出したカルモンド軍だ

「ヤバイぞ、いくら重装歩兵でも、あの数のノワールサイは止めら

れないぞ」

敵は、待つてはくれるはずもなく、ノワールサイの群れ？はカルモンド軍に向けて進撃を始めた。

その様子は、さながら角のはえた黒い壁が向かってくよつで、カルモンドの兵士は恐怖に包まれた。

「む、無理だろこんなの」

「逃げ場なんかないぞ」

「なんでノワールサイが群れてんだよ、おかしいだろ」

兵士が諦め絶望し始めた頃

ノワールサイの群れが吹き飛んだ。ジンの友人（友竜？）である銀龍アルベルトのブレスによつて。

アルベルトは、もう一度ブレスを放ち、堀を無力化させていたストーン・ゴーレムも吹き飛ばす。

アルベルトは、第二の堀を再生した後、一度キリガネとヘンリーの前に降り立ち人形を取る。

「君たちが、人の王か？」

「ああ、わたしはヤマト国^{ひとがた}の国王キリガネ」

「わたしは、ファーランド王國の国王ヘンリーといいます。」

「銀龍アルベルトだ。ジンくんの要請でこの戦いに助力する。」

「あなたがジンの言つていた助つ人か、これは心強いな。」

「父上先程のは・・・こちらのかたは?」

「そこに、トウカが天幕に訪れた。

「さつきの銀龍殿だよ。」

「えつ・・・・」、「」助力感謝します。・・・」それでジンさんへの風当たりも弱くなるといいのですが

「うん? そういうえばジンくんはどうしているのかね? 戦場にはいないようだが。」

「それが実は」

事の経緯を話す。

「そうか」

アルベルトはそれ以外の言葉を口にしなかつた。

そこに、キリガネが

「アルベルト殿聞きづらいのだが・・・どうまでやれる?」

「全力のブレスはあと二回だな」

三回だけか、いや三回もあると考へるべきなのだろうな。銀龍のブレスは、地形を変える程の威力だ。贅沢は言えない。

「改めてお願ひします。力を貸しください。」

軽々しく頭を下げる王一人の代わりにトウカが頭を下げる。

「もとよりそのつもりだ。娘も参加しているからな。」

「娘？」

「ああ、ジンくんと行動を共にしている。」

ジンさんのハーレムには龍族までいるんですか、とトウカが心の中で思つていると

「トウカ出遅れるなよ」

「ななな何をいつているんですか？」

トウカの顔がまるまる赤くなつていぐ。

これは珍しい。ジンのことをそれなりに意識してくるようだな、と
キリガネは心の中で思つ。

「いやお前の婿の」

「黙つてください。父上はわざと指揮に戻つてください」

キリガネは、面白いものを見れたとでも言つよつて「ヤーヤーしなが
ら指揮に戻る。

「はいはい、わかつてゐよ。各騎士団は魔物の駆逐を魔術師隊は、ストーン・ゴーレムを潰せ。今度は死守しろよ」

北方軍は一時間後、開戦から五時間ごろに戦線を押し戻すことに成功する。

北方軍が戦線を押し戻した頃、東方軍の前には赤い巨大な亀が現れた。

「階よける——」

東方軍の戦場では、無数の火球が空から降りかかってきていった。前衛部隊は、その火球をとともに受けのことになる。

赤い亀は、ランクAの火砲亀かぼうき、背中にたくさんの大砲門を持ちそこから無数の火の雨を降らせる魔物だ。ノワールサイ以上に硬くその火力で村を焼き尽くす危険な魔物だ。本来なら近接に持ち込んで一気に弱点である目や口を攻撃するのだが堀と他の魔物がそれを許さない、一方的に火球を降らされる状況になっていた。

「くそ、赤亀のやつ好き勝手やりやがって」

「またくるぞ、伏せろ」

また無数の火球が飛んできた。

「『水上壁』」「『水天門』」

突然二つの水の壁がでて火球を打ち消した。

「出てくる場所が悪かったですね」

「湖と川の国ウルティアの代表の力見せてあげましょ。」

それは、『水災の魔女』の称号を持つソフィアとウルティア国の代表カルディアによるものだつた。

その後も火砲亀の攻撃を一人は防ぎ続けた。一人が防いでいる間にティリエルが火砲亀に空を飛んで近づく。ティリエルは無数の火球をすべて回避して背中の仲間を火砲亀の前へと運んだ。

火砲亀の前に降り立つたのは、ジンの仲間のリリスだ。

「ここからは、私の番だよ。」

リリスはジンの仲間の中で随一の速さを生かして魔物も火球も避けて火砲亀の前までたどり着くそして両手で持ったエストックで目を貫く

「『スパーク・ショット』」

エストックを刺したまま頭の中を雷撃で焼いて止めを刺す。リリスは、火砲亀が黒い粒子になつて消滅するのを見届けてその場を脱出する。この時も魔物はリリスを捉えることができなかつた。リリスはそのまま堀の付近でティリエルに拾つてもらい退避することに成功した。

ソフィア、リリス、ティリエルの力は格段に上がつていた。

ソフィアは、軍隊の半分を守るほどの水の壁を何度も作り出した。以前のソフィアは威力に関してはジンに頼つていたのを魔術を組み合わせることで自分で威力を大幅に上げた。

リリスは、以前歯が立たなかつたAランクの魔物を瞬殺して見せた。ティリエルも、人を乗せての回避行動、体力、機動力に磨きがかかる

つて いる。

今 の 彼 女 ら の ギ ル ド カ ラ ド は

名前 ソフィア 種族 人間 性別 女
ギルドランク C
能力ランク 総合B 気力C 魔力A

チーム 「世界を結ぶ者達」

称号 水の巫女 精霊術師 水災の魔女 ジンの女

名前 リリス 種族 人間 性別 女
ギルドランク A

能力ランク 総合A 気力S 魔力B

チーム 「世界を結ぶ者達」

称号 ジンの護衛 熟練者

名前 テイリエル 種族 龍族 性別 女
ギルドランク C

能力ランク 総合A 気力A 魔力A

チーム 「世界を結ぶ者達」

称号 ジンの義妹 銀龍

とすっかり上級者の力を身につけている。彼女らのおかげで東方軍の被害は最小限に抑えられた。

しかし開戦から6時間がたつた頃、東方軍と西方軍も、第一の堀を無力化されることになる。もともと東方軍は、効率的な遅延でしかなかつた。そこに火砲亀の邪魔が決定打になつた。西方軍は竜騎兵^{チーム}に疲れが見えてきたので、自ら第一の堀を放棄した。

火砲龜の攻撃を受けた部隊以外には、目立つた被害は出でいないが、これで東西南北のすべての第一の堀は無力化されたことになる。

これからは、堀を越えられる魔物だけとはいへ断続的に戦闘が続くことになる。これからがジンとクルト皇帝が憂慮していた長時間の緊張状態の戦闘に入ることになった。

51話 第1回 世界防衛戦・外 救出

開戦から7時間たつた頃ジンは、皇都のお城にたどり着いていた。

「英雄さま、何故お城に？」

と中庭で手入れをしていた庭師のじいさんに話しかけられる。今はジンの名前は城の中に限れば結構有名になっている。

「ちょっと野暮用でな」

じいさんに返事をしながら師団長のタツドをさがそうとするが。

「ジン殿お待ちしておりました。」

タツドのほうから数人の部下を連れてやって來た。

「話は聞いてるよな。状況は？」

「怪我人は三人、三人とも軽傷です。確認できているので八人が連れ去られています。屋敷の損害は、ひどくありません」

タツドが、全体の説明をしてから。

「怪我人は、庭師が斬られたようですが傷は深くはありません。あとメイドが一人軽い打撲をおっています。」

「連れ去られたのは、メイドが7人とギルド職員が1人の8名です。」

クレアさんも攫われたのか。

「屋敷は、一部が焼けましたが、焼けた範囲は狭いです。後は扉や窓が少し破壊されています。」

タツドの部下が詳細の説明をしてくれる。意外だったのは彼らが協力的だったことだ。おそらくタツド師団長がしつかりしているのだろう。本當ならジンが数時間で帰ってきたこと自体がおかしいのだ、それを質問しないのはタツドがジンに時間が無い事を理解し、無駄口を叩かないように徹底させているのだらう。

「タツド師団長、今から言つ場所に兵を集めてくれ。」

「もう見つけたのですか？」

「見つけた。」

実は、城に来る途中に皇都全体を探索していたのだ。

「俺は先に助けに行く。できるだけ早く来てくれよ。」

最初は呆気に取られていたが、すぐにもちなおし。

「了解しました。」

皇都にある、とある倉庫の地下に、縛られた8人の女と傭兵風の男

が数人と騎士風の男が1人いた。

縛られた女を見ながら傭兵風の男が

「なあ旦那、まだこいつらにいたずらしたら駄目なのか？皆上玉だぜ」

旦那と呼ばれたのは騎士風の男だ。

「後半日は、待て。」

「なんでだよ」

「その頃には、戦いは終わっている。そうなれば人質の意味はなくなる。そうなつたら好きにしろ。」

傭兵風の男が野卑な視線を女達に向けるが、そこに絶望の表情はなかつた、なにか希望があるかのように目に力があるのだ。

傭兵風の男が薄気味悪いものを感じていると

ガシャーン

突然窓が破碎し、そこから男が中に飛び込んできた。

次の瞬間、旦那と呼ばれた男以外の誘拐犯は、風の刃で首を切り落とされて死んだ。

1秒で倉庫を制圧したのは、もちろんジンだ。

旦那と呼ばれた男が逃げようとしたので、片足を切り落とした。

「ギヤードー・・・」

耳障りな悲鳴を風で遮断して女達のところに行く。

「ご主人様来てくれた」

「うへ、あたし達のこ主人様なんだから」

「ご主人様大好き」

「ご主人様愛しています」

十一

怪我はないよ。メイド達は、シンが来てくれたことで歓喜している。よかつた酔い

「みんな良かつた。クレアさんも大丈夫ですか？」

ボーッとしているクレアさんに話しかける。

え・・・は、はい！
大丈夫です。

「良かつた」

（ジンさん、王子様みたい）

「・・・クレアさん、俺今『嵐帝』状態だから、その、聞こえたん
だけど」

「えつ」

クレアさんの顔が真っ赤になつていいく。普段のできる女の雰囲気はそこにはなく、恋する乙女のようなクレアさんがいた。普段とは違うクレアさんに新鮮味を感じる。

しかし今は時間がない。女達の縄を解くと皆を外に出す。しばらくしてタツドが到着して女達を預ける。

ジンは、倉庫に戻つて田那と呼ばれた男に近づき

「依頼人は誰だ？」

「喋ると思つているのか？」

「喋らせるんだよ」

ジンは、女達に聞こえないように風を操作して音が漏れないように部屋に防音を施す。

そして、まず切り落とした足の切断面を焼いて止血する。勝手に失血死されたら困るからな。

「いあ、あ、」

体を焼かれて悶えている男に

「喋りたくなつたら話せ」

その後、数分後男は通信用の腕輪を持ってきた男の名前を喋つた後に死亡した。依頼人については最後まで喋らなかつた。

「ジン殿どうでしたか？あの男、黒幕を吐きましたか」

「今から確認に行く。タツド師団長は彼女達を頼む。もし傷つけたら……想像に任せる。」

「わ、わかりました。では、男を連行します。」

「ああい。もう死んでるから」

「・・・・・」

この場にいた兵士達は、女達の護衛に全力を注ぐことをひそかに決意した。

「じゃあ俺は城にようがあるから先に行く。」

城に向けて走りながら。自分の心を落ち着かせ脳をフル回転させる。そしてひとつ回答を導き出した頃に城に着いた。城にはアリシャが待ち構えていた。

「何があつたの？」

「俺に対して妨害があつたんだ。それでひょといリウルによつができたんだ。」

以前からジンに対して憎悪を抱いている男だ。

もう少し細かい事情を話して、聞きたいことを聞く。

「そういうえばラウルは、腕輪を紛失している。弁償で30万ギル払つてた。」

「ありがとうございますアリシャ。後は直接聞こつ

ラウルは、すでに見つけている。

しばらくして、ラウルは捕獲した。今日の前には椅子に縛られたラウルがいる。

「ラウル師団長、あなたが捕らえられた理由はわかっていますね。」

アリシャが問い合わせるが

「何のことだ私はしらん」

「この持ち主がお前からもひつた、と証言している。そして持ち主は、俺の身内に手を出した。この意味がわかるな」

「なつ、・・・いや、ち、違う、まで、俺は何も知らない。俺はただ横流しだけで。あなたの身内に手を出すつもりなんてこれっぽちも。」

「だらうつな」

アリシャとラウルがポカンとしている。

「え?」

「エハニヒトハシンジン?」

「考えてみてアリシャ、」こいつは紛失してすぐに弁償している、た
だの師団長に30万ギルなんて大金払える訳がない。つまりすでに
パトロンがいたんだよ。つまり裏から糸を引いているやつは別にい
るんだよ。」

「そ、そりなんだ、俺は売つただけなんだ」

「それも立派な犯罪だがな」

頃垂れるラウル。

「なんでそんな面倒なことを?」

「！」こいつを身代わりに殺すつもりだったんだろう。腕輪を証拠にして
な。」

「な、んで、俺なんだ」

ラウルは、理解が追いつかないようだな。

「お前が俺に恨みを持っていたからだろ?。ただそれだけだ。」

「そんなどで」

「ジンビツあるの? 殺すの?」

ラウルが肩をビクッと震わせる。これからどうなるかを想像したの
だろう。ラウルは以前、ジンにボコボコにせられた過去がある。

「まずはそうだな、お前が腕輪を売った相手は誰だ」

「た、たぶん、カルモンド王国のグスター王だ。話を持ちかけて来たのはグスター王の側近だつたし、一度だけ腕輪に関してグスター王に声をかけられた」

グスターが意味もなくただの師団長に声をかけるわけがないこれは確定だひ。

グスターか、・・・あいつはそろそろ殺してやるうか。

「そうか。じゃあ後は横領で儲けた金の倍を国に納めひ。それで許してやる」

「え？」

「いいの？ジンは男には容赦しないと思つていたんだけど」

「ラウルは利用されただけだろ許すわ。だがな、ラウル次はないからな、これに懲りたらもう少し真面目に生きろよ。」

「あ、ありが・・ヒ」

「ジンがそういうならいい。でも師団長の役職をそのままにはできない。」

「それは任せるよ。そろそろ戻らなといけない。」

ジンが歩き出すと

「ジン」

アリシャが、呼び止める。
ジンが振り返ると、アリシャが飛び付いて来てキスをしてきた。

「頑張つて」

とても不安そうな表情を見せる。アリシャの不安な顔を見るのは初めてだ。

安心させるために今度はこちらからキスをする。長めのキスをして頭を撫でてから離れる。

「ああ、任せろ。行つてくれる。雷の聖痕を発動『雷神』」

開戦から八時間が過ぎた頃、ジンは『雷速』を駆使して『無得と魔物の大地』を日指す。

51話 第1回 世界防衛戦・外 救出（後書き）

稚拙な文章ですが、よろしくお願ひします。

最後まで読んで頂きありがとうございます。

「指摘・「」感想等ありましたらよろしくお願ひします。

52話 第1回 世界防衛戦・英雄参戦

会戦から9時間が経過した頃、戦場は闇に包まれていた。

連合軍では、篝火が灯して自軍を照らしていた。

そんな中、連合軍は窮地に立たされていた。大量の魔鳥やガラスが黒い半球からてきたのだ。連合軍は空の魔鳥から一方的に攻撃を受けることになっていた。

連合軍で空を飛べるのは**龍騎兵部隊**と銀龍のアルベルトとティリエルだけだ、とても戦場全てをカバーできない。
他のものでは地上から攻撃しても暗くて狙いが定まらずほとんど効果がないのだ。

今は龍騎兵と銀龍が鳥型の魔物を倒してくれるのを期待するしかなかつた。

しかし、龍騎兵は持久戦を考えて魔術や竜のブレスは控えランスで突き殺すようにしていたので撃破するのに時間がかかっていた。

アルベルトは、1日くらいうは余裕で戦えるので全力で次々と撃破していく。

そして目覚ましい働きをしたのが、ティリエルの背に乗ったミリアとフェリスのメイドさんコンビだった。

フェリスが、光系の魔術で辺りを照らすそこを早い雷系の魔術で落ち落としていた。

「『サンダー・アロウ』」

一人の息もぴつたりだ。今も『ライトボール』で見つけた魔鳥ヤガラスをミリアが『サンダー・アロウ』で撃ち落とした。今日のためにジンが二人を組ませて訓練をした成果だ。

訓練を重ねたことで二人は、まるで姉妹のように仲良しになっていた。

「やりましたね、ミリアさん」

「ええ、フーリスちゃん。それにしても不甲斐ないです」

「？？なにがですか？」

フーリスは、不思議そうな表情を浮かべる。話の流れで自分達の事ではないと思うのだが

「各国の対応のことです。どの国も対応できていなくていいではないですか。」

「仕方無いですよ。もともと空の戦いなんてただの人には経験なんてありませんから。お兄様がすごいんですよ。」

ティリエルも会話に入ってきた。

「それもそうですね。さすがは、私達の『主人様です。』

「そういえばお兄ちゃんまだかな？」

「そろそろ来られるでしょう。」

「あはは、1週間かかる道程を十時間足らずで帰つて来てもお兄ちゃんならそんなに驚きませんね。」

「そうですね。・・・あつ、ミコアさん、フヨリスさん次が来ました。今度は多いです。」

「わかりました。魔の光よ、闇を払い、わが敵を照らし出せ『ライトボール』」

今回の光球は、かなり大きい、それでも今のフェリスには朝飯前だ。
「『サンダー・アロウ』」

ミリアは、『サンダー・アロウ』を無詠唱で使つた、さうにその後は技名の詠唱も行わずに雷の矢を放つていた。

お互ひ得意分野を磨いた結果、それぞれの足りない所を補い合ひつことがでるようになつた。
フェリスが多様性と威力を
ミリアが速度と正確さを
それぞれ磨いていた。

二人の今のギルドカードは、

名前	ミリア	種族	人間	性別	女
ギルドランク	D				
能力ランク	総合B	気力C	魔力A		

称号 ジンのメイド 雷術師 風術師

名前 フェリス 種族 人間 性別 女
ギルドランク D

能力ランク 総合B 気力D 魔力S

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの料理人 ジンの義妹

三人は、近くの魔鳥を片付けた後、別の場所の魔鳥も倒して回った。

別の空では、

「隊長、いきました。」

「任せろ!、ハアア」

隊長は、気合い声を上げて手に持つたランスで逃げてきた魔鳥を貫いた。魔鳥は黒い粒子になつて消滅する。

「お見事です。」

二人の竜騎兵ドラグーンだった。

驚いたことに一人の声は、女性のそれだった。

竜騎兵になる絶対条件は竜を手なずけることだ。これがかなり難しい、竜もいくらかは人に馴れているがティリエルやアルベルトのように言葉を交わせるわけではないのだ。

そして何故か女性の方が竜がなつきやすいのだ。
実際、竜騎兵部隊の男女比は、半々だ。

隊長と呼ばれた女性は、美しい女性だった。名前はアルシナ、竜騎兵部隊の隊長を勤める女傑だ。

「あつちの方がす」「こさ」

アルシナがティリエルたちの方を見ながら言つ。そこでは、二人と銀流が次々と魔鳥を撃ち落していた。

「確かにすごいですね。『英雄ジン』の仲間って皆みんな感じなんでしょうか?」

「さあな、わたしは英雄の方に興味があるが

「だ、ダメですよ。隊長は男なんかに惑わされちゃあ

「君は私を何だと思つているんだ・・・うん?通信だ」

「【アルシナ隊長ですか?】」

「ああ、そうだ」

「【先程、大量の魔鳥の発生を確認しました。今すぐ地上に退避してください】」

「何を言ひ、それこそ我々が

「【これは命令です。詳しくはわかりませんが、空にはすでに手を打っているそうです。】」

「・・・・・・わかった。」

アルシナの遠い空に数千の魔鳥を確認した。

「あれをどうにかできるのか？」

アルシナは、疑問に思いながらも地上に降りた。

「本当に大丈夫なのか？」

開戦から10時間が過ぎた頃

アルシナが地上に降りてから数分たつた。空には5千近い魔鳥ヤガラスが飛び交っていた。

地上に降りたアルシナは空を見ながら

「今からじゃあ空に上るのは厳しいな」

「どうします？」

「どうするも何も・・・・あっちから来るぞ」

魔鳥が空で攻撃態勢に入っていた。おそらく攻撃は圧縮した風の塊だろう

(手を打ったんじゃなかつたのか)

今にも攻撃が放たれようとした瞬間

「『万雷』」

万の雷が、すべての魔鳥を貫いた。

「なつ」

一匹の例外なく空にいたすべて魔鳥は、黒い粒子になつて消滅した。

「なん、ですか、これ？」

「わからん、だがこんなことができるのは」

アルシナが結論を言おうとした時、空から人が降ってきた

「到着つと」

降つてきたのは、男だった。男は重力を感じさせない着地を決め。

「あ～、着いたぞ。言われたとおり空の魔物は一掃した」

男は、通信用の腕輪で誰かと話している。

「いっからは、好きに動くからな、そのための独立部隊だろ」

これが決定的だつた連合軍で独立部隊を任せているのは、クイント・皇国の中だ。

つまり田の前に立るのは『英雄ジン』なのだ。

「貴方が英雄のジン殿なのですか？」

「うん？ そうだよ、始めまして。そつちは、えへと、竜騎兵の隊長さん？」

「アルシナだ、よろしく」

「よろしく、突然で悪いんだけどアルシナさんに、お願ひがあるんだけどいい？」

「なんだい」

「独立部隊の場所に連れて行ってほしいんだ」

「貴方は空を飛べるのでは？」

「さつきの『万雷』で聖痕が切れたんだ。風の聖痕も切れてるから空を飛ぶには専用の装備がいるんだそれを取りに行きたいんだ」

「わかった、後ろに乗るといい」

アルシナは、後ろにいる白龍を指差しながら言つ。

「ありがとう」

「だ、ダメですよ。隊長、男と相乗りだなんて」

「バカなことを言つていないので前は他の部隊と合流しろ」

アルシナは、部下を諫めながら竜に乗る。ジンもそれに続く。

「うひー、お姉様に手を出したら承知しませんからねー！」

「お姉様と呼ぶなと言つただろー！」

ジンが呆れていると、

「ゴホン・・・あゝ私は行くからな」

アルシナは、返事を待たずにジンを乗せて飛び立つた。部下の女はまだ何か喚いていたが無視することにしたようだ。

白竜の背に乗りながら（そういうえばティリエル以外の竜に乗つてティリエルに怒られないかな？）などと考えていると

「ジン殿、いくつか質問してもいいだろうか？」

「どうぞ」

「貴方ほどの力がありながら、今までどこでいたんですか？」

「皇都」

「は？」

「だから皇都まで行つて人質を解放してから帰つてきたんだよ」

「人質、・・・なるほど、大体状況はわかりましたが、それでもな

ぜ数人のために戦場を離れたのか理由を聞かせてもらえませんか？

「うーん、いいけど、先に質問をしてもいいかい？」

「答えられることなら、答えよ！」

「じゃあ聞くけど、君は何のために戦ったの？」

「えつ・・・それは、・・・世界を守るために」

「嘘だね。この世界の人間で世界を正しく認識できる人間がいると
は思えない。本当の理由は、この世界に住む誰かだったり、国だつ
たり環境だつたりのはずだよ。」

「確かに、そう、かも、しれませんね」

「俺も同じだよ。いや、異世界から来た俺にとって、屋敷の人間は
家族のように大切な存在だ。俺は、家族のために戦っているそれだけ
だ。」

「それは、世界を守ることと反するのか？」

「手段と目的を間違えちゃダメだろ。ここでは世界を守るのが手段
で、俺の女を大事にするのが目的だ。手段のために目的を犠牲にし
たら意味がないだろ」

「そう言わるとなんとなく納得してしまうな

「納得するのか、普通は理解できてもなかなか頷けないものなんだ
が。君は面白いな、どうだ俺の女にならないか？」

「さあ、急になにを言つていい。ふざけているのか！」

アルシナが真っ赤になつて怒鳴る。それは怒りかそれとも恥ずかしいだけなのかは、わからない。

「そんなつもりはない、まあすぐに答えなくてよいよ。そうだなこれから俺の活躍を見ていてくれないか？」

「それぐらいはいいが」

「それじゃあ、アルシナが見てくれるんだから頑張らないとな」

実はアルシナの中では、ジンの評価はそんなに悪くなかった。彼女も竜騎兵をやつていてるから、それなりに力に価値を置く考えを持っている。そしてジンの力は魔鳥5千を一瞬で片付けるほどだつた。力に溺れている感じでもないし、突然の告白には驚いたが、戦士としては草食系より肉食系のほうが、という思いもある。

それに、（世界より女を助けに行つたりするし、とても大事にしてくれそうだな）と乙女なことも考えていた。

アルシナは傍田^{はたけ}にはわからないが内心では、かなりジンのことを意識していたのだ。

アルシナは、ドキドキしながらジンを独立部隊に送る羽田になつた。

53話 第1回 世界防衛戦・新たな力

開戦から12時間が経過した。大侵攻も半分が終わつたことになる。

ジンが『黒飛板』ショバーリツを確保してからしばらくした頃、またしても魔鳥が黒い半球から出てきた。

それも今までとは比較にならない数だ、その代わりに地上の魔物は激減していた。

東方軍の空には、ジンとアルシナだけがいた。ティリエル達は、別の軍の救援に向かっている。

「さつそく来たか。（グスター王は後回しだな）アルシナさんは、俺が撃ちもらしたやつを頼みます。」

「わかりました。」

ジンは、『黒飛板』の上でこう言つた。

「さあ、これから俺の『本気』を見せよ!」

ちなみにジンにとつて万の軍勢の戦争も、銀龍アルベルトとの戦いも本気を出してはいなかつた。

正確には、本気を出せなかつた、ということだが。

アルシナは、これから何が起きるかとても興味を持つていた。なん

せ最初に見たのが、五千の魔鳥を消滅させた『万雷』だ。戦士としてジンの本気に興味を持つのは当たり前だろう。

この時、アルシナはジンの仲間ですら聞いたことのない。ジンの『詠唱』を聞くことになった。

「【私は創造する、源は火、形は銃、力は魔弾、・・・精製、『聖痕武器』紅炎銃・プロミネンス】」

詠唱を始めるのと同時にジンの火の聖痕から赤い光が溢れ出てきてジンの前に、紅い光球ができる。火の精靈も今までにない密度で光球に集まっている。詠唱が終わると同時に光が弾け中から、紅を基本とし色彩で砲口は2つ、装填数は六発の大きな紅い銃が現れた。ジンは落ちてくる銃を右手で握る。

ジンが大侵攻に備え、長時間戦闘用に作り出した『聖痕武器』の初お披露目だ。

聖痕の発動は強力だが、発動中は何もしなくても力を消耗するし発動を止めると再発動に時間がかかる。その弱点を無くすための『聖痕武器』だ。

「魔弾装填、『灯火弾』」

ガンガンガンガン

ジンは、装填の言葉と同時に四発の『灯火弾』を撃ち出した。放たれた魔弾は、東西南北の空へ飛び、それぞれの軍の中央上空付近で止まり強烈な光を放ち始めた。

戦場は、4つの小さな太陽を迎える間にように明るくなつた。

「「」んなに、あつさりと」

アルシナは、自分たちを苦しめた闇がこつもあつさり解決したこと
に、愕然としていた。

「魔弾装填、『追火弾』」

ガガガガガガッ

六発の魔弾が連射され魔鳥に襲い掛かる。魔弾に気付いて魔鳥が射線から逃げるが、魔鳥の近くで魔弾が方向を変え魔鳥に向かう。六発の魔弾は、六羽の魔鳥に直撃し魔鳥を撃ち落した。

「『追火弾』を常時装填」

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ

『追火弾』は、敵を追尾する必中の魔弾だ。ジンは絶え間無く魔弾を打ち出し、打ち出した弾数と同数の魔鳥を撃ち落していく。

「すごいな、これは」

アルシナは、その様を側で見せられて、魅せられていた。

「【ジンくん、南方軍側にノワールサイが現れた。迎撃してくれないか?】」

腕輪から声が聞こえる、クルト皇だつた。

「わかつた。空は自分たちで守れよ。」この明るさならやれるだろ

「【ああ、大丈夫だ。それについても感謝するよ】」

「アルシナさん、ついてきて

「了解した。」

「アルシナさんつていつもそんな喋り方なの？」

「ああ、変だらうか？」

アルシナにとつてジンは初めての気になる異性だ、内心不安に思つ。ジンに言われて自分の男っぽい喋り方が気になり始める。

「いいや。俺は良いと思つよ。」

「そ、そつか」

「じゃあ行こうか。」

「ああ、行こう。」

アルシナにとつて男の一言一言に一喜一憂するのも初めてのことだつた。

一人は、南方軍の上空に移動してきた。

「魔弾装填、『連爆弾』」

ジンは、ノワールサイの群れに六発の魔弾を撃ち込んだ。六発の魔弾が同時に爆発してノワールサイの群れを吹き飛ばした。威力も申し分なしだ。

「アルシナさん、どうだった？」

「すういの一言だったよ」

「そうか、良かった。それじゃあこのまま駆逐するかね」

ジンは、その後も紅炎銃・プロミネンスを駆使して魔物を殲滅して回った。

この時ジンは、空にいたため気付くことができなかつた。地下で魔物が蠢いていることに。

ジンはこの時、気付けなかつたことを後で悔やむことになつた。

開戦から14時間、真夜中の2時にそれはやつてきた。

最初に異変に気付いたのは、南方軍の前衛部隊を指揮していた。テンプル騎士団の王女で『剣姫』の異名を取るクリス王女だつた。

クリスが気付いたのは、偶々部下に、土の精靈術師がいたからだ。

「姫様、これは」

「わかつています。すぐに父上に知らせましょ。」

クリスが通信用の腕輪で連絡しようとした時、突然地面が隆起し始めた。

「遅かつたようです。」

ボコッボコボコッ

と地面から巨大なワームが姿を現した。その姿は肉、でできた丸い筒に牙が生えたような魔物で見た目はかなり気持ち悪い。ランクは、Sランクそれが三体だ。

ワームが発生したのは、西方軍、南方軍、北方軍それぞれに3匹ずつだ。

出てきたワームは、近くの兵士を数人丸呑みして地下に戻った。

三つの軍は大混乱に陥った。ただでさえランクSの魔物は脅威なのに、今は夜中で同時に三匹だ、平静でいられるのは、本当の強者とバカだけだ。

「俺は南方軍のところに行く、北方軍の方も何とかするから、西方軍には遊撃部隊を向かわせて」

ジンは、指示を出しながら、『灯火弾』効果が弱まったので、再度『灯火弾』を撃つ。

「【わかりました。】」

今連絡していたのは、いち早く状況を知らせてくれた東方軍のカルディアだ。クルト皇は、万が一のために指揮をしているそうだ。クルトには東側だけワームが出ていないことに何か思つてゐがあるようだ。

「アルシナをどうしますか？自軍に戻りますか？」

「できれば、一緒に行かせてくればせんか」

「いいんですか？」

「ワームに対して我々竜騎兵では、地中のワームには太刀打ちできませんから」

「わかりました。それでは、急ぎましょ」

「ジン殿は、いつもその口調なのか？」

「・・・いや、もつと軽い感じだな」

「どちらの方がいいかな」

「わかった。よろしくアルシナ」

「よろしくジン殿」

南方軍は大混乱に陥っていた。安全な場所がわからず兵士は右往左

往していた。どこから出でてくるかわからない敵というのが、恐怖を加速させる。

ボコッ

またワームが地面から現れて兵士に襲い掛かった。

「魔弾装填、『ひえんだん飛燕弾』」

ガガニッ

高速の一発の魔弾がワームを直撃する。しかしワームは、直撃したときに少しよろけただけで、何事もなかつたように地中に逃げ込んでしまった。

『飛燕弾』は速度重視で威力が低いランクのワームを仕留めるには火力不足だったようだ。

その後も他の魔弾を試すが、ワームはジンの近くには現れないため遠距離から撃つしかないのだが、『追火弾』は、穴の中まで追いかけたが中で誤爆してしまう。『連爆弾』は、爆発する前に地中深くに逃げられた。『灯火弾』に殺傷能力は無い。最後の魔弾は、周りの人間を巻き込んでしまう。

紅炎銃・プロミネンスと、ワームの相性は最悪だった。

『聖痕武器』の弱点は、汎用が利かないことだった。

さて、どうするかな。

53話 第1回 世界防衛戦・新たな力（後書き）

聖痕武器 「ステイグマ・ウェポン」

紅炎銃（じゅうえんじゅう）・プロミネンス

五種類の魔弾

『追火弾』

追尾型の魔弾、秘中の魔弾（地中の敵には当たらなかつた）

『灯火弾』

補助型の魔弾、夜の暗闇を照らす光源を作り出す

『飛燕弾』

高速型の魔弾、威力は低い

『連爆弾』

爆弾型の魔弾、六発の魔弾を同時に爆発させる。高威力、広範囲の

魔弾

『？？？』

？？？？？、威力が高すぎるため、未使用

54話 第1回 世界防衛戦・地中の敵

開戦から15時間、真夜中の3時頃、独立部隊が南方軍に到着した。

今は、天幕で対策を話し合っていた。天幕の中にはジャック騎士王とクリス王女とカリウス教皇あと三騎士が南方軍から、独立部隊からはレティーシア、ジーク、カイルとジンが来ている。アルシナもこの場に来ている。

「ジャック、一応作戦があるんだが」

「聞かせてくれ、正直お手上げだ。ワームを討伐するときは、専用の毒入りの餌と拘束具を使用するのが普通なんだ。あいにくそれらはここには無いし、それも同時に三体だ。かなり厳しい状況なんだが、どんな方法が？」

「作戦は単純だ、俺が外に出す。うちの者と、三騎士の方々で仕留めて終わり。」

「わかりましたわ。」

真っ先に賛成したのは、三騎士の聖騎士パラディンだった。声からわかるとおり女性だった。口調からして、おそらく貴族の令嬢なのだろう。他の三騎士は声は出さなかつたがその場で頷いた。兜を着けていて表情はわからないが、二人とも体から戦意が満ち溢れている。ワームに好き勝手されて相当鬱憤が溜まっているようだな。

三騎士の様子を見たジャックが

「わかった。君達に任せよ!」

全員が配置に着いてしばりくすると、

ボコボコボコ

「出た」

ワームが姿を現した。ジンは、空を飛んで出現地点を目指す。喰われそうになっていた女兵士を『飛燕弾』を撃つてワームから助ける。もちろん『飛燕弾』では、大したダメージを与えられないのは、承知している。ワームはまた地中へと潜ってしまった。ジンはワームが潜った付近に着地して。

「大丈夫?」

「は、はい。」

何故か女兵士は、頬染めていた。

「じゃあ危ないからそこについてね。土の聖痕（セイゲン）を発動『岩皇』」

ジンは、地に手を付いて地中のワームを探す。

「・・・見つけた。全員いくぞ、絶対仕留めろよ。」

地面が隆起したかと思ったら、地面が割れてそこからワームが飛び出してきた。ジンは、すかさずワームが地中に逃げないように地面を固める。

レティーシア、ジーク、カイル、と三騎士がそれぞれがワームに襲いかかる。

レティーシア、ジーク、カイルの三人は、剣術と魔術を併用して戦うスタイルを目指した。その結果、臨機応変な戦いができるようになっていた。三人とも長剣と盾の装備して格好だ。

三人のギルドカードは、

名前 レティーシア 種族 人間 性別 女

ギルドランク B

能力ランク 総合A 気力S 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの女 皇女

名前 ジーク 種族 人間 性別 男

ギルドランク A

能力ランク 総合A 気力S 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 一級騎士

名前 カイル 種族 人間 性別 男

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 二級騎士

三人は目立つた成長はないが、堅実な成長を遂げていた。

地上に出たワームは、その巨体をくねらせて周りの兵士を薙ぎ払う。

一般的の兵士達が吹き飛ばされる中、レティーシア、ジーク、カイルはその巨体を避けてワームの体に飛び乗って剣と魔術で近距離攻撃を仕掛ける。三騎士は、向かつてきたワームの体を各自の方法で撃退していた。聖騎士は、聖剣カリバーンの刃を巨大化させてその巨体を切り落とした。炎騎士は、ワームの体に飛び乗って魔剣レヴァンティンを突き刺し体内から燃やす。竜騎士は、巨体を片手で受け止め空いた手に持った竜剣ドラグニルで切りつけていた。

数分の戦闘の後、ワームは力尽き黒い粒子となつて消滅した。

「助かつたよ、ありがとう」

「」ちも助かつた。三騎士がいなればもつと手間取つていただろうからな。」

「今から他のところに行くのかい？」

「いいや、様子見する。俺が行かずに片付くならそれに越したこと
は無い。」

「そういえば、西方軍には遊撃部隊を行かせたらしが、北方軍は？」

「北方軍は、大丈夫だろ。最後の助つ人が少し前に到着したからな」

ジン達が話し込んでいた時、

西方軍では意外なことに『ランスロウ騎士団』が活躍していた。『ランスロウ騎士団』は、あらゆる魔物との戦闘を想定して準備をし

ていた。その中にワームに対する対策もあつたのだ。

ワームが好む魔物の肉にワーム用の痺れ薬を大量に含ませたものを仕掛ける。肉を食べて動きが鈍ったところをカロルドの剛槍そうじゅうがワームを貫いていた。他の騎士たちもワームを攻撃している。『双獣の双炎そうえん』のメンバーもワームを一体撃破していた。

北方軍では、ワームが大きな長方形の岩塊から体を突き出した状態で身動きが取れなくなっていた。

これをやつたのは、先程戦場に到着した最後の助つ人

岩窟竜のストルだ

「さあ、後は適当に倒してくれ」

身動きの取れないワームを、竜騎兵が始末して回る。

「助力感謝する。」

「あなたもジン殿の、彼は計り知れませんね」「ありがとうございます。ストルさん」

王と王女が謝辞を述べる。

「久しぶりだな。ストルの爺さん」

銀龍のアルベルトは、氣さくに挨拶をしていた。

「アルベルトの坊やか、大きくなつたなあ」

「どうも」

「しかし、来るのが遅れですまなかつたな。かなり被害がでたそ
な。どこかの高貴な人間が死んだと聞いたが」

「ああ確かに死んだよ」

「えつ、どの方が？あまつ驕^わらひはなつていなうですが

トウカも知らないようだ。

「グスターだ」

南方軍の天幕

「グスターが、死んだ、だ、と」

愕然としたジンが報告を繰り返す。

「ああ、うん悪くワームの一番最初の攻撃で呑み込まれたようだ。
どうしたんだい？君はグスターを嫌っていたと思うのだが」

「俺の身内を攫つた黒幕が、グスター王だつたんだ」

「なつ」

「あの野郎、俺が殺る前に死にやがつて！」

グスターの名前を聞いて、グスターに対しての怒りを思い出したが、

その本人はすでに死んでいる。やり場の無い怒りが、ジンの心を満たす。

「・・・ジンビツあるんだい？グスターは王だつたから、カルモンド王国に賠償を請求することもできるが」

ジャックが恐る恐る尋ねる。下手をしたら国際問題になる可能性がある。
しかし、ジンは怒りをなんとか治めて

「しないよ、俺のはあくまでグスター個人に対する恨みだ。憎しみの対象を広げるようなことはしない。そんなことをしたらきりがないだろ。」

「それを聞いて安心した。今はエクス王子が指揮を執っているそうだ。」

ジンは本当に疲れた様子で

「そうか。俺は疲れた、肉体的にも精神的にも。だから少し休むことにするよ。」

「わかった。横の天幕を使うといい、クリス、ジンを案内しなさい。」

「わかりました。ジンさん」

55話 第1回 世界防衛戦・休憩

開戦から17時間が経過した朝の5時

ワームを撃破してからも前線では戦闘が続いていたが、それほど激しい戦いにはなっていなかつた。

南方軍の天幕では

「ジンは、大丈夫だろうか？」

ジャック騎士王は、ジンの騎士に質問してみる。

「大丈夫でしょう。主はグスター王の死ではなく一発も殴れなかつたことにショックを受けていたようなので」

「まあ、確かに私を含め他国の王にとつてグスター王の死は、どちらかといふと吉報ですからな」

「その内、落ち着きますよ。」

「できれば、早いほうがいいだろう。何か無いかな？」

「そうですね。・・・女、ですかね」

「英雄色を好むと言つしな。よしクリス、シャルロット、ジンを励まして來い。」

シャルロットとは、
聖騎士のことだ。貴族のお嬢様で、髪型はボリ
バライアン

「コードたつぱりな長い金髪を巻き毛にしてる。顔立ちは、可愛らしくまだ子供っぽさを残している。

「わかりましたわ。私も英雄殿に興味がありますし。」

「シャルロット、もしかしてジン殿のことを」

「ち、違いますわ。と、いうか展開が急すぎませんか、クリス様」

真っ赤になつて反論するシャルロット。

「そ、うかなあ？」

「そ、うですわ」

「・・・まあいいか、それじゃあ行こつか

「はい」

一人は、天幕を出る。

「クリス様、英雄殿はどういう御方なんですか？」

「わたしも、それほど詳しくありませんが。聞いた話だと、グーロムとの戦争の時に人を殺して悲しんでいたそうです。」

「どうしてですか？ 戦争ならしかたないではありますか？」

「彼は仕方ないから殺す、というのが嫌いだそうです。それに彼の

故郷は戦争の無い所だったそうですよ。

「平和だったのですね。結局どんな御方なんですか？」

「う～ん、難しいな。会つて話してみるといい。その方が早い」

「まあ、それはそうでしょうけど」

二人は、話しながら横の天幕に移動する。
ジンがいる天幕に近づくと中から

「『主人様、気持ちいいですか？』」

「ああ、気持ちいいぞ」

「『主人様』こつちは、どうですか？』」

今度の、声は少し幼く感じる。

「『主・様、・・・堅いですね。』

「・・・熱いです」

「じゃあ今度は、わたしが・・・に乗りりますね。」

天幕越しでよく聞こえない

「『主人様』次は私ですよ～」

シャルロットの顔がどんどん赤くなつていいく。すぐに限界がきたよ

うだ。シャルロットは、天幕の中に飛び込んで

「あなた方戦場でいつたい何をしているんですのー?」

「うん?」

「・・・え、と、マッサージかな」

「マッサージですね」

「指圧です。」

「へつ」

シャルロットは、お嬢様らしからぬ声をだした。

シャルロットが入った天幕の中には、うつ伏せになつた英雄と、その背に乗つて指圧をしているエルフの女性と足を揉んでいる小人と思われる少女が一人いた。

「えと、私は、その、・・・失礼しますわ。」

勢いよく天幕に入ってきた令嬢が、今度は飛び出していった。

「キリ、ユリ確保」

「「はーい」」

動搖していたシャルロットは、キリとユリの連携の取れた追い込みにあつさり捕まつた。小さなキリとユリを乱暴に振り払うこともできずシャルロットは天幕の中に連れ戻される。

「シャルロットさんが、どうこう勘違いをしていたのかは大体わかつているよ」

「うう・・・その、すみません」

「べつにいじよ。可愛かったから」

シャルロットの顔がこれでもかと赤くなつっていく。

「主は、元々氣づいていたから、あまり氣にしなくてもいい」

テツも人の姿を取つて話に加わる。

「氣づいていた?」

「主は、精霊を使って周りの音を拾つている」

シャルロットが責めるようにジンに手を向ける。

「『めんね。可愛かったから』

ジンのちよつとした悪戯だった。

「いえ、私が勝手に勘違いしたんですし。とてもお元気そうですね。先程はグスター王が死んで、ずいぶん落ち込んでいましたのに」

さつきの話題を出す、それがシャルロットの精一杯の反撃だった。

ジンはその言葉に、思つていたより明るい口調で

「ああ、そのことで来てくれたのか、ありがとう。」

「べ、別に、そんなことね」

ただの礼に動搖するシャルロットをクリスが面白しそうに見ている。視線に気づいてシャルロットは、俯いてしまった。

そのシャルロットに向かってジンが話す。

「本当に来てくれてありがとう。ただ、前向きに考えることにしたんだよ。俺があの時グスターを殺したり痛めつけていれば、国際問題になつていただろう。小国の王達から反発が出たかもしれない、これからのことを考えると、それは困るんだ。それにワームに生きたまま喰われるのも、まあまあ惨いと思つしな。」

シャルロットとしては、『まあまあ』どころではないと思つのだが、もっと酷いことをするつもりだったのだろうか？

「それで精神的には、折り合いが付いたから今度は、体を休めていたんだよ。君達も休んでいくといい、イリヤは治癒術師だから、マツサージも気持ちいいぞ。」

「遠慮しますわ。まだ戦闘中ですから」

「そういうな。おそらくこれから先にこの戦いの山場が来る。いついう戦いでは、終わりの方で何かがあるものだし、東方軍にだけワームが出なかつたのも気になる。きっと何かあるだろう。だから今は体を休めたほうがいい」

「はあ、それでは、休みますか？」

「休みまじょ」

「じゃあ、シャルロットさんこそ、俺がマジナージしよう」
「そんな英雄殿にしてもううわけだね」

「いいからいいから、座つて座つて」

シャルロットを近くの椅子に座らせる。

「俺は肩揉みをさせて貰おう。」

ジンがシャルロットの肩に手を置くと
シャルロットが肩をピクッと震わせる。

「あの、今何を?」

「ああ、俺の肩揉みは、指圧と電流を使ったものでね、ちょっと刺
激が強いかもしない」

「あの、胸が、ピリッとしたのですが」

「まあ、上半身全体をマッサージするようなものだからね。胸も対
称だよ。大丈夫、触つたりはしないから」

ジンは、肩揉みを続けると、シャルロットの胸も大きく弾んだ。

「気持ちいい?」

「気持ち、いい、ですが、これ、は、その、あん」

シャルロットの身体がピクピク震えている。誰が見てもわかるぐら
いシャルロットは、強い快感を得ていた。ジンは、シャルロットの
身体が火照つていぐのに気づかないふりをして肩揉みを続ける。

「それは、よかつた。もつと激しくしよひ」

「あつ、ちよ、まつ、ああん」

シャルロットは言葉を中断され、その後も長い間、肩を揉まれ続け
た。

「あつ・・・んつ・・・あへ・・・」

シャルロットの顔はだらしなく緩み、開きっぱなしの口からま、よ
だれが垂れている。シャルロットは、長い肩揉みでトロトロになっ
ていた。

そこにジンが

「それじゃあ、これで止めだ」

やつぱりジンは親指で背中を押す、するとシャルロットが

「・・・・・ッ」

身体を特に胸を大きく震わせて仰け反る、声にならない悲鳴を上げ
て絶頂に導かれた。くたゞジンに背中を預けるシャルロットに。

「どうだった？」

「とても、はあはあ、気持ち、よかったです、ですわ、英雄様。」

この時のシャルロットの心の中は、ジンの存在がすべてになっていた。

「また今度してあげるよ」

「はい、お願ひしますわ。」

シャルロットは、そこで一度氣を失った。一部始終を見ていたクリスは、真っ赤にしてイリヤのマッサージを受けている。

「俺がしようか？」

「え、遠慮する。と言つよりあれは絶対に、肩揉みじや無かつたと思つんだが」

「ハハハ、まあそうかもね」

「はあ～」

ジンの笑顔にクリスはため息をついて

「・・・それより先程の話は本当ですか？」

「あくまで推測だよ、推測」

「それでも、もし何があつたら

「そのために今は休むんだよ。どうせ即応できるのは、俺かアルベルトくらいだからな」

「そうですか。…………どうして後ろに立ってるんですか？」

「肩揉み」

「やつぱりですか！」

ガシツ

ジンがクリスの肩を掴む。

「あつ・・・」

「大丈夫だよ。まだ時間はあるから」

「や、だめ、うつん・・・あつ」

それから20分かけて、クリスは絶頂に導かれた後、失神した。

ちなみに、今回戦闘には参加していない三人のギルドカードは次のようになっています。

名前	イリヤ	種族	エルフ	性別	女
ギルドランク	D				

能力ランク 総合B 気力B 魔力A

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド 治癒術師

名前 キリ 種族 小人族 性別 女

ギルドランク E

能力ランク 総合D 気力B

魔力E チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの娘

名前 ユリ 種族 小人族 性別 女

ギルドランク E

能力ランク 総合D 気力B 魔力E

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの娘

56話 第1回 世界防衛戦・贈り物

開戦から1~8時間が経過した朝の6時頃

クリスとシャルロットは数分してから意識を取り戻した。

「身体の調子はどう?」

ジンがいい笑顔で質問する。

「・・・疲れが、取れていますわ」

「なんでしょう」の敗北感は。」

「直接は、もうと気持ちいいんですよ。」

イリヤが、二人に耳打ちする。

二人は、何を想像したのか、顔を真っ赤にして俯いてしまった。初々しくて可愛いらしい。

「【ジン君、聞こえるか?】」

「どうした?」

「【東方軍に魔物が集中し始めた。とにかく来てくれ】」

「当たつてほしくない予想つてどうしていつ止めたるかな。君達も来

「わかつた」

てくれないか。きっと戦力が必要になる。」

二人は、ジンの言葉に頷いて立ち上がる。

開戦から19時間が経過した朝の7時になり辺りがすっかり明るくなつた頃に、ジンたちは東方軍に着いた。

東方軍の戦場では、5千の牛鬼が防衛線を作っていた。その後方は黒い地面が見える。その黒い地面はノワールサイの大群だった今までとは桁が違う数千のノワールサイだ。

「クルトどうなつている!」

「ジンくんよく来てくれた。」

「それよりあれは何なんだ?お前も警戒はしていただろ?」

「それが、急に東方軍以外のところから牛鬼が集まってきて防衛線を張つたんだ。それもほとんどの個体が盾を持つている」

「堀は?」

「無効化されている。さらに後ろには、大蛇が控えているのを確認している。」

「最悪だな。あれが突っ込んできたら、防げないぞ」

「ああ、今腕利きを集めているが、一度ワームの対策に三方に散つてしまつている。」

「これが狙いだつたのか、これではつきりしたな。黒い半球には、何かしらの意思のようなものがある。そして高度な作戦を立てられる。神のやつはそんなこと言つていなかつたぞ。最悪だな」

「確かに最悪だな。何か策はあるかい？」

「・・・ちょっと待つてくれ、考える時間をくれ」

突っ込んでこられたら負けだその前に終わらせなければいけない。牛鬼はどうとでもなる。ノワールサイを潰せばいいんだ。時間稼ぎがいる。

「アルベルトは？」

「…………」

「良かつた。ブレスは撃てるか？」

「一発ぐらーなら何とか」

「上出来だ。クルトまず牛鬼を殲滅してくれ。俺がノワールサイを殲滅する。テツ付いて来てくれるかい？」

「私はいつも主と共にあります。」

テツは、当たり前という顔をして頷く。

「ちょっと待つてくれ、そんなことが可能なのか？」

「俺を信じろ」

「（主人様、私も）

「主、私も」

「お兄様！」

「ジン様、私も連れて行ってください」

ジンの仲間達が次々に同行を申し出るが

「ダメだ。危険すぎる。君達では間違いなく死ぬ。生き残れるとしたら」

ジンは天幕の中を見渡して。

「俺だけだ。」

ジンの言葉に皆、押し黙る。そこにアルベルトが近づいてきて小声で。

「（ジンくん、奥の手を使つのか？）」

「（…使つ）」

「（あれば、長時間戦闘には向かない）」

「（それでもだよ。）」

東方軍、指揮官のクルトが

「ジンくんにすべて任せせるよ。既に無責任と言われるだろうが、

我々には他に手立てがない。・・・また、ジンくんに頼ることになつてしまつたな。」

「次に活かせ三年後がある、それじゃあ説明するぞ、戦いの流れはこうだ」

ジンが皆に説明をすると。

「ジン様」

「主、『』再考を」

「お兄ちゃん」

「『』主人様は、死ぬおつもりですか」

仲間がジンを引き止める。奥の手を知らない仲間には、余程無謀な作戦に聞こえたのだろう。

「大丈夫だ、奥の手を使う」

「奥の手?」

「でも、『』

いきり立つ仲間をアルベルトが

「ジンくんに、任せなさい。」

「お父様!」

「ティリエル、アルベルトは俺の奥の手を知っているからの言葉だから、そう責めるな」

「・・・すみません」

「さあ、いくぞ。時間がない。クルトすぐに牛鬼を殲滅してくれ。そのあと鶴翼の陣を作ってくれ。一匹も逃がすなよ」

「わかつてゐるよ」

「俺は、時間が来たら出る。その前に、他の王にも説明がいるな。クルト任せた。俺は準備してくるから」

しばらくして、各国の王族が東方軍の戦場に到着する。クルトが各国に作戦を話す。するとラインツ王が

「・・・できると思つてゐるのか?」

「できる。それに他に方法がない。」

「素通りさせられないのか?」

「三年後、後ろから攻撃を受けかねない、もしそうなつたら確実に負けるだ。」

「そう、だな。結局我々は彼に頼るのか。」

「へへへー。」

キリガネが、嘆く。

トランド王が

「シャール、アレを英雄殿に届けてくれ

「わかりました。」

シャールが天幕を出る。

「皆さん、配置に着いてください。これがおそらく最後でしょう。我々がジンくんの負担を軽くしましょう。」

シャールは、ジンを探して陣地を走り回る羽目になった。居場所がはっきりしなかつたのだ。目撃証言を元にジンを探して見つけた場所は馬車の中だった。

「ジンさん、こんなところで何をしているんですか？」

そこには、台座に座つて震えているジンがいた。顔色も悪く見える。

「えつ」

「・・・見られたか」

「だ、大丈夫ですか？」

「大丈夫。ちょっと怖いだけだよ。」

「怖い？」

「ああ、怖いんだ。確かに俺には力がある。大抵の事ならできてしま

まう力が、だからだらうな、俺は今まで命の危険を感じる戦いの経験がないんだ。だから、これからある死ぬかもしれない戦いが怖いんだ」

シャールにとつてジンは、まぎれもない英雄だ。それは今でも変わらない。一度は命を助けられてもいる。

しかし、英雄としてしかジンを見ていなかつたシャールには、目の前のただの少年に掛ける言葉が出てこなかつた。

しばらくして。

「あー落ち着いた。シャールも座つたら。」

「あ、はい」

さうなくシャールがジンの隣に座る。

「さつきの秘密にしておいてね。」

「な、んで、ですか？」

言葉に詰まりながら質問する。

「俺は、連合軍を作つた張本人だからな。象徴みたいな意味もあるから、ああいうのは見せられない。」

そこには、いつもの『英雄ジン』がいた。今のシャールには、それがとても脆く見えた。

脆く見えたからか、シャールにはジンが死んでしまう気がした。

だからか、シャールはとんでもないことを言った。

「い、生きて帰つて来たら、一つなんでも言つことを聞くわよー。」

言つた内容もすごいが、このタイミングでは、死亡フラグになりかねないと思うのだが。

「なんでもだね」

「え、ええ、余程のことではない限りは。」

「わかつた。絶対に帰つてくれるよ。」

シャールの頭を撫でる、気持ちよむけつに手を細める。

「あの、これ餞別。せんべつ」

シャールが赤い紙の束を五つ取り出した。

「これは？」

「爆符五十枚を束にした物よ。爆符は、火炎系の上位の魔術『エクスプロージョン』を込めた魔符よ。」

「高いんじゃないかな？」

「爆符一枚、一万ギルぐらいね。」

5束×50枚×1万ギル＝250万ギル

ジンがこの世界で元王国領の奴隸^{ゴリ}推奨派掃除をして稼いだのが100万だつた。その2・5倍だ。日本円に直すと一千五百万円相当だ。

「いいのか？」

「いいの。クラフト商国なんて今回大した事していないんだから。
その、頑張つてね」

「ありがとう、シャール」

もう少ししたら決戦だ。

決戦前にシャールが贈つた言葉と魔符は、ジンに力を与えた。

57話 第1回 世界防衛戦・決戦の始まり

朝の8時になつた。開戦から20時間が経過した頃

決戦が始まる。

ジンは、ドラグーン・チーム竜騎兵部隊、アルベルト、ティリエル、ミリア、フェリスを連れて空にいた。空からの目算では、ノワールサイの数は、万に近い数になつてゐる。

少し前にクルト率いる東方軍が牛鬼を殲滅に成功した。
それからすくにジンの作戦が始まる。

「まずは、第一段階だ。アルベルト頼む」

「任せろ」

銀龍のブレスが、堀を自分の身体で埋めているストーン・ゴーレムを吹き飛ばす。

第一段階で、第一の堀を再生することに成功。

「第一段階だ。竜騎兵部隊、爆符の束を投下」

竜騎兵が爆符束をノワールサイの大群に、シャルに貰つた五つの内三つを落とす。

前のほうの二ヶ所で五十の『エクスプロージョン』が同時に発動し

大爆発が起きる。

ノワールサイ、五百体前後が吹き飛んだ。爆発した付近のノワールサイは爆音と爆風によって平衡感覚を失いその場に蹲っている。

爆発と同時にジンが急降下する。

空に展開していた魔鳥ヤガラスが、ジンに迫る。

そのヤガラスを高速で突っ込んできた竜騎兵ドラグーンがランスで貫く。

「ジン殿に近付けるな。全力で魔鳥を叩き落すんだ。ジン殿は我々の最後の希望だぞ。」

アルシナだ。アルシナが貫いた魔鳥に止めを刺しながら指示を出す。アルベルト、ティリエルも加わり魔鳥を攻撃する。

ジンは援護を受けて立ち止まらずにノワールサイの上空にたどり着く

「残りの力を一発の魔弾、魔弾装填『竜炎弾』」

大群の中心に砲口を向け撃ち放つ

ガンッ

『竜炎弾』が放たれ大群の中心に消える。魔弾が落ちた始点で大爆発が起き火柱があがる。火柱は、拡大を続けノワールサイを呑み込んでいく。炎の中のノワールサイが黒い粒子になつて消えていく。

ノワールサイの大群、1割を焼き付くしてやつと火柱の拡大が終わり徐々に鎮火していった。。

これが第三段階。

パリン

紅炎銃が、ガラスが割れるように碎ける。どうやら力を使いきったようだ。

ジンは、黒龍刀を抜いてノワールサイの前方に降り立つ。『黒飛板』 シュバルツは、ティリエルに確保しておいてもらつ。

「第四段階だ『四重・岩壁』」

岩壁が牛鬼と堀の間に

ジンが作った4つの低く長い岩壁が戦場を真つ一つにした。重ねた状態ではなく四枚横に並んだ状態だ。

これで、『岩皇』も解けてしまった。

今の戦場の配置は

東方軍くく岩壁くく岩窟竜くく第一の堀くくジンくくノワールサイの大群

空には、竜騎兵、アルベルト、ティリエル、ミリア、フェリスの高空戦力

という配置だ。

「いぐぞ、テツ」

「【主、『J』試運を】」

狙いは、足だ。足を使えなくして身動きできな^シようとする。そうやって魔物の壁を作つて時間を稼ぐ。

ジンは『竜炎弾』と爆符束で浮き足立つてゐる大群に真正面から突つ込む。

身体を回転させながら左右の、ノワールサイの足を斬りつける。足を切られたノワールサイは、その場に転倒する。その頃群れが動き出した。転倒しているノワールサイは踏みつけられたり角で貫かれたりして死んでいく。ジンにも、多数のノワールサイが向かってくる。

「水の聖痕^{ステイグマ}を発動『水龍』、『流水陣』」

ジンは、水を使ってノワールサイの突進のベクトルをジンの脇を通りよろづに操作する。

脇を通るノワールサイの足を斬る。多数のノワールサイが堀を乗り越えようとしている。おまけに、大蛇まで堀の近くに来ている

「まだ堀を、越えられると困るんだよつ」

ジンは、堀の近くに移動することにする。ジンは、移動しながらもノワールサイを斬りつける。

「『水翼』」

ジンは、『水翼』で水を確保してから

「『大渦水』」

渦巻き状の大量の水が大蛇を中心とした場所の魔物を削り潰した。

「『水翼』・・・『万水』」

今までで最大量の水を出して堀を水で満たす。堀を乗り越えようとしていたノワールサイは溺死することになった。さらに、これで大蛇の橋を使わない限り超えられることはなくなつた。その代わり、『水龍』の時間がかなり減つてしまつたが。

「はあ、はあ・・・」

堀を水で満たしてから一時間が経過した。朝の9時を過ぎた頃だ。

「はあ、はあ、さすがに疲れてきたな。」

この頃になると、ノワールサイはジンを集中的に攻撃するようになつていた。ジンは、地面を転がりながら足を切りつける。

水を使った戦闘をしている中で転がり回つてゐるせいで、ジンは泥だらけになつてゐる。おまけに水を含んだ地面を、ノワールサイが動き回るので地面が泥沼になつてしまい一箇所に長くいられない。そのためジンは移動しながらの戦闘を強いられた。

「【ご】主人様、大丈夫?】」

「なんとかな」

今度は大蛇が三十四現れた

「また大蛇が出てきたか、さすがにすべてを殺すことはできないな。だが見逃すわけにもいかない。近いのから、片付けるしかないか」

近くに来た、ノワールサイを斬りながら愚痴る。

大蛇に向かって走りだすと今斬ったノワールサイを挟んで反対側にいるノワールサイ3体が、倒れているノワールサイをジンに向かつて突き飛ばしてきた。

「なに！？、がつ」

ノワールサイの、巨体をもろに受けてしまつ。地面を転がるジン。

「【主！大丈夫ですか！？】」

「ああ、大丈夫だ。身体中が痛いが、酷い怪我はしていない、それに座つていはいられ・・ない」

突撃してきたノワールサイの巨体を転がつて避ける。避ける際に足を斬るのを忘れない。

「はあはあ、これは、さすがに、きつい」

周りをノワールサイに囲まれてしまった。これでは、大蛇のところに行くことができない。

これではノワールサイが堀を突破するのも時間の問題だ。

ノワールサイの上空では、魔鳥をほとんど駆逐したアルベルト達が、上空からノワールサイへの攻撃に移っている。アルシナが、ノワールサイに囲まれているジンを見つけた。

「ジン殿が」

それを見て、アルシナとティリエルがジンのところに行こうとする。それを銀龍の姿のアルベルトが

「待ちなさい。君達が行つて何ができるんだ」

「ですが！」

「君にはそれを使つ仕事があるだろ？」

アルベルトが、アルシナの竜に括りつけられている爆符の束を指さす

「それに君達が行つても足手まといだ。今は自分の役目を全うしさい。」

「・・・そう、ですね。」

「わかりました。お父様」

「ありがとう。私はもう一度ブレスを放つたら、岩壁の前に陣取る君達はこのまま攻撃を続けてくれ」

地上では、大蛇の橋が10本も架かろうとしていた。

10時「」ひノワールサイの堀を渡るのが本格的になつていた。

「そりそろいいだろ、」

アルベルトがプレスを吐く。しかし、前ほど威力が出せず大蛇の橋を4本吹き飛ばした頃から、プレスの威力が落ちていき五匹目は落とせなかつた。

「爆符を落とします。」

残り一つの爆符の束も投下されて、大蛇と大蛇の上と付近にいるノワールサイを吹き飛ばした。

しかし、残つた四本の大蛇の橋から次々と堀を乗り越えてくる。

岩壁の前に、銀龍と岩窟竜が陣取りそれを迎え撃つ。

岩窟竜がプレスでノワールサイを吹き飛ばす。

銀龍は風の魔術で転倒させる。

そして二頭の竜の攻撃を掻い潜つたノワールサイと竜がぶつかり合つた。

岩窟竜は踏み潰し、あきと顎でノワールサイを噛み砕く。

銀龍は、尻尾で掴んで投げ飛ばし、近距離から風の刃で切り裂く。

しかし数はいつこうに減らずノワールサイの角が竜の体を突き刺さり始める。幸い竜の鱗は硬いので深手には、ならなかつたよつだ。

岩壁の前は激戦区と化した。ストルとアルベルトが防げなかつたノワールサイが岩壁を崩そうと何度も突撃する様子も見える。

その頃、ノワールサイに囮まれていたジンは

「『小突』」

二刀に分けた小太刀がノワールサイの目を貫く。

刀神に師事した神双流では、小太刀は基本的に防御だが、少ないが攻撃技もある。『小突』は、最小限の動きで予備動作なしで出せる突き技だ。ノワールサイの目を貫くことは、簡単だった。

この頃のジンは、目を貫いて頭の中を潰す戦法に変えていた。囮まれた状態で足を斬つて転倒されると、すぐにこちらの身動きが取れなくなるため、確実に殺せる戦法に切り替えたのだ。しかし、この戦法も限界が見えてきた。

ジンの疲労が、ピークに達してたのだ。一時間休憩なしでAランクの魔物と戦闘しているのだ無理もない。

「はあはあ、・・あと一時間を・・切ったか。もういいだろう。テツ、そろそろ奥の手を使う一度一刀に戻つて」

「【わかりました。】」

アルベルトにだけは、以前戦つたときに片鱗だけは見せた奥の手。それを全力で使う。

「これから当分は、俺の独壇場だ。」

57話 第1回 世界防衛戦・決戦の始まり（後書き）

いわゆる都合でギルドカードの仕様を一部変えました。
申し訳ありません。

58話 第1回 世界防衛戦・終戦

アルベルトとストルだけではノワールサイの猛攻を抑えきれず、岩壁の一部が破壊されノワールサイが一体が通れるぐらいの穴ができる。そこからノワールサイが岩壁を抜けようとする。

一体のノワールサイが岩壁を抜けると同時にジンが奥の手を発動する。

「人工聖痕、発動『無敵』」

発動と同時に疲労の濃かつたジンの体に生気が戻る。

「【主これはいつたい？治癒ではありませんよね】」

「『無敵』は、七大精靈全てを等しく混ぜることでできる『無色の力』を、扱う能力だ。俺が造り出した人工聖痕に、その『無色の力』を貯めていたんだ。」

「【『無色の力』？人工聖痕？】」

「『無色の力』はあらゆる力の源であらゆる力に色付けできる。今は、体力と治癒力に変換した。もちろん気力、魔力にも変換可能だ。人工聖痕は俺が7つの聖痕を調べて作り出した8つ目の聖痕だ。」

七つの聖痕と『聖痕武器』^{ステイグマ・ウェポン}に8つ目の人工聖痕。これこそが聖痕使い・ジンの本領だ。

ノワールサイが突進を仕掛けてくる。

突進を仕掛けたノワールサイはジンの手前で止まった。

どうやらジンが片手で止めたらしい。ノワールサイの突進は木をへし折るほどの威力がある、それを片手で止めてみせたのだ。

「オラアア」

目の前に突っ立っているノワールサイの横つ面を蹴り飛ばす。ノワールサイの頭がひしゃげて車よりも重い体がふつ飛んでいった。

飛んだノワールサイは、辺りのノワールサイを道連れにして突き進む20体ほどを道連れにして消滅した。

ジンは、岩壁の穴が空いた場所に向かつて走り出す。『無敵』状態のジンの気力はSSSを軽く越える。数秒で岩壁にたどり着いた。進行方向にいたノワールサイ全てに斬撃か拳打を浴びせる、その全てのノワールサイは、ジンの後方で黒い粒子になつて消滅を始めている。

ジンは、岩壁に取り付いているノワールサイ数百体に、向かつて覚えたての『フレイム・バレット』を放つ。普通の『フレイム・バレット』ではない、一つ一つの火球は大きく、熱量も異常だ。ノワールサイの直撃した部分が消滅する。残った部分も黒い粒子になつて消滅する。

岩壁が余波で、熔けている。後で聞いた話によるとガラス化していらっしゃい。

アルベルトとストルの場所に移動すると

「ジンくん、なのか？」

ストルは、自分の前に来た人物が姿形は一緒に、一瞬誰かわからなかつた。それだけ今のジン存在感は大きくなつていた。

アルベルトが心配そうに

「・・・大丈夫かい？」

「まだ大丈夫だ。今からノワールサイを殲滅する。アルベルトとストルさんは岩壁の崩壊した近辺を守ってくれ。」

「了解した。無理はするなよ。」

「努力はする」

ジンはその後も、戦場を支配し続けた。ジンが通つた後方には黒い粒子が立ち上る。しかし、すべてのノワールサイを凧ぎ払つた結果ジンが通つた道からは黒い粒子は、発生していなかつた。

ジンの左右から黒い粒子が立ち上る様を見た竜騎兵が

「まるで黒い翼のようだな。」

と呟いた。この言葉が世界防衛戦の終了後に、軍に伝わりジンが愛用している闇の精霊王お手製の黒衣と『黒龍刀・鉄』と『黒^{ショバカルツ}飛板』が合わさつて、戦後ジンは、色々な人に特に兵士から『黒翼』または、英雄と合わせて『黒翼の英雄』と呼ばれるようになつた。

ジンの圧倒的な力のおかげで戦いは終わりへと近づいていった。

長い戦闘も終わりに近づき12時を回った。開戦から24時間が経過し大侵攻の日は終わったのだ。魔物の大量発生もすでに止まっている。後は残敵を倒すだけとなつた。

ノワールサイの数も1割以下になつていて、ジン一人でAランクの魔物を8000体近くは、倒したことになる。

しかし、残り約五百体となつた頃

ジンの力の源の『無敵』が解けてしまった。

ジンの動きがガクツと鈍る。『無敵』はアルベルトが言つたように、長時間の使用には向かない、体に負担がかかりすぎるのだ、使用中は『無色の力』で誤魔化しが効くのだが時間切れになると、身体に力が入らなくなり思うように動けなくなるのだ。

左から来たノワールサイの突進をまともに受けてしまいジンの体が空を飛び岩壁に直撃する。

「がつ・・・く、そ・・ぐつ」

ジンは何とか立ち上がるが、突進を『黒龍刀』で受けた際に左腕が折れたようだ。骨折の痛みに、動きが一瞬止まってしまった。

そこを、正面からノワールサイが迫る。ジンは避けられる状態ではない絶体絶命に状況に陥る。

その時、二人の女が岩壁を乗り越えてジンの前に一人の女が降り立つ。

『剣姫』と聖騎士の一人だつた。

『剣姫』の剣がジンに迫つた角を切り落とし。

聖騎士が巨大化させた聖剣でノワールサイの首を落とす。

「クリス、シャルロットありがとうがどう助かつた。でもここで何をしている。これは俺の仕事」

「お黙りなさい！英雄様は、わたくしが戦えるように、か、か、肩揉みをしてくれたのではないんですの」

「そうです。我々が、あの激戦を戦えるようにするために、私を絶頂せたのではないか？」

「ク、クリス様、表現が直接的すぎます。」

真っ赤になつたシャルロットが指摘する、するとクリスの顔にも赤色が混ざる。

「確かにそうだが」

ジンが肯定すると

「それを危険とわかつた途端に全部一人で抱え込むなんて酷いですわ。」

「死ぬのが、わかっている戦場に連れて行けるわけがないだろ」

「わかつています。わかつていますけど理解はしていますけど、納得できないんです。」

「俺に、どうしようと？」

「いいんです、英雄様はそのまま」

（さつさ酷こって言つただろう）

「三年後は、一緒に戦つてくださいね」

「努力するよ。それに、まだ終わっていない」

前方にはまだノワールサイが500体前後いるのだ。というか今もこっちに向かってきている。

「だめです。ジン殿は休んでいてください。その腕では、まともに刀も振れないでしょ。」

「まだ右腕がある」

「主、駄目です。」

テツが人の姿に戻ってしまった。

テツの方を見ると目に涙が浮かんでいた。

「テツ、だがな」

「主お願いです。休みましょう。もう無理です。」

ずっと傍で見て、そして使われていたテツには、ジンの身体がすでに限界なのを誰より理解していた。

「・・・わかつたよテツ。不安にさせじめんな。」

折れていらない右腕でテツを抱き寄せる。ジンの腕の中で泣いているテツの背中を撫でながら。

「しかし、どうするんだ？俺抜きで」

今はアルベルトとストルが支えてくれているが、一人も結構ボロボロだ。ノワールサイ500体の相手はできないだろう。そう思っていたときに、

「ご主人様」

「主、ご無事ですか」

「ジン生きてる！」

「お兄様、大丈夫ですか」

「お兄ちゃん」

「ジン様」

「ジン殿、助けに来ました」

ジンの仲間が、岩壁を乗り越えたり空から降りてきたりしてイリヤ、キリ、ユリの戦闘能力の低いメンバー以外が勢ぞろいになっていた。

「あとは、私達にお任せください」

「わたしは、ノワールサイにリベンジだね。」

その後も、続々と救援が到着する。残りの三騎士や竜騎兵部隊を率いたアルシナも到着した。『ランスロウ騎士団』まで来ている。

皆この戦いに参加した人間の中で、かなりの実力者たちだ。それがジンのために一箇所に集まつててくれたのだ。

「皆、ありが・・と・・・う」

仲間の到着で緊張が解けたのだろうジンは、そこで氣を失つてしまつた。

彼らの活躍で程なくしてノワールサイ500体は討伐されジンは救出された。

59話 戦いの後

異世界363回

ジンは、馬車の中で目覚めた。

目を開けると嬉しそうなだけ泣きそいつな表情を浮かべたソフィアが見えた。

「ジン様・・・、良かつた。」

「おはよう、ソフィア」

ソフィアの顔が上に見えるビーナスの膝枕をされていられる感じ。

「ジン様は暢気ですね。2日も起きなかつたんですよ。」

そんなに、寝ていたのか。前の世界では、長くても十時間以上寝したことなんてなかつたのに。

「本当に良かった。私もまたおまけを楽しむよ。」

「ちょっと待つて。少しこのまま膝枕を楽しみたい。」

ジンは、ソフィアの膝に手を置いてソフィアの動きを止める。

「あつ、はー」

ソフィアは、嬉しそうに返事をしてジンの頭に手を置いた。

「ソフィアさん、お兄ちゃんの様子はどうですか？」

だが、すぐにフーリスが、馬車に入ってきた。

「お兄ちゃん！、起きたの」

顔を外に出して

「姫ちゃんお兄ちゃんが田を覚ましたよ。」

騒がしくなりそうだな。

予想に反してジンの仲間たちは、静かなものだった。抱きついたりキスしたりはしたが、長くは留まらずに馬車を出た。ジンが寝ている間に、皇都に着くまでは大人しくすることに姫で決めたらしい。

仲間の後は、各国の代表たちが訪れた。ジンの世話をしていたイヤが気をきかせて外にでる。

「ジンくん、良かった。田を覚ましたんだね」

「各国の国王が、こんなところに集まって何事だ」

「君は今回の戦いの最大の功労者だからね」

「！」の場であなたを軽視する者はいませんよ。」

カルティナの言葉にすべての王が頷く。

「まあいいか。今はどんな状況なんだ?」

「残敵は、1日かけてほとんど駆逐したよ。今は混合軍1万を残している。」

「皇都に戻つたら戦勝パーティーが開かれる。ジンくんには、それに参加して欲しい。」

「別に俺は出なくてもいいだろ」

「戦勝パーティーは、活躍に応じた報奨が渡される場もある。君が報奨を受け取らないと誰も受け取ることができなくなってしまうのだが」

クラフト王国のトランド王が、ジンを説得する。さすがは商人の王だ、言葉が巧みだ。つまり他の人のためにも参加しろということだろ。

「いつなんだ、少し休みたいんだが。」

「4日後には、皇都に着くそうだ。それから3日後に開かる。」

「・・・わかったよ」

「一先ずはそんなところだ。そのうち、会議を開くから、その時も参加してくれ」

「ああ」

「それじゃあ、お大事に」

王が次々と出ていくなかカルティナだけが残る。王と入れ違いに、『舞姫』トウカ王女、『剣姫』クリス王女、聖騎士のシャルロット、竜騎兵のアルシナ、クラフト商国のシャール王女が馬車を訪れた。皆戦いに参加した身分の高い女性が馬車に入ってくる。

アリシア皇女と聖女ウリアは、京都でお留守番だ。

「起きたのですね。お加減はいかがですか？」

「体がだるい程度だ。骨折も治っているみたいだし。」

イリヤの頑張りのおかげだらう。

「綺麗どころが集まつてどうしたんだ」

「前の時と同じよ。父さんに押し込まれたのよ」

「前もそつだつたのですか？」

そういえばアルシナとシャルロットは、前の時はいなかつたな。

「ええ、今回はわりと本氣でジンせんとの繋がりが欲しいようですが。」

「英雄様のお仲間の方はいいのですか？」

「クルト皇帝が何か取り引きしたようですよ。」

「まだ俺は」

「存じていますわ。英雄様はまだお疲れですか。ですから、お世話をさせてくださいませ」

さつきも言つたが、ここにいるのは、竜騎兵のアルシナを含め皆、高貴な身だ。つまり世話をしてもう少しお側の人間だ。

「・・・今まで看病の経験は?」

「「「あつません」「」」

「・・・知識は?」

「「「あつません」「」」

身の危険を感じていると

「わたくしは、一応軍で教えられましたわ。」

「私もあります。」

シャルロットとアルシナが名乗りを上げる。

「一人の言つことを良く聞いてくれ、やつてくれ頼むから

まあ、死んだりはしないだろ。

結果として、まあ死にはしなかった。

トウカとシャールが、怪しげな薬を飲まされそうになつたり。クリスとシャルロットが肩揉みを思い出してジンに欲情したり。カルディナが、体を拭くといって冷水をかけてきたり。と色々あつたがな。

アルシナが、普通に世話をしてくれたのが救いだつた。

「アルシナ、ありがと」

「気にするな、大した事はしていない。」

「今はそれが何より貴重なんだ」

「そ、そつか」

その後はアルシナがほぼ一人でジンの世話をしていた。アルシナは上機嫌だったが、他の女は不満そうだった。

その夜

アルシナがジンの身体を拭いているとトウカが

「ジンさんは、じつしてこんなになるまで頑張ったんですか？」

それは、ジンといった時間の少い、いじこいる女性がずっと氣になつていたことだ。

「世界を守るのに理由がいるか？」

「ジンさん、言っていたじゃないですか。この戦いは、お前達の戦いだって」

「手伝ってもらいますわ」

「手伝ってしましますか？」

「世界を守れるならそれくらいするわ」

「でも、ジンさんが死んだら。その後はどうすればいいんですか？勝てないですよ」

「そんなのわからなさ。もしかしたら俺が助けたやつが、俺よりすこいやつに成長するかもしれないじゃないか」

そんな言いませんよ、と皆が思つたが口には出さなかつた。

「どうしてジンさんなんですか？」

「俺しかいなかつたし、俺にしかできなかつた。それに、世界を守ればそれだけ可愛い子に会えるかもしれないだろ。実際に君達に出会えた。」

世界を守るといふことは、王女達のことも入つてゐるのだらへ。でも、それではジンを守る人がいない。

そこにアルシナが

「なら、ならわたしがジン殿を守ります。まだ力不足ですが、いつか隣で支えてみせます。」

「その役目は、わたくしのものですねわよ」

シャルロットも名乗りをあげる。

「シャルロット、それは私の役目です。それには、まずはジン殿の仲間と同じ士俵に立たなければいけませんね。」

ジンを置いて話がどんどん大きくなっていく。

だがジンは、彼女らが自分を支えると言つてくれたことを嬉しく思う、そして以前仲間が同じことを言つてくれたのを思い出した。

異世界367日目

皇都についた頃、ジンの体調は、普通に動ける程度には治っていた。ジンは、皇都についてすぐに屋敷に向かつ。誘拐された子達が気になつていたのだ。

「お帰りなさいませ、ご主人様。よく、ご無事で。」

屋敷の使用人達がジンを出迎える。

「ただいま。皆大丈夫だった?」

「全然平氣です。」ご主人様が助けてくださいましたから。

「そつか。皆一度中に戻ろう、話したいことがあるんだ。ここにいないやつらも一階の広間に集めてくれるか」

しばらくして、屋敷の全ての人間が広間に集まつた。

メイドが23名 庭師が3名（全員女性）

ジンのチームメンバーが12名にクレア

これにジンを加えた40人がこの屋敷で暮らしている。

ジンはその内メイドと庭師の26人を、広間に集めた。

「今回、皆を危ない目に合わせて悪かった」

ジンが頭を下げる

「『』、ご主人様、頭を上げてください。私達は好きでここで働いているのですから」

「でも、またこういうことがあるかもしれない。今回の戦いで俺を排除する動きは弱くなるだろう。だが、今度は俺の力を使おうとする奴らが出てくるかもしれない、だから君達には」

「『』主人様、私達はやめませんよ」

1人のメイドがきつぱりとした声で断言する。ほかのメイドの顔にも『やめたくない』と書いていた。

「しかし、危険なんだ。」

「『主人様、そのことで考えがあるんです。』

「考え？」

「私達もギルド登録しようと思つんですね。」

彼女達が言つた考えとは、つまりメイド23人の内15人がギルド登録をしてチームを新しく作り、屋敷の警護、主の近衛、などをやりたいということだつた。

リーダーは、ミリアが目を掛けていたジニーといつ女の子がすることになつてゐるそうだ。

ジニーだけを自室に呼んで話を聞くこととする。

「力をつけるにしても、それじゃあ危険が増えることになる」

「大丈夫です。危ないことはしません。それにクビにしたって皆自主品牌に、チームを作つてしましますよ。」

「なんでそんなことを？護衛を雇つてもいいんだぞ」

「その護衛には、男が来ることになるでしょう。それは、『主人様も本意ではないでしょ？』、私達も嫌です。それに、その・・・」

ジニーがなにやら黙つて聞いてゐる。

「なに？」

「その」主人様の近衛になれば、その、えっと、傍にいられる時間も・・・増えると思いまして。」

ジーイーが恥ずかしそうに打ち明ける。

「ここでチーム作りに反対するのはさすがに甲斐性がないな。わかつた、チーム作りを認めようただ条件がある。」

「条件ですか？」

「そう、ジーイー、俺のモノになれ」

「あ、・・・はい、喜んでこの身を捧げます。」

「それじゃあ今日の夜、夜伽を命じる」

「わかりました。ただご主人様にお願いが」

「なんだ？」

「その、夜伽に私の一人の妹も連れて行つて良いでしょか？一人とも、ご主人様のことを深く慕つております。それに実は、他のチームメンバーの娘たちは、ご主人様にお情けを頂いているようなのです。どうか妹にもお情けをくださいませんか？」

「いいぞ、連れてくるといい、ただ俺は」

「存じております。激しいと聞いています。楽しみにしていますね。」

部屋を出ようとするジーナーに聞き忘れていたことを聞く。

「やついたらチーム名は決まっているのか？」

「はい、『メイド隊』です。」

その夜

「」主人様、ジーナーです妹も一緒にです。入つてもよろしいですか。

「

「いいよ、入つてきて」

入ってきた三人娘はメイド姿だった。三人の容姿は驚くほど似ていた、薄い褐色の肌に黒髪で並べて見るとなんだか1人の人物を年代順に並べたようだ。年は3歳ずつ離れているらしい。

「じ、次女の、ディアです。」

「三女の、ケティーです。」

声まで似ている。「」れは、いろいろ想像してしまった。

「三人ともおいで」

三人がベットまで来る。

「本当に似ているな。」

そう言いながら三人を後ろから抱きしめる。

「ディア、ケティー、二人も俺のものになつてくれるかい？」

三人の真ん中の次女のディアがジンの胸に頭を預けて。

「はい、この日を待ち望んでおりました。」

三女のケティーは、なんどジンの手を掴んで自分の股間に押し当たた。

「めぢやくめぢやにしてください」主人様。」

ケティーは、とてもエッチな娘のようだ。

「むつ」

ケティーの行動を見たジニーもジンの手を服の中に導いて直に胸を触らせる。

「主人様、お口にお情けを」

二人を見たディアがキスをおねだりする。

三人とも互いに張り合つてどんどん行為が過激になつていぐ。ジンもその全てに答え、ジンからも過激なことを三人娘にしていく。

三人娘は、ジンの腕の中で氣を失うまでの三時間、競い合つようになつて快楽を求めた。

60話 戦勝パーティーと報奨

異世界370回

戦勝パーティーが開かれる日になつた。ジンは、女達に先に城に行くように言われてお城の控え室で待つていた。ジンはいつも黒衣の姿だ。

しばらく階を待つていると

「ご主人様、お待たせしました。」

最初に入ってきたのは、ミリアだった。ただその姿は、いつも通りのメイド服姿だった。てっきりドレスを着てくるのかと思っていた。「これが、私の正装です。それにこの格好ならジン様の後ろについて行けますし」

メイドの鏡だな。ミリアは元々皇族付きのメイドだったから、こだわりの一つや二つはあるのだろう。

その後は、続々と女達が入室する。

ソフィアは、髪の毛と同じ色の水色のドレス。仲良しになつたカルディアが見繕つてくれたらしい。

イリヤは、エルフの衣装を意識したものらしくて袖がない大胆な緑色のドレスだ。

リリスは、黄色いドレスを着ている。ドレスのヒラヒラが気になつ

て落ち着かない様子だ。

レティーシアは、赤いドレス着ている。しかし、皇女だけあって着慣れているようだ。

ティリエルは、黒一色のシンプルなドレスが、銀髪に良く似合つ。キリとコリは、おそろいの白いドレスを着ている。

フェリスは、メイド服のままだった。どうやら公の場で姫とばれそうなことをしたくないらしく。

テツは、パーティにもドレスにも、興味がないらしくジンの腰に刺さっている。

これらのドレスは、クルトと交渉してあつらひたらしくどれも質が良いらしい。

「皆綺麗だよ」

「一括りなのはいただけませんが、まあこの状況では仕方ありますね。」

「ありがとうござります。」

褒められてそれぞれ嬉しそうに顔を綻ばせる。

ちなみにジークとカイルの格好はタキシードだ。まあそれはどうでもいいが。

そこに、アリシャが訪れる。レティーシアと同じ赤いドレスだが、少し落ち着いた意匠になっている。

「ジン、そろそろ出番」

報奨の授^トのことだわつ

「わかつた、アリシャも綺麗だ」

「ありがと」

一見無表情だが口の端が少し緩んでいる。

皆を引き連れて、会場に向かう。

ジンが、会場に入った途端に、騒がしくなる。そして貴族達はジンに近づくものと遠巻きにするもの、あと様子見の者に分かれた。遠巻きにする者たちは

「あれが、『黒翼の英雄』か

「本当に強いのか?」

「女をあんなに連れてどうこうつもりだ」

彼らは、ジンのことを無視はできないが、平民と仲良くなんかできないといった連中だ。

そして、ジンに近づいてきたのは、ジンの活躍を聞きジンと繋がりを持ちたい貴族達だ。

「英雄様、始めてましてわたくしはリーコン教国、伯爵家の娘のメリルと言います。」

「私は、ヤマト國のフウカと言います。以後お見知りおきを

そして圧倒的に女性が多い。どうやらジンの女好きを聞いて貴族が

令嬢をあてがつてきたようだ。

「な、なんですか、これは？」

仲間の誰かの疑問に、アリシャが

「ジンは、前の戦いの最功労者。九大国がジンを支持しているのも大きい。今のジンは超重要人物」

「あ、あなた達」

「待ってください」

ジンの前に出ようとしたリリスを、腕を掴んでレティーシアが止める。リリスがレティーシアの方を向く

「なに?」

「ここのは、ジン殿にとつても大事な場、邪魔してはいけません。」

レティーシアは皇族として、こういう場には慣れている。もちろんアリシャもだ

「ここには、社交場、ジンの独占は厳禁。」

「社交場・・ですか」

正直、彼女達は誰かと交流するつもりなどない、というのが本音だ。まあ、ジンに許可は貰っているのでしつこい奴には実力で排除するので問題はないのだが

それより、ジンの周辺がどんどんすごいことになっていく。人の壁で身動きも取れそうにないし、誰が何を喋っているのかもわからない。

パンツ

手を打ち合わせる音が会場全体に響き渡り、会場が静寂に包まれる。どうやらジンが精霊術を使って音を増幅させたようだ。

「え~と、一気に話されてもわからないので、後程4人から5人ぐらいで来てください。そうしたら応対しますので」

そう言つてジンは、その場を移動する。

「これより、防衛戦の功労者の報奨の授与を行いたいと思います。」

アッシュ皇子がジンの作った空白の時間を使って、報奨の授与に入る。

「『黒翼の英雄』ジン殿前へ」

ジンが前に進んでいく。会場の奥には、九大国の王達が並んでいる。王達の前まで進むがジンはあえて膝はつかなかつた。王達もそれを咎めず報奨の授与が始まる。

「英雄ジン殿の戦功、ノワールサイ約8千頭の撃破、魔鳥ヤガラス約7千の撃破、ワーム3体の討伐に協力など、他多数の戦功を立てた。」

この発表は全ての貴族の度肝を抜くことになった。一般的の兵士には岩壁で戦いが見えていなかつたので正確な情報が出回つていなかつたのだ。貴族達は、この場で初めてジンの正確な戦功を聞いて、噂以上であることを知つたのだ。

「これにより、ジン殿に金獅子勲章を授_レする。」

今度のざわめきは小さかつた。金獅子勲章は、戦功に対する勲章の中ではかなりの上位だがジンの戦功からみれば当たり前のことがうに見えたのだ。

「そして、さらに我々は、彼に九大国で通用する爵位を_レえる。この場でジン殿を伯爵に任_レずる。」

今回のざわめきは大きかつた。それだけ伯爵位の授_レとは、かなりの異例なのだ。この世界では、今まで平民や騎士が爵位を得ることはあつたがそれは、せいぜい男爵か子爵であり、伯爵の任命は初めてのことだった。

「そして、金貨100枚の授_レをもつて終わりとする。」

$95\text{万} + 100\text{万} - 15\text{万} \text{ (メイドの装備とその他諸々)} = 180\text{万}$

ジンが一礼してその場を後にする。

「次、テンプル騎士団、ニ騎士の・・・」

その後も、報奨の授_レは行われていたが、皆どこか上の空だつた。自分を取り戻した者達は四人または五人のグループを作つてジンの近くに陣取つていく。

ジンの仲間も数人呼ばれ報奨を渡される。

180万 + 50万 = 230万ギル

「これにて、報奨授与を終わりとします。」

アッシュが締めくくつたのと同時に多くの人間がジンの元に走る。が、いつの間にかジンは九大国の王達の前に移動していた。

「クルト皇、それに皆さんけよつとよろしいですか？」

「あ、ああ」

クルト皇は、冷や汗を流しているように見えたが、すぐに奥の部屋に移動してしまった。

「あんた達、本人に相談もなく何を勝手に決めているのかな〜」

ジンの顔には、笑顔が張り付いているが、目が笑っていない。

「いや、必要だったんだよ。本當だよ」

「俺に話さなかつたことが必要だつたのか？」

「いや、それは、面白そつだつたから」

「まうまう・・・・・俺がそれで納得するとでも

「い、いいじゃないか、私だってアリシャとの婚約には、びっくりしたんだよ」

ジンの周りの温度が下がったような気がして、クルトが慌てて言い訳する。

「ああ、せういえば、クルトには事後承諾だつたらしいな」

「わうなんだよ。ってそれはいいんだよ。実はね」

「話を逸らしたな」

「実はね、ジンくんに頼みたいことがあるんだよ。」

「・・・はあ・・・なんだ?」

ジンは、ため息を吐きながらも、聞く姿勢を取る。

「九大国の身分の高い女性を娶つてほしい」

「・・・・・はあ?」

「今回のことで君の存在は、もはや伝説になつていてる。君をどこかの国が保有している、という勘違いを無くすための処置なんだ。あくまで共有といつておいたかったんだ。」

「俺は物じやないぞ。だが、まあ言いたいこともわかる。」

「すぐに結婚しろとは言わない。だから、まず君の屋敷に住まわせ

たいんだが、いいかい？」

「そのための爵位か。」

結婚することによっても婚約することによって貴族のほうが何かと便利だらうからな。

「駄目じゃないが、いくつか条件がある。まず来るのは一国から三人まで、侍女等も含めてだ。あと国家間の問題や身分の差を持ち込まない」と今はこれくらいだな。」「

「わかった。伝えよ」

「誰が来るんだ？」

「それは、まだはつきりとは決まっていない。後の楽しみに取つておいてくれ」

「わかつたよ。それじゃあ、俺はパーティーに戻るぞ仲間が心配だ。

ジンが席を立つと

「そうだね。我々もそろそろ戻らなければ、主催の我々がいつまでも席を外す訳にもいかないからね。」

そういうつて各国の王達も席を立て、パーティー会場に戻ることにする。

6-1話 英雄の今後の課題

ジンが、王達を連れて奥の部屋に消えた後のパーティー会場

「フェリスちゃん、大丈夫?」

「えつ」

ミリアが心配そうにフェリスに話しかける。

「いづいづ場は、苦手でしょう。」

「はい、ちょっと。でも、大丈夫です。」

フェリスは、グーロム王国の王族だったことがばれないかが気になつて、上流階級の人間に苦手意識を持っている。
以前会議の場で庇つてくれたジンが、この場にはいないのが尚更フェリスを不安にする。

「そうですか、一応誰かつけましょうか」

「そんなの悪いですよ。私はお兄ちゃんが戻つてくるまで、隠つこにいますから。」

「わかりました、気を付けるんですよ」

「はい」

話題の英雄と九大國の王が席をはずし静寂に包まれていた会場も時

間が経つにつれ、雑談を始める者達が多くなっていた。

そんな中、フェリスが会場の端っこでジンが戻ってくるのを待つていると

「おー、そこのメイドちょっと来い」

フェリスを城のメイドと勘違いしたのか、貴族の男がフェリスを呼びつけた。

「すいません、私は城のメイドではないんです。」

「使用者風情が意見するな、いいからちょっと来い」

「私は、あなたの使用者ではありません。」

「ちっ、貴様、どうのメイドだ。」

「おこー、・・・ジン様のメイドです。」

「ああ、あの成り上がりか

貴族の男が嫌なものでも見たかのような表情を浮かべる。

フェリスはこの時点での評価は最底辺まで落ちていた。

「何とか言つたらどうだ」

「・・・」

「別に何もありません。失礼します。」

一秒でもこの男の近くに居たくないフェリスは、その場を後にする。

「おい、ちょっと待て」

フェリスは、貴族の声を無視して仲間のところに向かう

「あのガキ、私を無視するとは無礼な。」

仲間の所に戻ってきたフェリスが不機嫌そうなのを見てイリヤが話しかける。

「どうしたのフェリスちゃん。」

「・・・お兄ちゃんを侮辱されました。」

「・・・なんて言われたの?」

「お兄ちゃんのこと成り上りがりつて、お兄ちゃんが頑張つたからの伯爵になつただけなのに」

「おい、セツキのメイド」

先程の貴族が一歩一歩歩いてくる。わざわざ追いかけしてきたようだ。それも多数の護衛らしき人間を連れてきている。その護衛は鎧こそ着ていないが長剣を帯剣をしているパーティーには相応しくない格好だ。

嫌なものを感じてイリヤがフェリスの前に立ちはだかる。

「何のようですか？」

「ほお、エルフかいい女だな。」

イリヤは、その言葉には取り合わず。

「私達の主を侮辱したようですね」

「ふん、事実だろう。おまけにこんなに女を連れ込んで見せびらかして英雄殿は何か勘違いしているんじゃないか。それに聞いているぞ、屋敷で働いているのはほとんどが元奴隸だそうじゃないか、まったく神経を疑うよ。」

パーティーに武器を持ち込んでいる恥知らずの癖に、と思いながらもイリヤは口には出さない。テツは例外だ。

「ここに、私達がいるのは、私達も戦いに参加していたからです。何もしていないあなたにとやかく言われる筋合いはありません。それに屋敷のメイドは皆いい人ばかりです。主は元奴隸だとここだわるお方ではありません。」

「奴隸など家畜と同じだろう。大方お前達も元奴隸なんじゃないのか？」

確かにイリヤは、一度奴隸の身になつた。奴隸らしいことをする前にジンに助けられたが、イリヤにとつてそれは苦い思い出だ。貴族の言葉がそれを思い出させ、イリヤの顔が険しくなる。

「なんだ図星か、ならそつちのメイドは戦いの戦利品といったとこ

ろか、まつたく英雄が聞いて呆れる

自分達は、ジンに救われた、その救われたことを侮辱されてイリヤの我慢は限界だった。

「・・・何様ですか貴方は」

「私は、コーデル国、ビラー侯爵家の長男、ビルキッドだ。お前が望むなら奴隸として飼つてやらんこともないぞ」

「コーデル国は、南のほうの小国だ。ジンなら一人で滅ぼせる規模の国だ。

「誰が、貴方のような『ミ虫のよつ』に

ビルキッドが、顔を真っ赤にして怒鳴りだす。

「貴様！奴隸の分際で私を侮辱したな。お前達、痛めつけてやれ。」

護衛が腰の剣を抜く。

それに気付いた、ジークとカイルが護衛とイリヤ達の間に入る。

「内のお嬢様方に何か御用でしょうか？」

「ジーク聞く必要ないだろ。こいつら、屑だぜ」

ジーク達の方が能力ランクは上だろうが無手と剣だ状況はかなり不利だ。ビルキッドの護衛とジークとカイルが今にもぶつかり合いそうな時

「ジーク、カイルやめろ」

「「はつ」」

ジークとカイルが言葉に従つて下がる、ジンが戻ってきたようだ。

「内の者に何か用か?」

「部下の躊躇はしつかりしたらどうなんだ。」

「何を勘違いしているのかしらんが、俺は部下はこの会場に連れてきていないぞ」

フェリスたちが驚いた表情を浮かべる。ジンは4人を見て

「全員、俺の家族だ。」

今度は、4人の顔が嬉しそうにほころぶ。

「あんたが俺を成り上がりと呼ぶのは構わない、事実だからな。だがな、俺の家族に手を出したら・・・殺す・・・いいな。わかつたら、俺の前から消えろ」

本気の殺氣をぶつける

「「うつ」」

「ビルキッド様、ここは」

護衛の一人が耳打ちして。

「わ、わかった」

ジンの殺氣に当たられたビルキッドはすぐさまその場を去了った。

「イリヤ、フェリス大丈夫だった？」

「お兄ちゃん」

フェリスがジンに抱きつく。

「手は出されていません。ですがあいつら」

「会話は、聞いていたよ。あれが人間の国の奴隸に対する考え方なんだよな。」

実際結構大きな声で話していたにも関わらずビルキッドの奴隸に対する差別的な考えを非難するものは少数だった。イリヤのことを蔑む目で見るものすらいる。改めてこの世界の奴隸への考え方の酷さを痛感した。

「（）主人様、信じていますよ。」

「ああ、任せろ」

ジンは、イリヤの前で奴隸制度を無くすことを宣言していた。イリヤはそれをまだ信じてくれているようだ。

本当の意味で無くすのには時間がかかるだろう。だが、今のジンは長寿だ。時間はある、それに今は発言力もある。

「ジン様、お時間よろしいですか？」

「皇族付きのメイド、レイシアだ。」

「ジン殿と話したいと言つ方をこちらで整理しておきました。今からよひしーでしょうか？」

「ああ、わかつた。ミリアを連れていってもいいか？」

「どうぞ。」

「それじゃあ、ちょっと行つてくれるね。ミリア一緒に来てくれ

フェリスとイリヤにキスした後レイシアについて行く。

王達と入った部屋とは別の部屋に通された。部屋には、扇状に作られた机と椅子が用意されていて一対五の形になつている。もちろんジンは、一の側に座つた。

「ご主人様、入つてくるのは4人から5人です。そして中央に座つた人をその組の代表だと思つてくださいません」

しばらくすると

「ファーランド王国のキュリア様」一行です。」

「キュリア様は、公爵家の一人娘です。家のほうは魔人を受け入れている貴族達の代表です。」

ミュリアが簡単な説明してくれる。このためについて来て貰つたのだ。

「失礼します。」

着飾つた五人の淑女が入室してきた。

「始めまして、英雄様。」

今では、クイント皇国以外でもジンは英雄と呼ばれることが多いなつている。

「どうも始めまして、どうぞお座りください」

ドレスアップした貴族の娘は、とても絵になる。仲間達のドレス姿も綺麗だったが、キュリア達のドレス姿はとても自然体で着ていて似合っている。

軽くそれぞれの自己紹介をすませる。そしてやはり、キュリアが話を始める。

「お会いしたかつたです、英雄様。武勇談をお聞かせ下さいませんか?」

「ええ、いいですよ

ほどほどに、戦いの話をしていくらかの時間がたつた頃、キュリアが質問を投げかけてきた。

「次の戦いは、どうなるのでしょうか?」

「・・・三年後の戦いはもっと激しくなるだろうね。今の戦力では、勝てないだろうな」

今の戦力とは人間の国全てだ、それでも勝てないとジンは言った。つまり、人間以外の力が必要だということだ。

「・・・英雄様は、異世界から来られたと聞きました。それでは、魔人についてはどうお考えですか？」

おそらく、これが本題だろう。魔人への対応は直接ファーランド王国に影響することなのだから。

「俺は、何かを言えるほど魔人については知らない。」

キュリアが少し残念そうな表情になる。今の世間の魔人への風当たりは強い、異世界から来たという英雄ならそれもなく魔人のことを理解してくれるかもしれないと思つての質問だったのだろう。

「安心してくれ。俺は魔人すべてを、悪だと言つつもりはない。少なくとも俺の屋敷にいる鬼族のカラッていう女の子は、とても良い子だよ。」

「魔人を屋敷に住まわせてるのですか！？」

驚きの声をだす、キュリアほかの貴族の娘も驚いている。

「ああ、何かと不自由させているのは心苦しいんだが、返そうにも故郷が遠くてな。」

「そうですか。では、英雄様は、魔人は滅ぼす、ということは無い

と思つてもよろじいのでしょうか？」

「それは、安心してくれ。それに俺はこれから先の戦いに魔人の存在も必要になると思つていい」

キュリア達の顔に驚きと喜びが表れる。もしそれが実現すれば、人間と魔人の共同戦線ということになる。ファーランドにとつてこれほど喜ばしいことはないだろ？

興奮した様子のキュリアが

「そ、それでしたら、近々ファーランドに来られませんか？」

「それは、まだ無理なんだ」

「ど、どうしてですか？」

「魔人と他の種族の溝は深い、三年後には間に合わないと俺は思つてる。だから俺は先に亜人と話をしようと思つていてるだ。」

「そつ・・・ですか、残念ですが確かにそれが正しいですね。でも今日は、ありがとうございました。とても実りのある時間になりました。」

少し落ち込んだ声を出しだが、最後のほうで持ち直した。

「それは、よかったです。」

「それではそろそろ失礼します。後が控えていそうですね」

キュリアは、そう言つて席を立つ。

「それでは、またお会いしましょうね。英雄様」

次に入ってきたのは、男だつたクラフト商国の商人だ。彼とは、ビジネスの話になつていつた。

商品は、情報だ。

「それじゃあ、亜人との関係は悪化しているのか？」

「ええそうです。グーロム王国や奴隸商人が奴隸を得るため起こした数々の事件により、亜人にもかなりの被害がでています。亜人は、ただの人間より需要が高いですから。」

「おたくはどうなんだ？ 奴隸は扱っているのか？」

「私のところでは一切扱っておりません。そうでなければ、ジン様の前に姿を出せるわけが無いではありませんか」

「まあ、そうだろうな」

その後も、いくつか情報を買つ。

230万・5万＝225万、ギル

買った情報からわかつたのは、一国単位でなら協力的な種族もいるが、人間に对してどの種族も敵対とはいかないまでも、警戒はされているようだ。

奴隸の問題に魔人の問題、さらに亜人との問題も出てきた。これは、思っていた以上に忙しくなりそうだ。

まずは、今度ある会議で議題に出すとするか

その後もジンはたくさんの中と面会することになった。面会は夜遅くまで続き何とか今田中に終わつたが、レイシアが整理してくれていなかつたら、もっと酷いことになつていただろう。

レイシアほしいな。

62話 世界防衛会議・二回目

異世界373回目

二回目の世界防衛会議が開かれた。

もううん今後の方針についてだ。

「ジン殿確認したいのだが、次の侵攻までどれくらいあるのですか？」

ジンは神様に貰つた懐中時計もどきを見る。

「1187日後だな」

「1187日後ですか？1067日後ではなく？」

「ああ、そうなつてこる。ビルにうわけか120日遅くなつている。」

今度の侵攻は本来なら三年後のはずだ。この世界の一年は360日だ、三年で1080日間だったはずが1200日間になつていて。

「その頃は、冬です。もしかしたら黒い半球が季節も考慮したので
は」

「まあ、これについては考へても仕方ないだろ？ 今から今後の課題に移りたいんだが

「そうですね。」

それぞれ今後の課題をまず出していく。

「まずは、夜ですね。光の確保の方法を考えなければ、ジン殿だけでは三日間照らし続ける難しい。できたとしても赤い銃を思いつきり使えないのは痛い。」

「次に、空ですね。高空戦力があまりにも少ない。ジン殿と竜騎兵と竜だけでは三日間はきついでしょう。」

「ノワールサイの大群はどうする？先の戦いのよつてジン殿を使い潰すわけにはいかないぞ」

どんどん課題がでてくる。全ての課題にジンが関わっているところがなんとも言えない。

以前の会議に比べてみんなのやる気が段違いだ。あの戦いを経験して王達の認識も変わったのだろう、これならこの後の提案も何とかなるかもしねれない。

出てきた課題は、

夜の暗闇・高空戦力の不足・ノワールサイの突進・三日間といつも時間の戦闘

その他にも色々あがつたが大きなものはこの4つだ。

次に対策の話に移る

ノワールサイの突進は、堀を増やして軍の後ろにも作るといつゝことになつた。

つまり、堀くく軍くく堀にするのだ。

ノワールサイをわざと通して堀に突き落とすといつものだ。これらまともに突撃を防ぐ必要はなくなる。

人間は、細い板でも使えばいい、ノワールサイは重いからその程度なら大丈夫だ。

ノワールサイの対策はできたが、他の課題に良い案が出てこず会議は難航した。

「皆さん」

ジンに視線が集まる。その視線に以前のような邪魔者を見るような視線は無く期待するような視線になつてゐる。

「皆さんに提案があります。」

「なにか考えがあるのかい？」

「似たようなものです」

「では、お願いする」

次の瞬間、ジンは今までの会話と関係のなさそうな、かつとんでもない提案を口にした。

「奴隸制度の廃止を提案したい。」

「なつなにを急に言い出すんだジンくん」

「いつたいどうしたんだ?」

「今日は、今後の侵攻の対策の会議だぞ。そういうことは、別のこときに」

「関係ならある。」

ジンの断言に王達が黙る。そんな中アリシャだけが平然と

「どう関係があるの?」

「ありがと、アリシャ。今あなた方が話していた通り今後の課題が多いです。そして今度の戦い人間だけでは勝てないと私は考えています。」

「どうしてそう思うんだね?」

「高空戦力を今以上増強することはほぼ不可能です。これはお分かりですね」

「確かに、ほぼ無理だな」

「そのほかの課題も解決は難しいです。そこで私は亞人を引き入れることを提案します。空は鳥族がいますし、夜目の利く獣人もいます。そのほかにも彼らは突出した能力を持っています。引き入れることができるれば大幅に戦力を多方面に拡大できます。」

「彼らが協力するかね?」

「この戦いは世界を守る戦い、この世界に住む以上は亜人にも協力してもらひのが筋でしょう。」

「だが、それが奴隸制度の廃止とどう関係があるんだい？」

「今の亜人は人間の対して不信感を持っています。その原因が奴隸制度です。奴隸制度をそのままにしては、亜人と同盟が組むことは難しい。」

言うべきことはすべて言った。

「今私が言ったことを一度皆さんで良く考えてみてください」

ジンは席に座つて目を閉じる。すると辺りで奴隸制度廃止についての議論が始まる。

「奴隸を解放すると労働力がなくなる」

「解放した後はどうする。面倒を見るのか？」

「金が無いだろう。亜人の奴隸もいる。」

否定的な意見ばかりが出る。内心奴隸を手放したくないのだろう。ひそかに失望しながらも静かに待つ

見送りで意見が纏まつとした時

「ちなみに、俺は奴隸制度が嫌いだ。奴隸制度が残る世界を守るつもりはない。アルベルトとストルにも手を引かせる。」

この瞬間、提案は提案という名の脅迫になつた。

「ジ、ジンくん？」

「俺は、本気だぞ。確かにこの世界では階級制や王制は必要だらうが。首輪で相手の意思を無視する奴隸制度が必要だとは到底思えない。」

「まあ、元タクイント皇国は奴隸を禁止しているのとそれほど問題ではないのだが」

「クイント皇国には、相談役になつて貰う。」

「やつぱりそうなるんだね。」

「わが国も奴隸制度を廃止しよつ」

ヴァーテリオン帝国がジンの提案に賛同する。

「私の国も廃止します。」

すると他の九大国も賛同する。

ジンの言葉を聞いて亜人との同盟が必要なことも理解しているのだろう他の国々も渋々賛同し始める。

ジンの言葉が王達の本国への言い訳にもなるのも賛同し易くした。本国で反対されてもジンの責任にすることができる。ジンは会議の場で発言した言葉の責任は取らなければいけないし、ジン自身自分の言葉には責任を取るつもりだった。

ジンは会議が奴隸のこと程度で揺れているのを見て心の中で

(「Jの様子だと魔人の話は控えたほうがよさそうだな）

と思ひ。九大国の王達には折を見て話してみるかな。

こうして重大な決定が下されたことにより、今回の会議はひとまず終わりとこうことになった。

各国の王が席を立ち部屋を出る。そんな中カルモンド王国の新しい王、Hクス王がジンに近づいてくる。

「ジン殿」

「なんだ？」

「父上の無礼、真に申し訳なかつた。」

グスターのことか正直その後の戦闘が激しそぎて忘れていたくらいなのだが。

「ああ、そのことが気にするな。それよりお前は大丈夫なのか？」

「はい、私が王位を継ぐことは、すでに決まっていましたから。」

「そうじゃない、肉親の死は誰の死だろ？といつらい。お前は平氣か

？」

「・・・そんなことを聞かれたのは初めてです。そうですね、父が死んでからの国を見て、本当に父はわが国にとつて邪魔者でしかなかつたのだな、と痛感しました。」

「お前とこいつは？」

「悲しいですね。ただ、国のためになると想つてこる自分もいます。ハハ、酷い息子ですね私は。」

「お前は、王の資質を持つていぬよ。胸を張つて玉座に座るとこで戴冠式はまだなんだろ？？」

「ええ、ですが。次の会議で奴隸制度廃止の細かい決定をしたら戴冠式を行いたいと思つてます。今は戦時と変わらないので国内だけでになりますが」

「やつが、頑張れよ」

「ジン殿はこれからどうするのですか？」

「俺は世界を回るつもりだ。色々足りないものも見えてきたしな。」

「いいですね。僕も一度は旅に出てみたこと思つたことがありますよ。あれ？でも会議ではそんなこと一言も・・・いんですか？」

「俺は、どにも所属はしていなからな。後で九大國の王には話すがあくまで報告で相談じやない。帰つてきたら土産話をしてや

「ひ

「楽しみにしてこます。それでは、失礼しますね」

「ああ、じゃあな」

彼が王になればカルモンド王国も良くなるだろう。

それから1週間後、正式に奴隸制度廃止が決定された。奴隸差別はすぐには無くならないだろうが、これはジンにとって大きな一步だ。

63話 お嫁さん候補

異世界 381日目

一度目の侵攻まで後1179日

今日は奴隸制度廃止が決定した次の日で、各国からお嫁さん候補の女性が集まる日だ。

最初に到着したのは、アルシナとその部下だ。来ている服は竜騎兵ドラグーンの格好ではなく、女性用の軍服姿できっちりしていて一人とも凛々しい。

「ジン殿久しぶりです。」

「お姉様に手を出したら殺す。」

ついて早々部下の女がジンに殺氣を飛ばしていく。ジンはその殺気を軽く流して

「アルシナ久しぶり。君が嫁さん候補なのか？」

「半分当たりで半分外れだ。私だけではないんだ」

「私も候補です。」

殺氣を飛ばしてきていたアルシナの部下から驚愕の真実がもたらされた。貴族だったのか、・・・意外だ。

「と言つよつ私が、本命のお嫁さん候補よ。いい、私はフォーダル

公爵家の長女のファー・ラインツ叔父様の姪よ。ラインツ叔父様には子供がないから私と貴方を結婚させて、貴方に継がせることを考えているようつね。」

「…………はつ？」

「あくまで可能性の話。そう簡単にいくはずがないでしょう。それに私は貴方なんて『めんだわ』。」

「せうか、俺も政略結婚は嫌いだ。気が合つたこれからりよりしくアーラ」

「ふん」

「まあ、中に入つたらどうだ。メイドが案内してくれるから」

次に到着したのは、ファー・ランド王国の公爵家令嬢のキュリア嬢が侍従を二人連れて到着した。

「英雄様、これからお世話をになります。」

「まさか君が来るとはね」

「ふふ、分かれるときに『また』と申し上げましたよ。といひで英雄様に』相談したい』ことがあるんです。」

「その子のこと？」

侍従の片方が外套を深く被つていて性別すらよくわからないのだ。

「実はこの子は魔人なのです。屋敷に入れてもよろしいでしょうか？」

「思い切つたことをするね。」

下手なことをしたら殺されかねない

「俺は構わないよ。」

「よかつた。マリネ、この方は大丈夫よ。」

マリネと呼ばれた外套を着た子は、外套を脱いだ。中から出てきたのは、普通の女の子に見えた。

首を傾げていると

「この子は蛇人へびひとです。身体に鱗がある部位がある部族で、見ての通り見た目は人間とほとんど変わりはありません。」

「へえ、よろしく、マリネ」

「よ、よろしく、お願い、します。」

緊張しているのか警戒しているのか声が硬い、打ち解けるのには時間がかかるかもしれないな。

次に来たのはカルモンド王国で、侯爵家令嬢のルーテシアという娘と侍女が一人来た。ルーテシアは、金髪ロリ少女のドレス姿だ。ミリアの話では少々高飛車らしい。

「始めまして、わたくしルー・テシアと申します。これからじまくは、お世話になります。」

じまくは、か少し言葉に棘を感じるな。

「始めまして、俺はジン。よろしく

握手をしよう」と近づくと

スス

と後退するルーテシア。

もう一度近づいてみる。

スス

左に逃げた。近づく、離れる、近づく、離れるを何度も繰り返して

「どうしたんですか?」

埒があかないの侍女に尋ねてみると

「その、実はジン様のことを色魔と思っているようとして。それとかなり急な話でしたので、まだ心の整理がついていない内にこのようになってしまった。」

「だってそうでしょう、名前から女を集めているやつじゃない!」

集めたのは俺じゃないんだが、まあいいかこういう子がいても。

「ああ～そうでしたか、わかりました。この後は屋敷の者に任せましょう。挨拶はできたので、これで失礼します。」

次にきたのは、ウルティア国からカルティアの妹のカメリア姫とメイドが1人だ。

「小つさいな。」

カルティアのミニチュアが田も前にいた。外見は文句なしの幼女だ。

「小さい言つた。成長が遅いだけだもん。」

「ずいぶん軽い感じの子だな。」

「カルティアの妹なんだよな？」

「やうだよ。と言つてもかなり年は結構離れているんだけどね。」

「でも、嫁さん候補のはずだろ。君じゃあ」

小さずめる。

「十年も経てば気にならなくなるって、まあ姉さんは自分が狙っているみたいだけどねえ」

それで小さなカメリアを出してきたのか。

「これからよろしくね。お兄さん

その後も次々にお嫁さん候補が到着した。

テンプル騎士国からは、クリス王女とシャルロット
ヤマト国からは、トウカ姫と巫女風の侍女が2人
リーヨン教国からは、聖女ウリアと神官と神官騎士が1人ずつ
クラフト商国からは、シャール王女と侍女が1人

四ヶ国からの候補は知り合いばかりになつた。

屋敷は広いのでまだ余裕はあるが、最初に貰ったときは広すぎると
思っていた屋敷も、今ではちょうど良く感じるようになつてしまつ
た。

その夜、全員を集めての食事会を開くことにする。全員が食堂に集
まつた頃にクイント皇国第一皇女のアリシャも到着し、食堂に現れ
たアリシャにお嫁さん候補の女達が注目する。注目する理由はもち
ろんジンの婚約者という部分で他の者より一歩リードしているから
だろう。

注目を集めるアリシャはそんな視線を気にもせずに、ジンの元まで
来て。

「ごめん、遅れた」

そう言いながら、椅子に座るジンの膝の上に座る。

「な、何をしていますの？」

シャルロットの額に青筋が走っている。他の女も面白くなさそうだ。

「婚約者の特権?」

「私に聞かないでください!」

ジンはアリシャを脇に手を入れて持ち上げ、隣の椅子に座らせる。

「アリシャは二つちつ

「むつ

アリシャが少し不機嫌になつたが、他全員が不機嫌になるよりはいい。後ろのメイド達もなんか怖かつたし。

「まずは、食事にしよう。うちのフェリスが俺の世界の料理を再現したものでな、まあ俺なりのおもてなしだ。料理の質問は後ろのメイドにしてくれ」

食卓には、以前作ったハンバーグや唐揚げをはじめ、肉料理だけでなく炊き込みご飯や煮込み魚なども再現している。

お嫁さん候補の女達は、舌が肥えていそうで少し心配だったが、おいしそうに食事をしてくれていた。その様子を見てフェリスがジンの後ろで嬉しそうにしている。並んでいる料理の中には、フェリスの創作料理も混じっている。その料理もおいしそうに食べててくれているのが嬉しいよつだ。

「見たことが無い料理ばかりです。とてもおこしいです。本当に異世界から来られたんですね。」

「まあな、といつてもそんなに凝つた料理は知らないんだけどね。この料理もフェリスが色々工夫してくれおかげだしな」

「フェリスさんって戦いでも結果を出したんだよね。すげーーー

カナリアがフェイスを讃える。

「や、そんな」とありませんよ。お兄ちゃんのおかげです。」

「お兄ちゃんのおかげ? 何したの?」

「前もって高空戦の特訓をしただけだよ。」

ジンはなんでもない」とのよう言つが、お嫁さん候補を少なからず驚かせた。

夕食が終盤に差し掛かつた頃にジンが

「皆に知らせておかないといけないことがあるんだ。実は俺は数日後には旅に出て、世界を特に亞人の国を回るつもりだ。だから俺は屋敷にいることが少なくなる。」

「そ、それでは、来た意味が無いではありますか」

「まあ、そうなるが。でも三年後の戦いに必要なことなんだ。」

「同行してもいいのですか?」

「うめん。最初は、一人で行きたいんだ。」

「どうしてですか？」

「俺は亞人についてほとんど知らない。だから一人で先に行つて色々知つておきたいんだ。それに最初は聖痕の力で移動するから同行は不可能だと思う。旅先で合流するは可能だろうけど。」

「わかりました。」

何人かは来る気満々のようだな。すぐに身内で相談を始めてくる。

「私達が先に出てもいいのですよね？」

「ああ、構わない。ただ護衛とかのこともあるから俺に相談してね」

クリスの質問に答える。

「居場所は、クルトに腕輪を貰つておくのでそれで頼む。俺からのお知らせは以上だ。それじゃあ俺はこれで失礼するよ。細かいことはまた後日に。」

ジンはそう言つて食堂をでる。そして自室に戻ると部屋の前にクレアさんが待つっていた。

「クレアさんどうしたんですか、こんなところで？」

「ジンさんにお願いがあります。私をチームに加えてください。」

「えっ、急にどうしたんですかギルドの仕事はどうするんですか？」

「私ギルドは辞めておもした。」

「・・・なんで、そこまで」

「私、拉致されたとき周りの男達の話を聞いてあきらめました。助からなって思つてました。そこに来るはずのないジンさんが現れて助けられて。その時から、ジンさんのが好きになつていました。いいえ前から意識はしていたんです。それがこの前のことで」

「ありがとう、嬉しこよ」

「ジンさん、私もハーレムに加えてくださいー。」

今のかレアさんはいつものできる女ではなく、恋する乙女のようだとでも可愛く見える。

「喜んで。」

クレアを抱き寄せてキスをくる。

「ジンさん」

「ちなみにクレア、もう夜だね」

「えつ、はい」

「やして、ここは俺の部屋のすぐ前だ。」

「・・・」

「おこで」

「ジンちゃん、ちよ、ちよつと待つてください。まだ心の準備が

「待たない」

クレアを部屋に引きずり込んでベッドに押し倒す。

「ジンちゃん、あの、ちよつと」

服の上から胸を揉む。

「やあ」

「やつぱり今日のクレアは可愛にな。つい、いじめたくなる。」

「うひ~

涙目の中アを解放して

「クレア服脱いで」

「え、はい」

クレアは恥じらいながらも服に手を掛けるが

「あのジンちゃん、そんなにジロジロ見られると恥ずかしいんですね」

「ここから。俺に見せ付けるよ!」

クレアは、恥ずかしがりながら服を脱いでいく。一枚一枚と脱いでいき今は下着姿だ。

「そこでストップ」

下着姿で立っているクレアを後ろから抱きしめる。そしてゆっくり時間を掛けて下着を脱がす、その時のクレアの恥らう姿はグッと来るものがある。全てを脱がして全裸にすると。

「クレアが一番恥ずかしいと思つ姿勢を取つてみて」

「・・・はい」

普段のクールな秘書の姿を捨てて、田の前であられもないポーズをとるクレア。

その後も次々と恥ずかしい注文をしていく。

するとクレアは恥ずかしがりながらも従順にすべての注文に答えた。

我慢できなくなつたジンと身体を重ねるまで全裸であらゆるポーズをとる羽田になつたクレアは、ジンに体のすみすみまで見られることになつた。

クレアは、この田を一生忘れることが無いだろう。

64話 世界の敵

異世界382回

「」は、『無得と魔物の大地』

そして『無得と魔物の大地』を巡回中の部隊

「あ～あ、今頃皇都では戦勝パーティーでもやつてるんですかね、
隊長」

「もう終わつてると、それに俺達には関係ない世界の話だ。」

「確かに、そうつすね。でも、英雄様はお呼ばれしてますよ。」

「まあ、あれだけの戦功をあげたんだからな当然だろ。」

「隊長、あれつて本当に英雄様がやつたんですかね？」

「どうこう意味だ？」

「いやね、どうも信じられないんですよ。ノワールサイ、八千頭撃
破なんて人間技じゃないでしょ。」

「お前は最近そればかりだな。確かに片思いの女が最近英雄の話ばか
りするんだったか。」

「うぐ」

兵士がその場に蹲る。

「まったく、英雄の活躍は竜騎兵が確認している。そんなことばかり言つているとその女に嫌われるぞ」

「……ぐぐす」

どうやら手遅れだつたようだ。

哀れな部下に憐憫の眼差しを向けていると

「隊長、人が倒れています。」

「なんだと、何人だ？ 状況は？」

「それが、奇妙なことに一人だけポツンと倒れているんです。」

確かに奇妙な話だ。ここは、数日前に防衛戦が終わってから混成軍1万がずつと見回りをしている。見回りは部隊」とだから一人というのにおかしい。異常事態でも死体くらいはありそうなものだが。

「緊急事態かもしれん、急いでその者を保護する。案内しろ」

隊長は、部下12人を連れて向かう。

移動するとすぐに見えてきた。どうやら一般兵の男のようだ。

「おい、大丈夫か？」

意識がないのか返事がない。さっきまで愚痴を言っていた兵士が真っ先に助け起こす。

「生きてるか？ 目をあ

ドス

「えつ・・・・あ、う」

生存の確認をしようとした次の瞬間、兵士の胸を血のように赤い剣が貫いた。

赤い剣を持つた兵士が剣を兵士の胸から引き抜いて立ち上がる。貫かれた兵士はその場に倒れる。

「貴様どこの部隊の者だ！」

「俺様はもう何処にも所属してねえよ。バーカ

男が、剣を振り上げ魔術を行使する。

「『ダーク・ファイヤ・ボール』」

聞いたことのない魔術だ。男の頭上に黒い炎で出来た火球が出現する。男が剣を降り下ろすと連動して黒い火球が放たれ部隊に襲いかかった。

「ああああああ
「ぎやあああ」

「ああ・・・あづ・・・」

三人の兵士が黒い炎に呑み込まれ焼け死ぬ。

男は黒い炎を纏ながら生き残りに向かつて名乗る。

「よく覚えておけ人間ども、俺様は『黒炎使い』のガーランド。お前達の敵の名前だ――――」

叫びながらもう一発黒い火球を放つガーランド

「て、撤退だ。至急本部に連絡する」

部隊長は、すぐさま敵わないことを悟りその場を撤退した。

何故か黒炎使いは、逃げる兵の背中には攻撃を加えず、その場も動かなかつた。

「これで良かつたんだよな?」

逃げた兵士が見えなくなるのを確認して、ガーランドが暗闇に、いや黒い半球に向かつてしゃべりかける。

するとなんと黒い半球の中から三人の男と一人の女が現れた。ガーランドに驚きは無い何故ならガーランドもそこから来たのだから。ちなみにこの怪しげな集団の内訳は少年、青年、中年、老人、妙齢の女性の五人だ。

「ええ、いいパフォーマンスだったわ。これであなた1人に人間達

の注目が集まるでしょ。」

五人の中で唯一の女が発言する。

「それはそれは、楽しそうだなああ」

「理解できないな」

五人の中で一番小さな少年がそう吐き捨てる。

「そう言つた坊や、世の中色々なやつがいる」

老人が宥めるが

「そんなの俺の勝手だろ。」

少年は反発するだけだ。

「我々は別に仲間という訳ではない。ただ同種の力を『えられた。
それだけだ。後はそれぞれやりたいようにやるだけだ。』

最後の男が発言する。集団の中で一番身なりのいい中年の男だ。

「それには同意だな。俺は、殺して殺して殺しきくす。」

「『自由に』

「我はあの獸を貰つ。やりたいことがあるのだな。」

中年の男が言つてるのは少し離れた所にいる魔獸のことだ。

「どうぞ、わたしはこれを貰います。」

女は黒い槍を黒い半球から取り出す。

「僕は、このペンダントを貰ひつ」

少年は、逆十字のペンダントを取り出し。

「では、残り物はわしがもらおつかの」

老人は、儀式剣を半球から取り出した。

ガーランドの赤黒い剣や魔獣も黒い半球から出てきたものだ。

「それじゃあ、それぞれやりたい」とも違うよつだし、俺は先に行くぜ

ガーランドがその場を後にする。他の者達も無言でその場を後にする。

この時、IJの世界の敵が、ジンの知らないことじりで暗躍を始めた。

65話 雪の精靈

異世界 382日目

二度目の侵攻まで後1178日

朝、目が覚めると田の前に眼鏡を外したクレアの顔が見えた。眼鏡を外したクレアはどことなく幼く見えて新鮮だ。まあ、そこまではいい昨日はクレアと一夜を過ごした後、クレアを抱き枕にしたのだから不思議ではない。

問題は、背中にもうひとつ体温を感じることだ。それもキリかユリぐらい小さいのだ。しかしキリやユリではない、一人ならもうひとつ体温を感じないとおかしい、可能性としてはアリシャくらいだろうか？

恐る恐る後ろを向いてみると真っ白い髪の毛が見えた。アリシャではない、アリシャは白みを帯びた金髪だ。毛布を捲つてみるとそこには、白い肌に純白の髪あどけない寝顔を晒している八歳ぐらいの幼女がいた。

「！」 小雪

ジンのことをパパと慕う雪の精靈だ。その小雪が裸で刀を抱えて眠っている。

「刀？」

「『』主人様、朝で『』ぞい・・ま・・す。」

タイミング悪くミリアが入って来てしまった。

今の状況、半裸のジンと全裸の幼女

「『』主様が幼子にまで手を。フニリスちやんには手を出していいな
いから安心してましたのに。」

「違つからなー。」

「うへん、パパどうしたの?」

小雪が起きたようだ。眠ねりで田代を擦つてこるのが可愛らしき。

「『』主様そんなプレイを

「ミニア、お前実は悪乗りしてただろ」

「では、隠し子ですか? 実はわたくしこれが一番あつむると想つて
いるのですが?」

「それが一番近い気がするが、ちょっと違つー。」

「はあーあ、ジンさんどうしたんですか?」

欠伸をしながら全裸のクレアさんが起きた。ミニアにはジンでちよ
うど見えない位置だったのだ。

「まさかのクレアさんとの間の子供ですか!?」

「だから違つ。それヨツミリア、子供服を急いで用意してくれ。裸
でこさせるわけにはいかないだろ。」

「あ、はい。確かにそうですね、かしこまりました。」

ミコアが、すぐに部屋を出た。

朝の出来事から、しばらくたって食堂で朝食を取りながら説明することになった。この場にいるのは、テツとミコアとフューリスとリスにジンと小雪を含めた6人だ。クレアさんは「今は恥ずかしいので一人にしてください」と言つてからじこ。

「つまりこの子は精霊でジン様が精霊の統合を失敗したときに、ジンさんの血を取り込んで生まれたんですね。」

「やうこつーこと。存在としては、テツに近いかな。」

「やういえば小雪ちゃんが持つてゐるのって刀ですか?」

ティリエルがテツを気にしながら小雪にたずねる。

「美味しい～、うん? そうだよ。『精霊刀・七星』って書いて七種全部の精霊を込めることができるんだって。」

確かにそれは俺向きの刀だ。

「主の刀は私です。」

テツが張り合つた。

「でもパパは、一刀流だよ

「む！」

珍しくテツが悔しそうな表情をしている。テツだってそんなことはしつているのだ。だから一刀に分かれる力を作つたりと頑張つているのだから。

「あ、後これはパパの刀の人！」

小雪の手から小さな透明な石が出てきた。

「これは？」

テツの不機嫌な声を、小雪は全然気にした様子もなく

「『精霊石』だって、土のおじちゃんが、あいつとあいつかけになつて言つてたよ！」

「あいつかけ……。主後でお話したいことが」

改まつてなんだらつ？まあ、テツの珍しい頼みだし断る理由も無い。

「わかった。」

「ジン、土のおじちゃんって誰？」

鍛錬から戻つてきいたリリスが質問する。

「土の精霊Hのことだ」

「精靈王がおじりやん」

食堂になんとも言えない空気が流れる

「あ、戻れた。パパ、闇のお姉ちゃんが今度行くから覚悟しろー
だつて」

「そうか。楽しみだな。」

もう一息の内に、小雪が食事を終え

「いいわよめました。パパ遊ぼー。」

小雪とは一年以上も離れ離れだったのだ今日へりこは一緒に過ごす
ことにしてよう。

「今日は、小雪の相手をするから、悪いけど他の子への説明お願
いしていいか?」

「はい。親子の久しぶりの対面です。お任せください」

ミコアが快く快諾する。

「ありがと。小雪、何して遊ぼつか?」

「肩車で屋敷を探検したい」

「よし、わかった。行こうか」

小雪を抱えあげて肩車する。

「わーい、高い高い」

それだけで小雪は喜んでくれる。一通りはしゃぐとジンの頭を抱きしめて

「パパのにおい、久しぶりだよ～」

やつぱり寂しい思いをさせていたようだ。だが、ジンは数日後には亞人の国に出発する。

その事も話さなければいけないな。

しかし今は、小雪を楽しませることだけを考えることにじみづ。さて、何処から行こうか？

ジンは行き先を考えながら、廊下を進む。

庭に出ると『メイド隊』が訓練をしていた。まだ日が浅いのに随分さまになっているな。魔術をミリアが近接をレティーシアが教えている。

今は自己鍛錬の時間らしい。

「」主人様、入らしていただいたんですか。その子は？」

いち早く気づいた三人娘が近づいてきた

「」の子は、小雪。細かい」とは、ミリアに聞いてくれ。」

そういえばまだギルドカード見ていないな

「ギルドカード見せてくれないか？」

「『主人様の』要望とあれば」

ギルドカード

名前	ジニー	種族	人間	性別	女
ギルドランク	D				
能力ランク	総合C	気力C	魔力C		
チーム	『メイド隊』				
称号	ジンのメイド				

名前	ディア	種族	人間	性別	女
ギルドランク	D				
能力ランク	総合C	気力C	魔力C		
チーム	『メイド隊』				
称号	ジンのメイド				

名前	ケティー	種族	人間	性別	女
ギルドランク	D				
能力ランク	総合C	気力C	魔力C		
チーム	『メイド隊』				
称号	ジンのメイド				

三人とも仲良く能力を上げているようだな、ランクが全部一緒だ。

一緒にカードを見ていた小雪が

「ねえパパこの人達ってパパのハーレム?」

「やつだよ」

小さな子の前であつたり肯定され三人娘は、嬉し恥ずかしいといった感じだ。

「でも、小雪が一番目のハーレムだもんねえ」

あの時は将来的な意味で待つていろと呟つたんだが、まあ確かに一番田ではあるな。

「確かにやつだな」

『メイド隊』を驚愕しているが、まあいいだろ？。

「パパ、小雪もカードが欲しい」

子供でも登録できるだろ？か？
まあ、俺がいればなんとかなるか。

「じゃあ、行つてみるか？」

「うん」

所変わつて冒険者ギルド

「申し訳ありません。子供の登録はお断りしているんです。」

「大丈夫ですって」の子は強いですから」

「そんな」と言われましても強さの確認が取れないと

「確認が取れればいいんだな」

ジンは、そう即つとギルド内にいた冒険者から適当に連れてきた。話していた内容から察するところ、ジンくぐらいらしげ

「この子と戦ってくれ。」

「英雄さんよ俺達のことなめてんのか？」

「ああ、もし勝つたら百万ギルやるよ」

冒険者の田の色がかわった。子供を攻撃すればギルド内で干されるだろうが百万ギルあれば当分は遊んで暮らせん。

「いいだろ？。」

「小雪手加減しろよ」

「はーー」

名前も知らない冒険者が木刀を構える。

ジンの合図で始める

「はじめー。」

「つおおーー。」

冒険者が声を張り上げて走り出しが

「『氷柱』」

小雪の頭上に氷槍が現れ同時にその氷槍が放たれる。冒険者の周りに氷の槍が突き刺さり動きを封じる。

「えつ、な」

「まだやる?」

小雪は単純な意味で続けるかを聞いただけだったが、冒険者は生死の判断を迫られているかのような錯覚をした。

それも無理は無い、どれかひとつでも氷槍が当たれば死んでいたのだ。

「一、降参だ」

「パパ勝ったよ~」

「お~偉いぞ小雪。」

ジンが頭を撫でる。ジンに撫でられて幸せそうな顔をする小雪は、ただの幼い子供だ。しかし、小雪はその小さな身体に強大な力を秘めているあることをこの場で証明した。

「あの屋敷は異常だな」
「子供であれかよ」
「目を合わせるな。殺られるぞ」

「男には容赦ねえからな」

とまあ色々言われているが気にしない

「小雪の登録いいかな?」

受付嬢は何度も頷いた。

ギルドカード

名前	小雪	種族	精霊	性別	女
ギルドランク	F				
能力ランク	総合D	気力D			魔力C
チーム	『世界を結ぶ者達』				
称号	ジンの娘	雪の精霊			

「へへへ」

カードを見ながらにやける小雪を肩車して屋敷に戻る。
そういうえば屋敷の案内をまだしていないことと思い出す。
『メイド隊』の訓練も終わった頃だろう。ということは、どジンは
考えを巡らせる。

「小雪屋敷に戻つたら探検再開だ」

「うん」

屋敷に戻つて向かつたところは、屋敷に三つある風呂の内の三十人以上が余裕で入れる大浴場だ。他の二つは男湯と5人くらいが入れる浴場（基本カラとマリネが使う）がある。ちなみにジンは、三つ

全てのお風呂を使う。

「『』、『』主人様！」

もちろん大浴場には、訓練明けの『メイド隊』十五人が汗を流している。そこに、タオル一枚のジンと素っ裸の小雪が乱入したのだ。

「皆お疲れ様。今日は日頃の苦労を労おうと思つてな。皆を洗つてやろうと思つてな」

「パパ、小雪が一番だよ」

「ああ、わかつてゐよ」

「『』主人様、次は私にお願いします。」

ケティーがすかさず名乗りをあげる。そのケティーに張り合つてジニーとディアが

「わ、わたしも」

「お、お願いします」

三人娘がジンにお願いすると、ほかの女達も

「いいのでしょうか？」

「『』主人様に身体を洗つていただけるなんてめつたにないわよ
確かにそうね。」

「『』わたしもお願いします。」「」

最終的に全員の身体を洗うことが決まった。

まずは、小雪からだな

「ほり小雪、ここに座つて」

ジンの前の椅子に小雪を座らせ、小雪の真っ白な髪を丁寧に洗う。

「どうだ?」

「あわち~」

「わつか

「うそ」

精霊界にいた頃にもいつもやって小雪の髪を洗つてあげていた。だから小雪がどこをどう洗つてほしいのか良くわかつている。

小雪は、ジンの手技に満足そうに頬を緩める。
その後、体も丁寧に洗つて

「先に風呂に入つて」

「はーい」

小雪は、普通に洗つた。次からは、様子が違つた。

小雪が座つていたところに今度はケティーが座る。

すぐにはジンはケティーの身体を洗い始めた。

素手で

「『』、『』主人様？」

「ダメか？」

「い、いいえ、お、お願いします。」

「それじゃあ、すみずみまで洗うからな」

「えつ、はい」

宣言どおりジンは、ケティーの身体をすみずみ洗った、ケティーの身体でジンが触れていない場所は、ほとんど無いと言つていいだろう。

その後も、ジニーイー や ティア や他のメイド隊の子たちをすみずみまで洗つた。『メイド隊』のメイド達の身体は適度に引き締まつてい、それでいてやわらかかつた。

胸の感触は、ケティーがブニッとしていて、ティアはふよんつてしまつて、ジニーイーはムニッとしていた。

「ああ、『』主人様にすみずみまで触られてしました。」

「『』主人様に征服されてしましました~」

「所有物になれたみたいで幸せです~」

「私達は元々ご主人様のモノだけね」

「『』主人様の身体洗いたい・・・身体で「

「ちょっと下品よ」

「やりたくないの?」

「・・・やりたいけど」

若干関係ないのも混じっているが、それなりに好評だったようだ。

ジンも皆の身体を楽しめて役得だった。

その後、メイドに身体を（身体で）洗つてもうつてから風呂をあがつた。

その夜

小雪がジンの隣で寝ている。その顔は涙で少し濡れている。
旅に出ることを話した時に泣かれてしまった。それでも小雪は最後には、小さく頷いてくれた。

「パパ、大好き」

寝言でそんなことを言つてくれる事が堪らなく嬉しい。

「主、よろしいでしょうか？」

テツだ。やうこえ、ば後で話があると言つていたな。

「どうぞ」

「失礼します。」

「どうした？」

「お願いしたいことが」

「珍しいな、ビーツしたんだ？」

「主は、私に・・・満足していますか？」

テツが唐突に、ジンに問いただす。

「それは、もちろん。お前以上の相棒はない」

「ありがとうございます。その言葉は嬉しいです、でも私は満足していません。主は、人工聖痕を使つた時、私を気遣つていました。私は、主に全力で、私を振るつて貰いたいんです。」

普段無口なテツが一気にまくし立てる。それだけテツには譲れない一線なんだろうな。

「テツ、話してくれてありがとうございます。これからもそうやって話してくれ。テツが肯、俺に悩みを打ち明けるように言つてくれたように俺もテツの悩みを聞きたい。」

テツを抱き寄せる。

「主」

「一緒に探そづテツを強くする物を」

「はい、主」

二人は、唇を合わせた。

ヒピローグ 獣人の国へ

異世界390日目

二度目の侵攻まで後1170日

クインント皇国の皇都にあるジンの屋敷の玄関

「パパあ～～～」

「ぐす、・・・お兄ちゃん」

小雪とフェリスが、ジンの袖を掴んで泣きついていた。

「なるべく早く終わらせるから。頼むから泣かないでくれ」

二人を困った表情で宥めているジンの姿は、父親が年の離れた兄の
ようで周りの女達は、その姿を見て和んでいる。

この場にいるのは後発組の、

カメリア姫、トウカ姫、ソフィア、ミリア、フェリス、カイル、ジ
ークにジニー率いる『メイド隊』三人を加えた10人のチームと、
屋敷居残り組の

小雪、クレア、シャール、ルーテシア、キュリア、ウリアの6人が
見送りに来てくれている。

といつてもルー・テシアは隅っこにいる。

それ以外については

今から数日前

ジンは先発組を見送っていた。先発組みは、アルシナ、ファーラ、アリシャ皇女、クリス王女、聖騎士シャルロット、イリヤ、レティーシア、にティア率いる『メイド隊』三人の合計10人だ。

「皆気をつけるんだよ。」

「大丈夫、少しは鍛えた」

無表情で拳を握つて見せるアリシャ。ある意味アリシャが一番心配なのだが、よく皇都を出ることを許されたな。

「英雄様、私はこの旅で強くなつてみせますわ。その時はお側に」

「シャルロット卿、それはわたしとて同じだ。」

シャルロットの艶っぽい声にアルシナの凜々しい声が重なる。二人がジンの腕に左右から絡む

「シャルロット！」

「お姉様！」

その二人に親しいクリス王女とファーラが一人を引き離す。

クリスは、

「シャルロット、私を差し置いて何をしている

ファーラは、

「お姉様離れてください。穢れてしまします。」

と内容は正反対だった。

「気をつけて行くんだよ。」

「　　ハーヴ　　」

「ファーラも気をつけるんだよ。」

「な、なんで私まで？」

「可愛いからだな」

「なつ」

ファーラの顔が赤くなる。貴族の割には贅辞に耐性が無いようだ。
軍人気質なのだろうか？

「うう・・・言われなくとも、・・・気をつけろわよ

照れながらも返事をするところが可愛らしく。

「そうか、それじゃあ皆行つてらっしゃい。」

「　　行つてきます。」「　　」

「行つて・・・ませ、す」

ファーラも小さく返事をしてくれたのがちょっと嬉しい。

こうして先発が、出発したのが3日前だ。行き先は多種多様の獣人が集まる国、ルクラルート郡国だ。

ジンの行き先もある。

そして今日が、ジンとテツの出発の日だ。

今日はキリ、ユリ、ティリエル、リリスのチームも一緒に出発する。このチームは、キリとユリの里帰りと小人族を連合に参加してもらうための大天使の二つの意味合いがある。小人族の国にはストルもいるからあまり心配はしていない。

小人族の国が遠いため移動速度重視のチーム構成だ。

この6人が見送られる側になる。

そして見送りに来た小雪とフェリスが泣きだしてしまったのだ。

なかなか泣き止まないので

「最後の手段だ」

ジンは、泣き続ける小雪の口にキスをした。小雪が驚いて泣き止むがすぐには解放せず息が続く限りキスを続ける。唇を解放すると

「パパと・・・キスしちゃった」

顔を真っ赤にして小雪が口に手を当てる。

ジンは、次にフェリスの唇に吸い付いた。今度は唇の間に舌を入れて口内を舐め回す大人のキスだ。

「あむ・・おにい・・・」

長い大人のキスが終わった時のフェリスの顔は蕩けきつてい、口の端からよだれが垂れている。

「少しだけ俺に時間をくれ」

「「うん」」

さつきまでとは打つて変わつて素直に頷く一人。

「ありがと、愛してるよ」

ジンは何事も無かつたかのように他の女に話しかけていく。

「クレア、シャール、離れの建築のこと頼んだよ。」

女達も何事も無かつたように返事をする。

「任せてくれさい」

「まあほどほどに頑張るわ」

二人には離れの建築を頼んでいた。ジークとカイルの家になる予定だ。今の環境では肩身が狭いだろうし、女も連れ込めない。これから、もしも！男がこの屋敷に来ることになつたら離れに住むことになる。二人に聞いたら、是非にということで建築が決まった。

ジンが80万ギル出して残りはジークとカイルが負担した。

225万・80万＝145万ギル

「行つてらつしゃいお兄さん。私も後で行くからねよりしへね。」

カメリアが見送りの言葉を掛けてくれる。それにしてもお兄さんが定着してしまつたな。

「ご主人様お気をつけて」

「ジン様はテツさんと二人だけで行くのですから慎重に行動してくださいね。」

「ご主人様、怪我しないでくださいね。」

ミリア、ソフィア、イリヤが名残惜しそうに声をかけてくる。後発組には、元奴隸獣人を郡国へ護送する任務があるため出発が遅い、再開するまで日があるからだろう。

「小雪も頑張る」

小雪が居残り組なのは、小雪がこの世界に来たばかりで、身体能力が見た目通りの幼児並みだつたからだ。そこで屋敷に残るケティー率いる『メイド隊』と一緒に特訓することになつたのだ。頑張るとは、その特訓のことだろう。

「そうだな、頑張つたらご褒美をあげよつ」

「やつた～」

フェリスが寂しそうに見るので頭を撫でながら

「フーリスの料理が食べられないのは残念だな。」

「お兄ちゃん。私も料理の腕上げておくから楽しみにしててね。」

「ああ、楽しみにしてるよ。そろそろ行くことある。テツ不自由させる」

「構いません、主」

テツには、ルクラルート郡国では、まだ目立ちたくないから、人目があるところでは刀の形態を維持するように頼んでいる。そのため会話するのにも気を使つことになってしまったのだ。

「じゃあ行つてくる」

「「「「行つてらっしゃいませ」「」」

ジンは小人族担当のチームと共に、屋敷を出た。

皇都を出た辺りで

「四人とも先に行くね」

ジンが別れを告げた。

「もうですか？」

「意地でも付いていくつて言つたら」

「すまん絶対についてこれないんだ」

「えつ」

一同びっくりする。「ここにいるのは空を飛べるティリエルとチーム内最速のリリスがいるのに絶対についてこれないと言うのだ。

「聖痕を使うんですね」

理解したユリが確認のための質問をする。

「その通り」

「「「」主人様！」」

突然小人娘の二人が腕を掴んできた。

「ど、どうした？」

「私達にもキスしてください。小雪ちゃんには、やつてたじやないですか」

「そうです。私達だけまだキスしてもらつていません！」

確かに一人には、そうゆうことはしていないことに気付く。また、二人を子供扱いしていたようだな。

「わかった。つまり、二人は大人のキスを『所望なんだな』

ジンはそう言うとキリを抱き上げて唇を重ねる、もちろんそこでは終わらずフェリスと同様に口内を弄り回した。

次にユリも同じようにキスをする。待ち構えていたのだろうユリは、積極的に舌を絡めてきた。

ユリとのキスが終わると惚けているキリの唇をまたしても奪つた。

「『』主人さ・・・あむ、んつ・・・」

その後もジンは一人の唇を交互に奪い続けた。30分が経過した頃

「・・・あ・・・・あ、あ・・・」

二人はピクッピクッと痙攣するまで口内をジンに弄られて、地べたに座り込んでいる。

「お兄様」

「ジン」

ティリエルとリリスの艶っぽい声が後ろから聞こえる。

二人にもたっぷりサービスをする。一人は行為に慣れているから座り込んだりはしなかった。

「そろそろ、行かないと」

「行つてらつしゃいませ、お兄様」

「頑張つてね、ジン」

キリとユリには、刺激が強すぎたのか、まだしゃべれないよつだ。

「小人族の件頼んだぞ、雷の聖痕発動『雷神』、『瞬雷』」

リリス達の前からジンの姿が消えジンは、獣人の国へ飛んだ。

『瞬雷』は、使用者を雷化して瞬間移動と可能にする技だが、聖痕の力を全て使ってしまうため使い勝手は悪い。だがその成果もありジンは数秒で複数の国を跨いで獣人の国の国境付近に到達した。

第一章終了時点の設定資料

【主人公の成果】

チーム　『世界を結ぶ者達』を結成。人数12人+テツ

ハーレム 28人

ソフィア・イリヤ・リリス・テツ・ティリエル・ミリア・レティ
シア・フェリス・キリ・ユリ・クレア・小雪・アリシャ
ジニー、ディア、ケティーの『メイド隊』15名

グーロム王国を潰して、クイント皇国を大きくする。

報酬として屋敷を皇帝から貰う。

人間の連合軍の結成に成功する。

『メイド隊』結成

お金 145万ギル

【人物設定】

主人公 ジン

前の世界ではやりたいことがなかつた。そのため、異世界に来るこ
とにあまり迷いはなかつた。そして異世界に来ることで生き甲斐を見つける。力は精霊界で精霊王（あと刀神にも）に修行してもらつ
た。

全精靈王との契約　・すべての精靈を操れる

火・風・水・土・雷・光・闇がある

聖痕の発動　・属性ごとにある 光と闇はできない

火＝炎王 風＝嵐帝 水＝水龍 土＝岩皇 雷＝雷神

人工聖痕　第8の聖痕　『無敵』
ステイグマ・ウエポン

聖痕武器　紅炎銃・プロミネンス

神双流　刀神直伝の二刀流の剣術

契約破棄　大抵の契約は強引に破棄できる

初級の魔術

裝備

黒龍刀・鉄
『しづがねのりゅうてつ』
精靈刀・七星

白銀の龍輪
『しろぎのりゅうりん』

ハーレムヒロイン

ソフィア　精靈の巫女

精靈に使えていたため聖痕を持つ主人公を信用した。村を救われたことと救われた時の精靈術を見て主人公に惚れる。精靈使いでもあり水の精靈魔法が得意。水の魔術を練習中。落ち着いた少女で髪の毛は水色。

裝備　水の指輪

イリヤ　エルフの治癒術師

高級奴隸として売られそうなところをリリスと一緒にジンに助けられる。

ジンのご主人様と慕う。マッサージが得意。エルフならではの美貌を持つ　金髪で天然。

裝備　ヒーリング・リング

リリス 生糀の冒険者 スピード型

戦闘奴隸として売られそうなるところをイリヤと一緒にジンに助けられる。

魔物との戦闘で危ないとこをジンに助けられてジンに惚れる。

活発な少女 炎髪

装備 エストック（両手突き剣）

ティリエル 銀龍

牛鬼に襲われているところをジンに助けられる。銀龍としては、幼く将来が楽しみ。飛行能力を磨く年齢より幼く見えるのが悩み。ジンをお兄様と慕っている。銀髪装備 ダガーを2本 白銀の龍輪

フェリス 亡国の姫

一度すべてを失ったが、ジンの元で新しい人生を歩む。料理が大好き。ジンのもとで料理人、魔術師として頑張っている。ジンとおにいちゃんと言つて慕つている。髪は緑色。

装備 ブースト・リング

ミリア できるメイドさん

元皇族付きのメイドだったが、ジンに恩返しをするためにジンのメイドになる。

戦い方はスピード型の魔術師。呼び方は、『ご主人様。

装備 風雷の指輪

レティーシア クイント皇国第一皇女

ジンの強さを気に入る。姫というより騎士に近く付いた通り名が『姫騎士』

長い金髪で少しキリッとした、美人。ジンをジン殿と呼ぶ。

装備 ロングソード

テツ 小太刀の少女

『鉄餓刀』から『黒龍刀・鉄』になる。持ち主の邪魔になるため気力、魔力を持たない。

最近一刀に分かれができるようになった。黒髪でジンの前以外は基本無表情。

ジンに貰つた銀の首飾りは宝物。ジンのことを主と呼ぶ。

クレア 眼鏡秘書

ジンに誘われて屋敷に住むようになる。短い黒髪と眼鏡で秘書っぽい女性。ジンを意識していたが、誘拐されたときに助けられたことによりジンのことがはつきりと好きになる。元ギルド職員

アリシャ クイント皇国第一皇女 エルフのクオーター

年の割りに小さいことを気にしている。ジンに、通話の出来る指輪を渡すなど積極的。レティーシアと違いしつかり皇女をやっている。白みを帯びた金髪。

キリとユリ 小人

小人の双子。キリが姉でユリが妹。瓜二つだが見分けは付け易い。金庫に閉じ込められているところをジンに助けられる。キリは気が強く。ユリは物静か。二人とも奴隸時代の後遺症で軽い暗所恐怖症と閉所恐怖症。

小雪 雪の精霊

ジンが精霊の統合をした時に失敗して生まれる。その際にジンの血を取り込んでいる。

ジンの子供。ジンをパパと呼んで慕つてゐる。髪は純白の長いストレートヘア。

ジニー、ディア、ケティー

三人の容姿は驚くほど似ている。薄い褐色の肌に黒髪で並べて見る
となんだか1人の人物を年代順に並べたように見える。年は3歳ず
つ離れている。

ハーレム予備軍

キュリア

ファーランド王国の侯爵家令嬢、魔人に対して理解を示したジンに
好感を抱いている。ジンの嫁さん候補。

マリネ

キュリアが屋敷に連れてきた蛇人の少女。

シャール

クラフト商国の王女。牛鬼に襲われているところをジンに助けられ
ている。ジンの嫁さん候補。

アルシナ

ヴァーテリオン帝国の竜騎兵部隊の隊長。防衛戦を経てジンの活躍
を近くで見てジンに興味を持つている。

ファーラ

ヴァーテリオン帝国の公爵家令嬢竜騎兵。アルシナをお姉様と慕つ
ている。ジンの嫁さん候補。男嫌い？

聖女ウリア

リニヨン教国の一君主制の片割れ。神の言葉を聞く事ができる。ジ

ンの嫁さん候補。魔人嫌い。ジンの屋敷に滞在。

ルーテシア

カルモンド皇国の侯爵家令嬢、ジンを色魔だと思つてゐる。ジンの嫁さん候補。ジンの屋敷に滞在。金髪ロリ少女

カルディア

ウルティア国の中王。ジンに興味を持つてゐる。強力な水の魔術師。髪は鮮やかな蒼髪。

カメリア

カルティアの妹。まだ幼いがジンの嫁さん候補。カルティアと同じ蒼髪。

ジンをお兄さんと呼ぶ。

クリス

テンフル騎士国の中王女。『剣姫』の異名を取る。ジンの嫁さん候補。

シャルロット

テンフル騎士国の中騎士の一人の聖騎士^{パラディン}。貴族のお嬢様で、髪型はボリュームたっぷりな長い金髪を巻き毛にしてゐる。顔立ちは、可愛らしくまだ子供っぽさを残してゐる。

トウカ

ヤマト国の姫。『舞姫』の異名を取る。ジンの嫁さん候補。

その他のキャラ

クルト

クルト・クイント クイント皇国^トの皇帝。レイシアの父

アッシュ

クイントの王子 今は元グーロム王領の管理を任せている。

アイリス

アイリス・クイント クイントの皇妃

ゲオルグ

クイント皇国^トの将軍

ジーク

騎士でジンに仕えることを選ぶ

カイル

ジークの友人で同じく騎士ジンに仕える

アルベルト

銀竜。ティリエルの父親 戦つて友になる。SSクラスの力を持つ。

ラシード将軍

グーロム王國の將軍だつた。ジンの誘いに乗る。今はクイント皇国^トの將軍をやつている。Aランクの実力者。聖痕なしのジンと引き分けている。

ラインツ王

ヴァーテリオン帝国^トの帝王。

カリウス教皇

リニヨン教国^トの二君主制の片方。

ヘンリー王
ファーランド王国の王。

ジャック騎士王

テンプル騎士国の王様。自身も騎士として強い力を持つている。

グスター王

カルモンド王国の元国王。自分本位な男。世界防衛戦中にワーム飲み込まれる。

エクス王

グスター王の息子。カルモンド王国現国王。グスターと違つともできた人間。

キリガネ王

ヤマト国の国王。刀を扱う武士でもある。

トランド王

クラフト商国の国王。商人気質。

ビルキッド

コーデル国、ビラー侯爵家の長男。奴隸を家畜と断言する。

ラウル

クイント皇国第六師団長。ジンにボコボコにされる。

タツド

クイント皇国第八師団長。

ガルダ

元ギルドマスター、今はギルド支部長

ミーシャ

皇国のメイド、変な方向に天然

レオン

皇国の騎士

レクト

ミリアの弟 元戦闘奴隸

オルム

村長兼ソフィアの保護者

コートル将軍

グーロム王国の将軍。死亡

ガーランド

『黒炎使い』と名乗る。黒い半球から出てきた人間で世界の敵。赤い長剣を持っている。

カラ

鬼族。ジンの屋敷に住んでいるが、詳細は不明

【ギルドカード】

名前 ジン 種族 人間 性別 男

ギルドランク A

能力ランク 総合 S 気力 SS 魔力 A

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 聖痕使い 精靈王の友人 救世主 英雄 11人の女に愛される男 奴隸の解放者 精靈術師 準貴族 超越者

名前 ソフィア 種族 人間 性別 女
ギルドランク C

能力ランク 総合B 気力C 魔力A

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 水の巫女 精靈術師 水災の魔女 ジンの女

名前 イリヤ 種族 エルフ 性別 女
ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力A

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド 治癒術師

名前 リリス 種族 人間 性別 女
ギルドランク A

能力ランク 総合A 気力S 魔力B

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの護衛 熟練者

名前 ミリア 種族 人間 性別 女

ギルドランク D

能力ランク 総合B 気力C 魔力A

チーム『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド 雷術師 風術師

名前 レティーシア 種族 人間 性別 女

ギルドランク B

能力ランク 総合A 気力S 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの女 皇女

名前 ティリエル 種族 龍族 性別 女

ギルドランク C

能力ランク 総合A 気力A 魔力A

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの義妹 銀龍

名前 フエリス 種族 人間 性別 女

ギルドランク D

能力ランク 総合B 気力D 魔力S

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの料理人 ジンの義妹

名前 小雪 種族 精靈 性別 女

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力D 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの娘 雪の精靈

名前 ジーク 種族 人間 性別 男

ギルドランク A

能力ランク 総合A 気力S 魔力B

チーム ヴ世界を結ぶ者達』

称号 一級騎士

名前 カイル 種族 人間 性別 男
ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力B

チーム ヴ世界を結ぶ者達』

称号 二級騎士

名前 クレア 種族 人間 性別 女
ギルドランク C

能力ランク 総合C 気力B 魔力C

チーム なし

称号 ギルド職員

名前 ジニー 種族 人間 性別 女
ギルドランク D

能力ランク 総合C 気力C 魔力C

チーム ヴメイド隊』

称号 ジンのメイド

名前 ディア 種族 人間 性別 女
ギルドランク D

能力ランク 総合C 気力C 魔力C

チーム ヴメイド隊』

称号 ジンのメイド

名前 ケティー 種族 人間 性別 女

ギルドランク D

能力ランク 総合C 気力C 魔力C

チーム 『メイド隊』

称号 ジンのメイド

名前 カロルド 種族 人間 性別 男

ギルドランク S

能力ランク 総合S 気力S 魔力S

チーム 『ランスロウ騎士団』

称号 特一級騎士 剛槍 超越者 到達者

名前 アーマイン 種族 人間 性別 男

ギルドランク A

能力ランク 総合A 気力S 魔力B

チーム 『ランスロウ騎士団』

称号 一級騎士 到達者

名前 ヤツシユ 種族 人間 性別 男

ギルドランク A

能力ランク 総合A 気力A 魔力A

チーム 『ランスロウ騎士団』

称号 一級騎士

【世界観】

数年前、人間と亜人対魔人の戦争があつた。戦争は人間側が勝ち魔人は北に追いやられた。勝った人間と亜人は、最初はうまくいつていたが、大昔で他種族に対して無知なこともあります、それ違いやりざこざが起き長い年月をかけて人間は中央に亜人は南に住むようになつていつた。亜人はさらに細かく分かれていき国や集落ができた。人間の国によつては、亜人が住んでいる国もあるが、それは中央より南に近い国々。

通貨は

金貨一枚＝10000ギル
半金貨一枚＝1000ギル
銀貨一枚＝100ギル
半銀貨一枚＝10ギル
銅貨一枚＝1ギル

1ギル＝約10円くらい

【登場国】

クイント皇国

人間の国で一番目の大國。ジンが身を寄せる国。

ウルティア国

湖と川の国。ジンに対してかなり好意的。

ヴァーテリオン帝国

人間の国で一番目の大國。竜騎兵を有し唯一高空戦力を保持している。

リニヨン教国

宗教を主軸とした国。教皇と聖女の二君主制の国。

ファーランド王国

魔人を受け入れて いる国でリーヨン教国と仲が悪い。

テンプル騎士団

騎士の国で三騎士を有する

ヤマト国

武士の国。

クラフト商国

商人の国で狸族が多数暮らす。

カルモンド王国

潤沢な資源を持ちそれにより堅い重装歩兵を持つ。

ルクラルート郡国

多種多様の獣人が人間や魔人に対抗するためにつくった。

コーデル国

南の方にある小国。

【登場した力】

〔闘氣〕

氣力によつて変動する。身体能力の強化。武器の強化。

魔力によつて変動する。あらゆる現象を引き起こせる。

〔魔術〕

魔力によつて変動する。あらゆる現象を引き起こせる。

属性 風

『トルネード』 無数の風の刃で切り裂く

属性 火

『ファイア・ボール』 火球を飛ばす
『フレイム・バレット』 無数の小さな火球を飛ばす
『フレイム・シユート』 中級の炎弾魔術。

属性 雷

『スパーク・ショット』 触れた相手を感電させる
『サンダー・アロウ』 雷の矢を放つ

属性 光

『ライトボール』 光源を作り出す

〔精霊術〕

氣力、魔力は必要ないが、習得が難しく、才能に左右される。

火・水・風・土・雷・光・闇の七種類がある。

火の精霊術 『炎蛇』 火の蛇を作り出して攻撃、『炎竜砲』 ドラゴンのブレスをイメージた熱線。もっとも威力が高い、『炎爆』 爆音と衝撃で搅乱する

風の精霊術 『風刃』 锐いカマイタチを作り出す、『風見鳥』 偵察用の鳥型の精霊獣を作る、『削嵐』 無数の風の刃で敵を削る

水の精霊術 『水翼』 大量の水を使うための前準備、『陸津波』 陸で津波を起こして押し流す、『水撃』 圧縮した水をぶつける、『斬水』 高圧縮した水を細く使って相手を切る

『水上壁』 『水天門』 同種のもので水の壁を作り出す

土の精靈術 『土壁』 土の壁を作り出す、『岩壁』 岩の壁を作り出す、『土鉄岩金壁』土壁、鉄壁、岩壁、金剛壁を作り出す。『落とし牢』 落とし穴、『刺石槍』 地面から石の槍が突き出る

雷の精靈術 『落雷』 力ミナリを落とす、『流雷』 相手を氣絶させる、『タケミカヅチ』 槍状の力ミナリに回転を混ぜすべてを貫く。

「無色の力」

色付けによってあらゆる力に変換できる力。身体への負担が大きい。

【魔物】

ランクA

ノワールサイ

黒い鉱石を纏つたサイ型の魔物。突進力と防御力はSクラス。

オオクロコダイル

ワニ型の上位の魔物。かなりの巨体で、傷つけることはできても止めをさすのが難しい。

噛み付きは必殺。

火砲亀

背中にたくさんの大砲を背負った大亀。

ランクB

大蛇

大きいだけの蛇だが、かなりの大きさ。防衛戦では橋の役割を担つた。

ストーン・ゴーレム

石でできたゴーレム、堀を自らの身体で埋めた。

ブルー・コブラ

個体の戦闘能力より、その隠密能力が特徴。見つけることができれば、Dランクの冒険者でも倒せる

牛鬼

群れと連携が脅威。武器を扱える。個体はそれほど強くない。

Dランク

ゴブリン

圧倒的な数と繁殖力が特徴。個体は弱い。

燃狼

火を纏つた狼

コールドオオカミ

冷気を纏つた狼

Eランク

グリーングリズリー

熊型の魔物。緑色の毛を持つ。普通の熊より大型で凶暴。あまり熊と変わらない。

バインドスネーク

蛇型の魔物。獲物を縛つて絞め殺す。

Fランク

ラビットドン

ウサギ型

ウサギが大きくなり凶暴化した。

ハイウルフ

狼を少し強化したような魔物。

魔物以外

岩窟竜

Sクラスの力を持つ。ストルは、長く生きていて古龍に近い力を持つている。

銀龍

SSクラスの龍の上位種。

第一章終了時の設定資料（後書き）

やつと第一章が終りました。早めに一章も書くつもりです。

感想をいただけたといれしいです。

プロローグ 狐族の領主

獣人の国、ルクラルート郡国にある狐族こやくの集落にある屋敷で集会が開かれていた。

「領主様には、ソルジャー・オーラー討伐に行つていただきたい。」

下座に座る男が、とても領主に対する言葉とは思えない発言をする。この場の領主とは、獣人の中でも指折りの一族、狐族すべての長にあたる者のことだ。発言したのは、ジュウザといつ男だ。

「その程度、屋敷の者達で充分でだろう」

返答した領主は、まだ小さな少女だった。ジュウザは、領主に向かつて小馬鹿にしたように

「屋敷の者は忙しいのです。あなたと違つてね。」

「このひ

ジュウザは、いきり立つ少女を無視して。

「では、採決でも取りましょうか。私の案に賛成の方は挙手をお願いします。」

進んで手を挙げる者、渋々手を挙げる者と様々だが、この場に集まつている狐族の九割以上が手を挙げる。少女は悔しそうに歯切りする。

「では、明日にでも用意させますので、よろしくお願ひしますね」

ジュウザは領主の返答を待たずに部屋を後にした。

ジュウザが部屋を出た後

「何様だ、あやつは」

領主の少女が悪態をつく。

「クズハ様、大丈夫ですか？」

心配そうに近侍の男が聞く。聞いているのは押し付けられたソルジャー・オーク討伐のことだろう

「平気よ、問題ないわ」

クズハは、内心かなり不安だったが、表には出さない。弱みを見せたくないのだ。

この屋敷で信用できる者はほとんどいない。クズハの両親は幼いときに他界しており、信頼できるのはここにいる叔父であり近侍でもあるミロクくらいだ。しかし、ミロク自身は四尾のため発言力はない。狐族の序列は尻尾の数で決まる。普段、尻尾は一本で力を解放した時に数が増える。一尾から九尾まであり、これを階位と呼んでいる。

クズハだって今の地位に、就きたくて就いたわけではないのだ。慣習で九尾が領主になることが狐族で決まっているのだ。クズハの家は本家の傍流であるため、クズハの立場はかなり弱い。

さらに、先程の階位・八尾のジュウザが集会を牛耳つて好き勝手しているのだ。

そして今回は、魔物の討伐という面倒ごとを押し付けられた。おそらくミロクは、任務から外されるだろう。クズハには側にいる者さえ選ぶことができない。

そして2日後

昼頃、ノエム森林に狐族の集団が入った。

「領主様、お早く」

「わかつ・・・てる、わよ」

クズハの小さな体躯では歩幅も小さい、それなのに周りの兵士の速度は全くといつていよいほどクズハに対しての配慮が無かつた。クズハの息切れしながらも集団になんとかついていく。森林の中を一人になるのは危険すぎるからだ。

しばらくしてソルジャー・オークを見つけた。オークたちは休憩中のなか無警戒だった。居眠りをしている者までいる有様だった。

その光景を見て狐族の集団は、意気揚々と攻撃を始める。

狐族は火を重んじる傾向があり魔力の色が赤の者が多い。魔術師といえば炎術師が多い、そのため狐族の魔術は獣人の中で破壊力は抜群だ。狐族の3人が火炎系中級の魔術を放つ。

「　「　『フレイム・シユート』　」」

しかし今回は、その火の魔術が仇になる。起きていたソルジャー・オークが手に持っていた盾を掲げる。その盾に炎が当たると炎は霧散してしまった。

オーケが掲げたの盾は、『火避けの盾』といって火を消す力を持っている特殊な盾だ。これを持った敵は狐族にとつて天敵だ。

「こいつら火が効かないとわかつた瞬間、狐族の集団は逃げ出した。

クズハを置き去りにして

クズハも必死に追いかけるが、クズハの足で大人の速度についていける訳もなく、徐々に離されていき孤立して走ることになった。

(どうしてこんなことに)

クズハの胸中にそんな思いが湧き上がる。それでも今は必死に走るしかない。

地割れが見えてきたあそこには木製の橋がある。橋を渡つてオーケが来る前に橋を落とせば、とクズハが希望を見出したとき。

バガン

橋の上で爆発が起きた。爆符を用いた『エクスプロージョン』だ。木製の橋が『エクスプロージョン』に耐えられるわけもなく橋が落ちる。おそらく先に渡つた者達が爆破したのだろう。

「そんな、なん……で」

後ろからは、オークが迫ってきている。クズハは、思考がまとまらない内に、後ろから来る恐怖から逃げるために地割れに沿つてもう一度走り出す。

（見捨てられた？それとも私を殺すため？最初から仕組まれていたの、もう嫌。何でこんなことに。誰か助けて）

頭の中が「じちや」「じちや」になっていたためだろう。クズハは目の前の段差に気付かなかつた。

「さやあつ

段差に躊躇して転倒してしまい、クズハの目に涙が滲む。

「誰か助けてよ！」

クズハは、いる筈の無い味方に助けを求めた。

面を上げ後ろを見ると一体のオークが斧を振り上げている。

（わたし、死ぬんだ）

そうクズハが思つたとき。オークがあらぬ方向に凄い勢いで飛んでいった。

「ふえ」

びっくりして変な声を出してしまつた。

「大丈夫？」

いつの間にか目の前に、黒衣を纏つた男がクズハを守るように背を向けて立っていた。

1話 ルクラルート郡国

異世界395日目

二度目の侵攻まで後1165日

ジンが仲間達と別れてから5日がたった頃、ジンはルクラルート郡国の街に滞在していた。

ルクラルート群国は、あらゆる種族の獣人が寄り集まつた結果、亜人の國の中でもっとも大きな国となつた。ル克拉ルート郡国は、国というよりは、いくつかの種族の同盟関係のようなものに近い、つまり王に当たる人物がないのだ。そのため、国としての動きはかなり遅い。

種族ごとに領土があり領土と領土を繋ぐ街道に中立街が設けられている。種族間に問題を抱えている種族もある。中立街には、種族間での問題を持ち込むことは禁止されており、中立街はそういうふた種族間の緩衝地帯の役割を担つていて。

ジンが滞在しているのは、そんな中立街の一つだ。

街は獣人が溢れているが、人間が居ないわけではない。皇都にも少數だが獣人は住んでいた。この中立街は皇都と比べ獣人と人間の比率が入れ替わっている感覚だ。

人間に対しての感情も人それぞれで、嫌悪している者、好感を持っている者、無関心の者と様々だ。そんな中、ほとんどの獣人が好感を持っている人間が『黒翼の英雄』だ。グーロム王国を滅ぼし奴隸を解放している『黒翼の英雄』の噂は獣人の国まで轟いていた。

そんな中ジンが最も驚いたのは、中立街が人間の街に酷似している

ことだ。これは、多種族の獣人が住む際にその種族の色が出すぎないようにするために、人間の文化を取り入れた結果、人間の街に酷似した作りになつたらしい。

中立街には冒険者ギルドもあり、ジンはギルドに依頼を受けに来ていた。

「まことに申し訳ありません。こちらの依頼はすでに受けている方がいるようなのです。どうやらこちらの手違いで貼り出されていたようです。」

受付嬢の猫族ねじやくの娘が深々と腰を曲げている。ギルドカードの能力ランクを見てから妙に腰が低くなつた。どうやら獣人の国では、高ランクの者は自分の一族から出てこないため、フリーのSランクの冒険者は重宝されているらしい。

人間の国では高ランクの冒険者は、富仕えを嫌つていたので正反対だな。

「別にいいよ。それにしても、この依頼を受ける人がいるんですね。

」

ジンが受けようとしたのは、

- 依頼ランク A
- 内容 ソルジャー・オーケ80体の討伐
- 期間 二週間以内
- 備考 ソルジャー・オーケは特殊な装備を持っている模様。

という依頼だ。ソルジャー・オーケは持つ武具でランクがDからBで変わる。依頼ランクがAということは、ランクBが数十体はあるはずだ。一般的の冒険者では、歯が立たないだろう。

「どうも、狐族の領主様の一族が討伐に出てくれたようなんです。」

「どうも、狐族の中でも指折りの種族だ。しかも領主の一族が来ているのか、見物に行つてみるのもありだな。」

ジンは依頼地を確認させてもらつて、ギルドを出る。

「ノエム森林ね」

ジンは、一言呟いて、地図を見ながら街門に向かう。

ジンの格好は、黒衣姿で腰には、テツの刀姿の黒龍刀と精靈刀がある。

『黒飛板』シユバルツは目立つので、縮小化と軽量化の魔術がかかつた荷袋に入れている。

同じ理由で移動は徒步だ。

中立街からそれなりに離れると

「テツ、もういいぞ」

ジンの言葉に反応してテツが人の姿になる。人の姿になつたテツをジンが抱き抱える。

「どうしたの主？」

「せつかくの一人つきりだからな、嫌か？」

「嫌じやない。ずっとこのままでもいい」

テツがジンの首に顔を埋めてくる。ジンは、その頭を撫でながらノエム湿原を目指す。

途中から走ったので三時間くらいでノエム森林に着く。テツには、走り出したときに刀の姿になつてもらつた。

ノエム湿原に入つてしまふと、黄色い狐耳と狐の尻尾を持つ獣人の集団が見えてきた。おそらく狐族だらう近づいてみると話し声が聞こえてくる。

「助けに行かなくていいのか？」

「いいんだよ。」

「でも」

「もともと、今日はそれが目的だ。ジュウザ様の『命令だぞ。』

「わ、わかった。」

何やら不穏な話しをしている。次に爆発音が聞こえた方向に全力で駆ける。ジンは、ギアを上げて爆発音が聞こえた方向に全力で駆ける。ジンは、ギアを上げて爆発音が聞こえた方向に全力で駆ける。

途中狐族の集団の横を猛スピードで駆け抜けた。

「なんだ？」
「何か通つた？」

狐族の獣人はジンの姿を確認することが出来なかつた。ランクの足に風の補助が加わつたジンの動きがそれだけ速すぎたのだ。

すぐに大きな地割れが見えて来た。地割れの反対側で狐族の娘が、ソルジャー・オークの集団に襲われていた。

「誰か助けてよう」

狐族の娘は、涙を流して助けを求めていた。何故、子供があんな目に?さつきの奴らの仕業なのか?
ジンの胸中を怒りが走る。

オークが斧を持って狐族の娘に近づいて行くのが見える。地割れを迂回する時間はない。

そこでジンは走りながら土の精霊を操り精霊術を使った。

「『橋渡し』」

土が盛り上がり土橋を形成する。土橋を地割れ半ばまで作り出す。ジンが土橋の上を走る。即席のため土橋が崩壊を始めるが構わず走る。ジンは、土橋の先端まで走ると

跳んだ

一瞬だけ人工聖痕の『無敵』を発動する。『無敵』を使っての跳躍のスピードは、雷速を以上の域に到達した。

一瞬で移動したジンが、狐族の娘に斬りかかるとしていたオークを膝蹴りで蹴り飛ばす。蹴りを受けたオークは、頭をひしゃ上げさせて飛んでいく。おそらく生きてはいないだろう。

「ふえ」

狐族の娘が、驚いて奇声を発する。

「大丈夫？」

「えつ、ええ」

「そこにいて」

目の前には70体ぐらいのソルジャー・オークが武器を構えている。先手必勝だ。

「『炎蛇・四首』」

四匹の炎の蛇を作り出す。

「燃やせ」

「ダメ！炎で、そいつらは倒せない！」

後ろで女の子が叫ぶ。炎蛇がオークの持つ盾に当たった瞬間、炎蛇が霧散した。

「『火避けの盾』よ。火は効ないわ。逃げて！」

オークが武器を振りかざして向かってくる。

「冗談、後ろに女の子が居て、逃げられるか。」

ジンは、黒龍刀（小太刀）と精靈刀（大太刀）を抜き放ち

「本気で刀を振るのは久しぶりだな。」

大太刀を右に小太刀を左に持ったジンが、小太刀を前に構え大太刀を顔の辺りまで引く。

「『大突』」

右の大太刀で突きを放つ。『小突』が早い技なら『大突』は重い技だ。

突き出した大太刀は、オークの肉体を鎧ごと貫き、それでも止まらず、後ろのオーク2体も一緒に貫いた。

「『小突』」

左側にいるオークの頭を小太刀で顎から貫く。一瞬で4体のオークを始末した。

この攻撃によつて、オークの攻撃対象がジンに移る。

1体のオークがジンに長剣を叩きつけるが、ジンはその攻撃を黒龍刀で受けオークの長剣を弾く、そしてがら空きの胸を精靈刀で切り裂いた。

同じ戦法で20体を倒した頃、オーク達も1体では敵わないことを悟り四方から攻撃を繰り出だが、ジンは四つの攻撃それに刀を側面からぶつけそれぞれの攻撃の向きを操作する。

「『神双流・四角受け』」

誘導された攻撃は、それぞれ左側のオークに身体に当たり動きを止めた。動きの止まった4体の首を切り落として止めをさす。

「風を解放」

精霊刀から、風の精霊が溢れ刀身を風が包む。

「『風刃』」

ジンが精霊刀を振ると風の刃が生まれ、防御の遅れたオークが身体を斬られて、その場に倒れる。

精霊刀を使うことによって、風刃を使うことが容易になり溜めも必要なくなった。

この時点でオークは逃亡し始める。群れを作る魔物ゆえか一塊になつて逃げていく。

「『落雷雨』」

逃げていく一団に雷の雨が降り注ぐ。

雷を前に火避けの盾は、意味を成さずソルジャー・オークは全滅した。

ジンは刀を納め

「なま鈍つては、いよいよだな」

大太刀と小太刀の二刀流がジンの本領とはいえ、ここ一年ぐらいは、テツだけを振るつていたから少し不安だったのだが、聖痕を使わずにBランクを含めた魔物を数十体を、危なげなく倒すことができた。少しの満足感に浸つた後で狐族の娘のところに戻る。

やつと少女をゆっくり見ることができた。狐族の娘は、幼い顔立ちに小さな体、金髪、金眼のつり目がちな少女だった。服は華やかな赤い着物を着ていて、その上に同じ柄の上衣を着ている。上衣の長さが腰までで、その間から尻尾が一本出ている。便宜として狐つ娘と呼ぼう。

「もう大丈夫だよ」

ジンが狐つ娘の前にしゃがむと

「うひ、うえ〜〜ん、怖かつたよ〜〜」

狐族の娘は、ジンに抱きついて泣き出してしまった。余程怖かったのだろうなかなか泣き止まなかつた。

ジンが、泣き止むまで狐つ娘を腕の中であやしていると。

「あの、落ち着いたから離してちょうだい」

解放すると

「さっきのは、その、忘れてちょうどいい、私は・・・」

顔が真っ赤な狐つ娘は、一度悩むそぶりを見せて

「私は、狐族のクズハ、階位は・・・九尾よ」

「へえ、俺は」

「なんでそんなに無反応なのー?」

何やら、怒りだしてしまった。

「えつ、えうと。尻尾一本しかないみたいだけビ。」

「力を解放したら九本になるのよ。つてそういうじやなくて、他にある
でしょ?」

「なにが?」

「狐族の九尾つて言つたら狐族の領主のことでしょう?」

「そりなんだ」

「・・・わうなのよ。はあ、まあいいわ、あなたは?」

「俺はジン見ての通りの普通の冒険者だ」

「あれだけ強くて普通はないでしょ。名前は?」

あちらも結構重大な事を話してくれたよつだし、ちやんと名乗つて
おくか

「俺はジン、Sランクの冒険者だ。」

「やつぱりSランクなんだ」

ジンの名前は以外と知られていないようだ。
まあいいさ。

さて問題は、狐つ娘改めてクズハをどうするかだよなあ。ここに来

る前に見かけた奴らのところに返しても、また殺されそうになるかも知れないし、かといって領主を連れ去る訳にもいかない。

ジンが、物思いに耽つていると。クズハが意外な提案をしてきた。

「ねえジンは、今何か依頼を受けてるの？」

「うん？ いや、今はフリーだな」

「なら、私に雇われない？」

「なら、私に雇われない？」

初対面の相手にこきなり雇いたいと言い出した。ジンは驚いてクズハの顔をまじまじと見てしまう。その時のクズハの顔は、とても不安そうな表情だった。きっと殺されかけたことが関係しているのだろう。それを知るためにも、雇われてみるのはいいかもしない。

「別にいいけど。雇つて」とは、報酬を貰つてことだけ、いくらいで？」

「えつ、えつと、その～」

クズハが目を逸らす。クズハは、領主だが自分の自由にできるお金なんてほとんどない。ましてやランクの冒険者を雇うには高額な報酬が必要なのが普通だ。

クズハの様子からお金がないことを察したジンは

「別に雇われなくても、護衛くらうならするよ。」

「ダメ！私が雇わないとダメなの！」

クズハは、突然現れて自分を助けた男をどうしても自分の側に置きたかった。そのために何か確かなかつながらりが欲しがっていたそれが雇用だったのだ。

「そう言われても、どうするんだ？」

「だから、その……じつじよ。」

「俺に聞かれても。」

「いいから考えてみなさいよ」

「そうだなあ……衣食住の確保を

「そんなの報酬にならないでしょ」

「じゃあ、出世払い」

「それは、雇えていないでしょ」

「……」

「ほりくー人は、考えこんで

「なら私を、あなたにあげるわ。」

「は？」

「だから私自身をあなたに捧げるつて言つてゐるのーなによ、不足な
の？」

平らな胸に手を当てて頬を赤くして涙田のクズハ。

「い、いや、そんな」とはないが

「なら雇われなさいよ」

かなり凄い事を言つてゐる氣がするのだが、まあ役得と黙つておへか。

「わかつた。その代わり条件がある」

「条件?」

「ああ、俺はわざとSランクのジンと名乗つたが、他の奴の前ではAランクのシンで通したい。」

「わかつたわ」

クズハは、Sランクつて大変なのねつと勝手に納得した。ジンにとつては、もちろん『黒翼の英雄』とばれないようにするためだ。

「これからよろしくね。私が主だけクズハつて呼んでいいわよ。」

「いやそういうわけには」

「クズハつて呼びなさい」

どうやらクズハと呼んで欲しいらしい。

「わかつたよクズハ。これからよろしく。」

「ええ、よろしくねシン」

ジンが『火避けの盾』を回収していると

「りょ、領主様、い、生きておられて」

クズハを殺そうとした狐族達が地割れを迂回してやつてきたようだ。殺そうとしていたのは、クズハが襲われていたことと落とされた橋を見てほぼ確定した。

「残念だつたな。私はシンと帰るから先に帰つていいく」

狐族達はジンを見て

「（ビ、ビツする？）」

「（一度戻つてジュウザ様に報告しそう）」

「（そうだな。）それでは領主様我々は先に失礼します。」

小さな声で話していたが、風を自在に扱うジンには余裕で聞こえていた。

狐族達はそそくさ帰つて行つた。狐族達が見えなくなると、クズハが不安そうな声音で

「ジンあのはな、実は私・・・」

何かを打ち明けよつとしているようだが

「うん？」

「いや、なんでもない」

結局クズハは話すのをやめてしまった。

武具を拾い終え、狐族の里に向かう。クズハの表情が狐族の里に近づくにつれて堅いものになつていく。

「大丈夫か？」

「大丈夫よ」

全然大丈夫に見えない。顔色もどんどん悪くなつっていく。
しかし今日出会つたばかりのジンには理由がわからず何もできない。
ジンはもどかしく思いながら狐族の里を目指した。

「ジンが、狐族の里、『狐火の巣』よ」

里に着いたのは、真夜中だつた。

二人が里に着くと狐族の男達が、どこからか現れ

「お帰りなさいませ、領主様。ジュウザ様が少々お話しがあると仰せです。」

そういうながらクズハとジンの周りを槍を持った狐族が固める。クズハにだけ聞こえる声で

「（どうあるんだ？）」

「ついていく。シンも来い」

クズハが移動するので、それについていこうとする

「冒険者の方は別の場所でお待ちください」

周りの狐族が槍を突きつける。

クズハの表情が陰ったのを見たジンは

「断る。俺の依頼主は、クズハだ。あんたらじゃない。」

ジンは、突きつけられた槍を抜刀術の要領で半ばから斬り落とす。

「え？」

元槍の棒切れを持った狐族は、その場に尻餅をつく。ジンはそれを無視してクズハの隣に歩み寄る。最初に話しかけてきた男が面白くなさそうにしているのも無視だ。クズハの顔から陰は消え、顔を少し赤くして前を向いている。どうやら嬉しさを抑えているようだ。頬が少し緩んでいる。

そのまま一人で男についていく。

二人は、和式の屋敷につれて行かれ、屋敷にある一室に通された。その部屋は上座と下座が段差で区切られていて、もちろん領主のクズハは、上座に座る。

「シンは私の後ろに」

「了解」

二人が部屋に入つてすぐ一人の男が入ってきた。片方は案内をした

男だ。

「話しあとはなんだジユウザ?」

クズハが面倒そうに尋ねる。そこに案内をした男が
「その前に、そここの冒険者。シンと言つたか、領主様に雇われたそ
うだな。その倍を出すから即刻この里を立ち去れ。大方領主と聞い
て護衛を受けたのだろうが、そやつの好きにできる金などほと
んどないぞ。領主と言つてもお飾りだからな」

お飾りであることを知られてジンがいなくなるかもしだれないといふ
恐怖でクズハが身体を震わせる。ジンは肩に手をおいて。

「お前には、絶対に払えないよ。一生無理だね」

「貴様!」

「放つておけ、たかがネズミ一匹だ。それより領主様、部下を先に
返したそうですな。チームの隊長であったあなたが部下を先に帰ら
せるとはどういうことですか?彼らに何かあればどうするつもりだ
ったのですか?」

ジンが横槍を入れる。

「あれだけの、人数で無事にかえつてこれないのでなら、それは人選
をしたあんたらの責任つてことになるだろ?」

「なんだと」

「帰つてこれなかつたらだよ。何もなかつたんだろ。ならあんたらの人に選は間違つていなかつたということだ。ならこの話題はもう終わりでいいだろ? なあジュウザさん。」

「…………私はこれで失礼する。」

ジュウザは、面白くなさそうに部屋を後にした。

「す、いな、シンは。ジュウザを追い返してしまった。」

「まあ、俺は外から来たからな。それだけだよ」

ジュウザと入れ替わりに男が入ってきた。安堵した表情を浮かべ

「クズハ様、よく、無事で。こちらの方は?」

「こいつは、シン。私の恩人だ。シン」うちはミロクで私の叔父に
あたる人だ。」

「クズハ様を助けていただいてありがとうございます。私、クズハ
様の近侍のミロクと申します。」

「どうも、冒険者のシンです。」

「ミロク、今日はもう遅いから、休む」

「わかりました。では、シン殿の寝床は

「あ、気にするな私が何とかする。」

クズハはさつまつとジンの腕を掴んでその場を逃げ出した。

「どうしたんだ？ そんなに慌てて」

「領主の私が、か、身体で、お、お前を雇つたとばれたら何を言われるか」

「ああそういうことか、でも寝床はどうするんだ。」

「私のベットでいいだろ。」

クズハの部屋は、屋敷と同じ和装の造りなのだが真ん中にベットがあるのでとてもシユールだ。クズハがベット好きなのだろうか？

「そ、それに、私をお前に捧げると言つただろ。」

そう言いながら先にベットに入ってしまった。クズハが毛布から顔を出して

「早く来い」

「はいはい」

ジンも隣に入つて横になる。

「何もしないのか？ 何をしてもいいんだぞ？」

まだ、何故クズハが、よそ者のジンにこれほど、引き止めたがるのかわからない。クズハの領主としての立場が悪いのはわかつた。そういうえばクズハの無事を喜んだのは、ミロクという男だけだった。

もしかしたらクズハは寂しいのだらうか？
それなら

「大丈夫、俺はクズハの味方だから。」

「なんでだ？」

「俺は可愛いやつの味方だからな。さつきも書いたるジュウザには絶対に払えないって、あれはそう言つ意味もある。」

クズハがこちらを向いて頭をジンに預けるように倒した。

「ジン……私、本当は領主になんてなりたくないんだ。こんなガキに一族を纏めるなんてできるわけないだろ。それなのに慣習で九尾つてだけで領主に据えられて」

「……」

「ジュウザは好き勝手するし、今日なんか殺されそうになるし、もうやだ」

クズハの頭を抱きしめてやせこく撫でる。

「クズハ、俺の前では一度大泣きしてゐるんだし、我慢しなくていいんだぞ。」

「大、泣き、なん、て、・・・うつ・・・うわああああん

クズハはジンの胸に顔を埋めて我慢することをやめた。

クズハが泣き疲れて眠るまでジンは、クズハの頭を撫で続けた。

異世界396日目

一度目の侵攻まで、後1164日

ゾンビゾン

クズハは、扉を叩く音を耳に覚ましがわり起きた。

「ふあ～ああ」

隣に、ジンがいないことに気がつく。

「昨日あんなこと言っていたのに、どうして言つたのだ、あいつは？」

不満そうではあるが、不安といつわけでは、なさそうだ。やう思つている間も、扉は叩かれてくる。正直うるさいに適当に身支度をさせて。

「誰だ？」

「クズハ様、ミロクです。失礼いたします。」

扉を開けてミロクが、入つて来る。ミロクは、開口一番

「シン殿が、とんでもないことを、してくれましたぞ。」

「シンが何をしたんだ？」

「ジユウザ殿の部下に、決闘を挑んで、・・・・・ボコボコにしてしまいました。」

「な、なんだとー?」

ガチャ

「よつ、クズハ起きたか」

「よう、ではない!何をしているんだお前はーあいつ、絶対に仕返しへくるだ。」

「それについては、今から話すよ。俺の素性も教えようと思つてな。

「

「素性?」

ミロクが首を傾げる。

「クズハ、ミロクさんには、話してもいいのか?」

「ミロクなら大丈夫だ。それより早く話せ」

「わかったわかった。じゃあまずは素性からだが、俺は人間の国では『黒翼の英雄』って呼ばれてる。」

「『黒翼』ですとー?」

「ど、どひした!!ロク、大きな声で」

大声で驚く!!ロクと、意味がわからないクズハ。

「『黒翼』と言えば、人間の国の英雄です。奴隸を解放したりと、それは凄い働きをしているとか。」

「ジン、本当か?」

「本当だ。」

「ジンとは?」

「」このつの本名だ。」

「シンは、偽名でしたか。何故狐族の里に?それ以前に、何故ルクトルーク群国に?」

「それも、今から話す」

一時間後

「黒い半球に、連合軍ですか」

「ジンは、初めからそのつもりで、その、私に近付いたのか?」

「それは違う。あの場に俺がいたのは偶然だ。」

「そうか。」

明らかに気落ちしている。

「ああもつ、本題なんだが。・・・クズハ、俺と来ないか。」

「やつぱつ

「狐族の領主は、辞めて構わない。」

「えつ」

「な、何を言つ。そんな無責任な。」

慌てて止めようとすと、口口クを、クズハが制して

「じうこつ」とへ。

「今の君に、領主は無理だ。狐族を纏めることはできないだらう。君のためにもならないし、トップが定かではない組織は信用できない。だから、領主をやめて、俺の元に來い。領主は、ジュウザにでも任せればいい。さつき起じした騒動は、ここを出るための、ただの理由作りだ。」

「それでは、連合に参加するときに問題にならないか?」

「狐族が、連合に参加するときは、あくまでルクトルート郡国の一
部族に過ぎない。何とかなるだらう。」

それが、ジンの本題だった。クズハにとつてそれは、とても魅力的に聞こえたが、ミロクの手前、なかなか領くことができない。

「私は」

ガシャーン

ガラスが割れる音が、クズハの言葉を遮る

「何事だ！」

襖を倒して部屋に、侵入者が入つて来る。侵入者は、外套で顔を隠していく、素性がわからない。

ジンは、クズハとミロクを抱えて、外に飛び出る。庭を飛び越え、屋敷の敷地の外まで出るが、そこにも外套を着た奴らが待ち構えていた。

ジンは一人を降ろして、一刀流中心の戦闘に入る。実力差は歴然で、ジンが侵入者を圧倒していたが、ジンが一人の敵とつばぜり合いをしていたとき、そこに特大の火球が降ってきた。

ジンは、なんとか避けたが、つばぜり合いをしていた一人は、目の前で焼け死んだ。

「お前、仲間を！」

ジンの視線の先には、尾が八本になつたジュウザがいた。ジュウザが、こうも早く動くのは、想定外だった。おそらく昨日から、準備していたのだろう。

「仲間ではない、ただの駒だ」

「ジンー。」

クズハの叫びにそちらを向くと、なんとミロクが、クズハに短剣を突きつけていた。

「何をしている、ミロク！」

沈痛な表情で押し黙るミロク。

「ジンと言ったか、動けばクズハの命はないぞ。わかつたら、まず武器を地面に、置いてもらおうか」

ジンは、その場に刀を置く。

「ジン戦え、ジン！」

クズハが叫ぶが、ジンは動かない

「ミロク離せ。ジンがジンが

「死ね、ネズミが」

ジンの頭上に、先程より巨大な火球が生まれ、ジンに向かつて放たれる。

「ジン、ジン、ジン」

ジンが、水の障壁で防ごうとするが、

「ジンに・・・手をだすな――！」

クズハに異変が起きた。

クズハの尾が九本になり、身体からは金色の炎が溢れ出す。すごい勢いで、溢れた金の炎は、周囲一帯を瞬時に包み込んでしまった。ジユウザも火球も敵も屋敷も

そしてジンやミロクさえも包み込んだ。

炎が消えた時、周りには誰も居なかつた。その場にいた者たちを灰も残さず燃やしてしまつた。

「あつああ、ジ、ジン、ミロク。私の・・・せい、で。ああ、ああ――」

クズハがその場に、泣き崩れる。心が壊れそうになつた所で

ベシ

誰かに後ろから頭をはたかれた
後ろを向くと。

「ジ、ン」

無傷のジンが、そこに立つていた。

「ジン、生きて」

「咄嗟に、『火避けの盾』を出して時間を稼いで、刀を回収して、地中に逃げたんだ。」

金の炎の前では、『火避けの盾』も時間稼ぎにしかならず、数秒で

燃やしてしまった。

「ジン、私、ミロクを」

「クズハ！お前が焼いたのは、敵だ。ミロクも、少なくともあのときは敵だった。」

戦いを遠くから見ていたのだろう。野次馬が集まつてくる。

「お、おい、金の炎が暴走したぞ」

「ジユウザ様が」

「ミロクまで焼かれたぞ」

「ど、どうすんだよ。逃げるのか？」

「俺達が領主にどんな態度をとつてたか思い出せよ」

「だからって」

「戦うのか金の炎と」

一部始終を、見られていたようだ。聞こえる会話の内容は、酷いものだった。

「クズハ、金の炎ってなんだ？」

「九尾だけが使える、最上位の炎のこと、なんだけど使えたのは初めて」

九尾だけか、この里で金の炎は、特別なものなのかもしれないな。

「クズハここを出よ。このままここにいたら、何が起きるかわからぬ。」

「う、うん。でもいいですか？」

周りを狐族に囲まれている。戦つ意思があるかはともかく、無理やり抜けようとしたら、一悶着あるだろ？。

「これで飛ぶ」

荷袋から『黒飛板』を取りだし、クズハを抱えて空を飛ぶ。

「わやあ――・・・と、飛んでる」

「中立街まで飛ぶから」

「わかった」

クズハは、複雑そうに、狐族の里が見えなくなるまで、見ていた。

4話 クズハの鍛錬

異世界397日目

二度目の侵攻まで、後1163日

狐族の里『狐火の巣』から逃げてきたジンとクズハは、昨日から中立街にある宿屋に泊まっている。クズハを一人にするのは不安だったので、一人部屋を取ることにした。

朝からクズハは、塞ぎ込んでいた。下から食事を持ってきたジンが話しかける。

「クズハ、起きてるか？」

「起きてる」

ベッドの上で体育座りをしたクズハが、返事はするが声に元気がない。

い。

「元気を出せ。一週間後には仲間が来るから」

「ジンの仲間？」

「家族みたいなものだ」

「ミロクは、唯一の親戚だった」

地雷だつたか

「これからどうすればいい？ジンだつて爆弾を抱えた私の面倒なんか、みたくないだろ？」

「まあ、爆弾の面倒はみれないな。」

— そう、か

ケズハの顔から生氣が抜けていくようだ、青白くなっていく。

「それなら、爆弾では無くせばいい。俺と一緒に金の炎を扱えるよう^うに鍛錬をしよう」

「でも、え？」

金の炎の鍛練なんて危険すぎる。普通は先代の九尾が付きつきりで教えるのだ

「俺に任せろ。」

どのみちこのままで、一人ぼっちになるだけだ。クズハは覚悟を決めた。

「わかつたわ。やる」

「明日から特訓だからな。その力で誰かを助けられるようになれクズハ。」

金の炎を扱えるようになれば、きっと立ち直るきっかけになる。そ

うなつてほしい。

異世界 398 日田

一度目の侵攻まで、後 1162 日

翌日、ジンとクズハは、ノエム森林に来ていた。ジンが、土の精靈術で即席の修練場を作る。周りに飛び火しないように深いクレーター状の修練場だ。

「クズハ、金の炎を出せるか?」

「たぶん出せるけど、加減が

「気にせず出して」

「わかった」

クズハが腕から金の炎を発現させる。抑えようとしているのか、炎が不規則に揺らめいている。

「クズハ抑えなくていい、本氣を出せ。この前はそんなんじゃなかつたる。」

金の炎がどんどん大きくなる。どうやら術者本人には、害はないようだ。

「それを上空に向かつて小さくちぎって放つてみる」

クズハは言われた通り、小さな金の炎を上空に放つ。

途中までは、順調だつたが、突然炎の塊が歪みだし爆散した。あたりに火の粉が飛び散る。火の粉は、もちろんジンにも向かう。

「水の聖痕を発動『水龍』、『水天門』」

小さな火の粉に対し、過剰な程の水の障壁を作り出した。しかし、それが正解だつた。金の炎は、水の中に入つてもしばらく消えず少ししてから消えたのだ。半端な水壁を作り出しても意味はなかつただろう。

「クズハこの調子でやるぞ。」

「ねえ、ジンはなんでこれが有効だと思つの?」

クズハは、ジンの無事に安堵しながらも疑問を口にする。ジンは、金の炎について何も知らないはずだ。

「暴走の仕方が、昔の小雪に似ているんだ。」

「小雪つて誰?」

眉を寄せて、不満そうな顔をするクズハ。

「俺の娘だ。」

「はつ?」

固まつてしまつたクズハに、一から説明して立ち直らせてから話を続ける。

「それで小雪は、生まれながらにして不安定ながら強大な力を持つていたんだ。」

小雪が今よりも子供だったこともあり、ずいぶん苦労した。子供だから癪癩一つで周りを凍らせてしまうのだ。ジンは小雪の傍で力の制御方法について模索を続けた結果、小雪はなんとか力を制御できるようになつた。

「その時にやつたのが、何かの形や技に固めることと、操作に重点を置いた訓練だ。これは勘だが、金の炎の威力を抑えるのは、おそらく無理だ。だから威力は抑えないで他のところに集中して訓練するべきだと俺は思つ。」

「それじゃあ、まずは操作からつてことね。わかった、やってみる。」

「聖痕には、制限時間があるからな、急げ!」

「了解。金の炎、きっと私のモノにしてみせる。」

それ以降も特訓を続け、2日目では、爆散はしなくなり。3日目には、金の炎は安定した。やはり、炎を抑えようとするのが、いけなかつたようで、そこを理解したら上達は早かつた。

訓練開始から一週間がたつた頃、クズハは独自の成長を遂げた。

「『金狐』」

金の炎を狐の形にしたのだ。

「どお、ジンなかなかでしょ」

得意そうなその笑みには、宿屋で見せた陰は見られなかつた。

「よし、中立街に一度戻るか」

「わづね」

二人は、確かな手ごたえを手にして中立街に戻つた。

異世界404日目

一度目の侵攻まで、後1156日

中立街に戻つてきた日の夜

寝ようとジンがベッドに入ると

「どうした？」

クズハが、ジンのベッドに入り込んできた。

「ほ、ほら私、あんたに私を捧げてるし、こうした方がいいかな～
て」

真っ赤になつてクズハが言い訳する。そこにはジンは、狐耳に手と止
めて。

「なあ、クズハ？」

「な、なによ?」

「耳触つてもいいか?」

「い、いいナビ?」

「尻尾は?」

「ここわよ」

「それじゃあ失礼して。」

もふもふ

「じ、じりへ」

「ふわふわして気持ちいい。クズハはどうなんだ?」

「落ち着く

「・・・・・」

「落ち着く」

顔を真っ赤にして言い直した。

可愛しかったので、今日は尻尾をしゃしゃしながら寝ね」と云ふ。

一度田の侵攻まで、後1155日

「起きなさい。起きて」

クズハの呼びかけで田が覚める。

「ジン起きた？起きたなら手を離して、お願ひ」

ジンは、クズハの懇願に、最初は何を言っているのかわからなかつた。自分がクズハの尻尾をまだ掘んでいることに気付いた。

「もう少し」

「こぎこぎ

ジンがクズハの尻尾をこぎこぎする。すると

「はああ・・・んつーーーー」

昨日となんだか反応が違つ。声がなんだかエロい。

「クズハ」

「な、なによ

「もしかして尻尾が、きもちよく

「そんなわけ」

「こぎこぎ

「————ツ」

クズハの身体がピクピク痙攣する。
そこでさすがに手を離す。

「はあ・・・はあ・・んつ、ジンのアホ」

潤んだ田でじゅうを睨んでくるクズハの表情は、とても可憐く、意地悪をしたくなるような表情だった。

「気持ちいいんだ」

「なによ、悪い」

「いじや、俺はアリだと思ひづぞ」

ジンは身体を起こして、狐耳にも触れて触り心地を楽しむ。

窓から外を見ると、もう毎日ひだつた。久しづつのベッドで寝すぎたようだ。

宿屋のロビーが騒がしい、団体でもついたのだひづか。

扉が叩かれた。

「はい」

返事をしてしまった。

「ジン殿、お久しぶりです。」

「お姉様、お待ちください。」

アルシナとファーラの竜騎兵コンビが入ってきた。どうやら団体は仲間達だつたようだ。

ただいまの部屋の状況は、ジンとクズハが一つのベッドに入っている、クズハの顔が赤く目が潤んでいる。

部屋の状況を見たファーラが

「こんのケダモノ——」

いきなりが殴りかかってきた。これは予想できたのであっさり避けたが、避けた先に椅子が飛んできた。アルシナが投擲してきた物だ。椅子がジンの頭にめり込む。

ジンがその場にしゃがみこんでフルフル震えて痛みに耐える。

「お姉様ナイス」

ガツツポーズのファーラと

「すまんジン殿、つい。だ、だがお前も悪いのだぞ。久しぶりに会つたら小さな娘と、イチャイチャしているから」

謝りながらも不平を口にするアルシナは、可愛いのだが。それを気にする余裕はジンには無い。

しばらくして、ジンがプルプルから復活して

「すまん、確かに再会としては最悪だったな。」

「改めて、ジン殿久しぶり」

「久しぶりアルシナ。ファーラも元氣そつだな。」

「まあね。それより多分あんたを捜している人がいたから連れてきたわよ。黒衣に『刀つてあなたの』ことじょ。」

俺を捜す？誰だ？この国で知り合いなんてほとんどございません。

「名前は？」

「さあ」

「名前くらこ聞ひやせ。」

「「ひぬせ」わね。確かミロクの妻だと、伝えてくれって言つてたわよ。」

「なんだってー。」

尋ね人の素性にジンが叫ぶ。クズハも驚いているようだ。怖がつているようにも見える。

「ジンビ「ひょつ、私はミロクを」

「・・・会おう。ちやんと話すべきだと想ひ」

「でも、あたしは仇」

「だからだ。ミロクを殺したのは俺達だ。だから俺達は、ちやんと

話さないといけない。」「

「ジンは、何もしてない！」

「いや、俺はあの時ジュウザを挑発した。その結果、ミロクが巻き込まれて死んだ。俺がすぐにジュウザを殺していれば問題はなかつたんだ。だからこれは俺とクズハの問題だ。」

「・・・わかった。」

「ミロクの奥さんはロビーに？」

「あ、ああ

「この部屋に通してくれないか、外で話すことじやないからな」

「別にいいけど」

アルシナとファーラは、状況が飲み込めないながらも了承する。

一人が部屋を出た時、クズハが

「ミロクの、家族か」

と呟いたのが、聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5887w/>

聖痕使い

2011年11月26日22時04分発行